
殺人鬼は異世界に来てしまったようです

himame

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

【Nコード】

N7170Y

【作者名】

himame

【あらすじ】

自分の快樂のために殺し続けた殺人鬼は暇潰しで行なった黒魔術で異世界へと飛ばされてしまった！？魔王という存在と出会いこの世界を知った殺人鬼は魔王と手を組み共に生きていく。剣と魔法の世界の中を殺人鬼はどうやって生き残るのか。これは一人の殺人鬼の物語——だよな？

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい（前書き）

「殺人鬼？いえいえ俺はただ殺すのが大好きなだけです」

b y 主人

公

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい

既に空は黒く染まり綺麗な満月が見える晴れた夜空。周囲を山に囲まれた村があつた。

「……こんなもんか」

その村の中を一人の男が歩いてゐた。年は十八歳程だろうが、全身を黒いコートで包み月明かりに照らされたなか頭にかぶるフードから覗く白い髪とその間から僅かに覗く妖しく光る赤い瞳。その姿はまるで鬼のようであつた。男は口元に笑みを浮かべ手で引き摺つてきたものを投げた。

「これで最後——と」

男の投げたものは地面に鈍い音を發てて落ちた。その投げ捨てられたものからは赤黒い液体が流れ出る。やがて月明かりがその投げ捨てられたものを照らす。

それは人だった。顔は恐怖の色で染めた表情で固まる老婆の死体。男はそれを見て笑を深める。

「いやあ、苦勞したねえ。．．．ま、その分中々の光景なんだけどさ」

[illegible]

死体はどれも絶望したような表情や恐怖で歪んだ表情ばかりだ。ある者は片腕を失いある者は顔の半分が消し飛んでいる。なかには腹が裂け臓物が出ているものもある。その死体に囲まれた中男は愉悦に染まった顔で笑っている。

「さ、始めようか！この俺の今世紀最大のショーを！！」

男は死体の中を歩きながら叫ぶ。男は殺人鬼だった。今まで何千何万という数の人を殺し続けてきた生粋の殺人鬼。

やがて殺し続けてきた男は退屈しないよう趣向を凝らして様々な殺し方をするようになった。これもその一つ。今では誰もが口を揃えてこう言うだろう。「有り得ない」と。彼が行うものはそう――黒魔術だ。

よく見れば死体は何らかの模様を描くように配置されているのが分かる。直径は恐らく100mを程のもの。それを描くのに犠牲になった村人の数は実に100人を超える。男は別にこれが失敗しても構わない。只自らの退屈を紛らわせる為だけに行なっていることだ。失敗しても場が白けるだけ。

「（いや、それは嫌だな）」

そう考えながらも男はこれをやめることはない。やがて男は魔方阵から出ると鈍い輝きを放つ一つのナイフを取り出す。男はそれを持つと躊躇うことなく自分の指を切る。切り傷からは真っ赤な血が少しずつ流れ男はその流れ出る血をうつとりとした表情で眺める。その様子は誰が見ても気が狂っているとしか思えないだろう。やがて血は一滴の滴となって方阵へと落ちた。

コオオオ

血の滴が触れた直後方陣からは僅かな光が漏れる。

「あ？」

男はその様子に首を傾げる。男としてはこれが成功するとは思わなかった。いや、成功して欲しいという思いもあったがそんなものは明日地球が滅ぶという何万何億分の1でのものでしかない。徐々に溢れ出る光を見て男はもう我慢しきれないとばかりに盛大に笑った。

「くくく、ふふ、くかかかヒヤハハハハハハハハハハ！！！！！！」

男は手を広げ笑う。その瞳は無邪気な子供のように輝いていた。

「おいおいおい、スツゲエなあ！スツゲエよ！！何だ何だ何だあ！？何が起きるってんだよ！？悪魔か？天使か？何でもいいから俺を満足させてくれよ！！！！」

その言葉と共に飲み込まれていく男。やがてその光は男の視界を白く塗りつぶし

男は草原の中に立っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・Why？」

草原でポツンと立ち口を開いた男の間抜けな声は嫌に響いて聞こえた。

あー、変な光に巻き込まれた俺だ。取り敢えず現状を把握しようとして動き回ったんだが、どうやら俺の荷物は近くに落ちていたようだ。いやあ、助かったね。今回村一つ潰すのに弾薬と火薬と後食料とだいぶ持ってきたからな。

「これ持って辺り散策するか」

不可解なことが起きたら取り敢えず口に出せ。それで結構頭の中が整理されるもんだ。……少なくとも俺は。

「原因は十中八九あの黒魔術」

まさか成功するとはねー。どんなものか知らないけど。本にあったの適当にやっただけだし。

「あんだけ殺した甲斐があつたつてもんかね」

俺はその時の光景を思い出して思わず笑みを浮かべる。今までの中でも結構面白かったほうかな。興奮したもんだね。

「……」

ま、何にしても現状把握、現状把握つと。まず俺の周囲に広がっているのは草原。まあ、これといったものはなし。さらに遠くに森が見えるな。他は……何もなし。

「情報なさすぎだろ」

思わずそう呟いてしまう俺は悪くない。……疑問に思つかもしれないが俺はヒトを殺したがる以外は一応まともだぞ？

「まずは森行つて。ほかは後で決めよ」

行動しないと何も始まらねえ。俺は木箱の中にあつた付けそうな火薬と弾薬それに食料をカバンに入れ森へと向かった。数分後に聞こえた置いといた火薬の爆発音をBGMにして。

只今森の中でございます。リポーターはこの俺。

とまあそんな感じで進んでるが、あれだ。草原と森の中違いすぎじやね？なんだか猿だか鳥だかよく分かんねえ声が聞こえる。

「……………今日の晩御飯は何でございましょうか？」

そんな呑気なことを言っている俺の前に現れたのは腕が2m位ありそうな猿なのかゴリラなのかよく分かんねえ生物。見た目は猿っぽいが多分体はゴリラ。何か筋肉がとんでもねえもん。それで俺の記憶で該当するのはゴリラ。何千何万とヒトを殺してきた俺には分かるあいつの異常さが。俺の目は人体構造が人に近けりや近いほどそいつの行動、構造が手に取るように分かる。

「ウホッ！キキキ！！」

何か猿ゴリラ（俺命名）がどつちなのか分からねえ鳴き声を上げて俺に飛びかかる・よし、なら

「俺流初対面の方へのご挨拶ー！！！」

俺は飛び掛る猿ゴリラの顔面に右ストレートを放った。その拳は驚くほど綺麗に決まり反対に猿ゴリラの拳は俺を外し後ろの木を挟る。殴られた猿ゴリラは顔を仰け反らせそのまま吹き飛ぶ。因みに猿の速度は常人より遥かに速い。俺がそれを捉えられたものはあるものの御陰だ。

俺は頭のどこか（どこか忘れた）がぶっ壊れてて本来ヒトがセーブしている力を俺は全て引き出すことができる。御陰で小さい頃から俺の体中の骨が折れまくった。だがその肉体を極めればそいつはどうなると思う？ 答えは

「最強の肉体持った人間の出来上がりだー！！！！！」

俺は吹き飛ばされた猿ゴリラの顔に躊躇なく踵落としをする。その衝撃で猿ゴリラの顔面は見事に変形し白目をむいている。あれ食らってまだ生きてるのかよ。

俺はポケットからナイフを取り出し

「お疲れさんつしたー」

首を切り裂いた。猿ゴリラは二、三度跳ねるとやがて動かなくなつた。

「・・・見事に地球外生命体です。本当に（ry」

改めて猿ゴリラの全身を見た俺はその姿に此処が少なくとも日本ではないと判断した。というかあの魔方陣の時点で大体予想つくけどさ。

俺は木々の隙間から日が暮れてきたのを確認するとそこらへんから木の枝を持ってきて火をつける。

今日は此処で野宿かね。俺はそう考えながら明日からの行動を考

えていった。

P S : 猿ゴリラの肉は少し固かったです。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（前書き）

「怪しい人に声をかけられたら？右ストレートでこんにちはだろ」

b

y主人公

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです

おはようございます。太陽が憎たらしいほどに輝いてやがる朝でございます。

「・・・・・・・・・・」

まずは周囲の確認。相変わらず周囲は木々で埋めつくされてる。

「・・・・・・・・どうせなら夢であって欲しかった」

俺はそう目の前の現実になんか愚痴りながら立ち上がる。化け物どもは寝る前にピアノ線を周囲一帯に張り巡らせたから一応大丈夫だと思うんだが。念には念をと言うことでピアノ線を見る。

「わお」

一部のピアノ線が血塗れになって張ってあるのを発見した。そしてそのピアノ線に引っ掛かっているよく分からない獣の死体。チータのようにも見えるがその死体には目が三つあり角が生えている。さらにそこからすぐ近くにはもう一つの死体。・・・・こいつらって学習能力ないのかね。何かもう一つの死体はゲームで出てきそうなゴブリンの様な死体。

「・・・・・・・・・・？」

見ればゴブリンが腰に着けている巾着袋から鉱石のような赤い欠片が見える。俺はそれを取り出すと日に照らして眺める。

「・・・・・・・・何だこれ？」

日に照らされキラリと光る赤い欠片。俺は取り敢えずそれをポケットの中に入れる。取り敢えず巾着袋にはもう何も無いようなので獣の死体を見る。

「・・・・・・・・朝飯にするか」

俺は獣の死体を掴むと寝床にある木の枝を組み再び火をつけた。これはなかなか・・・・・・・・。

朝食を食^{けもの}べた俺はピアノ線を回収し鞆を持つと歩きだした。

「獣はなかなか・・・・・・・・ただ実際に戦って仕留められるのか」

生憎衝動に駆られて殺すただの快樂殺人者じゃないんでね。先のことも考えて行動しないと後で痛い目を見る。現にそういつた奴を何度も俺は見てきた。

俺が暫く歩いていく周囲の草がガサガサと揺れる。俺はその音を聞くと共につい条件反射で

ダァン！！

懐からデザートイーグルを取り出し引金を引いた。それと共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。放たれた弾丸は一瞬で目標へ到達し

「ギャ！？」

目標は短い悲鳴を上げ血飛沫と共に倒れた。俺は銃とナイフを構え周囲を警戒する。すると草が揺れると共にピアノ線に掛かっていたゴブリンとよく似た奴らが飛び出してくる。

「・・・・・・・・」

数は10、いや俺に向けられている殺気数は15。まだ何処かにいやがるな……。ゴブリン共の表情にはハッキリとした殺意と憎悪が受け取れる。さっきの一匹を殺したことを恨んでるのか？

「中々仲間思いじゃねえか。・・・けどよ」

ダン！

俺は一匹のゴブリンに向け引金を引く。放たれた弾丸はゴブリンの眉間に穴を開け、また一匹が死んだ。

「俺は優しくねえからよ」

流れ出る血から漂う鉄の臭いと銃口から昇る硝煙の臭い。それは俺を興奮させ殺人鬼としての本能を刺激する。

「精々足掻けや、虫螻があ！！！」

俺は目の前にいた一匹のゴブリン目掛けて駆ける。目の前で突然仲間が死んだことに動揺しているのだろう。ゴブリンはろくな抵抗も出来ず首を切り裂かれ血飛沫を上げながら血の海に沈む。俺は頬に掛かった血を舌で舐める。

「ヒカカカカ！！脆すぎだろお！？殺る気あるのかあ？」

再び駆ける俺。残りのゴブリン達は状況を理解できたのか俺へ向かって殺到する。振り下ろされる棍棒、俺はそれを片手で受け止めるとそのゴブリンの首を掴みへし折った。骨の折れる鈍い音がしゴブリンの首はぶらぶらと揺れる。

「ギャア！！！」

俺が一匹のゴブリンに集中していると背後からもう一匹のゴブリンが俺の頭に棍棒を振り下ろす。

「んなもん食らうかよぉ！！」

俺は飛び掛ってきたゴブリンに先程の首が折れた死体をぶつける。それによってゴブリンのバランスが崩れ後ろにいた仲間達を巻き添えにして転倒する。それを見た俺はそのゴブリンにピンを抜いた手榴弾を投げその場を離れる。背後から俺を襲う爆音と衝撃、俺は転がりながら体制を立て直すとその爆心地を睨む。其処にあるのは小規模なクレーターそして辺りに飛び散っている肉塊と血。俺はそれを見て口笛を吹く。

「随分スッキリ消えたなあ」

あれだけの距離だったんだ当然俺も無事な訳がない。左手に走る痺れと痛み。火傷で済むってのは人間やめるとしか思えないな。

「残りは5匹。さあて何処にいるんだい？」

手の中でナイフをくるくると回しながら俺は周囲を見渡す。次の瞬間俺の脇腹に刺さる矢とはしる痛み。

「ギャギャギャー!!」

ゴブリンは俺に当たったのが嬉しいのか声を上げる。その行動に俺は口元を歪ませた。やっぱこいつら馬鹿だ。

「死んじまえよお!!」

俺は声が聞こえた場所へ弾丸を連続で放つ。ゴブリンは苦し気に呻きやがて倒れる音が聞こえる。

「あと四匹。さあ次はどいつだあ?」

その言葉と同時にまた引金を引く。そしてまた聞こえる血飛沫と断末魔の声。

「さ、残りは三匹」

ガサガサという音共に聞こえる三つの足音。ただその足音は徐々に遠ざかっている。

「……………逃がすと思ってるのか?」

先に手を出してはいすみません?んなもん聞いてもらえと思ってんのか?俺はその足音の下へと駆けていく。

「舐めてんじゃねえぞ。小鬼風情が!」

俺は口元を歪め瞳を輝かせながら駆ける。やがて見えてくるのは三匹のゴブリン。奴らは俺の半分程の身長しかないんだ当然歩幅など

俺より遥かに小さい。見えてきた標的を前に俺は舌舐りをする。
良いぜ良いぜ良いぜ。そうだその命を燃え上がらせる！俺にその命
の燃え上がる様子をみせてくれ！！

俺は手に持ったデザートイーグルを奴等に向け、引金を引いた。炸
裂する弾丸、血飛沫を上げ血の海をつくっていくゴブリン。

「堪んねえなあ！！これだから殺すのは止められない！！」

俺は額に手を当てて顔を覆いながら高笑いを上げる。最早此処が何
処であろうと構いやしない！これが俺が求めたもの。この血風と快
感を感じることができるこの場所が俺が求めたものだ！！ダイヤの
金の輝きすらも凌駕する人の魂の輝きそれを俺は見続けたい！！！！

「だからどうよ爺さんよお？」

俺の背後に立つ一人の老人。見た目は只の老耄だが中身がまるで違
う。何か巨大なものを無理矢理人という容物に詰め込んだ化け物だ。

「是非とも俺と踊ろうじゃないか。爺は好みじゃないんだがな」

俺が問いかけると目の前の老人は笑う。

「ふふふ、こんな老耄と踊ってくれるのかのお。良いじゃろう」

老人が何処からともなく一本の杖を取り出すと地面にコンとぶつけ
る。それが合図かのように老人の背後に出現するのは無数の方陣。

「たつまんねえ。こんなに昂るのは久しぶりだよ！！俺にもっと生
を実感させやがれえ！！！！」

俺は今までにない程の速度で目の前の老人に疾走する。老人はその姿を見てニヤリと笑った。

「くくく、いいな。この俺『魔王』に挑むとはな」

一瞬老人の姿がぶれ、一人の長身の男が現れる。全身が黒く牙のようなものを生やし、背中には翼が生えている。

こいつは言った。魔王だと。俺は思わず笑を浮かべる。おもしれえ。

「見せてくれよ！魔王様の實力つてやつをよお！！！」

降り注ぐ方陣からの光をくぐり抜け俺は奴の目の前に出る。振りかぶる右腕。相手も俺と同じように左腕を振りかぶる

「ッラア——！！！」

「フツ——！！！」

ぶつかり合う拳。だがその決着は一瞬だった。

メキヤ

鈍い音を発て潰れる俺の右腕。それは骨が折れ腕から突き出ていた。

「——」

その痛みに俺は顔を歪める。だが——

「くたばれよ」

最後の力を振り絞り放たれた銃弾。それは魔王の眉間を確実に貫いた。

「ムウ——」

魔王は僅かによるめき仰向けで倒れていく。その様子を見て俺の意識は闇の中に落ちていった。

「・・・・・・・・」

あ？ここ何処だよ。俺はそう思いながら起き上がる。既に夜空には満点の星空が広がり大地を照らしている。あの爺は何処に行きやがった。つか何で俺生きてんだよ。

俺は自分の右腕を見る。そこにはあるのは無事な右腕ついでに火傷も綺麗に治っていた。

「む、目覚めたのか」

俺が立ち上がって体の調子を確認していると茂みの奥から魔王とか名乗っていた男が現れる。男は俺の視線を気にせず近くに座ると隣を叩く。・・・・座れと？

聞きたいこともある。俺はそのことを考えると魔王の隣に座る。

「・・・・・・・・何で俺を生かした」

「開口一番がそれかのう」

魔王は面倒臭そうに頭を掻く。うるせえよ、俺には重要なことなん

だよ。

「主には興味があつたからのう。『門』を開けるものなど何千年と
いなかったからのう。ましてや向こうの者が開けるなど初めてじゃ」

「『門』？」

「主ではないのか？」

魔王は首を傾げる。・・・門。思い当たるのはあの光。

「・・・たぶん俺だ」

「やはりか。門を開けられるなど儼ぐらいじゃからのう」

魔王は頷くと俺に顔を近づける。

「で、どうやって開けた？」

質問ばかりだなこいつは。少しは俺にもさせやがれ。

「大量のヒトの死体を集めて模様を描いたんだよ。そしたら光に包
まれてここにいた」

「人？主はどれだけの人間を殺した？」

「さあ、その『門』ってやつを開けるのに百人近く、今まで全部含
めて何千何万・・・よく覚えてねえよ」

俺にとって殺すのは飯を食うのと同じくらい自然なこと。正確な数

なんて覚えてる訳がない。俺の言葉を聞いて魔王は愉快そうに笑った。

「フハハハハハハハ！！！！主は本当に人間か！？そんな者など聞いたことがないぞ！！？」

「当たり前だ。他にもいたら世の中の人間は殆ど死んでるぞ」

その言葉を聞いて魔王はさらに笑う。うるせえんだよ。

「で、今度は俺の番だ。向こうってのは何だ？」

まず最初に聞きたいこと。此処がどこなのか、向こうとは何なのか。話とあのゴブリン達で大体の予想はつくが・・・

「向こうってのは主が生きていた世界じゃ。この世界は『アリアンロッド』と言ってな。お前達の住む世界とは別の世界じゃ」

・・・さいですか。いや、むしろゴブリンやら魔王やらが地球にいる方が驚きだけどさ。慣れっつてのはとんでもないな、ここが異世界だと言われてもまるで驚かない。

「で、魔王様は何でこんな所にいるんでしょうかね？」

皮肉を込めて俺は魔王に問う。魔王は腕を組んで悩むと何か思いついたのか言った。

「実は後継者を探していてな。ちょうど門を開いた者がいたから押しつけ・・・もとい継いで貰おうかとな・・・」

「巫山戯んな」

俺はそう吐き捨てて立ち上がる。そして歩き出そうと踏み出し――
―足を掴まれた。

「離せ」

「まあ、待て。主はまだこの世界のことを知らんじやろ？」

確かにそれはそうだ。俺はこの世界の知識がまるでない。当然あんな化け物共についてもこの世界の人間についても……。

「まあ、教える代わりに継げとは言わん。話を聞け」

……ただ教えてもらえるのはありがたい。ただ程怖いものはないとも言いが……。

「座れ、座れ」

そう言つて魔王は再び隣を叩く。俺はメリットデメリットを即座に考え、座った。

「いいか、この世界には魔物というのがいる。まあこれはお前が殺していたゴブリン共が該当する。」

あれ本当にゴブリンだったんだ。

「魔物は総じて知能が低い。なかには人間以上の知恵を持つものがあるがそんなのは稀だし。自ら無駄な戦闘というのは行わない……たぶん」

こいつが一気に信用できなくなった。

「我らは姿は魔物に似てるがれっきとした魔族という生き物じゃ」

ふむふむ、翼、角、牙があるやつは魔族〓信用できない、と。

「今変なことを考えなかったかのう？」

「気のせいだろう。で、他は？」

「まあ、種族は他にもあるが面倒くさいから先に他の説明じゃ」

グダグダ過ぎんだろこいつ。俺は深いため息を吐く。

「この世界には魔法というものがあっての。それぞれ炎、水、風、大地、闇、といったものがあるのう。因みに魔王は全ての属性が使えるんじゃ」

「あ？じゃあ、他の奴は全部は使えないのか？」

「うむ、複数使える者はいるが全ては無理じゃ。」

魔王はそう言って言葉を区切る。

「そもそも、魔法には今の以外にも呪い、聖、召喚、無、と様々なものがあるからのう。」

「ふん。」

面倒くさいなそりゃ。

「あとは魔導具といつてのう。魔法でも実現不可能なことを可能にするアイテムがあつての。それぞれランク分けされておる」

魔王はそう言つと溜息を吐く。

「他にも色々あつてのう。正直説明すんのは面倒くさいんじゃ」

ぶつちやけんじゃねえ。

「と、言うわけでの？主に直接この世界の知識、魔法の扱い方、や魔力を叩き込もうと思つての」

魔王はそう言つて俺の頭を掴む。俺は逃げることも許されずに押さえつけられる。そして流れ込んでくる知識。それは激痛となつて俺を襲う。

「ぐっ・・・が・・・ぎぎぎぎぎ！！あ、たまがあ！！！！つう・・・つてええええええ！！！！！！」

頭が割るような痛み。俺は我慢できずに頭を抑えて地面をのたうち回る。

「がああああああ！！！！痛い痛いいたい痛いイタイイタイイタイイタイイタイイ！！！！！！」

俺は思わず叫んだ。魔王が何か言っているがそれすらも耳には入ってこない。鼻からも血が流れ出てくる。やがてその痛みに耐え切れなくなつた俺は再び闇の中へと落ちていった。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

「友に秘密を知られたら？何が何でも口を封じるの……一部を除いて」

b y 魔王

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

Good morning 太陽。今日ほどお前を消したいと思っ
た日はねえよ。昨日俺が魔王に流し込まれた知識。俺が意識を失っ
ても激痛で再び意識を覚醒させてきやがった。意識を失っては激痛
で目が覚める。地獄のような時間だったぞ。ようやく治まった頃
にはもう日の出だ。・・・あの魔王死ね。

「・・・・・・・・・・」

実際俺はもう口を開く気力すらない。思考は正常だが如何せん体を
動かす気にはならん。耳を澄ますが俺の他に動いている音はしない
から魔王は何処かへ行っているのだろう。これで放置とか言ったら
絶対にあいつを殺す。・・・しかし

くう

俺の腹はまだまだ気力があるようだ。こんだけ元気に空腹を訴えて
るのだから。

「・・・・・・・・・・起きよう」

日が地平線から完全に出た頃。俺はようやく気力が戻ってきた。

「^{あれ}激痛で体力を相当もってかれたし服も血塗れになっちまった」

おまけに顔も血塗れだ。不快で堪んない。俺はまだ動きたくない

いう体に鞭を打って立ち上がる。そこで初めて周囲の様子に気づいた。

「・・・・・・・・何処だ此処」

俺の背後に広がっているのは鬱蒼とした森、ここは最初とそこまで違いはないが問題は前。俺の眼下に湖が広がっている。そう眼下、つまり俺は今上から湖を見ていることになる。今、俺がいる場所は湖より遥かに高い崖の上だった。

「魔王がやったのか？」

俺は一步前に出ようとしてバランスを崩す。

「・・・・・・・・貧血か？」

顔面は見えないが服には大量の血液が乾きこびりついている。良く俺死ななかつたな。自分の運に感謝しつつ俺は鬱蒼とした森の中に入ってしまった。

「・・・・・・・・あやつは生きてるかのう」

僕は小さな湖の辺で呟く。やれる限りのことはしたし回復もこまめに行なった。これで死ぬ確率は低いじやろうが絶対ではない。

「後継者を死なすのはもったいないからのう」

あれがただの馬鹿だったら助けようなどとは思わんし継がせる気も

ない。そんなことをしたら僕は恥を晒すことになるからのう。

「……………しかしこの姿も疲れたのう」

老人も嫌じゃったが。この姿はごつくて気持ち悪いからのう。威厳は出るんじゃないが…………。

「やはりこれが一番だのう」

我はそう言つて元の姿に戻る。うむ、やはりこの姿が一番じゃ。我はそう言つて服を脱ぎ湖へと入ろうとし

「おい、ま……………おう？」

その声に思わず我は後ろを振り向く。そこには昨日助けた人間の姿。ヤバイヤバイヤバイ。この姿を、女の姿を見られた！？……………しかも裸。

森の中を歩いていたら俺は途中で見つけた小川を辿っていた。たぶんこの水があ湖に繋がっているんだろう。

やがて小川の先に小さな湖が見えてくる。あのでかいやつ程じゃないが十分だ。俺はその湖へ歩いていくと丁度足を水に浸している魔王がいた。

「あ？」

俺が声を掛けようとするとう魔王の姿が突然ぶれる。その現象に少し驚きながらも俺は近づこうとすると

「おい、ま」

「やはりこれが一番じゃ」

美女が現れた。

「・・・おう？」

その姿を見て俺は今まで見てた魔王は実は幻なのではないかと思っ
た。だってあれだぜ？あの敵つい面して牙生やして翼生やした奴だ
ぜ？それがいつの間にか美女になるって・・・。
俺はその場で頭を抱えながらとうとうイかれたのかと考えていると
先程の美女が声を掛けてくる。

「死ね！！」

「うおっ！？」

突然、美女は俺へと飛び掛ってくる。思わず反射的に俺は転がって
その場から逃げた。つつか服着ろ、服！！美女は裸を見られたのが
余程ショックだったのか涙目になりながら俺を追撃しようとする。
しかし、あれだ。いいね。美しいとしか言いようがないプロポーシ
ョン。それに絹のように美しい黒髪。そして宝石のように輝く紫の
瞳。それを見た俺は笑を浮かべる。

いいね、どうしても切りたくなっちゃうじゃねえか。俺はデザート
イーグルとナイフを構えると目の前にいる美女へ駆ける。

「ふん！生かそうかと思ったが！！我の姿を見て生きてられると思
うなよ！！し、しかも、は、はだ、裸まで見るとは！？継承などと

うでもいい！！ここで殺してやる！！？」

美女・・・というか魔王なのか？は顔を湯気が出るくらい赤く染め俺に腕を振るう。食らってしまえば消し飛ぶような威力。だが、まだ混乱しているのかその一撃は隙だらけで――

「フツ――」

俺は紙一重でその攻撃を躲すと魔王（仮）の首を掴み木に叩きつける。

「がつ！？」

その衝撃に魔王（仮）は咳き込み俺を睨む。だが殺すことは出来ないだろう。殺ろうと思えば今すぐにでも俺は魔王の首を切り裂ける。俺より魔王が死ぬほうがどう考えても早い。

「お前魔王なのか？」

「当たり前だ！！」

あ、マジで魔王なんだ。

「で、何でそんな姿になってんだ？つか初だなお前」

「これが私の本当の姿だ！！！そ、それにあ、当たり前だろう・・・」

魔王は叫ぶが徐々にその声は小さくなっていく。

「は、裸を、み、見られたんだから」

魔王は顔をさらに赤くし涙目で言う。・・・止めてくれ、凄いい切りたくなってくる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

魔王も俺も黙り込む。・・・このまま掴んでも埒が明かない。俺は掴んでいた手を離すと魔王にコートを着せる。俺の服で唯一血の被害から逃れていたものだ。多分魔王が脱がしたんだろう。

「取り敢えずこれでも着とけ。話はそれから聞く」

「・・・・・・・・・・」

魔王は俺をじつと見る。おい、我慢してんだからそんな目で見るなとつと服を着ろ。

「・・・・・・・・ありがとう」

魔王はそう言うのと湖に置いてある服に着替えに行く。いや、体でも洗うのか？

俺は取り敢えず魔王を見ずにさっきの衝動をぶつけるように木に向けてデザートイーグルの引金を引いていく。そもそも印象変わりすぎだ。前の敵つい状態なら文句で何でも言えるがその状態だと俺がみつともないように見える。傍から見たら俺が虐めているようにしか見えないしな。世間の価値観ならあの魔王の姿（美女）は間違はなく美しいとか綺麗と言えるだろう。それもとびっきりの上玉と。

まあ、俺も男だ。そんなものの裸を見ちまったら……切りたくなるだろう？え、ならない？

まあ、ともかく元々言おうと思ってた文句も言えなくなっちまうんだよね。

「……………腹減ったな」

俺がマガジンに入っていた銃弾を全て撃ち終わり新しくマガジンをセットしていると丁度魔王がやってきた。

「……………すまない」

何への謝罪かは分からないが俺は無言で渡されたコートを取る。

「構わない。というか俺も服を洗いたいから向こうでいいか？」

俺は魔王の返事も聞かずに湖へと歩いていく。後ろから足音がするからついて来ているのだろう。俺が湖で服を脱いで洗いだすと魔王が隣に座る。

「怒らないのか？我はお前を殺そうとしたのだぞ？」

「別に。むしろ俺の方がすまなかった」

命を狙われるのは慣れてる。今まで散々殺してきたんだ。当然その分恨まれるし命だって狙われる。裸を見られて襲ってきたってことは此奴にとっては重要なことだったんだろう。だったら狙われるようなことをした俺が悪かったのだろう。俺が謝ったことを意外に思ったのか魔王は驚いた様子で俺を見る。

「い、いや。我の方が悪かった」

魔王は慌てたように謝る。・・・こいつ本当に魔王か？マジで印象が違うんだが。俺は内心でそう訝しがりながら魔王に気になっていたことを聞いた。

「で、何であんな姿になってたんだ？」

別にずっとあの姿でいる必要などないだろう。

「だって、あの姿の方が威厳があるし、それに魔王として舐められないだろう」

・・・成程。ようはあの姿の方が魔王っぽいと。けど・・・

「その姿でも十分過ぎるほどのカリスマを感じるんだが」

何というか。正直厳つい姿の時よりも俺はビビった。感じる力も迫力もこの姿の方が凄かったしさっきの一撃も冷や汗が止まらなかったからな。俺の言葉に魔王は僅かに顔を上げる。

「・・・・・・本当か？」

「ああ、とんでもないほど感じた」

今の落ち込んでる姿からは全く感じないがな。そんなことを言つてこれ以上落ち込まれるのも面倒くさいから言いはしないが。魔王は俺の言葉を聞いてブツブツ言いながら頷く。あ、くそ。流石にスポンは落ちねえよなあ。服も血がこびり付いて落ちねえよ。俺は傍に置いておいた鞆からシャツを取り出し着替える。

「よし!!」

「あ？」

俺が着替え終わると魔王は勢いよく立ち上がる。そして目を輝かせながら俺を見る。・・・今度はなんだ？

「人間よ！私もついて行くぞ!!」

「は？」

此奴何つつたよ。ついて行く？俺に？

「うむ、主には世話になったしの！それに主には教えねばならぬことがあるからの!!」

魔王はそう言つて俺に飛びついてくる。やめろ！離せ鬱陶しい!!

「人間よ、主の名前は何というのだ？」

魔王は離れると小首を傾げながら聞いてくる。たぶん文句言つても此奴は聞かないのだろう。昨日と今日で何となく此奴のことは分かつてきたし・・・認めたくないが。

「響夜、鳴神響夜だ」

「うむ、我の名前はマオ。マオ・オメテオトル・ヘーラー。マオと呼ぶがいい!」

そう言つて魔王、マオは手を差し出す。取り敢えずはまだ世話になることもあるんだ。俺はそう考えて差し出されたマオの手を握りつつた。

「よろしくな響夜!!」

「ああ、よろしく」

これがこれからも続いていく殺人鬼と魔王の出会いだった。

あの後から暫く経ち今俺達は焚き火を挟んで向かい合つて話している。

「いいか、響夜。知識を与えたから大体のことは分かるはずだ。まずは魔法の属性についてだ。言つてみるがいい。」

なんとという高圧的な態度。いや、教えてもらうのは俺だから強くも言えないが

「あゝ、炎、水、風、大地、闇、聖、呪、無、空、時、だっけか」

「ああ。魔法が使えない者もいるが大抵は少なくとも初級の魔法は使えるな」

「で、俺の魔法ってのは？」

「うむ、それだがの・・・まあ何というか。我は主と繋がっておるから分かるのじゃが」

「？」

マオは少し難しい顔をする。俺はマオのその様子に首を傾げた。

「主が扱えるのは炎、呪、空の三つじゃ」

「炎は一般的だっけか。で、空はレアなので……。」

「呪を使えるという者はいないと言っても過言じゃなの。」

「何でだ？」

俺が与えられた知識の中には呪については能力の特徴だけでそんな情報はなかった。

「呪は使えるものは相当限られるんじゃ。まず上手く操れなかったら自分にその反動が返ってくるし、それが使えるのは余程の罪深きものや恨みなどがあるものじゃからな」

それも大抵操れずに自滅するんじやが。とマオは言う。

「しかし、主にはピッタリかもしれんな」

マオはそう言って笑う。それは厳ついときのような豪快な笑いではなく女らしい……お淑やかとでも言えば良いのだろうか。そんな笑いだった。

その姿を見ながら俺はずっと疑問に思ってたことをマオに聞く。

「なあ、俺の手にあるのは何なんだ？」

そう、俺の手の甲。そこにはよく分からない刺青がはいっていた。翼を生やした……。これは天使だろうか。一本の剣を両手に地面に突き立てるように持つ天使の上半身の姿だった。それは黒く描かれていることから墮天使のようにも感じる。

「…………それは…………あれじゃ」

それを見たマ才は齒切れが悪くなる。

「あれって何だ」

「その…………我との契約の証じゃ」

「証？」

魔力を受け取った時のか？

「うむ、我が死んだとき主は我の代わりに魔王になるという魔王の後継者としての証じゃ」

「……………は？」

「だから魔王の後継者の「ちょっと待て、お前これいつやった」……知識と魔力を与える時じゃ。」

「巫山戯んな！お前シャレになんねえぞ！！」

「良いではないか！魔王になれば最強ともいえる力と全ての属性を使うことができるのじゃぞ！！それにその紋章は我を召喚すること

も出来るし、制限があるとはいえ通信も可能にするのじゃぞ!!」

「そついう問題じゃねえ!!」

畜生やられた! やっぱりタダより高いものはねえのかよ!!?

「…………ハア」

「そう落ち込むでない。それに知識と魔力を与える以上それはどうしても必要なんじゃない」

「……………」

「そ、それにあれじゃ、ええと別に、我を殺さなくとも婿になれば…………じゃなくて!! ある意味主は家族以上の繋がり…………でもなくて…………」

マオ、必死に弁解しようとしてるが話がどんどん変わっているぞ。俺はその衝撃の事実に凹む。そんなものになつたら敵ばかり増えて休む日すらなくなんじゃないかね? 殺人鬼だって休みたい日はあるんだぞ?

「……………寝よう」

俺はそう言つて横になる。何かマオが慌ててたがんなもん知らん。やがてマオも寝ることにしたのか。静かになった。聞こえてくるのは木々がや草花が風で揺られる音と火が枝を燃やす音だけだった。不思議といつてもよりも静寂が心地よく感じた。

「……………響夜」

「・・・・・・・・」

「すまなかった。勝手にそんなことをして」

マオの声は少しだけ震えていた。俺はその声を聞いて静かに溜息を吐く。本当に此奴は・・・・。

「構わねえよ。こんな結果になったとはいえ、魔力といい知識といい世話になったからな」

実際もしマオ以外の奴らに出会っていたらこんな素直に話が通じたかどうか分からねんだ。その点でいえばメリットの方が遥かに大きい。

「だから謝んじゃねえよ」

「・・・・・・・・ありがとう」

俺はマオのその声を聞きながら眠りについた。

「・・・・・・・・」

まだ日の出か。俺は太陽の光を感じながら起きようとし、動けなかった。

「・・・・・・・・」

俺にしがみついているマオ。心無しか随分心地よさそうに寝ている。

「……マオ」

俺はしがみついてくるマオの肩を揺らす。だがマオは離れるどころか逆に力いっぱい俺の胴体を締め付ける。

「——ッ」

い、痛い。仮りに魔王。なかなかの力だ。普段から力は抑えているのだろう。でなかったら俺の肉体など即座に潰れちまう。

「ま、マオ……起きろ。おい、マオ」

俺は少し強くマオの肩を揺らす。早くしろこのままだと潰れるから！

「……ん……」

俺の祈りが通じたのかマオはもぞもぞと動く。薄く目を開ける。

「おい、目を覚ませ」

「……ふわ……響・夜……おはよう」

そう言っただけで俺から離れるマオ。助かった。なんとか俺の胴体はまっぴたつにならなくて済む。俺は内心でホッとしつつ起きようとする。

「……ん」

起きようとする俺にキスをしてくるマオ。………What？
その突然の行動に思わず思考が停止する。

触れ合う唇。触れ合っているほんの数秒がまるで何時間のように感じる。

「・・・・・・・・・・」

やがて唇が離れると共にマオは再び眠り出す。先程の光景に呆然とする俺。いや、別にキスが初めてなのだから言うわけじゃない。ただ会ってそこまで経たない奴に突然されたことは初めてだ。やがて意識が戻ってくる俺。マオの顔を見るがマオはまた心地よさそうに寝てるだけだった。

「・・・・・・・・・・意味わからん」

寝ぼけてたのか？俺は取り敢えず起き上がり荷物から朝食の準備をする。マオがいる分量も多いからな。やがて起きたマオは何もなかったかのようにまたはしゃいでいた。きっとあれは寝ぼけてやったのだろう。

俺はそう結論づけ荷物を整理するとマオと共にこの世界に来て初めての旅に出た。

マオがやけに元気だったのは余談だ。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった
感想、批判、ご意見があったらどうぞお願いします。

殺人鬼から見てもとても魔王には見えん（前書き）

「無性に切り殺したくなることってあるよね？」

b y 響夜

「我を見てそんなこと言うでない!!」

b y マオ

殺人鬼から見てもとも魔王には見えん

この世界にはスキルつてのがあるらしい。何でも通常^{ノーマル}スキル、特殊^{レア}スキル、固有^{ユニーク}スキルつてのがあるらしい。右へいくほど珍しくその力も協力になるとか・・・。

何故突然こんなことを言ったのかそれは俺のスキルが分かったからだ。

固有スキル：想像形成

固有スキル：魔神の観察眼

固有スキル：鬼神の武勇伝

特殊スキル：魔王の加護

通常スキル：属性付加

つてのが俺のスキルらしい。上から説明していくと想像形成つてのは想像したものを魔力で創るつてもものらしい。ただしイメージが明確でない^と形があやふやになったり効果も小さくなるようだ。で、魔神の観察眼つてのは俺の殺人鬼としての能力、対象の筋肉の動きや体の構造が分かるらしい。鬼神の武勇伝は俺の身体能力のことだと思う。持ち主の能力をすべて底上げするらしい。魔王の加護は言うまでもなくマオが俺につけた後継者として証のせいだ。いちおう能力増強やら回復力増強の効果があるらしい。で、属性付加は持ち主の属性を武器やらに纏わせることが可能らしい。

スキルつてのは経験で獲得するのもあれば最初からもっているもの、

あとは魔導具や神器で得られたりとか・・・。

そうそう神器ってのは魔導具のさらに上らしい。何でも神が作ったもので誰も造ることが出来ないものだとか・・・。これには特殊型と形状型しかなくマオ曰く

「神の創ったものに人間が格をつけるなどおこがましいと思ったのじゃろう」

とのこと。

ま、これは俺が生きる上での知識の確認といったところだ。

「響夜く。まだなのか？」

俺達は今山の上を登っている。マオは知識を与える際に俺に不要だと思ったものは与えなかったらしくこの世界にはまだまだ知らないことがあった。例えば村や街の情報、魔物についてなんてのはマオは何を考えたのか俺に与えなかった。

「うるせえよ。だったら自分で歩け」

マオはずっと本来の姿のままだが黒いドレス(?)しか持っていないらしく歩きづらいついかほざき俺が背負っている。山の中をドレスとか此奴は何を考えてやる。

「む、響夜」

「分かってる」

俺のスキルと普段から鍛え上げている聴覚は近付いてくる敵の足音を察知していた。俺は背負っていたマオを降ろす。それと同時に現れる魔物。虎、いや狼・・だろうか。額には一本の紅い角を生やし虎のような牙に狼のような体躯ただその大きさは恐らく4、5m程もあるだろう。その体は見るからに強靱で、恐らく銃は効かないだろう。

「気を付けるのだぞ響夜。あれはゴブリンどもより遥かに強いぞ」
「あいよ」

丁度良い。此奴で魔法つてのを試してやるか。俺は魔物の注意を引き付けながらマオから離れる。

「遊ぼうぜ猫スケ。まあ人語を理解できるのかは知らねえが」

俺は魔物を試しにナイフで切り付ける。だがやはりその体に傷を付けることは出来ず魔物は自らの力を誇示するかのように吠える。うるせえんだよ。耳がいてえだろうが。取り敢えず注意は引き付けたので良しとする。

「集中・・・集中・・」

「力とは支配するもの。」マオはそう言っていた。魔力を俺の意思通りに操り構成する。

「形成・・・呪・・・炎・・・空」

三つの魔法と想像形成、属性攻撃を使う。想像形成で形を創る。そ

れに呪の属性を付加させる。さらにそれに炎の属性を被せて付加させる。あとはそれを空の魔法で操る。

「地獄車」

ま、こんな感じが。空中に現れたのは刺を生やした二つの車輪。呪で癒せない傷をつけるという呪いを付け炎で車輪を包む。あとは空でそれを俺の意思で操る。空を使わずともできるが此方の方が敵の攻撃を躲せる。

「殺れ」

あとはそれを放つだけ。車輪は目の前にいる魔物へと向かう。魔物はその車輪を迎撃しようとする。だが二つの車輪は魔物を挟撃するように立ち回る為魔物は必ずどちらかの攻撃を受けていく。魔物に刻まれていく傷跡そして傷は徐々に増えていき。

「・・・ガア・・・」

魔物はもはや虫の息と言ってもいい状態だった。俺は懷からデザートイグルを取り出す。確かに只の銃では傷付けられない。・・・なら魔法での銃ならどうよ。

「・・・」

俺は銃弾を想像形成で構造を組み換え呪の属性を付加させる。そしてその銃弾を魔物に向けて放つ。放たれた銃弾は車輪に注目していた魔物に当たり。・・・爆発した。

「・・・これは中々良いものだな」

俺はその結果に満足し車輪を消す。魔物の腹は爆発で飛び散り。傷跡からは焼け焦げた匂いがする。俺はその死体を観察して効果範囲を把握しておく。次使うとき自分ごと巻き込まれたら堪ったもんじやない。

「随分と上手く扱えたの」

マオは俺に近づいてそう言うてくる。

「まあな、何か創るときに重要なのは腕だ。この場合何かを創るってのは要は想像すればいいんだろ？」

今まで退屈を紛らわせるのに色々やってたんだ。これぐらいは何とかが出来る。

「ただ、魔力を少し使いすぎじゃな。あれぐらいなら其処まで魔力を使わなくとも出来るぞ」

「そこはこれからの練習次第だろ？」

「まあ。我に頼るがいい！」

そう言うて胸を張るマオ。此奴は魔王よりも子供みたいな感じだな。

「・・・・・・・・」

俺は騒いでるマオを無視して先へ進む。マオも俺の後を慌てて付いてきた。

「街はまだかのう」

「お前知らねえのか？」

「詳しい土地など我は知らん」

マオはやけに誇らしげに言う。・・・それは自慢にはならねえぞ。
俺は呆れながら先を歩いていく。

「響夜〜!!」

「うっ!？」

今何か人間が発するようなものじゃねえ言葉が出たがそれは無視だ。
突然マオが俺に首に手を回して抱きついてくる。首が、首が苦しい。
俺はこれ以上首が絞まる前にマオを支える。

「いきなり抱きついてくるんじゃないねえ！」

「良いではないか。歩くのが辛いんじゃない」

マオは頬を膨らませて言う。何だ此奴は。俺はマオを背負いながら
山をさらに歩いていく。やがて森が広がり俺達は森から出た。

「・・・・・・・・・・」

「お・・・・・・・・」

マオは瞳を輝かせながら感嘆の声を上げる。俺も目の前に広がる光
景を見る。そこに広がっているのは太陽の光を受け輝く海。そして

そこには港と街が広がっている。街は中々大きく多くの建物が見える。

「ほら！行くぞ響夜！！」

マオは俺の手を掴んで引つ張る。

「おい、待てそんな急に走ったら――」

「ひゃっ！」

俺が言おうと思ったら案の定はマオは転んでしまった。見ればドレスも破けてしまいマオは涙目になっている。

「・・・・ハア」

泣きたいのはこっちだ。俺はコートを脱いでマオに渡す。

「ほれ、ついでに鞆の中の服やるからそれに着替える」

こんな姿で街に行ったら絶対に目立つ。只でさえ此奴は容姿がいいんだ。余計に目立つちまう。マオは俺から衣類を受け取ると木の影へ入り着替える。

「・・・・何でこんな疲れなきやいけないんだ」

俺は深い溜息を吐いて空を見上げる。ああ、太陽がうざってえ。

「・・・・・・・・でかいな」

着替え終わったマオを連れて俺達は街に入った。こうやって街の中を見るとやはり此処が異世界なのだと実感させられる。周りには耳や尻尾を生やした獣人、翼や牙を生やした魔族、長い耳が特徴のエルフ、それに毛むくじらのドワーフ、人間もいる。皆やはり俺の世界とは違うものを着て鎧や、冒険者のような服装の奴もいる。その多くが武器を装備している。おそらくこれが知識の中にあつた冒険者って奴なのだろう。

「響夜！あれは何だ？」

マオは街の中は初めてなのかそこら中に目移りしている。これだけなら御令嬢とかで済むんだろう。

「あ？・・・・・・・・ありや街灯・・・・・・・・か？」

この世界に該当なんてあつたんだな。魔導具が何かで制御してるのか？ただその数も少なく恐らく限りがあるのだろう。

「・・・・・・・・」

さつきからどうも視線が俺たちに来る。服装に問題があるんだろうが、こればかりは仕方がない。先ずは金をどうにかしないとな。

「マオ。お前は金持つてるか？」

俺はマオに聞く。ここでもってないと言ったら・・・・・・・・どうしようか。俺のスキルで創るか？

「一応持っているぞ!!」

元気よく言うマオを見て俺は負担が減ったことに内心喜んだ。

「そんじゃ先ずはお前の服を買うか」

知識を与えられてなかったらこの世界の字なんて分かんねえし。硬貨の基準も良く分かんなかっただろう。マオには一応感謝しねえとな。

「いいのか？」

「構わねえよ」

不安そうに俺を見るマオの頭を撫でて言う。今更俺の迷惑とか考えんじゃねえ。

マオは撫でられたのが照れ臭かったのか少し俯いて顔を赤くする。

「そうと決まれば先ずは服屋か・・・」

どこにあるのかな。俺とマオは人混みの中を歩きながら探す。

「きよ、響夜」

「あ？ああ、悪い悪い」

どうやらいつの間にか歩くペースが早くなっていたらしい。俺はマオとはぐれないよう歩くペースを落とし手を繋ぐ。

「響夜？」

「はぐれたら面倒臭いだろう」

その行動を不思議そうに見てくるマオに俺は言う。何時の間にか随分お人好しになっちまったな。

「ほら探すぞ」

「うむ！」

マオは満面の笑みで頷くと上機嫌で歩き出す。俺もその手を握りながらマオの隣を歩いて行った。

「〜」

満足そうな様子で歩くマオ。そして隣でマオの服を持ちながらぐったりとした様子で歩く俺。女の買物というものをどうやら甘く見ていたらしい。マオは真剣な顔をして何着も試着し俺や店員に感想を聞いたりし、納得したら新しいものを探し出す。それが何時間もある。

「・・・疲れた」

もうとつとと宿を探して休もう。俺はそう考えてマオに言う。

「マオ、そろそろ宿を探すぞ」

確かこれだけ買い物してもまだ余裕があったな。お前の一応ってど

れ位だ？

「うむ、何処がいいかのう」

新発見だがマオの勘は異常なほどに当たる。服の時もそれを存分に発揮していたからな。

「むぐぐ、響夜！あそこじゃ！！あの宿がいいぞ！！」

マオは元気よく俺に言う。マオの指さす方向を見ればそこには一軒の宿屋。外装もそこまで悪くなく混んでいるわけでもない。俺はその宿屋へと歩いていくマオの後ろについて行った。

「すみません。」

対人関係はマオでは不安があるので俺が人を呼ぶ。こういうところでは一応敬語を使うぞ？これで外に閉め出されたら堪ったもんじゃない。

「あら？お客さんかしら」

俺の呼び声で一人の女性が奥から現れる。・・・若いな、20代つてところか。

「どうしました？」

俺がそんなことを考えていると目の前にいる女性は首を傾げる。

「ああ、いえ、美しいものですから」

「あら、そんなまた。そんなこと言っても負けてあげませんよ？」

俺の言葉に女性は笑って答える。ucci、ダメだったか。勿論そんなことを声に出して言うわけもな、俺は肩を竦めて微笑した。

「.....」

痛い。足を踏むなマオ。止める。マオは不機嫌そうな表情で俺の足を思い切り踏み付ける。

「あらあら、彼女さんが御立腹ですよ」

女性はマオのそんな表情を見て笑った。いや、こっちからしたら全然笑えないんだけどさ。

「ははは、済みません。一部屋お願いしたいんですけど」

「はい。どれ位の滞在になりますか？」

「あゝ.....」

決めてねえな。俺が悩んでいるのを見て女性は言った。

「決めてないなら取り敢えずだけで、後から延長することもできますよ？」

「あ、じゃあそれで。えつと取り敢えず十日間程」

「三食お付きになさいますか？」

「あ、はい。」

「でしたら銀貨七枚になりますね」

女性の言葉に俺はマオの持っていた硬貨を支払う。すると女性は差し出された硬貨を取り代わりに一つの鍵を差し出してきた。

「ではお部屋の鍵になります」

俺はそれを受け取ると未だに不機嫌そうな顔をしたマオを連れて部屋へと向かった。

「おい、何でそんな怒ってるんだ？」

「ふん、響夜など床で寝ればいいのじゃ」

マオは俺の質問に答えず手から鍵をひったくると早々に部屋へと入っていく。

「……意味わかんねえし」

俺はその行動に溜息を吐きながらも部屋へと入りマオの荷物を置く中はそのなりに広く、綺麗に掃除されていた。こう考えてみるとこの世界に來ての初めてまともな寝床だな。俺はベッドで横なろうと近づくと

「ふん！」

ベッドの上にマオが乗って邪魔してきやがった。俺はもう一つのベッドへと向かおうとするが

「おい」

そのベッドは先ほど置いたはずの荷物で占領されていた。此奴魔法使いやがったな……。マオは相変わらず不機嫌そうな面をしぷいっと顔を背ける。俺はその行動にこの日何度目になるのかの溜息を吐くと壁を背にして床に座り込む。

「……………疲れた」

今までの疲労のせいか目を瞑ると強烈な睡魔が俺を襲う。俺はその衝動に抗えず深い眠りに落ちていった。

殺人鬼から見てもとても魔王には見えん（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼と魔王は色々と初めてのことに戸惑った（前書き）

「予想した通りの所だな」

b y 響夜

「賑やかなのじゃ!!」

b y マオ

殺人鬼と魔王は色々初めてのことに戸惑った

おはよ・・・太陽が見えねえ。目覚めて最初から躓くとは如何なものか。ちよつと太陽に文句を言いたくなつた。余計な事を考えていたら俺の意識は完全に覚醒し大きな欠伸と共に起き上がろうとし、止まる。

「・・・・・・・・デジャブ」

もういいよこのネタ。俺に抱き着いて眠っているマオ。お前は餓鬼か。そう思ってしまう俺は悪くはないだろう。

「・・・・・・・・ベッドがあるのに何故俺と同じ床で寝るんだか」

寒いし硬いし良いことなんて一つもないぞ。それとも人肌が恋しいのか？俺はそんなことを考えながらマオを見る。

「安心しやがつて・・・」

もしこれが他の奴なら襲われていたかもしれないというのに。俺はそんなことを考えてマオの頬を引っ張る。

「・・・・・・・・柔け。よく伸びるな」

俺は柄にもなくマオの頬で遊ぶことに夢中になってしまっていた。思わずハツと意識を取り戻しながらも手はその行動を止めない。

「・・・・・・・・平和だな」

よく考えればここまで平和に過ごせたことなんて一度もなかった。普段からヒトを殺し、恨まれ追われの俺に休息など一日あれば良い方だった。俺はそう考えマオを一瞥する。

「ホント・・・いい寝顔だよ」

二度寝なんてのも良いか。俺はそう考えて横になる。不思議と睡魔はすぐに俺を襲い、俺はまた直ぐに眠りに落ちた。

「・・・・・・・・ん」

もう朝か・・・・？我は眩しい朝日を浴びながらその目を開く。しかし温かいな・・・・。我はその温かさが心地好くとても起きる気にはならなかった。

「・・・・・・・・響夜？」

そういえばあやつは何処におるのじゃ？普段から我よりも早く起きている男の名を呼ぶ。しかしその声に答える返事はなく、ただ静寂だけが広がっている。・・・・もしかして何処かに行ってしまった？そんなことを考えてしまった我は突然不安に襲われた。我の姿を知っても態度を変えず、励ましてくれる男。何だかんだと言いながらも我の頼みを聞いてくれる御人好しな男。あやつがいなくなるなと嫌じゃ！！眠気など吹き飛び我は堪らずに起き上がろうとし、止まった。

「・・・・・・・・響夜」

目の前にあるのは先程まで考えていた男の顔。朝日を浴びながらその顔は心地好さそうだった。

「・・・・・・・・ハア」

それを見た瞬間我は安堵する。それと同時にそれ程にこの男のことを想っていることに自分自身驚きを隠せなかった。

「・・・・・・・・」

白髪赤眼というこの世界でも珍しい容姿の男。思わずその髪を撫でていると、そういえばこやつのことなど我は何も知らないということに気が付いた。

「・・・・・・・・殺人鬼のう」

とてもではないが今のこやつ顔を見ているととてもそのようには見えない。・・・・・・・・戦闘中はそう思えるだけのものがあるが。現にこやつが我に襲ってきた時など、正に鬼気迫るものがあつた。我が人間に気後れするなど初めてのことじゃ。・・・・・・・・それだけこやつの実力が高いということなのかもしれないが。

閑話休題

兎に角我はこやつのことなど全く知らない。

「・・・・・・・・よし」

こやつのことを本人に聞いてみよう。ただしその為には今よりもずっと親密な間柄にならなくては。我はそう決心すると起き上がろう

とする。

「・・・・・・・・・・」

やはり無理じゃ。他の生物との触れ合いなど長らく感じなかったしこやつの心音は聞いてて落ち着く。我は再び響夜に抱きつくと目を瞑る。もう少しだけこの至福の時を感じたいと思いながら。

「・・・・・・・・・・」

こんにちは太陽。今度はちゃんと見えたか。俺はそんなことを考えながら未だに抱き着いて寝ているマオを引き剥がす。今度は抵抗しなかったので良かった。もうあんなことは避けたいからな。

「・・・・・・・・・・腹減った」

そういえば飯も付くんだったか。俺はそれを思い出すとシャツをとズボンを着替える。一応書置きを置いておくか。俺は部屋に備え付けてあった羊皮紙とペンを取ると書置きを残す。この世界の文字は初めて書くから少しぎこちないが問題はないだろう。マオから知識を貰って良かった。これならあの痛みと引換えだったとしても許容範囲内だ。俺は床に眠っているマオをベッドに運び部屋を出る。

「・・・・・・・・鍵はいいか」

仮りにも魔王。何かあっても心配するのは相手の安否だろう。俺はそう結論づけ階段を降りて一回のバー（というか飲食店？）に顔を出す。

「あら？今起きたのかしら？」

俺が降りると偶然にも昨日の受付の女性が丁度食器を運んでいた。

「あ、はい。少し疲れが溜まっています」

主に魔王の世話で。そんなことは口が裂けても言えるわけがなく俺は愛想よく笑って誤魔化する。

「あら、夜の方でかしら。」

この人は笑顔で何つつこと言ってたんだ。俺はその言葉に思わず苦笑する。

「違いますよ。俺と彼女はそんな関係じゃありません」

俺がそう言つと女性はふふふと笑う。

「ふふふ、そうでしたか。お似合いだったのでついそうなのかと」

このヒト商売上手いなあ。などと考えながらも俺は再び苦笑する。

「それじゃお昼にしますか？」

「ええ、お願いします」

俺は愛想よく笑って返事をする。女性もその言葉を聞いて厨房へと入っていった。

「・・・何か職でも探した方が良いのかねえ」

俺はこれからのことを考えて頭を悩ませる。適当に街の外にいる奴らから路銀を筆記取るのも良いがそれだと来る日と来ない日があるから却下。だとすると何か依頼でも受けて働くかねえ。マオの知識にはそういうのがないから詳しくは分からない。

「・・・どうするべきか」

俺の横に置かれる水の入ったコップ。見ればさっきの女性が微笑みながら持ってきていた。

「どうぞ」

「ああ、済みません」

「いえいえ、それよりも何やら悩んでいるようですが」

この店のことだとも思ったのか女性は少し心配そうな表情をする。

「いえ、ちょっとこれからについて――」

そこで俺は気付いた。このヒトに聞けばいいんじゃないかね？」

「すみません。何か良い働き場所ってありませんか？」

俺の言葉が意外だったのか女性は少しキョトンとする。

「働き場所、ですか？」

「ええ、何分旅人でして。今までは何とかなつてたんですがそろそろ路銀も尽きかけてきてしまひまして・・・」

「冒険者ではなくてですが？」

「？ええ」

俺は少し首を傾げる。

「ああ、いえ、その身のこなしというか、隙がないようだったので」

「・・・この女性何者だ？いくら冒険者達が泊まるのが多いとはいえ隙とかつてのはそうそう分かるもんじゃねえだろ。」

「・・・まあ外は危険でしたから。それなりに実力がないと旅なんて出来ませんよ」

取り敢えず怪しまれたくはないからな。俺は肩を竦めて答えた。女性も何処か納得したのか頷く。

「そうでしたか。・・・ああ、それで働ける場所ですよね？」

女性はそう言つて少し悩む仕草をする。

「・・・そうですね。やはり一番メジャーで簡単なのはギルドに冒険者として登録することじゃないでしょうか。」

「ギルド、ですか？」

「ええ、やはり依頼が普段から数多く来ますし、ランクが上がれば

知名度や依頼の報酬も大きくなりますから」

「・・・・・・・・ん」

ギルドか……。まずはマオと相談した方が良いか。……。よく考えればあいつのことをここまで気に掛ける必要もないよな。

「有難うございます。連れと一緒に考えてみますよ」

「ええ、頑張ってください」

女性はそう言うのと厨房へと戻った。この宿は中々いいな。やはりマオの勘は伊達じゃない。俺はそう考えながらコップに手を伸ばす。

「きょくやくく!!」

「・・・・・・・・またうるせえのが」

俺はその声に肩を落とす。

「五月蠅いぞマオ」

俺は階段を騒々しく降りてくるマオを注意する。マオは俺の顔を見た途端に笑顔を見せる。そして俺に集まる視線（主に嫉妬6割殺意7割の10割越え）。見た目だけなら美女なんですがねえ。俺は思わずため息を漏らす。

「響夜！酷いではないか！？昼食に行くなら何故我を起こさない！」

「・・・あゝ？あんまりにも良い寝顔だったんでな。起こすのが忍びなかったんだ」

俺は適当な言葉を口にしてその場を乗り切る。マオはまだ不服そうな表情をしていたがそれも一時、飯が運ばれてくればまた笑顔になるだろう。

「はい。出来ましたよ」

マオの愚痴に適当に返事していると先程の女性が料理を運んでくる。

「済みません」

「いえいえ、これが仕事ですから」

俺は運ばれてきた料理をマオの前に持っていく。

「？」

「ほれ、先に食っとけ」

「でも・・・」

「文句言つな」

「そうですよ。こういう時は素直に受け取らないと」

女性の援護射撃にマオは料理に手を伸ばす。

「…………おいしい」

「そう言ってくれると嬉しいです。では貴方の分も・・・」

女性はそう言って一礼すると再び厨房に戻った。

「…………いい人だな」

「うむ、優しいのだ」

流石にあのヒトは人として見るか。中々面白いしな。

「…………響夜も、ありがとう」

「どういたしまして」

頬を僅かに赤らめて言うマオ。だから切りなくなっちまうから止める。

「マオ、この後なんだが」

「む？」

マオは手を止めて俺の話を聞く。

「ギルドって所に行ってみるぞ」

「ギルド・・・ああ、冒険者の」

「金が必要だからな」

マオは納得したのか頷いて再び料理に手を伸ばす。俺はその様子を眺めながら自分の料理が来るのを待っていた。

あの後ロシエル——あの女性の名前だ。あの後聞いた——によるとギルドはすぐ近くにあるらしいので俺とマオは今ギルドに向かっていた。よく分かんがロシエルから招待状を貰ったのでこれを渡せば良いらしい。ロシエル、お前はマジで何者だ？

「響夜！見えてきたぞ！！」

マオははしゃぎながらギルドを指差す。ここに来るまでも大変だった。マオの容姿が目立つから自然と人々の視線が集まる。そしてその視線は隣にいる俺にも向かうわけで……。切り殺したくなかった。

「あんまりはしゃぐな」

俺はマオにそう言いながらギルドの扉を開ける。ギルドの中は沢山の種族の奴らがあり賑やかだった。真っ直ぐ受付を目指す俺たちに注がれる好奇の視線の数々。俺はこの世界じゃコートは外套として誤魔化せられるかもしれないがそれ以外は这个世界じゃないものだ。それにマオは貴族といった方が言いからな。いや、貴族じゃなくて王か。・・・一応。

俺はそんなことを考えながら受付嬢の下に行く。

「すみません」

「はい、本日は当ギルドにどのような御用でしょうか？」

「実は冒険者として登録したいんですが、どうすればいいんでしょうか？」

「あ、はい。それでしたらこの用紙にお名前とご年齢、後は現在の住居の番号をどうぞ」

住居の番号・・・要は住所か。

「済みません。招待状を貰ったんですが」

俺はそう言ってロシエルから貰った招待状を渡す。受付嬢は差出人を見た後中に封筒されている手紙を取り出すと一言断って奥へ入っていた。

「・・・・・・・・。」

「あれは何なんじゃろうな？」

マオはそう言って受付嬢の入っていった扉を見る。いや、それはいいが。

「何故手を繋ぐ」

俺はマオの行動に少し混乱していた。ここは混んではいい別にほぐれるような所ではないし何も手を繋ぐ必要はないだろう。

「良いではないか」

そう言つて更に密着してくるマオ。止める暑苦しくなる。俺が露骨に嫌そうな顔をしてマオの接近を防いでいると奥から受付嬢が戻ってくる。

「済みません」

「ああ、いえ。問題ありません」

俺は外面で愛想良く笑う。

「実はギルドマスターに御会いしていただきたいんですが・・・」

「・・・は？」

何？もしかしてマオが魔王だとバレたか？それともそれ以外で何かやっちゃったか？

「いえ、特に何か問題があつたわけではないんですが。只あの招待状のことで・・・」

ロシエル、テメエ何渡しやがった。俺はロシエルへの恨み言を吐きながら受付嬢の後を付いていきギルドマスターの元へと向かう。

「マスター。お連れしました」

「うむ、入ってくれ」

ドアの向こうから老人の言葉が聞こえる。受付嬢はドアを開け俺達を招き入ると早々に出ていった。残された俺とマオの二人は取り敢えず椅子に腰掛けている老人をみる。

「む、主達が紹介にあった」

「響夜です」

「マオだ」

「そんな畏まらなくとも良い」

その一言で俺は敬語をやめる。

「そんじゃ、この口調でいかせてもらっわ」

俺の態度の豹変ぶりにマスターは少し驚き声を上げて笑う。

「ホホホホホ！中々面白い奴じゃのう！」

老人は俺たちに席を勧める座ったのを見ると話し始める。

「先ずはロシエルからの招待状じゃのう。あやつには所謂審査員というものをやってもらっているのじゃよ」

「審査員？」

マオは首を傾げて言う。

「うむ、ギルドとして十分な実力があるであろう者たちを見定めるのじゃ。これは各宿屋に一人はいるのう」

成程。どうりで身のこなしがどうか言ってたのか。

「それで大丈夫と判断されたものに招待状を渡すのじゃ。希望次第ではある程度のランクから始められるぞ?」

「・・・いや、最初から地道に進めていくから良い」

「いいのか?」

「ああ」

この世界の基準を図るのに良いし魔法の練習台になるからな。俺の隣でマオも頷く。どうやら俺に同意らしい。

「では、あとは受付嬢から聞いてそれで登録完了じゃ。それ以降はランクに応じた依頼が受けられるぞ。・・・そうそう、たまには僕からも頼むことがあるかもしれんからその時は頼むぞ?」

老人のその言葉を聞きながら俺達は部屋を出る。受付でギルドカードを貰うと俺達は依頼を探し始めた。

ランクにはEとAがあり、その一つ上にS、SSとランクがある。Sというのは殆どいなくSSなどそれこそ両手で数えられるかどうからしい。

「響夜。これはどうじゃ?」

そうやって俺に見せてくるのは一枚の依頼書。そこに書かれているのはゴブリン達の討伐というものだった。

「数は・・・13か」

まあ、練習だしな。俺が頷くとマオはそれを受付嬢に渡してきた。

「ほら！行くぞ響夜！！」

元気いっぱいと言うマオ。その様子を眺めながら俺も後に続いていく。こうして俺達の初めてのギルド生活が始まった。

殺人鬼と魔王は色々とお初めてのことに戸惑った（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること（前書き）

「・・・・あ、おもしれえ。最高にハイな気分だクソ野郎」

b

y
響夜

「我の邪魔をするな!!」

b
y
マオ

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること

ギルドの依頼で俺達は今ゴブリンの討伐に来ている。そこまで苦戦することは無いと思うが油断すれば何があるか分からない。既に俺は此処に来てマオという規格外と会っているのだから。俺は適度な緊張感をもって目的の場所へと歩いて行く。・・・マオを背負つて。

「・・・・・・・・おかしいだろ」

「何がじゃ？」

俺に背負われた状態でマオは首を傾げ聞いてくる。

「・・・・・・・・ハア」

「？」

俺の様子にマオは相変わらず首を傾げたままだった。地面に落とすてやろうか？

「マオ。そろそろだから降りろ」

「・・・・・・・・うむ」

マオは少し不服そうな顔をしたが素直に俺から降りる。

「ゴブリンは穴の中にいるんだっけか」

「うむ、奴らの住処は大体掘って作られた穴の中じゃ。狩りにでも行かない限りは大抵住処にいるの」

俺達がそんなことを言いなが進んでいくと拓けた場所に出る。そこから見えるのは一つの大きな穴。・・・が5つ。

「・・・13、だよな？」

「・・・13・・・の筈じゃ」

俺の言葉にマオも自信を失う。・・・だよな。あれ、どう見ても40は超えてるよな。俺達はゴブリン達の様子を見る。

「・・・？」

「どうしたのじゃ響夜？」

「いや・・・奥の方に何か建物が見えるからよ」

俺の指さした方向。そこに見えるのは神殿のような建物。だが半壊して建物の殆どが土砂に埋まっていて生物が住んでいる様子もない使われているようにも見えない。

「・・・」

「響夜。気になるのは分かるが今はゴブリンが先じゃ」

「ああ」

俺は神殿からゴブリン達へと視線を戻す。ま、さっさとやるか。

「・・・・・・・・」

俺のスキル想像形成。これはよく考えればこの世界の常識を覆すようなものだ。マオから聞いた。この世界は魔法を唱えるとき詠唱が必要になる。上位の奴らは詠唱破棄で無詠唱のまま魔法を使えるがそれも限度——マオのような規格外除く——がある。そして最初から存在している魔法に従った構成で魔法を放っている。だが俺の想像形成は詠唱を必要とせず俺の想像で創られるからこの世界には存在しないものだ。ようは・・・

「俺にしか創れないただ一つの魔法だ」

俺は火の魔法で巨大な炎の蛇を創る。

「いつてこい」

俺の合図と共にゴブリン達へ向かっていく。一匹のゴブリンがその姿を見て敵襲と悟るがもう遅い。目の前にいるゴブリン達を飲み込む。そこに来て漸く他のゴブリン達も動き出す。

「行くぞマオ」

「うむ」

炎の蛇によって焼け焦げた大地の上に俺達は降り立つ。

「中々のものじゃな」

マオは周囲を見てそう呟く。

「まあな、今回は炎と追尾性だけにしたからな」

俺達がそんなことを言っていると炎の蛇が突然凍り、砕け散る。

「……ゴブリンメイジ」

「どれくらいだ？」

「身体能力はそれほどじゃないの。ただ知能が高く魔法が使えるの。身体能力がそこまでじゃねえんなら奴に魔法を撃たせなければいいか。俺はそう考えるとゴブリンの群れへと駆ける。」

「半分任せた」

「了解じゃ」

その言葉と共にマオはゴブリンの群れへ次々に魔法を放つ。

「……容赦ねえな」

天高く吹き飛ぶゴブリン達を見て俺は思わず同情してしまう。

「ギャギャッ!!」

「邪魔」

飛び掛るゴブリンの顔面に拳を入れると横たわるゴブリンの頭を踵落として砕く。広がっていく血の臭い、俺はその臭いで自分が興奮

していくのが分かる。

「・・・堪んねえ。堪んねえよ」

俺は懷からデザートイーグルを取り出す。

「オラオラオラア！！派手にブチまけるやあ！！」

放たれた銃弾は針となってゴブリン達を襲う。だが俺がそれだけで終わりにする訳がない。針が刺さったゴブリン達は叫びだし次々に仲間を襲う。幻覚作用。それがこの針に掛けた呪の効果。仲間を未知の敵と錯覚させ混乱させる。仲間同士で殺し合うゴブリン。それを見た俺は思わず肩を震わせて爆笑する。

だからだろう、俺はゴブリンメイジからの攻撃に気付けなかった。

「――」

俺はその攻撃で手に持っていたデザートイーグルを弾かれる。そして同士打の中を抜けて俺に飛び掛ってきた5匹のゴブリン。

「――しまっ！」

俺はそう言つて左手に持った黒い塊をゴブリンの額に押し付ける。

「た訳ねえだろ？」

俺は笑いながらグロックの引金を引く。放たれた銃弾は眉間を撃ち抜き。俺は向かってきていたゴブリン共を次々に撃ち殺していく。

「ほらほらどうしたあ！？もつと死ぬ気で来いやあ！！」

俺は次々に倒れていくゴブリンを見て叫ぶ。

アイアンメイデン
「鋼鉄の処女」

その言葉と共にゴブリンメイジの背後に鋼鉄の拷問器具が出現する。ゴブリンメイジはそれに気付く暇すら無く中へと押し込まれ閉じ込められる。その瞬間ゴブリンメイジの絶叫と血が漏れ出だした。

「……………堪んねえ」

俺はその光景を見て満面の笑みを浮かべる。最高だ。まさかこれも再現可能とは…………。

「……………つち、もう終わったか」

辺りを見れば周囲にあるのは屍ばかりあと数匹程残っているがそれもやがては同士打で死ぬだろう。…………念には念を入れるか。

「燃やせ」

俺は周囲一帯に炎の矢を降らせる。残りもこれで焼け死ぬだろう。俺はそれを確認するとマオを見る。

「……………まだ終わってないか」

魔王つてのは滅多に戦えないのか？随分顔が輝いているが。俺はそれを見ると気になっていた神殿へと足を運ぶ。何かありませんかねえ。

「しかし随分古びてるな」

どれだけ昔のものなんだか。俺は何時でも戦闘が出来るようにグロツクとデザートイーグルを手にとっておく。

「玄関でも作るか」

俺は崩れないように調節して弾丸を放つ。弾丸は神殿の外壁にぶつかる。と大体俺の予想通りの規模で爆発する。

「お邪魔しまーす」

俺は出来た玄関を通して中へと入って行った。

「ふはははは！！逃げ回るがいい！！」

我は手当たり次第に近くにいる敵を吹き飛ばしていく。久しぶりに手加減無しで戦えるのだ。これぐらいは許してもらいたいものじゃ。

「さあ、次は何で吹き飛ばそうか」

闇で影を操るのもいいの。自分の影に刺されて死ぬ姿というのは酷く滑稽であろうな。我はそう考えながら魔法を発動させる。だが――

「GYAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

「む？」

突然空から咆哮が聞こえる。そして突風が吹き荒れると共に聞こえる翼を羽ばたかせる音。

「GRAAA!!!」

空を見ればそこには先程まではいなかったはずの———というか
こんな所に現れないはずの———巨影。それは全身を覆う赤い鱗、
二枚の翼、そして鋭い目付き。恐らく種としては代表格と言つても
過言でない生物。

「**赤竜**」
レッド・ドラゴン

我はその姿を見て不敵な笑みを浮かべる。まさかこんな所で出会えるとは……。

「……響夜は何処にいるのかのう」

我は響夜の姿を探す。けれど何処を見ても響夜の姿はなくあるのはゴブリン共の死体だけ。

「む・置いてかれたかのう」

私は証を使って響夜が何処にいるのか探す。．．．．．神殿？

「あやつ先に行きおつたな」

我は頬を膨らませて言う。だがそれも束の間だった。

「もう一体ドラゴンの魔力を感じるの」

感じるのは・・・神殿。響夜がいる場所も・・・神殿。

「不味い！」

幾ら響夜でも人間。それもこの世界に来たばかりでドラゴンと戦うなど無謀以外の何物でもない。我は真剣な表情になると目の前の赤竜を睨み付ける。

「悪いが、早々に死んでもらおうぞ」

我はその言葉と同時に魔法を放った。

「オオオオオオオオオオ！！！！」

俺は目の前にいる化け物に弾丸の雨を浴びせる。だが化け物は多少怯んだものの俺へ突進してくる。

「クソっ！」

俺はその突進を何とか躲すと今度は背中へ弾丸の雨を浴びせる。だが化け物はその攻撃も物ともせず俺を向く。そこで漸く俺は目の前にいるのが何なのか分かった。

「・・・・竜・・・・の骨？」

そこにいたのは全身が骨で出来ている竜の形をしたもの。肉や皮もなく僅かに浮遊しているがその正体は分からない。

ひしゃげたオブジェクトを見て俺は冷や汗を拭う。今は今まででもベスト5に入る程の恐ろしさだった。俺は鞆から手榴弾を取り出すと竜へと投げる。

ドゴオオン！！！！

手榴弾は見事に竜へぶつかり爆発した。俺は土煙の中にいる竜を睨み付ける。……流石に少しは傷が付いたよな？やがて土煙が晴れたそこには顔の半分を破壊された竜の顔。その瞳には確かな憤怒の色が見えていた。

「……………ざまあ」

俺は口元に笑みを浮かべて言う。それが気に障ったのか竜は尻尾で俺へと強烈な一撃を放つ。俺は躲そうとするが肩にはしまった激痛で動きが鈍る。

「……………か、はっ！！！！」

その一瞬の隙を逃すことなく竜の尻尾が俺の腹に直撃する。骨の折れる嫌な音と共に俺はその衝撃で壁へ吹き飛ばされる。

「ゴボツ……………」

壁に叩き付けられた俺は思わず咳き込む。口のなかには血の味が広がり床を赤く染めている。

「……………舐めてんじゃねえぞ」

俺はその痛みを無視して立ち上がる。

「ぜってえ殺してやるよ」

俺は再び銃弾の雨を降らせる。今度は只の銃弾じゃねえぞ糞が！放たれた銃弾は次々にその効力を発揮する。あるものは爆発し、あるものは針となつて竜を襲う。

「死ね死ね死ね死ね！！！」

俺の銃弾を浴びながらも竜はその闘志を燃やして突撃してくる。既に竜の体は半分近くがボロボロになり普通なら幾ら骨の体といつてもとても動けるようには見えないだろう。

「ファック
……畜生」

俺の体はもう動かねえ。最後の悪足掻きで引金を引き続けているがもうこの距離までこられたら倒しても俺に突っ込んでくるだろう。俺は最後に不敵な笑みを浮かべ竜に叩き潰された。

「……」

体が……動かねえ。竜に叩き潰された後、俺は地下へと落下した。上からは勝ち誇ったような竜の咆哮が聞こえる。

「・・・けんじゃねえぞ」

俺は気力で床を這い蹲って動く。

「・・・ヤロウ、絶対痛い目みしてやる」

ぼんやりと俺が進む方向に二つの光が見える。

「・・・あ？」

俺は這い蹲りながらもその光がある台のへと上り、光に手を伸ばした。

「――」

その瞬間、俺は確かに何かを掴んだ。

「・・・十字架？」

俺が掴んだものは漆黒に輝く十字架。それは突然光だしやがて光が収まると共に十字架は消えていった。そしてその次の瞬間俺から溢れ出る何か。それは俺の全身を駆け巡りその効果を表した。

「・・・は？」

俺から消える痛み。みれば全身にあった傷も綺麗さっぱり消えていた。

「・・・。」

これは治ったと思って良いのか？俺は取り敢えず全身を確かめるように動かす。

「五体満足。・・・魔導具か何かか？」

後でマオに聞いておく必要があるな。俺は立ち上がると隣にあった台の上で光るものを見る。そこには一本の銀の鎖があった。

「・・・これも魔導具か？」

俺はそれへと手を伸ばす。するとさっきの十字架同様鎖も光だし今度は俺の右手に巻き付く。

「・・・・・・・・。」

俺はスキルの魔神の観察眼を発動させる。これは鬼神の武勇伝と違い常時発動ではないからいちいち発動させる手間が掛かるのが面倒だ。

神器：悪魔の心臓
グリモア・ハート

神器：神殺しの鎖
グレイブニル

・・・神器ですか。もしかして上にいた竜ってのはこれの門番か何かか？

「・・・・・・・・これはひどい」

思わず効果を見た俺は頭を悩ませる。

悪魔の心臓^{グリモア・ハート}：所有者に超再生能力を身につける。肉体が一部でも残っていれば再生を可能とする。

神殺しの鎖^{グレイブニル}：対象へと鎖を放つ。鎖は自由に操ることができ、本人の魔力の分だけ数を増やすことが可能。

神殺しの鎖は兎も角、悪魔の心臓^{グリモア・ハート}つて、俺、強制的に人間止めさせられかけてる？これなんて呪い？

「……ジーザス」

俺はそう言いながらも上へと神殺しの鎖^{グレイブニル}は飛ばす。もしかしたらマオがどうにか出来るかもしれないからな。神殺しの鎖^{グレイブニル}が天井に突き刺さると俺はそれを持って一気に壁を駆け上がる。

「よう、蜥蜴野郎」

俺は目の前にいる竜に声を掛ける。竜は俺が生きていることにキレたのか。宝を取られたことにキレているのか知らないが一際大きく咆哮を上げる。俺はそれを見て笑った。

「上等。今の俺に勝てるもんなら殺ってみやがれ」

「今の俺は……最高にハイな気分だぞ。」

その言葉と共に俺と竜の第二ラウンドが始まった。

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼だって傷つく時はある……たぶん（前書き）

「……人間は止めたくなかったな。」

b y 響夜

「我から見れば主はまだ人間じゃ!!」

b y マオ

この程度の炎で！

「ハアツ！」

我は向かつてくる炎へ黒い閃光を放つ。それは向かつてくる炎を飲み込み赤竜へと迫っていく。赤竜もそれを見て無理だと悟ったのだろう、回避行動にでるがすぐそこまで迫っていた閃光を完全に躲せるわけもなく赤竜は脇腹を挟まれた。その痛みからか赤竜はこれまでもよりも一際大きな咆哮を上げると我へ次々に火炎弾を放つ。

「ふん！貴様程度で我を殺せると思うな！！」

我はそれを黒い閃光によって消し去る。竜もそれには警戒していたのだろう余裕をもって躲す。

「……無駄じゃ。」

だが竜は一つ勘違いをしていた。それは――

「我が連続で放てないとも思ってたか。」

我は竜の回避した場所へ次々に閃光を放つ。それは竜の体を次々に消し去っていく、やがて竜は塵すら残さずに消えていった。

ドガァン！！

その音を聞いた我が神殿を見れば外壁の一部が破壊されていた。そしてやがて聞こえてくる咆哮。気づけば我はその場所へと走っていた。

「・・・・・・・・！？」

だが我の行手を阻むように何体ものゴーレムが土から現れる。

「くっ！何故ゴーレムが！！」

こやつらは魔法使いが造るもので自然発生するようなものではない。
まさかあの神殿に魔法使いが！？

一瞬その考えが頭を過ぎったがその考えを放棄する。竜を従える魔法使いなど聞いたことがない。

「人形の分際で！」

我は目の前にいるゴーレム達を次々に泥へ還していくが数が多い。
奴等は再び泥から現れると此方へ殺到する。

「くっ、響夜が心配だというのに！」

我は目の前のゴーレム達に最大級の魔法を放った。

「・・・・・・・・。」

外が五月蠅い。マオはまだゴブリン共と遊んでるのか？

「GURROOOOOOOO！！！」

「おっと、悪いな。お前が先だった。」

俺は目の前にいる竜を見て笑う。

「出来る限り長持ちしてくれよ。・・・実験が出来なくなる。」

俺はその言葉と共に竜へと駆ける。竜はその右手を振り上げ俺を迎撃しようとするが――

「グレイブニル！」

その振り上げた右手に絡みつく何十本もの鎖。それは竜の動きを阻害し隙をつくる。

「オラア!!」

さっきの戦闘。此奴は異常なまでの防御力を誇っている。恐らくそれが此奴の強みなんだろうが。

「至近距離の爆撃はどうだ？」

俺は想像形成で創り出したパンツァーファウストを竜の胴体へ放つ。それは奴の骨を砕き俺をも巻き込んで爆発した。

「――ッ」

俺を襲う火炎と激痛。俺の右腕は爆発に巻き込まれ吹き飛ぶが瞬時に再生した。それだけじゃない俺にあつた火傷の痛みも直ぐ様癒えていく。

「・・・やっぱり死なないか。」

恐らく俺の体は一瞬で全身を消し飛ばされない限り復活するのだろ
う。俺は自分の体を冷めた目で見る。

「・・・人間は止めたくなかったな。」

ポツリと呟く言葉。それは復活した竜の咆哮でかき消された。

「今遊んでやるよ。」

俺はそれを見て再び笑みを浮かべる。竜は俺へと勢いよく迫るがそ
う簡単に通すかよ。

「これでもちつと冷静になれや。」

俺は竜の頭上に何十個という巨大な石を創り奴の頭へ落下させる。
その衝撃によって奴は思わず頭を床へ打ち付け転がりながら止まっ
た。

「続いてはこれだ。」

俺は再びグロックとデザートイーグルを取り出す。奴は起き上がる
うとするがそれを俺は神殺しの鎖グレイブニルで封じた。

「俺は足が遅くてよ。皆に置いてかれちまうんだ。――――テ
メエもその苦しみを味わえ。」

俺はその言葉と共に銃弾を放つ。放たれた銃弾は竜の骨へ突き刺さ
っていく。すると竜は苦悶の声を上げた。見れば竜の周囲には紫色
の何か文字が書かれた帯状のものが幾重にも纏わり付いていた。

「消え失せろ。」

放った。放たれた槍は黒い輝きを放ちながら竜へと刺さり

カシヤアアン

砕けた。それと同時に竜に異常が起きた。竜を構成していた骨に亀裂が入り塵に変わっていく。

「GUGUAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

竜の咆哮も次第に小さくなっていき、やがてそこには何も残らなかった。

「盛者必衰の理つてな。」

今の中にはその生物の持つ魔力の分だけその体を塵にする。という呪いが掛かっていった。効くかどうかも怪しかったが、何とか効いて良かった。実際あれはあそこで碎けるようには創っていなかったんだが・・・

「魔導具の生成ってのは難しいな。」

正確には神器に近い魔導具だが。俺が竜のいた場所を眺めていると

ドガァン！

「うおっ！」

突然壁が壊れへんてこな・・・ロボット？の様な物が飛び込んでくる。俺はその光景に呆然とし・・・

「・・・」ぶおっ！！」

よく分からない声を上げて潰された。そして誰かが飛び降りる音。

「響夜ー！！何処におるのじゃー！！！！！！」

・・・マオ、これはテメエがやったのか。俺は何とかロボットの様な物の下から抜け出すとマオを見る。

「響夜！無事じゃったのじゃな！！」

「テメエのせいで死ぬかと思ったわ。」

俺は笑顔のマオの頭を掴むと思い切り力を込める。

「痛い、痛い！痛いのじゃ響夜！」

マオは俺の手から抜け出すと頭を抑える。っち、これからだったのによ。

「で、テメエは今までずっとゴブリンと遊んでたのか？」

「いや、突然赤竜に襲われての。消し飛ばして響夜の下に行こうと思ったらゴーレム共が・・・。」

ゴーレムってのは多分あのロボットもときだよな。・・・赤竜ってのはそのまま赤い竜か？

「響夜！ドラゴンはどうしたのじゃ！？」

「ああ、その骨か。」

「……骨？」

マオは首を傾げる。　　というか何故それを知っている。

「ああ、骨で出来た竜だ。」

「……多分それは骸竜がいりゅうじゃな。」

「骸竜？」

その言葉に俺は首を傾げる。

「うむ。死んで骨になった竜が空気中に漂うマナを大量に吸収してなるものじゃ。」

マナ……魔力の回復等の魔力の元になるものだけか。

「奴等は魔法の耐久が低い代わりに物理攻撃の耐久が他のドラゴンよりも高いのじゃ。」

「ふん。」

「で、そのドラゴンは？」

「殺した。」

「……………は？」

「いや、だから殺した。」

俺がそう言つとマオは俺に詰め寄ってくる。……顔が近い。

「ほ、ほんとに倒したのか！？」

「あ、ああ。」

その迫力に押され思わず俺は頷いた。

「だ、大丈夫じゃったのか！！？」

「…………死にかけて人間やめた。」

「？」

隠していてもいつかはバレる。だったら今のうちに言つといたほうが良いだろう。俺はそう思ってマオに神器も含めて今回のことを話した。

「…………大丈夫か？」

「ああ。」

マオに説明をしてどうにかして悪魔の心臓グリモア・ハートを外せないか聞いてみた。

・・・そしてその結果が

「すまぬ。」

「お前が謝ることじゃねえよ。」

これだ。俺から神器を取り出すことは出来ず、やるには俺を殺すしかない。死にたくはないから当然の如くそれは却下。俺はこのまま半不死的な能力を得た。しかも下手をするとこれ、不老にもなるのではないかとの悪い知らせ付きで。

「まあ、死ななかつただけ良しとするか。」

あそこでこれがなかつたら俺は今此処にいないことになる。助かったのだから多少の不満は我慢するでしょう。

「・・・それじゃギルドに帰るぞ。」

「うむ。」

俺達は頷き合うとその場を離れようとする。鞆が消されたのは痛かった。あの中には色々入ってたんだが・・・。
俺は立ち上がり辺りを見回し・・・気付いた。

「・・・依頼達成の証拠どうしよう。」

「・・・あ。」

その言葉に立ち止まるマオ。ドラゴンたちは二匹とも消えちゃった。ゴーレムは持って行っても性がない。

「・・・・・・・・・・」

俺達はその後何とか依頼達成の証拠であるゴブリン13匹の片耳を探し出した。戦うよりも探すほうが疲れるってどういうことだよ。こうして俺達の初めての依頼はまさかの結果で終わった。

殺人鬼だって傷つく時はある・・・たぶん（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は魔王に影響されたようです（前書き）

「・・・・・・・・勘弁してくれ。」

b y 響夜

殺人鬼は魔王に影響されたようです

あの竜というイレギュラーが出た初めての依頼から既に一週間が経とうとしていた。あの後帰ってきた俺達は色々と驚かれた。マオはそこまででないが俺は服が血塗れでコートやシャツもボロボロで服としての機能を果たしていない状況だった。それを見たギルドマスターと受付嬢が騒ぎ出したのだ。そのうえ帰ってきたら今度はロシエルが俺達を見て騒ぎ出す始末。依頼よりもよっぽど疲れた。

今は依頼も着実にこなしてランクも一つ上に上がった。それなりに平穏な日々でもあるだろう。窓から街の通りの様子を見れば相変わらずの喧騒が聞こえてくる。最初は慣れたと言っても多少の現実との違和感があったが今では此方の方が現実味が出てくるから不思議だ。それこそ俺のいた世界が夢であつたかのように。

「……………服でも買いに行くか。」

俺は読んでいた本を閉じてメガネを取る。このメガネ、書物などを読むとき時間を短縮するのによく重宝されているらしい。何でも思考が何時もより早く回転し読む速度が通常より3倍程の速さで読めるらしい。……………少し高かった。

「……………流石に二着は不味いよな。」

マオに貸していたものがあつたから何とか一着だけは残っていたがそれ以外は緊急用でギルドから貰った服だけだ。ギルドから貰ったのは堅苦しくて着てられない。

俺は取り敢えず財布の中の硬貨を確認する。…………よし問題ない。それだけ確認すると俺は部屋の扉を開け施錠する。マオは何処かに出掛けてるがまだ戻って来はしないだろう。

「先ずはギルドか。」

取り敢えずこの服返そう。俺は宿の階段を降りていく。

「あ、響夜さん。」

「・・・ロシエルか。」

俺は受付にいるロシエルから声を掛けられる。何か降りる度に此奴は此処にいる気がするが休憩もしてないのか？

俺は思わずそんなことを思ってしまったがそれを早々にやめて目の前にいるロシエルの話に集中する。

「マオちゃん。今日はご機嫌でしたよ？」

「あ？マオが笑顔なのは何時ものことだろう。」

俺は何時もの口調で話す。この一週間で此奴に丁寧な口調を使うのはやめた。というのもマオが此奴と仲良くなったことにより必然的に会話することが増えるのだ。御陰で俺は誰に対しても敬語を使うことは止めた。

「いえ、そうじゃなくて何か何時にも増して元気なんです。響夜さんが何かしたのかと思ってたんですが。」

「・・・ああ、多分今日は服の割引があるとか。」

ギルドに入ったからといって俺達にはまだそこまでの金銭的余裕はない。俺のメガネも他の物を買うのを我慢して購入したものだ。マ

オもそれを考えてなるべくセールのある日に買い物に出掛けてる。

「・・・そういえば。」

不意にロシエルの声が小さくなる。

「マオちゃんってやっぱり何処かの貴族なんですか？」

ああ、やっぱりこの質問はくるのか。だが素直に魔王と言える訳もない。俺は肩を竦めて言う。

「まさか、そんな訳ないだろう。」

「・・・ホントですか？」

「ああ。というかそんなに気にするんだったら本人に聞け。」

「いや、もしかしたら複雑な事情があるかもしれないじゃないですか。」

単に魔王が面倒臭いからです。

「そんなものあるかよ。」

俺はそう言ってロシエルに出掛ける旨を告げてギルドへ向かった。

「よづ。」

「ああ、響夜さん。」

俺は何時もの受付嬢に声を掛ける。

「今日も依頼ですか？」

「いや、この前借りた服を返しに来ただけだ。」

「あ、はい！分かりました。」

受付嬢は元気に返事をする。服を受け取る。

「……………」

俺はギルドの周囲を見渡す。何時も通りだが何処もおかしい、そんな感じがする。

「なあ。」

「？」

俺は受付嬢に声を掛ける。

「何っつーか。今日おかしくねえか？緊張してるといっつか浮き足立ってるっつーか。」

「…………ああ、今日は視察の日ですから。」

「視察？」

俺は何のことか分からず首を傾げる。

「はい、今日は戦乙女と千武ヴァルキュリア せんぶの二人が来るんです。」

「戦乙女と千武？」

「知らないんですか!？」

俺の言葉を聞いた受付嬢は驚いたように顔を近づける。・・・こりや失敗したか。

「いいですか？戦乙女っていうのは二つ名で本名はエルザ・アルリツヒゲン。『クラウン』の序列7位で凄く凛々しくて優しくて、本当に綺麗な人なんです！二つ名は彼女の戦う姿からそう呼ばれるようになったそうです！

それで千武っていうのは同じく二つ名。此方は本名をガルラ・アルフレッドと言いまして今まで幾つもの戦場でたてた武勇からこう呼ばれるようになりました！！

二人とも凄く有名で！皆その二人が来るってもんですから大騒ぎですよ！！！！」

・・・ようはあれか。有名人を見て騒ぎ出すのと同じか。それより

「『クラウン』って何？」

「・・・ハア。」

俺の質問を聞いて受付嬢は呆れたように肩を落とす。どうやらもう驚く気力すらないようだ。

「いいですか？『クラウン』って言うのは国家や世界への貢献を認められて勲章を貰った人たちです。ただそれだけじゃなくて『クラウン』って言うのには13人がいて皆その力はSSクラスだそうです。後は『クラウン』の人達は基本的に世界中を旅していて全員が集合することなど滅多にはないそうですよ。……まあ国家や世界の代表ですかね。」

「……は。」

俺の間抜けな声を聞いて更に呆れる受付嬢。何だその目は文句はマオに言え。

「ま、ありがとよ。」

俺はそう言っただけで受付嬢との会話を終わるとギルドを後にする。こう考えるとマオが俺に渡した知識っていうのは本当に生きるのに必要な物の一部だということが分かる。自分でも確かめてみるということなのか？

「……そんな訳ないか。」

どうせその方が面白いからとかいう理由だろう。俺はそのまま服屋へと向かった。

「……。。。。。。。」

只今俺は街を全力疾走している。理由？

「コラ、その貴方！待ちなさい！！」

何か変な奴が追っ掛けてくるからだよ。何でこんなことになったのかは俺もよく分らん。服屋に行つて外套やらシャツに似た何かだかを買つた後、泣いている子供が五月蠅かつたから風船を想像して渡してたら何かエンカウト。そのまま横を通り過ぎようとしたら突然追い掛けてきた。以上。

「待ちなさいと言っているでしょう！！」

待てと言われて待つ奴は中々いないと思うぞ？俺はその声を無視して路地に入り込むと一気に家の屋根へ登る。

「・・・・面倒臭い。」

俺は後ろを振り返らずに走るが再びあの声が聞こえる。追い掛けてきたのかよ。

俺はその行動にうんざりしながらも走ることを止めない。やめたら絶対に面倒事があると俺の直感が告げている。

「・・・・・・。」

俺は後ろを確認しようとして振り向く。だがその首は横に来た瞬間に止まった。ここよりも離れた場所。ギリギリその顔が確認できる辺り。そこから俺に手を振っているマオの姿が見えた。

「・・・・・・ハア。」

それを見て俺は深いため息を吐く。・・何であいつはこんな厄介な時に。あいつがこっちに來たら間違ひなく面倒臭いことになる。そ

れだけは回避したい。

「すこし強行手段に出るぞ。」

悪いのは俺じゃない。悪いのは俺じゃないんだ。

「グレイブニル
神殺しの鎖」

俺の言葉と共に背後にいる女性へ鎖が向かう。取り敢えず拘束した間に逃げよう。俺はそう決断して一気に加速する。だが――

「はっ――」

その声が聞こえたかと思うと俺の目の前に先程の女性が現れた。

「は？」

思わず間拔けな声を上げてしまった俺は後ろを振り返る。そこに先程まで俺を追いかけていた女性の姿はなく代わりにあるのは引き返してくる神殺しの鎖の姿。グレイブニル

「・・・・・・・・。。。」

何しやがった。俺は油断なく構えると魔神の観察眼を発動する。

「待ってください！貴方に聞きたいことがあるだけなんです！！」

「んな初対面の奴に怪しいこと言われてもな。。。」

「・・・・・・・・っ。」

女性は自分に非があることは分かっているようで僅かに呻く。女性の動きにボニーテールが左右に揺られる。金髪碧眼。容姿も良く軍服に似た何かを着ている。

「・・・・・・・・。」

どうする。ここで時間を掛けるわけにはいかない。そうすれば厄介^マ事が近付いてくる。

「・・・・・・・・そんなじゃ。」

「あ、ちよっ！」

俺は一気に加速して屋根から勢いよく飛び降りる。常人なら何が起きたか分からずただ呆然とするだけだろう。俺は路地裏に着地すると通りから人の波に隠れてその場を後にした。

「響夜！」

宿の部屋の中。帰宅してきたマオは扉を開けると俺の名前を呼ぶ。

「何だ？」

俺は素知らぬ顔でマオに顔を向ける。

「・・・・・・・・。」

「・・・ご、こんにちは。」

マオの後ろにいる女性は申し訳なさそうに言う。俺は心の中で悟った。ああ、逃げてでも厄介事には無駄だったかと。

「響夜。我を置いていくとは何事じゃ。それにこの者は主に用があるというではないか。」

「・・・ハア。マオには負けたよ・・・うん。」

俺は今までにないほど疲れきった声で言う。

「うん？・・・そうかそうか！当たり前じゃ、響夜が我に勝てるわけなかるう！」

俺はその言葉を聞いてさらに溜息を吐く。

「・・・はあ、アンタもそこで突っ立ってないで座れ。」

ここまで来たらもう逃げられないんだ。俺は空いているベッドに座るよう促す。

「・・・あ、うん。ありがとう。」

女性はぎこちない様子で座る。俺は女性が座ったのを確認すると机の上にあったポットの中に入っている紅茶を想像形成で創り出したティーカップに注ぐ。

「ほれ。」

俺はそれをマオと女性の二人に差し出した。二人はそれを貰うと口を付ける。

「……美味しい。」

「相変わらず響夜の入れる紅茶は美味しいのじゃ。」

「……紅茶？」

マオの言った言葉を聞いたことがなかったのか女性は首を傾げる。

「ああ……まあ何というか俺の故郷の物だ。」

間違っではないない。地球は一応俺の故郷だ。女性はもう一口飲むと顔をほころばせる。

「……で、何だ聞きたいことって。」

俺は目の前にいる女性に聞く。

「ああ、はい。私の名前はエルザ・アルリッヒゲンといいます。エルザと読んでください。」

「ああ、戦乙女さんね。」

「うっ!？」

その言葉を聞いたエルザは再び呻く。頬を若干赤くしながらエルザはコホンと調子を整える。

「その・・・その二つ名は出来れば遠慮して欲しいっていうか・・・あの本当に私はそんな大層な呼び名で呼ばれるような者じゃないので・・・。」

「・・・聞いた話と全然違うじゃねえか。凄いそわそわしてんぞ。マオはその名前を聞いたことがないのか首を傾げている。相変わらず世間に疎い奴である。」

「・・・で、エルザは何で俺なんかに？初対面だと思うが？」

「あ、はい。その実はあの子に風船をあげてるのを見て・・・。」

ああ、丁度泣いていた時か・・・。

「今の紅茶もそうですが、あの時貴方が突然手から風船を出していました。あれは誰から教わったんですか？」

「・・・そんなことのために俺は追い掛けられていたのか。」

「あれは俺のスキルだ。」

「・・・スキル。ですか？」

「ああ、言っておくが余り言い触らすなよ？バレると面倒臭いからな。」

マオの話を聞いてもこんなスキルはほぼ有り得ないとのことだしな。見ればエルザは何か考え込んでいるのかブツブツと呟いている。

「何の話をしているのじゃ？」

今まで会話に置いてかれたからかマオは俺の袖を引っ張って聞いてくる。美女がやる行動じゃねえな。世の中にはこれが良いと感じる奴もいるんだろうが残念ながら俺は特には感じん。強いて言えば切りたくなるだけだ。

「さあな。」

俺はその質問に首を傾げる。頬を膨らませるな、俺だって何のことなのか知らねえんだよ。

「結局何なんだ？」

俺はブツブツ言っているエルザに声を掛ける。するとエルザはハッとして俺達を見る。

「いえ、ただその能力と似たものを以前見たことがあるので・・・。

」

「あ？」

俺はその言葉に思わずマオを見る。どうやらマオも見たことはないらしく首を横に振った。

「あと、貴方からとてつもない量の魔力が漏れていたので気になってしまって・・・。」

「・・・・。」

え？魔力って漏れるの？

「俺のはマオから供給してるからな。そういうのはよく分らん。」

「供給って・・・。それには余程の魔力がないと出来ないんじゃない？」

「それが出来るからやってんだ。」

「・・・・・・・・。」

俺の言葉にエルザはマオを見る。まあ気持ちはわかる。此奴にそれだけの力があるとは思えないからな。現に今も頑張って美味しい紅茶を煎れられるように練習しているだけだし。

「でも一応魔力はある程度制御できるようにしたほうがいいですよ。でないとそれを狙って突然襲われることもあるかもしれません。」

「・・・・・・・・マジかあ。」

これ以上の面倒事とかマジ勘弁だ。俺の許容量は既に限界近いぜ？ 次何かあったら殺すかもしれないぜ？

「・・・・・・・・ええと、大丈夫ですか？」

俺は一度マオを見る。そしてエルザを見る。俺は交互に見る。決めた！

俺はエルザの手を強く握った。

「俺に魔力の使い方を教えてくれ！！」

マオに教わるとか無理！絶対碌なことにならない。エルザは突然のことに驚いたのか慌てる。

「頼む！お願い！この通り！！」

俺は頭を下げる。プライド？面倒事とプライド、どっちが重要だと思うよ。

「え、ええと・・・。」

女性は頬を赤くしながら視線を泳がせる。

「・・・は、はい。私で良かったら。」

「マジで!？」

俺はその言葉に思わず顔を上げる。まさかあつて間もない奴の頼みを聞いてくれるとは・・・。俺は思わず感激した。殺人鬼が感激するものおかしいか。

よし、今から此奴は人だ！俺は心でそう決めた。

「あの・・・とりあえず手を・・・。」

「ああ、済まない。」

俺はエルザの言葉に手を離す。エルザは自分を落ち着かせるように深呼吸をすると真剣な表情をする。

「任せてください。貴方がきちんと魔力を制御できるよう私が手伝います。」

その顔を見て俺は何となく此奴が戦乙女と呼ばれる意味が分かった気がした。それと同時に此奴自身にも興味がわいた。

やっぱり人間は良いねえ。

俺はジト目で見るマオを無視してエルザと予定を立てると挨拶をして別れた。

「……響夜。」

「何だ？」

「何故私を頼らない!!」

此奴がこういうことは大体分かっていた。いや此奴に教わってもいいが――

「お前だと絶対に何となくっていう答えだと思っただが。」

「……。」

プイツと顔を背けるマオ。やっぱりか。

「でも……少しは我を頼ってくれ。」

「……本当、此奴は面倒臭い。俺はマオの頭を撫でる。」

「……お前には何時も頼ってるよ。むしろ俺がお前を頼らない方が珍しいんだよ。」

「……そうなのか？」

マオは俺を見る。実際そうだ。魔力も知識も全部マオのものだ。此奴がいなかったら俺は何もできない無力な人間。この世界じゃ生きることなんて出来ないだろう。この街に来てからもそうだ、宿の時も竜の時も此奴がいたから俺は安心して戦えた。俺一人なら間違いなく無理だった。

「ああ。」

俺は優しい声で言う。俺は安心出来る奴にしか此処まで近づかない。マオも俺の声を聞いて安心したのか俺に体を預けるようにしてしだれかかる。

「響夜。」

「何だ？」

俺はマオを見る。マオは先程よりも強く押し付ける。

「何でもない。」

心無しかマオの声は先程よりも弾んでいるようだった。

「……………」

乙女心と秋の空とは言うが……殺人鬼にはよく理解出来ないものらしい。

朝日・・・太陽は相変わらずうざったいほど輝いている。普段ならそれを確認して起き上がるが今日は別だ・・・。

「・・・・・・・・響夜。」

マオが相変わらず俺に抱き着いている。気のせいかな何時もより密着しているような・・・。

「・・・・・・・・。」

俺はマオの頭を撫でる。マオはくすぐったそうな顔をする。・・・何だかマオの俺への依存度が上がった気がする。

「・・・・・・・・5時位か？」

時計はないからよく分からんが普段の癖と太陽の角度的にその位だろう。俺は再びマオへ視線を落とす。

「・・・・・・・・ん、・・・。」

よく考えれば俺はマオのことをよく知らない。此奴の生まれなどの素性を一切俺は知らない。

ま、俺も人のことは言えないが。

「・・・・・・・・本当に此奴は・・・。」

良くここまで無防備になれるな。俺だったら絶対に無理だぞ。俺は再びその髪を撫でていく。

「・・・・・・・・ん。」

撫でる。

「……………」

撫でる。

「……………」

「…………アホか俺は。」

今までで一番恥ずかしかったぞ今は……。この世界に来て此奴と会ってから随分変わってんな俺。

昔の俺が見たら何て言うのか。嗤うのか侮蔑するのか。それとも祝福するのか……。いや、それは無いか。

「…………殺人衝動もそこまで起きないんだよな。」

相変わらず生命が輝いている瞬間は見たいが前のように進んで殺しに行くようには無くなっている。これは依頼で魔物と戦えるからか？俺がそんなことを考えているとマオがモゾモゾと動く。どうやらお目覚めらしい。

「……………」

「おはようさん。」

俺は取り敢えずマオにそう言つとマオの頭を撫でる。

「…………ん。」

撫でられていくうちに頭も回転し出したのかマオは顔を真っ赤にし布団に潜る。

「・・・初なのかそうじゃないのかよく分かんねえな。」

取り敢えず起きたマオを引きはがすと俺は着替える。確かエルザとの待ち合わせが十時位。まだ時間に余裕はあるな。

俺はそう考えると今のうちに支度をして何時でも出掛けられるよう準備した。多分マオも一緒に来るんだろうな、などと考えながら。

街の中央通りの一角にある喫茶店。そこに俺達はいた。

「おはようございます。」

「おはようさん。」

「うむ、おはようなのじゃ。」

俺達はそう言ってエルザの対面に座る。

「人が凄いな。」

俺は思わずそう呟いた。周りからの好奇や嫉妬の視線。そんなものにはマオと一緒にいたから慣れていたが今は普段の何倍もの数を感じる。これが有名人パワーか。

「す、済みません。」

エルザも申し訳なさそうに言う。

「構いやしないさ。」

「全くじゃ。」

俺達がそう言うのとエルザは安堵した表情を浮かべる。

「そう言ってもらえると嬉しいです。」

その後他愛もない会話を続けているとやがてエルザは真剣な表情をした。

「それじゃあ、これから魔法の制御の練習をしたいと思います。」

「どんとこい。」

「バッチリじゃ。」

俺達はその言葉に頷く。それを見るとエルザは笑顔で言った。

「それじゃあ私と戦ってください。」

殺人鬼は魔王に影響されたようです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

今回どこで区切るか迷いましたが今回はここまでまた次回もよろしくお願いします。

変人が集まる殺人鬼の木（前書き）

「・・・・・・・・俺って何だっけ。」

b y 響夜

「!!!?」

b y マオ

変人が集まる殺人鬼の木

「……………は？」

喫茶店の一角。そこで響夜は間抜けな声を出して目の前にいるエルザを見る。

「いえ、私と戦っていたかどうかと。」

響夜はその言葉に頭を悩ませる。

「（いや、まだ戦闘だと決まった訳じゃない。）」

きつと基礎的な体力とかだろう。

響夜はそう望みを懸ける。最も魔力と体力にそれ程の結び付きがあるのかを考えれば答えはすぐに出るだろう。それが思いつかないあたり余程テンパッていることが窺える。

「それでは周囲に被害が出ない場所に行きませんかね。」

あ、これ終わった。

響夜はその言葉を聞いてそう悟った。

「（これは人選をミスったかもしれない。）」

響夜はそう思って他に頼りになりそうな人物を考える。

「（受付嬢……無理。ロシエル、後で何を頼まれるか分らん。爺・ギルドマスター・俺が何か嫌だ。）」

唯一頼りになりそうなマオは感覚とか言い放つだろう。

響夜はそこまで考えるとさらに頭が痛くなってくる。元々友人関係が狭いのは仕方がない。まだ来て二週間も経たないのだ。そこには目を瞑ろう。だが・・・

「（周りに碌な奴がいねえ。）」

本人が教わる側であるのにこの態度というのも自分が碌でもない奴の証拠なのではないだろうか。

現実から逃げようとする響夜にエルザは無慈悲にも現実を突き付ける。

「ほら行きましょう。」

「響夜？どうしたのじゃ？」

女性陣二人は既に席を立っている。響夜はその姿をみると諦めたのか深いため息を吐いて二人を追い掛けた。

今三人は街の訓練場の中にいた。だがそこに立っている三人の顔には既に疲れた顔がありありと出ている。

「・・・まさかあそこまでいるとは。」

「・・・疲れたのじゃ。」

「あ、あはは。すみません。」

疲れきっている二人にエルザは苦笑しながらも申し訳なさそうに謝る。実際有名人と一緒に歩いたことのない二人にはあまりにもキツ過ぎた。歩く度に周囲からの視線を感じ、さらには追い掛けてくる者もいた。お陰で此処に来るために人を撒くのに随分時間が掛った。

「……ふー。」

エルザは一度深呼吸をすると真剣な顔をする。

「もう大丈夫ですか。」

「ああ。」

その顔を見た響夜も観念したらしく何時でも戦えるように心構えをする。マオは二人から離れ端で二人の戦いを見守る。

「この戦いでは魔力というものを感じてもらいます。」

「感じる?」

「はい、魔法を使う時に感じるものでなく、自分の体内に常にあるのを感じるんです。そしてそれを自分の意思で体内を巡らせて下さい。自分の血管や神経をイメージするといいですね。」

「……なるほど。」

先ほどまでは自分の間違いを悔やんでいたがその考えは180°変わった。

目の前にいるエルザの言い方は分かりやすく、彼女が教えなれているということが分かる。ならばそんな大きな間違いがあるということはないだろう。

「（一度の死闘は１００の練習の価値があるというしな。）」

響夜はその言葉に納得し目の前にいるエルザを睨む。

「ではマオさん。開始の合図をお願いします。」

「うむ。任されたのじゃ。」

マオはそう言うと腕を振り上げる。

「では試合・・・開始！」

その言葉と共に振り下ろされる腕。

「はっ——」

気が付けば彼女は目の前にいた。

「うお！？」

それに気が付いた響夜は振り下ろされる訓練用の剣を躲す。幾ら刃が潰されているとはいえ彼女のふる剣速で食らったら大怪我だろう。

響夜は魔神の観察眼を発動すると彼女の挙動を見逃さないようにする。

「ふ――」

「――」

彼女が動き目の前に現れた瞬間、響夜は自分が持つ剣で彼女の剣を防ぐ。それを見た彼女は僅かだが眉を上げる。

「やりますね。」

「そりやどうも――!」

響夜は力任せに剣を振りエルザを弾き飛ばす。鬼神の武勇伝を持っている響夜は普段から常に身体能力が大幅に上がっているためカイガと素手で渡り合うだけの力を持っている。

当然それほどの力で弾かれたらどうなるか。エルザは響夜から引き離され数十mは飛ばされていた。

「只の冒険者ではないそうですね。」

「いや、只の新米冒険者だよ。」

響夜の言葉にエルザは不敵な笑みを浮かべる。

「少し本気でいきますよ。」

瞬間エルザの姿がぶれる。

「はっ――」

「!?!」

響夜は背後からの一撃を防げないと判断すると危なげなく躲す。

「……やりづれえ。」

響夜はそう言つと手に持つてゐる剣を捨て想像形成で一振りのナイフを取り出す——勿論刃は潰してあるものだ——と同時にエルザへ駆ける。

まさか剣を捨てるとは思わなかつたのだろう。エルザは目を見開くがそれもすぐに真剣な顔になる。

「つ……らあ!!」

それはまるで踊つてゐるかのようだった。器用にナイフの持ち方を変えながら響夜は目にも止まらぬ速さで攻撃を繰り出す。それをエルザは時に防ぎ、時に宙を待つて躲しながら一瞬の隙を突いて剣で攻撃する。

「つ、本当に……新米ですか!？」

「……ああ!冒険者としては……新米だよお!!」

お互いは剣とナイフを衝突させながら視線を交す。それも一瞬二人は再び移動しながら剣とナイフをぶつけあふ。

訓練場にはただ剣閃がぶつかりあふ音だけが響く。既に百合は打ち合っただろうか状況は徐々に響夜の劣勢になっていた。

「……つち。」

響夜のナイフは直ぐ創れるがその分脆い。響夜のナイフはエルザの攻撃に耐え切れなく砕け散る。響夜は壊れた瞬間に新たにナイフを創りだすがその瞬間、響夜の意識は想像形成に向けられる。それによって響夜は徐々に追い込まれていった。

「・・・やりますね。」

エルザはそこで攻撃をやめる。響夜はそれを不審に思うが原因は直に分かった。

——パキン

エルザが持っていた剣が半ばから折れたのだ。

「・・・貴方の実力なら問題ありませんね。」

その言葉と同時にエルザの背後の空間が歪む。響夜はそれを見て警戒する。

「・・・雷鳴轟かす勝利の咆哮」
フリスト・ヒルト

現れたのは一本の剣。両刃の剣で片手剣だがその形状はレイピアのようにも見える。

そしてその剣は蒼い雷を纏っている。

「・・・本気ってことっすか。」

それを見た響夜は冷や汗が止まらなくなる。あの剣から感じる重圧を響夜は感じたことがある。

「――神器。」

「私の愛剣。そして私の切り札です。」

エルザはその剣の切っ先を向ける。

「……頑張って戦ってくださいね。」

第三者からみれば綺麗な笑顔だが響夜から見たら死刑宣告としか感じられない。

「――」

エルザの姿がぶれた瞬間響夜の腕に痛みが走る。みれば背後にいるのは剣を構えているエルザの姿。

「（速過ぎだろ。）」

その瞬間響夜から油断という言葉は消えた。

「（一度見られてはいるが……）」

「神殺しの鎖！」
グレイブニル

グレイブニルその言葉と共に響夜の背後そしてエルザを囲むようにして神殺しの鎖が出現する。

「な！神器！？」

これはあの時の一瞬ではわからなかったのだろつ。エルザは驚きを露にする。

「く——」

神殺しの鎖はグレイプニルエルザへと向かうだが——

「……は？」

グレイプニルがエルザを縛ることはなくそのままエルザの体を突き抜けて行つた。

「……これが私の神器の能力の一つ。自身を雷化し物質を透過します。」

「それ何てチート？」

思わず響夜はそう呟いてしまった。エルザはそんな響夜の隙を逃すことなく一瞬で接近すると袈裟切り。

「……っ。」

攻撃自体は響夜の悪魔の心臓でグリモア・ハート再生するがそれでも痛みは感じる。エルザはそれを見て再び驚愕する。

「……それも神器ですか。」

「……ああ、最低最悪のくそつたれ神器だ。」

響夜は忌々しげに言う。

「そうですか。．．．これ以上怪我をする前に早く魔力を感じ取ってくださいね。」

響夜の顔を見たエルザは黙り込むとそれだけ言っ て剣を構える。

「（．．．魔力。）」

響夜は体内に意識を向ける。

「（マオの魔力は右手から供給されている。）」

ならば右手に何かが流れ込んでいるイメージをすればいいのか？
響夜は首を傾げながらも右手から水が流れ込んでいるようにイメージをしていく。

「．．．．．っ。」

エルザの攻撃をなるべく防ぎながらも響夜はそのイメージを固めていく。

「（．．．．．何かが流れてる？）」

響夜は徐々にだが魔力の流れを感じ始めていた。

「（これが魔力か。．．．これを全身に流れているようにイメージしていく。）」

水路を作りそこに魔力という水を流すイメージをしながら響夜は徐々に魔力を動かしていく。

「……………掴みましたか。」

魔力を感じ取ったのだろう。エルザは剣を振るのをやめ響夜をみる。

「（早い。）」

それが今の響夜への感想だった。常人は魔力の流れを感じ取るのもう少しの時間を要するというのに目の前にいる青年はそれをもの数分で終わらせようとしている。

「（あのナイフ捌きといい、神器を所有していることといい。）」

エルザはこの青年が何者なのか少し気になった。これが終わったら聞いてみるかと考えていると響夜が魔力を張り巡らせたのを感じ取った。

「……………体が軽いな。」

それが響夜の感想だった。驚くほどに今自分の体が軽く感じる。

「魔力を体に張り巡らせれば身体強化をすることが出来るんです。」

エルザはそういうと剣を握り締める。

「今から一度剣を振ります。それにそのナイフをぶつけてください。」

「……………了解。」

響夜はエルザの拳動を見逃さないよう注意する。次の瞬間、エルザの手が動くのを捉えた。

「（・・・くる！）」

その瞬間、響夜は僅かに捉えた向かってくる剣にナイフを振るう。

——ガキン——！！

金属がぶつかる音と何かが砕けた音がした。

「・・・・・・・・。」

響夜の手を持っていたナイフはボロボロに砕けちる。エルザは今の光景を見て驚いた後に笑う。

「お見事です。まさかぴったりで当ててくるとは思いませんでした。」

その言葉に響夜は肩を竦める。

「いや、ギリギリだったさ。お前の手が動く瞬間が見えなかったら無理だっただろうさ。」

「です十分凄いですよ。並の冒険者じゃ今の攻撃など見ることもすら出来ませんから。」

「褒め言葉として受け取っとく。」

「響夜！」

俺たちが話しているとマオが駆け寄ってくる。

「良くやったのじゃ！」

「あゝ、はいはい。」

飛びつこうとするマオを響夜は片手で押えながら投げやりに答える。

それを見たエルザは笑いだした。

「あ？」

「いえ、仲が良いんですね。」

「うむ！」

響夜の代わりにマオが声を上げて答える。

「では、次からはそれを無意識的に行えるようにしましょう。」

その言葉を聞いて響夜はまたこれをやるのかなあ。等と考えながらげんなりする。

「ああ、そうだな。」

「響夜！お腹が空いたのじゃー！！」

「はあ？」

その言葉を聞いた響夜は眉を寄せる。

「お前殆ど何もしてないだろう。」

「む、失礼な。響夜を見守っていたじやろう。」

それを聞いた響夜はマオに何を言っても無駄だということを悟る。

「ほれ、行くぞ。エルザも一緒にどうじゃ？」

マオの誘いを受けてエルザは少し考える仕草をすると快く返事する。

「はい、いいですよ。私も少しお腹が空きましたから。」

「では行くぞ!!」

その言葉と同時にマオは響夜とエルザの手を引いていく。

「（……もう殺人鬼のすることじゃねえなあ。）」

傍にいる二人の笑顔と今の自分を見て響夜はそんなことを考え苦笑する。

空には雲一つない青空が広がっていた。

変人が集まる殺人鬼の木（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は満足できないようです（前書き）

「……三人称はマス開けるようにしています。」

b y h i m a

m e

「……この台詞で言うことじゃねえだろ。」

b y 響夜

殺人鬼は満足できないようです

「・・・・・・・・・・！」

街外れの訓練場。そこに二つの影があつた。一方は白いYシャツと黒のジーンズの白髪青年。もう一方は黒い軍服のようなものを着た金髪にポニーテールが特徴の女性。響夜とエルザだ。

「ハア——！」

振り下ろされるエルザの剣を響夜は手にしたナイフを滑らすようにして防ぐ。

「——」

響夜はエルザの懷に潜り込むとナイフを一閃。だがその攻撃をエルザは僅かに体を反らして躲す。

エルザは追撃がくる前に素早く距離をとる。二人の距離は再び開き両者は睨みあう。無駄口などしない、そんなことをすれば瞬く間に相手の持つ武器が自分の首を刈り取る。

「グレイプニル！」

響夜は自らの神器を出現させるとエルザに向かわせると同時に自らも駆ける。

「雷鳴轟かす勝利の咆哮——！」
フリスト・ヒルド

エルザは腰にある剣を抜くと共にその名を呼ぶ。すると剣に蒼い

雷が纏いエルザ自身にも雷が纏われる。

向かってくる神殺しの鎖をエルザは雷化によって回避し響夜へとまさしく雷速の速さで迫る。振り下ろされる剣を響夜は周囲に展開していた神殺しの鎖で防ぐ。如何に雷化といへど剣自体は雷化をしない。それを見抜いた響夜は神殺しの鎖による防御にでたのだ。

「（とはいえ、こっちも攻撃する方法がない。」

そう斬撃は防げるものの響夜はエルザへ攻撃する手段を持っていないのだ。

「（・・・想像・・・形成・・・）」

骸竜との戦いの際に創りだした魔道具。創りだすものは違えど響夜は再びそれを行おうとしているのだ。

「（・・・何を？）」

響夜が膨大な魔力を集中させるのを感じたエルザはそれを危険と判断し響夜へと疾走する。

「——————心眼。」

その言葉と同時に響夜の手に現れるのは一つのペンダント。鎖に繋がれたペンダントはまるで目を思わせる様な形をしている。

「発動。」

その言葉にペンダントが砕ける。響夜はそれを確認するよりも早く目の前に迫っていたエルザへとナイフで一閃した。

交錯する二人。その結果は――

「――」

響夜の右腕に走る痛みと僅かに焦げた臭い。だがその代償を払っても得たものは大きかった。

「――」

茫然とした様子で自分の頬に手を触れるエルザ。その手には血が付いていた。

「……………どうやって私に攻撃を？」

エルザはそれを聞かずにはいらなかった。今まで同じクラウン以外の者――ましてやクラウンでもほんの一部の者しか雷化をした自分に攻撃出来た者はいない。それをまだ魔力を感じ始めたばかりの者に破られる。これは彼女に大きな衝撃を与えただろう。

「……………俺のスキルだ。一度だけあんたに攻撃を届かせることが出来る。」

その言葉にエルザは響夜の手に現れたペンダントを思い出す。エルザは剣を鞘に戻すと響夜へ振り向く。その顔はとても生き生きとしたものだった。

「今日はこれで終わりです。私にとってもいい勉強になりました。」

そう言ってエルザは頭を下げる。

「いや、俺のほうがいい勉強になった。ありがとよ。」

響夜はそう言うとエルザへと手を差し出す。それを見たエルザも笑顔で響夜の手を握り握手した。

「そんじゃ次も頼むわ。」

「はい。その時はまたお願いします。」

そう言うとエルザは訓練場を出て行った。一人残った響夜は樽を創りだすとそれに座る。何故樽を創ったのかは簡単なもののほうが想像もしやすいからだろう。

「・・・・・・・・。」

響夜は空を見上げる。

「（・・・・・・・・やっぱり少し物足りないな。）」

決してエルザとの戦いがつまらない訳ではない。むしろ響夜としてはこうして戦えるのは大歓迎だ。ただ響夜は血が見たいだけなのだ。訓練では出血など殆どない。エルザが手加減をしているというものもあるのだろうが響夜自身エルザを殺す気などない。

ヒトに手は出しても人には手を出さない。

それが響夜の基本理念だ。自らが信用できる者、気に入った者は人として見るがそれ以外はヒト。理科の実験動物マウスと同じだ。殺しても特に何も感じない強いて言えばその時に感じる生命いのちの輝きを見ることが楽しみというだけだ。

「ギルドでも行くか。」

何か面白い依頼があれば行ってこよう。そう考え響夜は手を翳すと黒い穴を開けそこに樽を入れる。倉庫と呼ばれる空を使った魔法だ。生物は入れられないが自身の魔力によってその大きさは変わり中に様々なものを入れられる。マオから教わったこの世界のものだ。

「……………」

響夜は一度周囲を見回すとギルドへと足を運びに行った。

視線、視線、視線、街中を歩いている時も数こそ減ったもののギルド内でも響夜は視線を感じていた。

「（俺はパンダじゃねえんだよ。）」

その視線にうんざりしつつも響夜は進んでいく。こればかりは仕方がないと響夜自身思っているところもある。普段からマオという美女と一緒にい、つい先日はエルザも入れて三人でいる所を見られている。それによって響夜の顔を覚えている者は多くそれがこの視線である。

「よう。」

「あ、こんにちは。有名ですよ響夜さん。戦乙女と一緒^{ヴァルキユリア}にいたって。

」

最早響夜とマオの専属と化してきている受付嬢から挨拶兼聞きたくない話を聞きながらも響夜は依頼を探す。

「そうそう、おめでとございます響夜さん。Bランクになりましたよ。」

「・・・・・・は？」

響夜はその言葉に間抜けな顔をする。響夜はついこの前Dランクになったばかりだった。それが何時の間にかBランクなどとても信じられるものではない。

「いえ、つい先日エルザさんがいらしてDランクにしておくなんて勿体無いと。それを聞いたマスターもそう思っていたらしく、ならBランクに上げるかと。・・・・これは結構異例のことですよ。しかも戦乙女のお墨付き。」

そう言って受付嬢は笑う。響夜にとっては堪ったものではない。また妙な視線が増えるのではないかと響夜は頭を抱えそうになった。

「・・・・・・畜生。」

こんな所で頭を抱えていたら余計に目立つ。響夜はそう考えるともう諦めて依頼に目を通していく。よく考えればBランクなら骨のある魔物と戦えるかもしれない。そう考えた響夜は一通り面白そうなものを取る。

アリス・ドラゴン
・地竜討伐依頼

・古城調査

・遺跡探索

・白銀狼討伐依頼

ホワイト・ウルフ

「……どれが良いかね。探索なら魔道具が手に入る確率があるし神器も有り得る。討伐は中々強そうな奴らだし。」

「白銀狼。行こうか。」

丁度Bランクがどれだけのもの七日を知っておきたいしな。響夜はそう考えると依頼書を受付嬢へと渡す。

「気を付けてくださいね。」

「ああ。」

響夜は受付嬢のそんな言葉を聞きながらギルドを出て行った。

かた……かた……

馬車に揺られながら響夜は今回の依頼の内容と白銀狼がどんな生物なのかを見ていた。

「……知能も優れている。注意すべきは氷魔法と脚力か。」

情報を見る限りだとこれ選んで正解だったかもな。

響夜はそう考えながらスキルを倉庫の中から幾つかの魔道具を取り出す。これを買うために響夜は今までなるべく報酬の高い物を選んで受けてきた。マオにも秘密にして・・・。

魔道具が放っている魔力はどれも一級品であった。幾ら報酬の高い依頼を受けてきたとは言ってもやはりE、Dランクでは限界がある。どうやってこれを手に入れたのかは無論秘密である。

「世界が変わっても人間の考えることは変わらないねえ。」

まあ、この世界では人間だけではないが。と内心で付け加えた。

「冒険者さん。着きましたよ」

やがて馬車が止まると声が聞こえる。響夜は馬車を降りると男に金を渡し礼を言う。

「しかしどんな依頼なんですか？」

「あ？・・・白銀狼だとさ。」

それを聞いた男は目を丸くすると乾いた笑いを漏らす。

「そ、そうですか。んじゃ私はこれで・・・。」

男はそう言うのと馬車をUターンさせてやがて見えなくなった。響夜はそれを確認すると山の中へとはいつていく。

「・・・・・・・・・・。」

山に入ってすぐ異常が分かる。凍っているのだ木々や大地が。響

夜はそれを見ながら白銀狼の魔法を思い出す。

『氷魔法』複合魔法というもので氷なら大地と水の魔法を合わせることによって作りだされる魔法である。他にも雷ならば風と火の複合魔法という様に種類がある。因みにエルザはこの複合魔法の雷を得意としている。

響夜は凍っている葉に触れるとそれは砕け小さな欠片となって大地に落ちる。

「……………とんでもねえな。」

どうやって白銀狼に会うか。この凍った雪山では遭遇する前に凍え死ぬ。

「……………燃やすか。」

響夜はそう考え、巨大な火柱を放つ。それは周囲の氷を木ごと燃やしつくし響夜の視界は火の海になっていた。響夜は魔神の観察眼を発動すると周囲を確認する。

「—————」

響夜は草が揺れる音がすると同時に大きく飛び退く。すると先程まで立っていた場所に巨大な氷柱が突き刺さっていた。

飛ばされてきた方向をみるとそこにいるのは全身に毛並みの良い白銀の毛を生やし強靱な四肢で大地を踏みしめている巨大な狼。間違いない白銀狼である。

「—————！！！！！！！！」

咆哮。それは山中に響き渡る。
それを合図にして響夜と白銀狼の戦いが始まった。

殺人鬼は満足できないようです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼の怒り（前書き）

「・・・・・・・・優しく殺してやるよ。」

b y 響夜

少しだけグロい（？）です。

殺人鬼の怒り

寒い。それが響夜の最初に感じたことだった。先程まで火の海だった大地が今では凍てつき始めている。

「・・・・・・・・・・。」

響夜は自分の周囲に魔力を纏いそこに火の魔法を発動する。火は響夜の周囲を魔力を伝って響夜とその周りを温める。

「（魔力の使い方は学んどいて良かったな。）」

響夜はエルザに感謝しつつ目の前の白銀狼を見る。白銀狼も響夜の出方を窺っているのかその場から動かない。響夜はそれを確認すると懐からグロックとデザートイーグルを取り出す。

「派手に踊りな。」

響夜はその言葉と共に引金を引く。火薬の弾ける音共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。銃弾は幾千もの針となって白銀狼を襲う。

「――」

だが白銀狼はその全てを躲し響夜へと接近する。

「化物め！」

それを見た響夜は舌打ちをして後退する。その間も白銀狼へと狙いを定めるがその全てを尽く躲される。響夜から見たら竜と戦った

時と同じ悪夢のような光景だ。

「（零距离でないと当たらねえか。）」

そう判断した響夜は銃を倉庫へ入れナイフを取り出すと自らも白銀狼へ接近する。一瞬にして零になる二人の距離。白銀狼の攻撃をナイフで捌きつつ響夜は懐に入り込もうとするが白銀狼は氷柱を地中から突き出しそれ以上の接近を許さない。

「ふっ——」

次々に繰り出される氷柱を魔力による強化で弾き、躲す。だが響夜と白銀狼の距離が開いた瞬間、響夜は横からの衝撃に吹き飛ばされる。響夜はその衝撃によって驚く間もなく木に叩きつけられる。その衝撃に息を詰まらせるが痛みを無視して素早くその場から転がる。その瞬間先程までいた場所に次々に突き刺さる巨大な氷柱。

「燃やせ！」

響夜は炎の蛇を創ると白銀狼へと放つ。

「オオオオオン！！」

白銀狼が一声鳴くと激しい冷気が放たれる。それは炎の蛇を凍てつかせ蛇は粉々に砕け散った。直後白銀狼へと次々に炎弾が放たれる。それは大地へとぶつかり衝撃と爆風によって冷気を吹き飛ばす。

「燃え尽きろっつてんだろっがぁ！！！」

響夜はその手に今までの比ではない程の炎弾を作りだす。それか

ら放たれる熱気だけで周囲の氷が解け始める。

「ラァ——！！」

響夜が放った特大の炎弾を白銀狼は危険と判断したのかそれを躲そうとする。

「甘いんだよ！！」

放たれた炎弾は白銀狼へと迫る中突如爆発した。それによって再び巨大な火柱が立ち白銀狼はそれに飲み込まれた。

「断頭台」
ギロチン

響夜は周囲に断頭台の刃だけを創り出し展開する。その数三十以上。それは響夜が腕を振るったと共に火柱の中にいるであろう白銀狼へと殺到する。

「■■■■——！！！」

それは断末魔の叫びだったのだろうか火柱の中から咆哮が轟く。響夜は火柱を警戒するように見ている時それは起こった。

ピキ……ピキピキ……

凍りだしたのだ。何百度という熱量を持っている巨大な火柱が。

「な——」

その光景に思わず響夜は目を疑った。それはマオから供給されて

いた魔力を一気に使用して放った一撃。今までの攻撃でも相当な威力を誇っている。

「・・・・・・・・。」

やがて火柱は巨大な氷柱へと変わり砕け散った。中から現れるのは全身に切り傷を負い血を流しながらも堂々と歩く氷で全身を覆った白銀の狼。

その姿は孤高であると同時に幻想的な雰囲気を放っていた。

「・・・・・・・・。」

響夜はその光景に目を奪われていた。

・・・・美しい。

そう思わずにはいらなかった。その姿だけでなくあの業火と刃を食らってもなお立ち上がり、より一層と燃え上がらせているその闘志に。

「・・・・・・・・素晴らしい。」

響夜は一步白銀狼へと近づく。その顔には今までにない程の笑み。

「ああ・・・・・・・・いいぜえ。美しすぎる。美しすぎるお!!??何だその生命はよお?ああ、ぞくぞくしやがる!!待ってるよお?今から、その全身を・・・・真つ赤な血で綺麗に飾ってやるからよお!!」

響夜は一本の長剣とナイフを両手に持ち白銀狼へ駆ける。

「■■■■■■！！！！」

白銀狼も迎え撃つ様にその氷によって強化された右腕を振るう。

「ヒヤははハハハハ！！！！」

その右腕を響夜は右手に持つ長剣でその右腕を防ぐ。そして冷氣によって響夜の手が凍る。

「こりゃあ良いなあ！お陰で剣を握らなくても済むぜえ！！！！」

響夜は更に高笑いをする。本能を表に出した響夜は今までにない程の戦闘に高揚していた。その実狂っている様に見えても危険と判断したものを本能で感じ取り躲し、防いでいく。

一閃。左手に持ったナイフは浅いものの白銀狼を切り裂いた。

「■■■■■■——」

白銀狼は今の響夜を危険と判断し距離を取ろうと飛び退こうとする。だが——

「おいおいおい？なあに離れようとしてんだよ。もっと楽しもうぜえ！！！！」

響夜はそれをさせまいと間合いを詰めていく。

「神殺しの鎖！！！！
グレイブニル

速度の差か響夜はこれ以上離されないよう白銀狼と自分の右腕を鎖で繋ぐ。

響夜もまたそれに対抗するように魔力を練り上げる。次の瞬間白銀狼は大きく口を開けそこから冷氣と氷の暴風が放たれる。

「かみづき火葬祭」

響夜の全身を覆う炎。それは響夜の体を焼き尽くし迫りくる暴風に拮抗する。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

「オオオオオオオオオ!!!!!!」

ぶつかりあう氷狼と炎の魔神。それは互いに拮抗していたが――

「オオ――!!!!!!!!!!!!!!」

その勢いを増し徐々に氷を飲み込んでいく炎。それはやがて白銀狼へと迫り飲み込んでいった。

焼け焦げ凍てついた矛盾した大地。そこに白銀狼は倒れ伏し響夜はその白銀狼の傍らに立っていた。

「.....」

「.....ひゅー.....ひゅー.....」

白銀狼はもはや虫の息だった。白銀狼は倒れ瀕死になろうとも響夜を睨み続ける。その瞳には隙を見せれば殺られると思わせるだけのものがあつた。

故に響夜は油断しない。何より響夜は目の前の白銀狼に敬意を覚えていた。だからこそここで殺す。

そう思い響夜がナイフで止めを刺そうとした瞬間。

!!!!!!!!!!

目の前が白に染まった。

響夜はそれに飲み込まれ上空へ吹きとばされた。重力によって地上へと落下する響夜。

ゴキイ！

叩き落とされた彼からは嫌な音がした。

暫く彼は状況を整理すると倒れたまま僅かに辺りを見回す。そして聞こえてくる男達の声。

「しかし、確認する意味あるんすかねえ。あれだけの規模の魔法食らったんすよ？」

「念には念をだ。奴は白銀狼を倒したのだぞ。もしかしたら生きているかもしれん。」

聞こえてくる男達の声と足音から数は5。

「（……狙いは俺か。）」

先程の会話から響夜がそう整理していると男達の姿が見えた。全員の特徴は翼や角、牙。響夜はそこで襲撃者が魔族だということが分かる。男達は響夜が死んでいるかを確認——響夜はうつ伏せになっている——する。

「（・・・どうするか。そういえば白銀狼は・・・）」

響夜がそう思っていると突然脇腹に痛みが走る。見れば魔族の一人が響夜を蹴っていた。そのことに響夜が苛立つとふとあるものが目に入った。

そこにはもう殆ど動かない薄汚れた白い毛並みの狼がいた。

・・・・・・。

それを見た響夜は無駄な考えを止めた。

「火葬祭」

響夜がそう言うのと全身を炎が覆った。もう先程まで感じた激痛など感じなくただ目の前にいる奴らの破壊だけ考えた。

「え？」

響夜が立ちあがり振り向こうとした一人の魔族の男の頭を掴む。

「ああ！！ぎゃ、あああああああああゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ！！！！！！！！」

「断頭台」

燃え移った炎に男は苦しみ叫ぶが響夜はその声を無視して掴んでいた男の両足を切り落とした。男は痛みを訴えるように叫ぶが誰もそれを助けられない。いや動くことが出来ないのだ。先程まで死んでいた男が立ち上がったという事実には。

「神殺しの鎖」
グレイブニル

その言葉に一人の男は足を鎖で巻かれ何度も何度も地面に叩き付けられる。

「ぎゃ！ぶつ！・・・あ、が。くぶう！？・・・た、たすげえ！！？」

例え何を言っても響夜はその言葉に耳を貸すことなく更にその勢いを強くする。この男達が白銀狼に手を出した時点で助ける等という考えは露ほどもない。

響夜は目の前の二人に歩いていく。二人は仲間たちの突然の死に動揺しているが響夜へと武器を構える。

「ハ——」

一人の男が魔法を発動する。放たれたのは水流。それは響夜へと当たるが——

「・・・・・・鋼鉄の処女。」
アイアンメイデン

その男は後ろから出現した拷問器具に一瞬にして鋼鉄の処女の中へ引き込まれ、断末魔と血が流れた。

「・・・・・・・・え？」

その光景が信じられなかったのだろう。最後の一人は間拔けな声を上げ、それを理解すると共に尻もちを着く。

「あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・。」

男は歩いてくる響夜をみると顔を青ざめ逃げ出そうとする。

「神殺しの鎖」
グレイブニル

だが響夜はそんなことをさせはしない。男の四肢を鎖で繋ぐと空中に磔にする。

「ひ、ゆ、許してくれ！！」

男の目に映っているのは墨のように焼け焦げた仲間と未だに何度も地面に打ち付けられている仲間。それを見た男は涙を流し、その体を振るわせている。

「・・・・・・・・頭蓋骨粉碎機」

響夜の言葉と共に目の前の泣いている男の頭に器具が取り付けられる。ギリギリと締め付けていく器具。男はじわじわと締め付けられる恐怖に漏らす。

「い、嫌だ！死にたくない！頼む、頼むから助けて！！お、お願いだから！あ、ああ！！」

男の声を無視して響夜は背を向ける。後ろから男の悲鳴が聞こえ

るが響夜はそれすらも無視して無表情のまま白銀狼に近寄り炎を消した。

「……………つ……………」

僅かだが白銀狼は生きていた。だがその体は力なくぐったりと倒れ目も瞑ったままだ。

「……………後味悪いだろうが。」

響夜は小さく舌打ちをすると想像形成を使う。

「勝手に死んでんじゃねえよ。」

響夜の手握られたのは小さな短剣。響夜はそれを白銀狼に刺すと魔力を流し込んだ。

「……………つ。」

響夜の全身を疲労感が襲う。だが先程より白銀狼の息は少しだけ落ち着いていた。響夜はそれに少しだけ安堵しつつ。響夜は辺りを見回す。

「……………ゴミ共が。」

そう言って響夜は魔族達の死体を焼き尽くすと白銀狼を再び見る。

「お前もゆつくり休みたいもんな。」

響夜は白銀狼にそう言うと神殺しの鎖を籠のようにして白銀狼を

持ち上げた。

「……形成。」

創り上げたのは小さな小屋。丁度白銀狼が入れる程度の余裕のある小屋である。響夜はそこに白銀狼を運ぶと自らもその小屋に入った。

「……ま……ず。」

響夜は立ち眩を起こす。先程の治療。魔力と一緒に響夜は生命力も流し込んでいた。如何に響夜が半不死といへど流石に生命力は不味かったのか。響夜は白銀狼を寝かせるとそのまま倒れるようにして眠りに落ちていった。

殺人鬼の怒り（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

あ、あとこの作品のタイトルは今のところ仮タイトルなので何か思いついた方どうか送ってください。

殺人鬼は冷汗が止まらないそうです（前書き）

「……………眠いのじゃ。」

by
マオ

殺人鬼は冷汗が止まらないそうです

「・・・・・・・・・・。」

おは・・・まだ太陽すら出ていなかった。畜生、恥ずかしいじゃねえか。

俺はそんなことを考えながら脳を覚醒させる。

「少し、無理しすぎたか。」

マオからの供給があるとはいえ白銀狼の戦いと汚物の^{ゴミ}処理に魔力を使いすぎたな。加えて生命力も削ったからな。

「まだ夜か。」

空には三日月が輝いている。気のせいか月は赤みを帯びている様に見える。

俺は月から目を離すと立ち上がろうとする。

「・・・・・・・・・・あ？」

だが俺が立ち上がろうとすると突然襟首を引っ張られ俺は尻もちをつく。

「・・・・・・・・・・。」

後ろを振り向けばそこにいるのは薄汚れているものの月の光を浴び幻想的な姿で座っている白銀狼。その瞳は俺を捉えていた。

「・・・はっ・・・はっ・・・」

「・・・。。。」

俺は再び立ち上がろうとする。だが俺の進行を遮る様に出される尻尾。

俺は右へ避けようとする。すると右へ振られる尻尾。

「・・・。。。。。」

俺はそれを左へ尻尾の下を潜り抜けて行こうとする。すると下に振り降ろされる尻尾。

それを何回か俺たちは繰り返し、俺は動くことを諦め白銀狼を見る。

「・・・わう。」

「・・・ああ。」

何か良く分からんが俺は適当に答える。白銀狼は俺へと顔を近づけると頬を舐め、一声鳴く。

「・・・。。。。。。。」

やべ、何か懐かれた。

俺は白銀狼の姿を見てそう感じた。あの汚物が邪魔をした時点でもう此奴を殺す気など俺にはなくなっていた。

ただ此奴に懐かれるのは構わないが此奴を連れて俺が街に戻ったら危険だ。白銀狼討伐の依頼なのだから討伐対象の此奴を連れて行く訳にはいけないだろう。俺の信用にも関わってくる。

「…………どうすっかなあ。」

俺がこれからのことを考えていると突然目線が高くなる。白銀狼が俺の襟首を口で器用に咥えたのだ。

「…………おい。」

俺の声を無視——俺を咥えていて発音できないのかもしれないが——して小屋の扉を開けると歩いて行く。

え、ちょ、俺を離せ。

そんな俺のことなど露知らず。白銀狼はそのまま俺を咥えて森の中に入ってしまった。

「…………気持ち悪い。」

俺は今泉の近くでぐったりとしていた。白銀狼に咥えられていたがあいつ突然走り出しやがった。咥えられてるこっちは何も出来ねえから揺れる揺れる。この泉に着いた時には天と地がどっちか分んなくなっていた。

「くそ、自分だけ水浴びしやがって。」

俺は泉の中心で水浴びをしている白銀狼を睨む。

あゝ、気持ち悪い…………おえ。

やがて吐き気が治まり調子も良くなってきた俺は上半身裸になると

泉に入る。外だし何時襲われるかも分からねえからこれが良いだろう。

「……お前はもう少し俺のことも考えよ。」

俺は横にいる白銀狼の体を撫でながら言う。柔らけえな。ふさふさだぞおい。

俺はその毛に顔を埋める。

「……………」

何これ気持ちよすぎだろ。くそ、強敵だ。

俺は思わずそう考えながらもその毛の感触を楽しむ。

「……………」

俺は本来の用事である水浴びを思い出しハッとする。白銀狼は俺が離れると先に陸に上がり水を飛ばしている。俺はそれを見ながらも取り敢えずタオルを創りそれで体を拭く。

一通り体を拭き終わると俺は泉から出る。

「何やってやがる。」

俺は服を洗おうと取りに行くと俺の服と戯れている白銀狼。

……此奴の考えてることが俺には分からねえ。

「取り敢えず返せ。」

「・・・くゝん。」

俺は白銀狼から服を奪い取ると泉で洗う。止める、そんな泣き声出すな。俺が悪いみたいじゃねえか。

「最初の姿も見る影がないな。」

最初はあれだけの気迫を持っていたのに。

俺は思わず嘆いてしまった。俺は洗い終わった服を適当に創った棒にぶら下げ集めた枝に火をつける。

「・・・お前どうするかな。」

俺は一番の問題について考える。

恐らく此奴は街まで付いて来る。ならどうにかしないといけないだろう。

「お前どうにかして街に入れねえの？」

俺は無駄と分かっているが白銀狼に問いかける。白銀狼は僅かに首を傾げた。

「・・・どうするかなあ。お前が俺たちみてえになればいいんだが。」

「ガウ！」

白銀狼は元気に返事をする。

「はいはい。」

俺はそれに適当に相槌を打っていると突然白銀狼に異常が起こる。
白銀狼が光りだしたのだ。

「……………何か俺したっけ？」

俺はその現象に顔を引き攣らせる。これやばくね？と。

「……………わん。」

やがて光が消えそこにいたのは可愛らしい声で犬の鳴き声の真似をする一人の少女。

「……………お前白銀狼か？」

「……………ん。」

俺の問いに少女は頷く。その動作で薄く水色がかっている銀髪が揺れる。

「人間の姿になれたのか？」

「ん。」

少女はまた短く答える。だが完全に人間になっではない。少女には獣耳と尻尾がある。恐らく獣人と言った方が近いのだろう。

「……………名前は何て言うんだ？」

「……………ない。」

俺はその言葉に思案する。ふと目に入っただのは揺れている銀髪。

「……よし、お前の名前は今からハクだ。」

俺はそう言っただけで少女、ハクの頭を撫でる。ハクは気持ち良さそうに目を細めその尻尾はパタパタと揺れていた。

……畜生、触りてえ。

「取り敢えずハク先ずは服を着るぞ。」

俺はハクにそう言う。

そう、ハクは今全裸で俺の目の前に座っているのだ。いや、俺は変態じゃねえから特に何も感じない。だが世間的には服はちゃんと着た方がいい。本人が良いと思って俺が凄い目で見られるから。

「……これ。」

そう言っただけでハクが握るのは俺が着ている服。そう言えばさっきも俺の服で遊んでたな。

「まあ、別に構いやしないが。」

ハクのサイズに合う服なんてのは俺のスキルでも無理だ。その場合正確な寸法が必要になる。なら俺の服済ませられるならそれが良い。大きいから捲れば問題ないし、自分の服は幾らでも創れる。

俺は自分が着ていた服をハクに渡す。

……パンツ一丁は結構寒いな。

「何か毛布でも創るか。」

俺は想像で大きめの毛布を創り包まる。一応ハクの方も創って渡しておいた。

「……………ん。」

俺が毛布に包まって温まっているとハクが入り込む。

「おい、お前の分は渡しただろうが。」

寒いんだ。

俺はハクにそう言うがハクはもう一枚の毛布を俺に渡す。
……………。

「二枚使えと?」

「……………。」

無言でハクが頷く。

「お前は良い奴だ。」

俺は二枚の毛布を繋ぎ合わせると包まる。大きくなったからかハクが入っても余裕がある。

「……………ぬくぬく。」

「全くだ。」

ハクの言葉に俺は頷く。俺たちがそのまま温まっているとノイズが

走る。

『・・・夜！響夜！！無事か！？』

「うお！？」

「・・・？」

その声量に俺は頭を押さえる。そ姿にハクは首を傾げている。
・・・マオか。

『響夜！聞こえているか！！』

「ああ、聞こえてる。」

これ以上騒がれたら堪らない。俺はその言葉に返事する。

『良かったあ。無事だったか。昨日魔力がどんどん使われていくし
帰ってこないしで心配したんだぞ！！』

「・・・悪いな。色々あったんだ。」

『心配させるでない！今からそっちに転移する！！そこを動くでないぞ！！』

その言葉と同時に一方的に会話は切られた。

「転移って・・・。」

たしか証があれば問題ないとか言ってたが。

俺がそんなことを考えていると真上に方陣が展開される。

「おい、……まさか。」

俺が急いで立ち上がろうとした時方陣からマオが落ちてきた。

「ぐ……ぼ……」

マオは俺の腹に思い切り落ちる。それは丁度俺の腹にクリーンヒットしその痛みに俺は悶絶する。

「響夜！無事か！！」

マオは俺の姿を確認するとすぐさま近づいて来る。

たった今テメエの所為で俺は死にかけたぞ！！

俺はそう言いたかったが痛みに声を出すことが出来ず低く唸る。

「………丈夫？」

恐らく大丈夫と言いたかったのだろう。ハクがトコトコと歩いてきて声を掛ける。その姿を見たマオは俺を見る。般若の形相で。

「響夜？此奴は誰じゃ？」

「……………」

未だに腹の痛みに耐えている俺がそんなことを言える訳がない。その姿を見てハクがフォローを入れる。

「………私、この人一緒にいた。」

違うぞハク！？お前が入れるべきなのはフォローで決して油じゃないぞ！！？

その言葉を聞いたマオは今まで見たことがない程の笑顔を浮かべていた。

この時俺は人は怒りの沸点を超えると笑うのだということを知った。

「・・・そうか。主は我が心配している間ずっと女とおったのか・・・。ふふふ・・・。」

俺の幻覚だといいがマオから薄らと黒い何かが漏れている。それが見えたのかハクも何時の間にか離れている。

「死ねえ！！！！この馬鹿者がああああ！！！！！！！！！！」

「っ！お、ば、らああああああああ！！！！！！！！？」

マオが魔力を伴って放った拳は俺に直撃し吹き飛ばした。

この日今までにない程の痛みを感じ俺の意識はブラックアウトした。

殺人鬼は冷汗が止まらないそうです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

常識を考える殺人鬼は今までいたのだろうか（前書き）

「最近不幸多すぎじゃね？」

b y 響夜

「……………がおー。」

b y ハク

今回は短いです。

常識を考える殺人鬼は今までいたのだろうか

太陽が丁度真上に昇っている頃俺は目を覚ました。

「…………手加減しろよ。」

俺は日射しで目を瞑りながら呟く。

「五月蠅い。主が悪いんじゃない。」

どうやら犯人は随分近くにいたらしい。

俺が今の呟きを聞かれたこと少し後悔していると太陽の光で塗りつぶされた視界に影が入る。

長く絹のような黒髪。そして綺麗な紫の瞳。

「…………少しやりすぎた。…………済まぬ。」

マオは少し顔を背けて言った。

「いや、別に…………ここは？」

「馬車の中じゃ。運ぶのが大変じゃったぞ。」

「…………ま、お。キョーヤ起きたから…………どく。」

俺達が話していると近くから声がする。 1

「・・・ハクか。」

俺の視界にもう一つ影が入り込む。
太陽に照らされて輝き儚いイメージを与えるマオとは正反対の薄い
水色がかった白銀の髪。そしてその姿を更に幻想的にさせている金
色の瞳。

その人物であるハクは髪をリボンで一つに束ねている。

「ん。」

名前が呼ばれたことが嬉しかったのかハクは尻尾をパタパタ振る。
俺はその様子を見てから頭を起こす。

「・・・。。。」

ゆっくりと流れていく風景。ガタガタと馬車が揺れているがそれが
心地よく感じる。

平和だ・・・。

俺はその心地良さに目を瞑る。

「・・・響夜？」

「？」

二人が俺に話しかけるが俺は目を瞑りやがて襲ってきた睡魔の誘惑
に身を委ねる。

意識を落としたかけた俺が最後に感じたのは両脇から感じる温かな感
覚だけだった。

「…………夜。響夜。」

「……………」

誰かが俺を呼ぶ声。俺はその声に意識を浮上させた。

「…………街に着いた。」

そう言つて話し掛けるのはハク。街が楽しみなのか獣耳も尻尾も元気でよく動いている。

「熟睡など主にしては珍しいの？」

左隣にいたマオが心配そうに言う。

まあ、俺が隙だらけの状態で眠ることなんてないからな。

「お前等を信頼してるからな。」

俺は二人の頭にポンと手を置くと先に降りる。二人は少しの間茫然としているがその意味を理解すると二人は笑顔で俺の後を追いつけてきた。

「響夜が優しくなったのじゃ。」

「キョーヤは最初から優しい。」

俺の隣で二人が話している。

「先ずはハクの服が先だ。それじゃ歩きにくいだろ。」

俺はそう言うがハクは首を横に振る。

「や。響夜の服これが言い。」

ハクはそう言つて難色を示す。

「止めなさい。」

俺とマオはそんなハクを半眼で見ながら言つた。

先ず俺が変態だと誤解を受ける。さらにハクが変な発言したら俺は社会的に死ぬ。

今でさえ結構この状況はやばいというのにそんなことをされたら堪つたものではない。

状況がどう転がろうと世間的には俺の死しか待っていない。なんと
いう無理ゲー。クリア出来ないとか最近の子供は絶対にやらないだ
ろう。

先ずはハクにきちんとした常識を持たせよう。

……殺人鬼が常識を説く日が来るとは今まで思いもしなかつたな。

—— 只今教育中 ——

「……服買いに行くか。」

「……ん。」

きちんとした常識をハクに教えた俺とマオはそこで教育を終了し服を買いに行くことにする。気のせいかなハクの尻尾はシヨボーンという音がでそうな感じで下がっている。獣耳伏せていた。

「どんな物を買うのじゃ？」

「あゝ……。」

そうか俺そう言うのは全然分からねえんだよな。買い物はマオに任せるか。だが……

「その前にギルドに寄るぞ。」

生憎持ち金は魔導具に使っちゃったから食費位しかない。ハクからは討伐の証拠である牙を貰っておいた。他の魔物がどうか知らないが白銀狼の牙はまた生えてくるから問題がないらしい。

やはり長寿だとそういうものがあるのだろうか。

ギルドに着いた俺達は白銀狼討伐の証の牙を出しついでにハクのギルドへの登録も済ませておく。こうしておいたほうが後からまた来るよりは楽だからな。

受付嬢からも戻ってこないから心配された。いい奴だなあ。

「お前達は服を見てきて良いぞ。」

「響夜はどうするのじゃ？」

俺の言葉にマオは首を傾げる。

「俺はまだこっちに用があるからいい。」

「む、そうなのか。」

「キョーヤ来ないの。」

マオは納得したようにハクは少し悲しそうに言う。

やめろ。俺が悪いみたいじゃねえか。心なしか受付嬢からの視線が痛い。

「ほれ。後で何処か連れて行つてやるから。」

俺はそう言つて名残惜しそうな二人を送る。

俺は二人が向うのを一瞥するギルドの食堂にあるテーブルに目を向ける。

「……………よう。」

「こ、こんにちは。」

「おう！初めましてだな。」

申し訳なさそうな顔をしているエルザと恰幅の良い上半身裸の男。

俺はついエルザを生暖かい目で見てしまった。エルザはその視線を見てないかというように顔を背けた。

「主がキョウヤという男か？」

俺がエルザへ説明を求める視線を送るよりも早く男は口を開いた。一応話は通じるタイプのようなのだ。

「ああ。俺が響夜だ。」

俺の返事に男は笑う。何だろっ嫌な予感がする。

「俺の名前はガルラ・アルフレッドだ。まあ『千武』と言う奴もいるがガルラと呼んでくれ。」

その言葉で俺は思い出した。視察に来ていたのは二人だということに。

今の名前から此奴がもう一人なのだろう。

「で、俺に何の用だ。」

周りからの視線が多くなってきたから早めに頼む。

「なあに少しお前に興味があつてな。」

ガルラはそこで言葉を区切ると不敵に笑った。

「エルザに訓練とはいえ引き分けなつた男がどれほどの者か見たかったのだ。」

「で？ 実際会つてどうよ？」

「良いな。お前からは強者の気配を感じる。人の皮を被つた獣のようだ。」

面白いこと言うな此奴。

だがその感情とは正反対に嫌な予感が増していく。
あれ、おかしいな。汗がすげえや。

「ぜひ、俺とも戦ってほしいものだ。」

……俺の人生終了のお知らせですか？

俺はそんなことを考えながら此奴が———というか周りにいる奴が———碌でもない奴ばかりなのだということを悟った。

俺は最近急激気増してきた不幸をこれでもかというほど呪った。

常識を考える殺人鬼は今までいたのだろうか（後書き）

感想。 批判、意見がありましたらどうか送ってください。

殺人鬼は連続エンカウントがしたいようです（前書き）

「殺人鬼は獲物を狙う獣と同じだ。」

b y 響夜

殺人鬼は連続エンカウントがしたいようです

「勘弁してくれ。」

俺が目の中の『千武』——ガルラにしたのは拒否。今戦うことなんてのは出来ない。ハクへの生命力を受け渡した影響は未だに残っている。足がガクガクだ。

「だが断る。」

「巫山戯んな！」

俺はもういっぱいいっぱい何だよ！！

「俺は帰る。」

「帰さん。」

「帰らせろ。」

「俺と戦ってくれるまでは帰さん。」

「テメエは餓鬼か！！」

言いいあう俺達。相手が何を言おうとも俺達には譲れぬものがあつた。

「帰せ！」

「帰さん！」

「帰せ!!」

「嫌だ!!」

そんな言いあい。傍で聞いているエルザも額に手を当てため息を吐いている。

周囲が呆れ返っている中俺とガルラの言い争いだけが響いていた。

「……………やってらんねえ。」

あの後俺は街を歩いていた。互いに一步譲らぬ戦いの結果、戦うのは五日後となった。

その間に俺がやるべきことは体調の回復と魔力の扱い方の訓練。そして——魔導具。もしくは神器の入手。

「神器の確保はほぼ無理。だとしたら魔導具の準備か。」

魔導具はピンからキリまであるがどれも中々の値段だ。ハクの牙で依頼達成の報酬を貰ったがそれも服代や宿代で半分近くは残しておかなくてはいけない。

「……………依頼貰って来たしそれで我慢するか。」

俺は手元にある三枚の用紙を見る。・大鬼討伐依頼

・魔剣調査

・マンドラゴラ採取

「・・・・・・・・。」

このうちの一枚は千武に戦う代わりにギルドを説得してもらい得た物だ。

オーガと戦えばそれだけ戦闘経験が豊富になる。千武との戦いでも役に立つ。

魔剣調査は危険と判断すれば破壊が目的。だが手に入るのなら俺が手に入れ札を増やしておける。

マンドラゴラは・・・・興味と金から。それ以外特になし。

「大鬼からだな。」

俺はマオとハクに一言連絡を入れ街を出る。

二人とも着いて来たがっていたが今回は一人で行きたいと言い二人を諦めさせた。

街道に出て馬車を呼ぶと俺はそれに乗り。カタカタと揺さぶられながら目的地へ向かっていった。

鬱蒼とした森の中。木々が山肌を覆い草木がその土を潤しているその一角に小さな広場が出来ていた。

「ガアラアアアアアアアアアア！！！！！！」

齢百の大樹に及ぶ筋肉が凝縮された腕。長いボサボサの白髪は悪臭を放ち。その顔は二本の牙と額の一本を生やした鬼だった。左腕に持った巨大な木を振りまわしながら大鬼は叫ぶ。目の前にいる異

物を排除するために。

「断頭台ギロチン！！」

相對していた白髪紅眼の男——響夜は大鬼の周囲に断頭台の刃を展開する。

「死刑執行。」

その言葉と共に放たれる十の凶器。大鬼はその全てを大樹で薙ぎ払い、躲す。

「オオオオ——！！！」

その荒れ狂う大樹を躲し響夜は大鬼にナイフを振るう。

——ガキィ！

だがそのナイフは大鬼の体に傷を付けられず逆に怒りを買っただけ。ナイフは折れ、砕け散る。響夜の判断は迅速であった。

「ッ——」

迫りくる右拳を響夜は体を捻り躲す。そして創り出すは一本の長剣。

響夜はそれで大鬼の右腕を斬り付け突き刺した。

「グウラアアアアアア——！！！！！」

その痛みに大鬼は叫びその瞳に憤怒の激情を映らせていた。

響夜はその瞳を見て笑う。

「こいよ木偶の坊。遊んでやるよ。」

大鬼は走り出す。その速さは今までの動きの比ではない。

響夜は魔力が感じられないことから恐らくはスキルだと判断すると自らも魔力とスキルを併用し相対する。

駆け抜ける閃光と荒ぶる災害。その戦いは熟練の冒険者が見ても舌を巻くものであった。

大鬼を圧倒的速度で翻弄しその体を切り刻んでいく。大鬼は膝を地に着けることはしない。手に持っていた大樹を投げ捨て大鬼は自らの拳で反撃する。

「キヒヤヤヤヤや！！！」

響夜の顔もまた愉悦に染まり、その唇を歪める。その太刀筋が揺らぐことなく逆に徐々に鮮烈され鋭さを増していく。

「グルア！！！」

だが大鬼は自らの体を犠牲にして響夜の動きを止める。長剣は大鬼の体を貫くが剣を引き戻すことが出来ない。その一瞬の隙を逃さずに大鬼は響夜の体を殴りつける。

響夜が逃げ出す前に大鬼は響夜の手を掴み何度も殴る。

「――」

だが響夜は決して大鬼から目を離さずに大鬼が拳を振り上げた瞬間

一閃

「オラオラオラ！早く逃げねえと肉塊^{ミンチ}になっちまうぜえ！？もう遅いかもしれねえけどよオ！！」

その悪魔たちを従える一人の殺人鬼は嗤う。それに答える声など当然なく。そこにあるのはかつて大鬼だった物だった。

それを見た響夜の思考は一瞬で元に戻った。

「・・・なるほど。空の魔法で空間を歪めれば銃口のみを任意の空間に構えられるか。」

あとはその合図を（ひきがね）をするだけ。

そして用が終われば倉庫の中へと入れ使用時に空の魔法で再び展開。

「中々良い。」

だが違う。

響夜はそう言い放つ。確かに広範囲、高火力。充滿する硝煙と弾ける生命は自分好み^{かがやき}の物だ。だが自らが望むものとはまた方向^{ベクトル}が違う。

響夜は展開されていた銃火器を倉庫へ仕舞うと歩きだす。

「魔剣・・・どれだけの物か。」

神器に匹敵するものであれば僥倖。そうでなくとも魔剣と呼ばれるほどの物なのだからそれなりの魔導具であろう。

響夜は街道に待たせてある馬車へと歩いて行った。その牙を磨きながら次なる獲物を狩るためにその獣は動き出した。

既に空には月が昇っていた。馬車から降り響夜は森の中を歩きながら自分のことについて考える。

「・・・・・・・・魔剣。」

響夜はマオからある程度の知識は与えられていた。だがこの世界に来て約三週間。この間だけでも、マオから与えられた知識は全てではないことが分かる。さらにマオが知らないこともある。

不意に響夜はポケットから赤い欠片を取り出す。それはこの世界に来てゴブリンと初めてと戦ったときに手に入れたもの。マオの知識にもものっていない物だった。

「何処からこんなものが手に入るのか。」

この欠片に高密度の魔力が溜め込まれているのはわかる。今もこの欠片からは微弱だが僅かに魔力が放出されている。ただこれが元は何なのかが分からない。

「・・・・・・・・？」

響夜はそのことに首を捻る。

「・・・・・・・・魔力を放出する。」

響夜は何かを感じた。どこかで知っているような喉元まで上がっているのにそこで引掛り口からその言葉^{こたえ}が出ない。

「・・・・・・・・。」

その不快感を消そうと響夜は自身の記憶を探るが答えは見つからない。

響夜はそのことに僅かな苛立ちを感じながらもそれ以上考えることを止める。今の目的は魔剣の入手なのだから。

「……とつとと行くか。」

響夜はこの不快感を消し去るように足早で森の中を歩いて行つた。

魔剣はどうやら突き刺さっている物ではないようだ。

魔剣が封じられていた台座の残骸を見て響夜は思った。周囲の外壁も破壊され床も亀裂が走っている。

「……所有者がいたのか？」

それとも……。

響夜はそこまで考え、これ以上ここにおいても意味がないと動きだしながら近くの村から聞いた情報を思い出す。

数日前に響き渡った何かの叫び。その翌日から次第に発見された何十匹という化け物の惨殺死体。そしてこの現状……。

「……おもしれえ。」

響夜は自らの出した答えが合っている時のことを考え笑う。その瞳には僅かな警戒と敵意、そして愉悦。

殺人鬼は笑う。これだけの力を持つ者と渡り合えるのだと。

「マオ、ハク、エルザ、ガルラ……。ああ、この世界は良い。」

こんなにも俺を楽しませてくれるんだ。」

決して向こう側^{ちぎゅう}では味わえない感覚。うんざりもしていたがその
実彼はこの現状を楽しんでいた。だが心の何処かでこの平和な日々
を気に入っていた自分がいたのも事実。

彼は苦笑する。これは魔剣に失礼だろうと。魔剣という極上の獲
物と戦うのに巫抜けた自分では駄目なのだと。

瞬間、殺人鬼の顔からは表情が消えた。

「・・・・・・・・・・。」

今この場より殺人鬼の本領が発揮される。

殺人鬼と魔剣。今宵、一人と一本の闘争^{ダンス}が幕開けた。

殺人鬼は連続エンカウンドがしたいようです（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

今回少し文章を変えてみました。主に最後の方を。

少しずつではありますがお気に入り登録してくれている方が増えてきて嬉しいです。おかげで自分の創作意欲も増してきています。まだ拙い文章かもしれませんがこれからもこの作品をお願いします。

殺人鬼と魔剣、二人だけの舞踏会（前書き）

「テメエは俺から逃げられねえ。」

b y 響夜

殺人鬼と魔剣、二人だけの舞踏会

深い闇に包まれた森の中。白髪の殺人鬼は疾走していた。

既に魔剣が封じられていた場所からは100？は離れているだろう。

彼が本来持つ人として異常なまでの能力値。神器——グリモア・ハート悪魔の心臓の

再生力による体力の回復。そしてスキルとして現れている二つのスキル。彼はその二つを最大限に発揮させていた。たとえ僅かな痕跡であろうともその観察眼から逃れられず、その鬼神のごとき身体能力を駆使して標的へと追いつがっていく。まるで血の臭いを嗅ぎ付けたハイエナのように。

「・・・・・・・・・・。」

ああ、臭う。臭うぞ。死の臭い、血の臭い、憎悪の臭い。ああ、心地良い香り。何よりも腐り果てた血潮と何よりも黒く染まった輝きだ。

響夜は獣のような獰猛な笑みを浮かべる。

この漆黒メツキを剥がせばどれ程の輝きが見えるのか。

そして殺人鬼はその違和感を見逃さなかった。

「・・・・・・・・・・。」

立ち止まる響夜。その視線の先にあるのは僅かに赤く染められた雑草。響夜の観察眼はその時間、方向さえも見抜いていく。

「・・・・・・・・・・見つけた。」

殺人鬼は標的の場所を把握する。そして再びの疾走。獲物を見つけた獣の勢いはもう止まらない。ただ目の前の獲物の首を食い干切

も持たない。

響夜はその剣を弾くと攻勢に出る。創り出すのは二本のナイフ。既に両者の距離は魔剣の間合いではなく響夜の間合い。次々に繰り出される連撃。その斬撃を魔剣は腕で弾き身体を反らし躲す。だがそれでもこの攻撃からは逃れられない。そのはずなのに

ガキーン！

響くのは鈍い音。斬り付けているナイフは魔剣の身体に傷を付けられず、逆にナイフが砕け散るさま。響夜は苦虫を噛み潰したような表情をする。

そしてその隙の逃さず魔剣は反撃を開始する。音速をも超える勢いで振られる大剣を何とか躲していくが徐々にその体に傷は増えていく。悪魔の心臓の方が再生は速いが防御が崩れればその再生スピードを上回る威力と速さの攻撃がくる。その攻撃に耐えながらも響夜は想像を開始していた。

強度が足りない。構成が甘い。一撃で破壊できるだけの力を、目の前の規格外と戦えるだけの強さを。ただそのみを求めた想像を・・・！

響夜は自らの想像をより高みに昇らせていく。

「・・・・・・・・。」

目の前にいる魔剣と同等の力を誇るだけの想像。いや、自らの存在を魔剣と同等の存在だと想像する。それは徐々に形を伴ってこの世界に顕現していく。

「俺は喧嘩弱いからよ。」

凡人が強者へ勝ちたいと夢見ること。誰だって一度は夢見る。憧

きを止めた。

「……………もうお前は逃げられない。」

響夜は魔剣へと近づく。

「お前が俺に勝つことなどなく、俺がお前に負けることなどありはしない。」

響夜はその手にある魔剣へと手を伸ばし——掴んだ。

「俺の体、取れるものなら取ってみろ。」

ただし——

「取れなかったらテメエは俺の物だ。」

瞬間、響夜の全身を激痛と狂気が襲いかかった。
襲いかかる狂気の渦。今まで魔剣に吞まれてきた者達の悲鳴。断
末魔。その全てが響夜へ手を伸ばす。

まだ！まだ死にたない！！

お母さん！！

何で俺が死ななくちゃいけないんだ！！？

誰か、たす……け……

いやあ！！

皆もう死ぬんだ！誰も助からない！！

次々に聞こえる叫びの中。響夜は亡者に全身を掴まれながらもその決して吞まれず寧ろ笑みを浮かべていた。

「くく、はははははははは！これが魔剣！？この程度か！」

響夜は笑い続けやがて高らかに言った。

「ああ、！！！」

亡者たちの叫びが木霊する中、響夜は嗤い続けていた。

突然、響夜の意識は覚醒した。そのことに特に驚く様子もなく響夜は自分の手の中にある物に目を向けた。そこにあるのは殺意と魔力が込められた掌ほどの漆黒の球体。響夜はそれが魔剣なのだと本能で理解していた。

「・・・・・・・・。」

響夜は魔神の観察眼を発動させその魔剣の情報を読み取っていく。そしてその情報を見た響夜はその顔に更なる愉悦を浮かべた。

「ああ、実に俺向きの得物だ。」

響夜はそのポケットの中から赤い欠片を取り出す。

「・・・・・・・・想像形成。」

その言葉と同時に黒い球体は赤い欠片を飲み込んでいく。欠片を

完全に飲み込んだ時、それは起こった。

……ドクン

何かが脈動する気配。見れば球体には赤い線ラインが浮き上がっていた。そして球体から放たれる魔力もまた先程よりも濃密なものとなっていた。

「……元があれば強化は可能。」

響夜はその球体を見てそう呟く。

材料を想像する際の基盤として固めておけばそれを基として新たに強化、進化させることが出来る。この結果に響夜は満足そうに頷く。

「切り札ジョーカーは手に入った。」

後はこれの使い方を完璧にするだけ。

響夜は次の依頼の時にでも使ってみるかと思えると最後の依頼のマンドラゴラへと歩いていく。その姿は新しい玩具を手に入れた子供のようだった。

決闘開始まで残り三日

殺人鬼と魔剣、二人だけの舞踏会（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

動きだす殺人鬼達の物語（前書き）

「……………帰って来てこれは酷いと思う。」

b
y
響夜

動きだす殺人鬼達の物語

「耳がいてえ。」

俺は馬車の中で横になりながらぼやいていた。鳴き声が凄いというのは聞いていたがこれは酷い。耳元で聞いたから鼓膜が破れやがった。いや、再生するからいいけどよ。

「……………もうこの身体に慣れちまったな。」

最初は毛嫌いしていたがもう慣れるとは、改めて自分の順応性の高さが恐ろしく感じる。

「形無き略奪者」
シェロシニア

俺は魔剣を呼ぶ。この魔剣どうやら所有者の体内が鞘の代わりらしい。呼び出せば一瞬で出現する。中々従順な奴だ。

魔剣は剣の形状で現れるが此奴の能力で所有者の望む形になる。重さも所有者はほぼ変わらないから使い勝手がいい。後は血を飲んだ分だけ此奴の能力は上がる。今の状態でも戦闘特化の神器でなければある程度はやりあえるだろう。

「まあ、お前は切り札だからな。」

なるべくなら此奴は使いたくない。もしかしたら何かしらの対策を取られるかもしれないからな。

俺は魔剣をペンダントの形状にして弄る。

「取り敢えず暫く生活の方は大丈夫だよな。」

流石にBランク二つとAランク一つ受けたんだから問題ないだろう。

「……………フラグじゃないよな？」

街に戻ってきた俺は依頼達成の報告と証拠、金の受け取りを済ますと宿に向かった。

受付嬢がやけに含みのある目で見てきたが俺何かやったか？

「ああ、ガルラのことか。」

多分それだろう。あれだけ大勢の前で言い合ってたからな。俺は久しぶりになる宿の前に着くと扉を開けた。

「あ、響夜さん！お久しぶりです！！」

俺が宿に入るとロシエルが笑顔で迎えた。

「……………ああ。久しぶりだ。」

何となくロシエルの笑顔が怖く感じた俺は早々に話を切り上げ部屋に向かおうとするが

「何で言ってくれなかったんですか？」

ロシエルが声をかけてくる。そんなことを言われても何のことか分

からない俺は首を傾げる。

「ハクちゃんのことですよ。」

「ハク？」

二人が何かやらかしたのか？

俺は疑問に思い席に座ると水で喉を潤しながらロシエルに聞く。

「だから言ってくれても良かったじゃないですか。」

「・・・いや、何が。」

「あんな可愛い娘がいたなんて。」

「ぶー！！！！？」

俺は思わず含んでいた水を吹き出す。

「良い子ですね。少し口数が少ないですけどそこがまた可愛くて。」

「おい、ちょっと待て。何であいつが娘なんだ？」

俺は咽ながらも何とか言葉にする。

「いったい俺の知らない間に何があった。もしかして受付嬢のあの目もこれが原因か？」

「え？違うんですか？マオちゃんに聞いたら顔を真っ赤にしてたんですけど・・・。」

「そりゃ、あいつが初なだけだ。」

くそ、そこで何とかマオが誤解を解いてくれれば良かったものを・・。

俺はそのことに齒噛みするが過ぎてしまったことは性がない。
俺はこいつの誤解だけでも解いておくかと口を開こうとする。

「でも髪も響夜さんに似てますし。」

「それはあいつの髪がたまたま俺に似てただけだ。」

そんなことで娘などと言われたら堪ったものじゃない。俺はあいつの父親になる気もねえしそんな歳でもねえ。

「でも黙ってる時も響夜さんに似てますし。好奇心旺盛なところとかはマオちゃんに似てますよ?」

「だから違うつての。好奇心旺盛なのはあいつが街に来ることは殆ど無いからだろうよ。俺に似てるってのは俺のことを父親だと思ってるから似てるように見えるだけだろ。」

そうだ絶対にそうだ。異論は認めんし反論もさせん。断じて俺はあいつの父親ではないのだ。

その言葉を聞いてロシエルは思案顔をする。

「……どうしよう。皆に広めちゃった。」

「今直ぐ誤解を解いてきやがれ!!」

その言葉に俺は思わず勢いよく席を立ち叫んでしまった。
畜生。何で俺がいない間に俺の立場が凄いいことになってるんだよ。
俺はそう嘆かずにはいられなかった。

ロシエルの誤解を解いた筈なのにそれ以上に疲れた俺は部屋に入ると直ぐにベッドに向かおうとし——気付いた。

「そっぴゃ、二つとも占領されてたな。」

あいつらがそれぞれ寝てるのを思い出した俺は床をぱつと掃除すると横になる。俺が良くても二人は嫌だろうから必然的に俺は床で寝るしかなくなる。

いつそのことケチ臭いこと言っでないでもう一つ一人部屋を取った方が良いかもしれない。

そんなことを考えながら俺は襲ってくる睡魔に身を委ねた。

・・・。

誰かが部屋に入ってくる音がするのが聞こえた。
その音で俺の意識が僅かに浮上する。

「・・・静かにすのじゃぞ。」

「・・・ん。」

帰って来たのか。俺は二人の声に目を開ける。

「む、起こしてしまったか。」

「・・・おはよう。」

俺が目を開けたのを見た二人は少し申し訳なさそうな顔をする。

「いや、大丈夫だ。・・・おはよう。」

俺がそう言つと二人が微笑んだ。その顔を見て少しだけ俺の心も和らいだ気がする。

「・・・殺人鬼がこんな感情を抱くのもおかしいか。
空に浮かんでいる月を見る限りまだ夜になったばかりか。」

「悪いな。帰つて来る時連絡入れんの忘れた。」

「問題ないのじゃ。流石に三つ連続は疲れたじやろう。ゆっくり休むといい。」

「キョーヤ、無理は駄目。」

疲れた俺に無理をさせないようにと二人は言ってくる。月の光に照らされて輝いている対照的な二人の髪。きつと誰もが女神と言つのだろう。それだけ二人の姿は幻想的だった。

「いや、もう十分寝たから問題ない。」

「む、本当なのか？」

「ああ、心配掛けて悪かったな。」

俺がそう言つと二人は少し驚きまた笑う。

「キョーヤ、優しい。」

「うむ、変わったのう。最初はもう少し無口で無愛想じゃったのに・。
」

「誰かさん達と一緒にいるからな。」

「「？」」

どうやら自覚はないらしい。首を傾げている二人に俺は思わず苦笑した。

「少し、外を歩いて来る。」

俺は二人にそれだけ言つと部屋の扉を開け宿を出た。

「そこまでじゃないな。」

この世界に四季があるのかは分からないが肌寒いというほどの気温でもない。

俺は宿を出ると当てもなくぶらぶらと通りを歩いていく。

「残り二日。」

決闘までもう時間は殆ど無いな。ギルドで依頼をこなしている暇などない。別にこの勝負は負けてもいいが相手はそれじゃ納得などしないだろう。手を抜いても恐らくあいつは分かるだろう。そしたら何度も戦つことになるかもしれない。

「面倒くさいな。」

俺は愚痴りながら路地裏へとはいっていき止まった。

「出て来いよ。」

俺がそう言つと背後で足音が聞こえる。その音を聞いて振り返ればそこには上等な騎士装束を着た男が立っていた。

「キョウヤ・ナルカミだな。」

ああ、そう言えばこの世界じゃそう呼ぶんだっけか。

「違う……と言いたい所だが、見逃してくれないよな。」

「当たり前だ。貴様をここで逃すわけがないだろう。」

「あの魔族の関係者で？」

ハクとの戦いで処分したゴミを思い出す。別にあいつらを殺したのが悪いとは思わない。先に手を出したのは向こうだ。自業自得、それ以外に思うところなどない。

「……そうだ。」

「敵討……じゃねえよな。」

「それは油断した奴らが悪い。貴様を狙うのは……貴様が邪魔だからだ。」

そう言つて目の前の騎士は剣を抜く。交渉は無理。敵意丸出しの奴にどうやって交渉を持ち掛けると？ 対価は俺の命とかほざきそうな奴だぞ？

「……そうかよ。なら――」

俺の背後の空間が歪む。

「殺されても文句はねえよなあ!？」

俺の背後から火球が放たれ目の前の騎士に向かう。

「無駄だ。」

だが火球は騎士の目の前で突然消えた。

「な――」

それを見た俺は驚愕を浮かべる。その隙を逃さず騎士はその剣を横に一閃。

その攻撃を俺はギリギリで回避するが状況は此方が不利だ。俺の背後にあるのは壁。脱出するには目の前の騎士の攻撃をどうにかして掻い潜っていかなくてはいけない。

死にはしないが蹴り殺しは勘弁してほしい。

「くそ！ 神殺しの鎖グレイブニル!!」

俺は奴に向けて無数の鎖を放つ。その攻撃を奴は狭い路地裏の中で壁を利用して躲す。神殺しの鎖もこんな狭い所では十分な力を発揮

できない。迫りくる騎士。まさかもう出番が来るとは――

「形無き略奪者！」
ジャロシニア

瞬間、俺の手には魔剣が握られていた。俺はそれで騎士の攻撃を防ぐ。騎士は眉を顰め。嫌悪感をあらわにする。

「貴様のような人間如きが俺の一撃を防ぐなど。」

「人間如きに防がれる騎士様はよっぽど実力が低いんですね。」

「図に乗るな。」

その一言で騎士は加速する。だがここは狭い路地裏、逃げ場などなく壁ももう使えないだろう。

「デメエがだよ。」

その言葉を合図に迫りくる騎士に向けて魔剣が伸びた。

「!?!」

その予想外の攻撃に騎士の身体は僅かに硬する。だがそれも一瞬、騎士はその攻撃を剣で受け止めると追撃を予想したのか小さく舌打ちし闇にまぎれて消えていった。

「.....」

突然襲ってきたり、いなくなったりと随分忙しい奴だ。

俺は形無き略奪者を体内に戻すと奴が消えていった方向を見る。

「たく、何だか面倒臭いことになってきやがった。」

俺はぼやきながら二人のいる宿へと戻っていく。どうかの馬鹿騎士の性でおちおち街も歩いてられねえ。

俺は深い溜息を吐きながら街道を歩いて行く。本当に面倒臭い。

空を見上げるとそこには俺の気持ちとは正反対に輝いている月が昇っていた。

決闘まで残り二日

動きだす殺人鬼達の物語（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は過ちをおかそうと考えるのか？（前書き）

「・・・・・・・・記憶消す神器ってねえのか？」

b y 響夜

殺人鬼は過ちをおかそうと考えるのか？

不審者——騎士かどうかよく分からないからだ——に襲われてから俺は念の為警戒し一睡もしなかった。お陰で目の下には隈が出来た。どうやら気持ち昂ぶっていない時は相当気が緩んでいるっぽい。絶対にこの奴らの所為だ。そう思いながら俺は眠っている二人を見る。呑気でいいなあ。などと平和なことを考えてみる。

「…………ふあ。」

俺が椅子に座り魔力の扱い方の練習をしているとハクが眠い目を擦りながら起きた。

「…………はよう。」

「おはよう。」

寝起きだからか舌足らずな感じだがハクは俺に挨拶をし——
何故か俺の膝に座る。

「どうした？」

俺は座ったままのハクを見た。

「キョーヤ…………眠ってない。」

「ま、色々あってな。」

俺がそう言つとハクは俺の膝から退き手を引っ張る。

「？」

「寝ないと駄目。」

その言葉に首を傾げていた俺は納得する。
わざわざ俺に気を使うとは・・・。

「済まないな。」

折角俺のことを考えて言っているのに無下に扱っわけにもいけない
だろう。

俺は立ち上がると空いているベッドに向かうが服の袖を掴まれた。

「こっち。」

そう言ってハクが指差すのはマオが寝ているベッド。・・・マジ
か。

「ハク、そっちはどう見てもマオが寝てるだろう。」

俺の言葉にハクは頷くが諦めず口を開く。

「・・・皆で寝たい。」

「・・・。。。」

・・・凄いハクにぴったりな考えだと思ったのは秘密だ。
だがそれで三人で寝る理由にはならん。というか三人で一つのベッ
ドは無理があるだろ。

「・・・・・・・・・・。」

止める。瞳を潤ませるな。泣きそうになるな。俺が泣かしてるみてえだろうが。

「・・・・・・・・きよーや。」

クソが。俺は悪くねえのに何でこんな罪悪感を感じなくちゃいけないんだよ。

「わーったよ。分かったから泣きそうな面すんな。」

俺はそう言っただけでハクの頭を撫でる。

「・・・・・・・・ん。」

ハクは満足そうに頷いてマオが眠っているベッドに飛び乗る。僅かにマオが呻くが起きる気配はない。余程深い眠りなのだろう。

ハクはマオの隣で横になるとマオが眠っている場所とは逆の場所をポンポンと叩く。それ以上煩くなってマオが起きるのも面倒なので俺はハクの右隣で横になる。

「・・・・・・・・おやすみ。」

「ああ・・・。」

正直、その言葉にちゃんと返せたかどうかは分からないが俺は直ぐに眠ってしまった。

ほんの数分か——体内時間としては——そこから起きた気がした。

「・・・・・・・・・・。」

丁度昼間だろうか。真上に昇った太陽の光の所為で眩しい。ふと腕が動かないことに気付いた俺が隣を見ると——黒いのと白いのが枕にしてやがった。

この状態を表すなら川の字だな。てか、実際にそうだ。

「・・・・・・・・・・こそ。」

俺はすやすやと眠っている二人を見て悪態を吐く。腕が抜けねえ。

「・・・・・・・・・・そういえば人間じゃねえな。」

うん、片方は魔王でもう片方は獣人(?)だったな。人間の腕力で勝つのは無理じゃね？

まあ、この程度で俺が諦めるわけねえけどさ。

「・・・・・・・・・・つと。」

・・・・・・・・・・うん、無理。開始3秒で詰んだ。

今、腕の筋肉繊維が千切れる様な音したからな。此奴らどんだけガチの睡眠してんだよ。此奴らと寝る奴は間違いなく自殺志願者だな。

「・・・・・・・・・・腕千切るか？」

いや、多分返り血で起きるだろうから俺が無駄に痛み悶えるだけか。……どうする。

「これで空の練習でもするか。」

扱う奴によっちゃ転移も出来るらしいからな。

俺はそう考えると魔力を集中させる。想像形成で創ればいいのかもしれないが想像形成での魔法は通常の魔法とは構成が違うから見ると奴によつては気付かれるらしい。だったら少しでも多くこの世界の魔法を出来るようにしておくべきだろう。

「………転移。」

転移魔法の構成陣を描くと同時に魔法が発動する。……発動したが。

「………やっちゃった。」

ベッドに沈んじまった。多分、構成が甘いというのと初めて使うから座標もいろいろミスったのだろう。

気にせず俺はもう一度転移する。今度はさっきまでいた場所に転移した。

「——ん。」

「………」

俺の魔力に反応したのか二人が目覚めます。

「……おはよう。目え覚めたなら退けや。」

俺は目を覚ました二人に言う。冷たい？いや、俺の負担はそれ以上だから。

二人はまだ頭が回らないのか暫くボーっとした様子で俺を見る。

「「「・・・・・・・・・・」」」

俺は二人の視線を感じながらも再び転移魔法の構成陣を描く・・・。

「・・・・・・・・ん。」

ハクが抱きついてくるが無視。

今度はもう少し構成陣の魔力を多くするか・・・。

・・・・ふにゆ。

ハクが胸を押しつけてくるが無視。反応したら負けだ。

「きょーや〜。」

今度はマオが抱きついてくる・・・・無視。

もう少し座標も細かくした方がいいか？

・・・・ぽよん

マオ、テメエもか。

俺は左右からの刺客を無視して魔法を使う。

「・・・・・・・・転移。」

その言葉と共に俺の姿が消えベッドから少し離れた場所に現れる。どうやら一応成功したらしい。転移出来る範囲は3mという悲しい事実もあるが。

俺はベッドから脱出出来ただけマシだと結論付け椅子に座ろうとす

る。

「響く夜〜!!」

「キョーヤ。」

がそれは無理らしい。二人が俺の肩を掴む。

「何だ？あんまり騒ぐな。」

俺の言葉に二人はむすつとする。

「その言い方は酷いのじゃ。」

「キョーヤは女の子への対応がなってない。」

腕引き抜くだけで筋肉線維が千切れる様な奴らを女の子とは言わん。ぐちぐち言ってくる二人に俺は溜息を吐き転移でドアの前へ移動し一回に降りた。

「響夜！話は終わっていないぞ!!!」

「キョーヤひどい！」

二人は俺を追い掛けて降りてくる。

「静かにしろお前ら。」

俺は騒ぐ二人そう言つと席に着いて注文をする。

「ロシエル！響夜が酷いのじゃ！！」

「キョーヤがひどい。」

ロシエルが来ると二人は先程の話をする。味方を増やしても現状は変わらないと思うんだがな・・・。

俺はそう思いながら注文の品が来るのを待っていた。

現状が変わらない。うん、そう信じてたんだがな。

「いいですか響夜さん。女の子は繊細で傷付き易いんです。ちゃんと優しく対応してあげないと駄目なんですよ？だいたい響夜さんは何時も二人に対して少し冷たいと思います。そのうえ女の子に恥じをかかせちゃ駄目ですよ！まったく二人はこんなに貴方のことを思っていてくれるというのに貴方は全くそれに応えようとしません。それはもう一人の男として駄目です！！それに・・・」

正直言おう。うぜえ。そして面倒臭い。何だ此奴は、まさか俺に飯すら食わせず床の上で説教とは。見る他の奴ら苦笑してるぞ。後ろの二人はロシエルに同意するように頷いている。

「——聞いていますか響夜さん！！」

「ああ。」

その言葉に俺は返事だけしておく。飯を食ってもいいんだがさつきそうしようとしたら三人が体の関節外しやがった。壊れたわけじゃねえからこれは治らない。強引に戻しといたが痛みは残っている。

正直少し涙目になった。関節を同時に三か所以上外されるのは死ぬ。

「分かりましたね響夜さん。」

「……………ああ。」

「よろしい。では今夜からでも二人には応えてあげてくださいね。」

そう笑顔で言い放つロシエル。

は？……………もしかして俺とんでもないことに返事した？やばくね、何、何に応えろと？くそ、聞いてなかった過去の俺をぶっ殺したい。

「……………。」

俺はとりあえず飯だけでも食おうと席に着……………

「飯がねえ。」

そう、テーブルにあつた飯が消えてるのだ。

「それならさつき冷めてしまったのもう戻してしまいました。」

「……………。」

なんてこつたい。説教の上に飯すらなくなるとは……………。流石にこれは辛いぞ。

「……………部屋戻つてる。」

俺はそう言つと席を立て部屋へと戻る。

ああ、もう眠りたい。

俺はそんなことを考えながら扉を開ける。さっきは気付かなかったがどうやらもう夜になっていたらしい。ロシエルの説教の長さ俺の現実逃避の長さに吃驚だ。

もうロシエルの説教は受けないと心に固く誓った俺は倉庫からベッドを取り出す。流石に今日は床に寝るのは勘弁してもらいたい。幸いベッド三つでも余裕があったようだ。ギリギリだったらまた床で寝ることになる。

もう、二時間ほど経ったか俺はベッドの上で地図を広げている。

「……星の墓場、赤の国、^{ミュールス}神国」

大体近いのはここら辺か。

流石にこの街しか知らないというのも拙いだろう。仮にも旅人という設定なのだから。金が貯まったら他の国や街に行くのもいいかもしれない。

俺がそんなことを考えていると部屋の扉が開く。どうやら二人が帰って来たらしい。

「よう。遅かったな。」

俺がそう言うと二人とも返事をするが何となくぎこちない。何かあったか？

「きよ、響夜。少しあっち向いていてくれ。」

マオがそう言うとハクも同意するように頷く。

まあ、別にかまいやしないが、国名も覚えておきたいから退屈はし

ない。

・・・・・・・・しゅる・・・

暫くすると布が擦れる音が聞こえる。あいつら着替えてんのか？だつたら外に出ると言つた方が良かっただろ。

俺はそう思いながらも地図を見る。大体の近くの国は分かつたが山などの細かい地形はまだ頭に叩き込んでいない。

「きよーや、もう、いい。」

俺が地形を覚えるのに集中しているとハクの声が聞こえる。

「着替えるんだつたら外に出てると言えば良かっただろう？」

俺はそう言つて二人を見——てしまった。

「・・・・・・・・。」

顔を赤く染める二人。その姿はワンピースのようなものを着ているが見た目だけだ。よく見たら布を巻いただけの姿。

・・・・・・ロシエル、何吹き込んだ。

俺はあの馬鹿の顔を思い出す。

「あ、あの・・・・・・・・。」

俺が馬鹿^{ロシエル}への呪詛を心の中で吐いているとマオが口を開く。その格好の所為か二人とも凄い顔が赤い。恥ずかしいならやらなければいいだろうに。

「そ、その……。」

ハクも普段からあまり喋らないが今回は恥ずかしさの所為か余計に声が小さい。今にも？き消えそうだ。

「あ……お前らどうした？」

少なくともあの馬鹿が唆したということは分かる。

「え、……えつと……響夜。」

マオが口を開く。口調も普段と少し違うか？似非爺口調ではなく少女のような感じだ。

「そ……その……。」

何か凄い、身の危険を感じる。今までの中でも相当危険な感じだ。神よ。もし貴方がいるのなら私を救いたまえ。救わないなら殺す。

「わ、私達と……寝て。」

「……ロシエル、テメエとは後で話ししなくちゃいけねえよ
うだ。」

決闘開始まで残り一日

殺人鬼は過ちをおかそうと考えるのか？（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

人の感情とかは書くのが難しいですね。他の方はよく書けるなあ
って何時も思います。

15禁の基準ってどれくらいなんですかね？それによって次回の話
を変更する必要があるんですね。

殺人鬼の悩みの種が増えました（前書き）

「……………助けてくれ。」

b y 響夜

今回短いです。そして何か……………うん。あれです。

殺人鬼の悩みの種が増えました

……。現実には実に残酷だ。俺は今その一部を体感している。

「……。きょうや。」

頬を仄かに赤く染めながらマオは甘い声色で俺の名前を呼ぶ。その黒髪は月の光に照らされよりより彼女を妖艶に魅せる。

俺はそれから目を逸らす。目を合わせたら駄目だと本能が感じ取ったからだ。

「……。きょう、や。」

だが悲しいかな。俺に逃げ場はなかったらしい。

左側には薄く青みがかった白銀の髪を揺らしたハクがいる。マオのように成熟した体つきではないが月明かりに照らされたその姿はより彼女を神秘的に魅せていた。

まずい、これは非常にまずい。肉体的にも精神的にも俺が死ぬ。世の男どもは喜んで飛び付くだろうが生憎俺はそこまで飢えてなどいない。腑抜けだ何だと言われようと俺は手を出さん。そうとなれば俺はこの状況から何とか逃げ出す方法を思い付かなければならない。

考える……。考える……。考える……

俺は今までにない程速く頭を回転させる。何とかこの状況から脱出する方法を。

転移、無理だ。マオは証から転移出来るし、ハクは臭いで追つてくれる。

魔導具で無理やり気絶させるか？無理だ。どちらか一人はいけてももう一人は反応してくる。

「・・・きょうや。」

甘い声を発しながら近付いてくるマオとハク。俺は少し後退りする。

「・・・おね・・・がい。」

壁際まで追い詰められた俺に二人はその距離を零へとした。^{ぜっほう}

その事実には俺はその体を一瞬だが硬直させた。その隙を二人は逃さず

「・・・ん。」

触れる唇。その柔らかな感触が今の事実を伝えてくる。視界に映るのはマオの顔。そして俺の身体に感じられる二人分の重み。

「・・・。。。」

永遠にも感じられた刹那。離れる唇。目の前に映るマオの意気は荒くなっている。もう一つの視線を感じて俺は視線を下に移す。そこにいるのは白銀の髪の少女。

「・・・きょう・・・や。」

俺が反応する前に押しつけられる唇。引き離そうにも二人の体制的に引き離せない。

「・・・ん・・・はっ・・・。」

息継ぎをしようとした瞬間ハクはその口内に舌を入れる。触れ合う唇の間からぬるりとした感触をともなつて入り込む舌。それは俺の舌を絡みとり口内を蹂躪する。

「ん・・・ちゅむ・・・は・・・。」

何度も絡み合いその動作は次第に激しくなっていく。

「・・・はむ・・・ん・・・ちゅ・・・は・・・む・・・きょうやあ。」

離れていく二人の唇の間にできる銀の糸をハクは妖艶に絡め取りながら甘い声で俺の名前を呼ぶ。

「・・・っ。」

これ以上は拙い。このままだと確実に俺の理性も崩壊する。

「・・・きょうや。」

その間にもマオは俺のズボンへと手をかけていた。

「ま、マオ。待て！」

俺は今までにないほどの焦りと共にマオを止める。ハクが迫ってくるがそれも片手で何とか止める。

「止める二人とも。」

俺は二人をギリギリで止めた。二人は息を荒くしその瞳を潤ませ俺を見る。思わず顔を背けそうになるが何とか踏み止まる。

「・・・いきなりどうした。」

何とか耐えている俺は二人からこの行動の理由を聞き出す。

「・・・響夜が・・・悪いんだよ。」

「きょう・・・やの所為。」

二人はそう言うのと再びその続きにもどろうとする。

「・・・つ。待てお前ら。」

たぶん、というかほぼ確実に今の二人は俺の制止など聞かない。なら・・・

「・・・。。。」

俺は簡単な魔法を発動させると二人に話しかける。

「それだつて今でなくてもいいだろう?・・・俺も今は疲れてるんだ。」

正直苦しすぎる言い訳。現に二人も不満げに俺の顔を見ている。頑張れ俺。今を乗り切れば何とか対策も立てられる。俺はそう自分に言い聞かせ二人の耳元でそつと言つ。

「・・・あとで、その時に続きをしてやるから。」

魔法による軽い意識の誘導。普段ならハクはともかくマオには絶対に効かないだろう。だが今マオの理性薄れている。この状態ならば効果がないわけがないだろう。

二人は顔を赤くしながらその言葉に頷く。

「・・・お前達が望む時に好きなだけやってやるから。」

正直これは俺にとっても危険な賭け。マオ達がこれを覚えていたら確実に俺は詰む。だがこの魔法で誘導しておけば今回のことを思い出さず、思い出しても夢だと思う・・・はずだ。

俺の言葉に二人は身を震わせるとその潤んだ瞳を向ける。

「それじゃ・・・」

「・・・最後に。」

二人はキスを要求するように目を閉じる。その行動に俺は内心で溜息を吐くが

何とかここで終わらせなければ

その一心の下俺は二人に口付をした。

ああ、もう二度とこんなことは起きないでくれ。

おはよう太陽。死ぬほどお前を八つ裂きにしたい。

俺はそう思いながら起き上る。左右には昨日と同じ姿をした二人の姿。何とか誤魔化して切り抜けたがあのと一緒に寝ようとしてきた――俺が拒否したが二人は断固として譲らなかった――結果、諦めた俺はもうどうにでもなれと二人と一緒に寝た。無論変なことは起きなかった。たぶん。

「眠い。」

ああ、そういえば今日が決闘だな。

俺は街の様子を見ながらそんなことを思い出す。正直ばつくれようとも思ったが魔剣の依頼はあいつの協力がなかったら出来なかったので付き合うことにした。たぶんそしたら俺の信用は一気に落ちる。俺は二人を起こさないようベッドから離れるとYシャツとジーパンに着替え下へ降りる。まだ朝早いからか客はほぼいない。俺はそれでも受付にいるロシエルの下へ行くと告げる。

「よくもやってくれたな？」

「何のことですか？」

笑顔で堂々としらをきるロシエル。そられてなおその行動とはある意味勇者だ。

「マ才達に余計なこと言いやがって……。」

「昨晚は楽しめましたか？」

此奴認めやがった。

「で、お前に話があるんだが。」

「？」

「実は今誰かを殴りたいんだ。だが、今回のことを他言無用、本人たちにも言わないと約束できれば逆にこの宿への代金を増やしてもいいと思って」「是非とも協力しましょう。」「……………」

此奴は……………」

俺はその変わり身の早さに深い溜息を吐く。

「いいな。もし破れば宿代ただ……………そしてお前に地獄を見せる。」

俺は今きつと天使ともいえる表情をしていることだろう。ロシエルの顔から血の気が引き冷や汗が流れているのが分かる。

殺人鬼が天使の笑顔……………おえ。

俺はそれだけを言うと言文をし空いている席に座る。ロシエルは未だ挙動不審で俺におびえているがどうせすぐに調子を取り戻すだろう。

そんなことを考えながら時間が過ぎ去っていきマオとハクが降りてくるのが分かる。

降りてきた二人はロシエルに笑顔で挨拶をする。ロシエルももう先程の様子とは違い笑っている。

「……………おはよう。」

「おはよう……………なのじゃ。」

俺の下へ来る二人だがその顔を真っ赤に染めている。
……………。

「昨日の。」

俺がそう言つと二人は煙が出るのではと思つほどに赤くなり俺から目を背ける。

・・・此奴ら完全に昨日のことを覚えてやがる。

俺はその事実絶望しながら何も聞いていない知っていないというそぶりを見せるがそんなものは無駄だっただらしい。

「・・・頑張つて。」

「・・・決闘が終わつた後・・・。」

・・・は？もしかして今日？対策も出来てないのに？

俺はその台詞に血の気が引くのを感じる。まさかロシエルへ行つたことがこんな形で帰ってくるとは・・・。

思わず俺は逃げ出そうかと考えるが諦める。そんなことは出来やしない。

しかし、誘導もしてなるべく記憶の片隅へと追いやつたのにそれでも覚えているとは・・・。

その事実俺は落胆する。・・・こんなときに使えないとは。

「・・・楽しみにしてるから。」

「は・・・はは・・・。」

その言葉に俺はもう乾いた笑いしか出せなかった。

決闘開始まで残り4時間

殺人鬼の悩みの種が増えました（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

難しい。難しすぎる。どうやって描写すればいいんだ。そんなことを考えながら書いておりました。今回短いのは最初で頭がオーバーヒートしてしまったからです。次からは戦闘・・・かな？

あと性描写（？）とかもうまく書けるようにしておきたいなあ。な
どと考えております。

殺人鬼の決闘そして加速する物語（前書き）

「……勝手に決めてんじゃねえよ。」

b y 響夜

今回長いです。恐らく過去最高の長さです。

殺人鬼の決闘そして加速する物語

「・・・・・・・・。」

人混みのなかを歩かないというのは実に素晴らしい。お陰で殺人衝動も何時もより控え目だ。

まあ、それ以外の問題があるんだが・・。

俺は左右にいる二人を一瞥する。

「どうしたのじゃ？」

「・・・・？」

「いや、何でも。」

首を傾げる二人に俺はそう言っただけを吐く。

さて、どうするか。決闘のこともあるがその後が一番の問題だ。どうやって逃げるかを考えておかないといけないからな。

「・・・・・・・・やってられん。」

そう呟きながら歩いて行くと何時もの訓練場の前でエルザが立っていた。

「あ、おはようございます。」

「ああ。」

「おはようなのじゃ。」

「・・・おはよう。」

笑顔で挨拶をしてくるエルザに俺達はそれぞれ挨拶をする。

「どうしたんだ。」

待つなら訓練場の中でもいいはずだが・・・。

「あ、いえ。ガルラが暴れるのに訓練場では狭いと言ってあの中に・・・。」

そう言つてエルザが見るのは何やらドーム状に結界が張られた訓練場より一回りでかい建物。

「ギルドと軍が共同で管理している中で一番大きい闘技場ですよ。」

軍、というのは国の為に戦っているものだ。地球とそう変わらないな。ただ軍は国の為に戦っていることに誇りを持ち自分のことしか考えていないギルドを嫌っている奴が多いらしい。エルザも軍の一員だがギルドのことを悪くは思っていない。むしろ友好的だ。

「私はそれを伝えようと思って待ってたんですよ。」

野郎勝手なことを・・・。

「お陰で訓練していた方がぜひとも・・・見学しようとしてます。」

「・・・・・・・・マジでぶっ殺そうかな。」

エルザの言葉で俺の殺意が増す。三人は俺の表情を見て苦笑する。
俺今どんな顔してるんだ？

「・・・なら早く行くぞ。これ以上見学人が増えるとか言ったら洒落にならねえ。」

俺は三人に言うとも早くも重い足取りでガルラのいる闘技場へと向かって行った。

「・・・・・・・・・・。」

闘技場、と言うよりも外と言った方がピッタリだろう。より実戦に近いようにするためかなには植林がされた森のような景色が広がっている。他にも様々な場所が造られていたがあいつが何故こんな場所を選んだのかはよく分らない。・・・いや、見学人から見えないから俺には中々良い場所だが。

その中を中央に向かって歩いて行くと直径が200m程の石造りの円形の舞台そこにガルラがいた。フィールド両手に無骨な巨斧を持ち目を瞑っている。

「・・・・来たか。」

まるで嵐の前の静けさとも言うべき声色。その決して大きくない声は嫌に響いた。そして感じる巨大な殺意の塊。ガルラは両目を開けると巨斧を片手で持ち上げ俺に突き付ける。

「ここへ来い。」

「……………」

・・・本気か。

俺は舞台上がり奴の目の前で止まる。

「よくぞ応じてくれた。」

この前からは考えられないほどの真剣な表情。その顔は正しく武人の表情。^{かお}面白い。

「いや、俺の方こそあんたみてえな奴と戦えるんだ。感謝するのは俺の方だ。」

俺の言葉にガルラはニヤリと不敵に笑った。

「ならば共に全力で戦おう!!」

ガルラは巨斧を振り上げる。

「ああ、俺を楽しませてくれよオ!!」

俺は全身に魔力を巡らせ奴へと駆けた。

一言で言うなら嵐。それが響夜がガルラの攻撃を見て感じたことだった。荒れ狂う嵐のように周囲にある物を例外なく破壊する。その中を響夜は前へ進んでいく。後ろに下がってはいけない。何故かは分からない。ただ本能が下がることを拒否している。

「オオオツ——！！」

ガルラが振り下ろした巨斧による一撃。それは響夜を確実に捉え粉砕する筈だった一撃。

「だ・・・ラア！！」

その一撃を響夜は自分魔力を纏った拳で無理矢理軌道を変える。弾き飛ばされた斧は響夜の傍の地面を砕き衝撃は響夜を巻き込んで周囲にあるものを吹き飛ばす。

「（・・・何本かやられたな。）」

響夜は軽く舌打ちをする。だがそれも直ぐに治っていく。ガルラは僅かに眉を動かすが特に何か言う気はないらしく再び構える。

「（・・・気付いたか。）」

自身の魔力を持たない響夜だけが持つ異常性。悪魔の心臓グリモア・ハートは常に稼働し決して所有者を殺させない地獄の神器。

そして再び響くのは破壊音と互いの得物ぶきが交り合う音。それは響く毎に闘技場を破壊し嵐が通ったかの如き跡が残るのみ。

それはたった二人の人間によって起こされた破壊。そしてその二人の均衡は揺らいでいた。

「がっ・・・！？」

振り下ろした巨斧の一撃を囿にし響夜の腹へ強烈な一撃放つガルラ。そこでその手を止めることなくガルラは神速ともいえる一撃を

次々と放っていく。響夜はその連撃を紙一重で躲していく。

周囲の目が多少とはいえあるここでは響夜は想像形成を使うことは出来ない。頼れるのはこの世界の魔法と予め創っておいた武器そして――

「形無き略奪者――ジェロシニア!!」

響夜の現在最強たる武器――魔剣の名を呼ぶ。

「!?!」

それは一瞬。ガルラが響夜へその巨斧を振り下ろそうとした瞬間響夜の胸から紅蓮の如き輝きを放った槍が放たれる。

その一撃はガルラを確実に貫ける威力をもったモノ。故に食らえばただでは済まない。

「ハアッ――!!!!」

振り下ろしていた巨斧の軌道を変え槍へぶつける。そして巻き起こる爆風。それは両者を飲み込み爆発した。

「……それがお前の切り札か。」

「ああ。これが俺の切り札だ。」

響夜は形無き略奪者ジェロシニアを薄く霧状に展開する。

「……む?」

「これでもう俺達の戦いは誰にも見られない。」

響夜の背後の空間が揺らぐ。

「さあ、存分に戦え。我が軍勢^{レギオン}よ。」

その空間から現れるのは無数の銃口。ガルラはこの武器を知らないだろう。当たり前だこの世界に科学など無いに等しいのだから。

「目の前にある障害を汝等の手によって灰塵へ変えよ。」

そして銃口が赤く染まっていく。放たれるのは無数の呪いが掛けられた弾丸。それは一切の抵抗を許さずに蹂躪していく。

「暴風に潜むし獅子の牙^{シュトゥルムヴァイント・シュトースツァーン}!!」

「閃光纏いし爆音^{ブリッツ・レルム}!!」

俺の詠唱と同時に魔法は発動しガルラもまたこれを危険と判断したのだろうその巨斧に光が集まる。そして銃弾が放たれた瞬間ガルラは地面にその巨斧を叩きつける。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

今までの比で無い程の爆発音。そして世界が揺れたかのような衝撃。それは霧の外にいる見学人達にも及んでいた。

「……………」

「凄いですね。」

「・・・うん。」

それは当然三人も感じていた。目の前にある霧とそこから放たれる魔力によって透視の魔法も狂わされ中を覗き見ることは許されなく何が起きているのかは見当もつかなかった。

「・・・？マオ？」

「どうしたんですか？」

先程から黙り込み他の見学人がいる席を見ているマオに二人は首を傾げ尋ねる。

「・・・え？あつ、ううん。何でもないのじゃ！」

マオは二人の声に慌てて答える。二人はそれに首を傾げるが本人が何でもないと言うのならと霧へと目を向けた。

「・・・。。。」

その中をマオは只一人何かに耐えるように目を伏せていた。

「死に晒せえ！！！！」

響夜は空中に断頭台ギロチンの刃を展開する。その数四十。その全てが敵を斬り裂かんと殺意を剥き出しにして襲いかかる。

「笑止！！」

その牙をガルラは手に持つ巨斧で薙ぎ払う。その斧は刃を光輝かせ一撃の下次々に刃を砕いていく。

「神殺しの鎖グレイブニル！！」

響夜の（あるじ）の声に応えるように神器である魔狼を縛る鎖はガルラへと疾走する。

「神器だと！？」

その内包されている魔力を感じたガルラは避けることに集中する。襲いかかる鎖を躲し、弾く。だがそれは縛られる時を遅らせるだけ次第に鎖は獲物を縛り付ける。

「——ッ」

ガルラは拘束されて尚鎖を破壊しようともがく。

「無駄だ。」
「¥」

神器は神器でしか破壊できない。それは決して覆されないこの世界の真理。響夜はガルラへとグロツクの照準を合わせる。

「死ねや。」
「」

その言葉と共に放たれる銃弾。だが——

「死ぬのはお前だろ。」

ガルラの言葉と共に響夜の真上に七つの光の輪が出現する。

「七なな天てん光こう輪りん」

直後、光輪は響夜へと飛来する。

「ちい——！！！」

響夜はそれに気付くと照準を光輪へと合わせ放つ。僅かだが意識が逸れたことによって神殺しの鎖グレイブニルの拘束は緩む。その一瞬を逃さずにガルラは拘束から抜け出し響夜へと疾走する。

「舐めるんじゃないねえ！！！」

響夜は空間からパンツァーファウストを呼び出しガルラへと放つ。それは目の前の地面へと直撃しガルラは爆風に飲み込まれる前にそこから飛び退く。

そして響夜もまた目の前に迫っていた光輪の幾つかを破壊すると霧状に展開していた魔剣を大剣へと変え残りの光輪を破壊する。

「——！！！」

ぶつかりあう巨斧と大剣。最早言葉を出す暇すらない。ただ目の前の敵を破壊する。ふたつの力による衝撃で既に周囲は無残な姿へとなり果てていた。

「づ……オオオツ——！！！」

振り下ろされた一撃を響夜は大剣を盾代わりにすることで防ぐ。そのまま響夜は巨斧を押し返した。それによってガルラは仰け反り響夜はそこへ大剣を振り下ろす。

「汝が纏いし聖なる羽衣。それを持ちて我が身を護る盾となれ！」

ガルラの身体が淡く光り、大剣がぶつかる。

硬い。それが響夜が感じたことだった。まるでコンクリートの壁を鉄パイプで殴ったかのような衝撃が走り手が僅かに痺れる。

「ハアッ！！」

振り下ろされる右腕。響夜は衝撃によつてそれを躲せず殴り飛ばされた。

「があ！！」

吹き飛ばされた響夜はすぐさま起き上り体制を整える。両社はすでに息も絶え絶えになり足元もフラフラと覚束無くなっている。

$$\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \\ \diagdown \\ \diagup \\ \hline \end{array} \right]$$
「ふ、
か
か
か」

「は は は は は は は は は は……!!」

笑い。この状況になろうとも二人は戦いを楽しんでいる。

「よう、強いじゃねえか。」

「そう言う貴様こそ。中々強いな。これまでお前の噂を何故聞かなかったのか不思議に思える。」

笑いあう二人は。既にもう殆ど体力は残っていない。なら――

「一撃で終わらせてやるよ。」

「倒れるのは貴様だな。」

互いの武器に集中する魔力。それは大気を震わせ見学人達も目を剥かせた。

「死ね。」

「お前がな。」

互いに振り下ろされる一撃。正しく自らの全て込めた一撃。その結果は――

二人を覆っていた霧が消える少し前。三人にも動きがあった。

「……………」

「マオ、どうしたの？」

「何でもないのじゃ。…………少し忘れ物してしまったから一回宿に戻るぞ。」

問いかけるハクにマオは笑って言い席を立ちあがった。その表情には僅かに影が差していたがハクが付いていくと言うと。

「大丈夫。」

と言い。闘技場から出ていった。

「……………」

誰もいない通路。そこでマオは二人がいる場所を見る。

「……それで、何の用じゃ。」

マオがそう言う通路の陰から一人の男が現れる。

「お探しました。魔王様。」

その男は一礼するとマオを見る。上等な騎士服を着その姿はまさしく忠義ある騎士の姿だった。

「……………用件は？」

「城にお戻りください。」

目の前の騎士の言葉にマオは溜息を吐く。

「断る。我はあのような退屈な場所にいたくはないのじゃ。」

マオはそれを断るが騎士も引く気などない。

「聖王が勇者を引き連れ進攻してきます。」

その言葉にマオは驚愕を露わにした。

「なんじゃと！？そのようなことは聞いておらぬぞ！！」

「今回のことは内密に進めてきたようで、異界の地の者を呼び出したようです。」

騎士はただ淡々と真実だけを告げていく。だがその瞳は事の重大さを伝えている。

「魔王様。城へお戻りください。我らには魔王様が必要なのです。」

その言葉にマオは俯く。だがやがて意を決し――

「分かった。」

同時刻、ぶつかりあった二つの力も終わりを見せた。

「……化け物じゃねえの？」

「……その歳でここまでの力を持つお前に言われたくはないな。」

膝を着き荒い息で話す二人。マオから魔力供給のある響夜は魔力で無理矢理戦うことは出来るが肉体はほぼ限界。ガルラもまた気力で戦い抜くことは出来るだろうが魔力はほぼ無いと言っても過言でない。

「……引き分け……いや、」

「決着は持ち越しつつうことで……。」

響夜とガルラは互いを見る。考えは同じだった。

引き分けなど認めない。

ただ互いに目の前にいる男と引き分けたと認めたくないだけの子供だ。だがそれでも構わなかった。再びこうして戦えるのなら……。

「疲れちゃったよ。」

「全くだ。だが……いいのか？」

ガルラの言っている言葉の意味が分からず響夜は首を傾げた。

「俺達が認めないとはいえお前は俺と互角に戦った男だぞ？」

その言葉に響夜の頬が引き攣る。

「見るがいい。見学人はお前に興味津津だ。」

響夜は魔剣を霧状から大剣へと変えてしまったことを思い出す。

それはつまり外界にいる見学人からは丸見えになったということだ。
。。。

「逃げるなら今のうちだぞ。」

その言葉が終わる前に響夜は走り出していた。動かぬ体に鞭を打ち必死に走っていく。それをみたガルラは苦笑を浮かべていた。

「。。。。。。まだまだ若いな。」

「。。。。ええ、彼は若いのにあれだけの實力を持っている。」

何時の間に隣に移動していたのかエルザが立っていた。

「まさかあれほどの剣。。。そして神器も持っているとは思わなかったぞ?」

「ええ、私も初めて見た時は驚きました。」

エルザは笑う。

「まあ、今は奴が見学人に捕まらないのを祈るか。」

二人は逃げて行った青年の姿を思い出し苦笑した。

「ああ！鬱陶しい!!」

響夜は今屋根の上を昇り走っていた。既に闘技場からは随分離れて

いた。流石にもう追ってこないと判断した響夜は速度を下げる。

「……………しつこすぎだ。」

空は曇り、小雨が降っていた。

『……………響夜。』

宿へと足を向けていた響夜に声が届く。

「……………マオか。どうした？」

マオとの契約の証。それにはマオとの念話の機能もあった。

『……………響夜、あの……………』

何というか何時もより元気がない。

そう感じた響夜はマオの名前を呼ぶ。

「マオ？」

『……………今まで楽しかったのじゃ。響夜と会って、……………その色々あったけど一緒に依頼を受けたり、ロシエルも交えて話して、ハクとも友達になれて……………。』

たくさん笑って、毎日が夢のような日々だった。凄く楽しくて凄く充実してた。』

マオは少しまるで泣くのを我慢しているかのような声色になっている。

響夜はそれを聞きながら考えていた。

「……………」

それではまるで、いなくなってしまうかのようなわけではないか。

『……………何より響夜と一緒にいる時間はとても楽しかったのじゃ。』

「おい、マオ。」

『……………今日の約束は忘れて……………今まで楽しかったよ。』

「おい、聞いているのか！マオ！！」

自然と響夜の走る速度は上がっていた。

『……………ハクにもごめんって言うておいて。』

「マオ！！」

『さようなら、響夜。』

気が付けばもう響夜は宿の前に着いていた。響夜は宿の扉を開けると返事もせずに借りていた宿の部屋へと飛び込む。

「……………」

何もない部屋。置いてあるのは最初からこの部屋にあったベッドと椅子、そして机。

響夜は部屋に入ると部屋を見回す。見れば机の上に一枚の紙が置

いてあつた。

「・・・・・・・・・・。」

響夜はその手紙を手取る。

書かれているのは謝罪の文と今までのこと。楽しかったという言葉とごめんという言葉。

その文面に響夜は俯き手紙を握りつぶしていた。

「・・・・・・・・・・馬鹿野郎が。」

外はただ暗雲と土砂降りの雨が広がっているだけだった。

殺人鬼の決闘そして加速する物語（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

はい、今回凄いい長いです。あと今までの文でこれからグレイプニルも神殺しの鎖と神器等の名前も統一しようと思います。

殺人鬼は勝ち逃げなど許さない（前書き）

「ストーリーカーも不審者も人として結構終わってるよな。殺人鬼？・・・
・普通だろ。」

by 響夜

殺人鬼は勝ち逃げなど許さない

「…………鬱陶しい。」

俺は目の前にいたゴブリンの頭をデザートイーグルで吹き飛ばす。
ゴブリンは短く断末魔の叫びを上げると倒れ地面を赤く染めた。

「…………依頼は完了か。」

「…………キョーヤ。」

俺がゴブリンの死体を見ているとハクがやって来る。どうやら向こうも依頼が終わったらしい。
それを確認すると俺達は依頼完了の証を剥ぎ取り街へと戻って行った。

マオがいなくなって既に四日が経とうとしている。最初はハクも泣き出しそうになるしエルザも混乱していて落ち着かせるのが大変だった。今では落ち着いているが必死にマオの居場所を探そうとしている。

…………そして俺は

「で？どうじゃったんじゃ？」

ガルラ
馬鹿に誘拐されている。

「どうもこうもねえよ。今までと同じようにはいかねえんだから苦
勞してる。」

マオがいなくなった日。その後マオから供給されていた魔力がなくな
った。証自体は消えていないがもう力も感じず今の俺は魔力のな
いちょっと強い人間だ。この世界だと魔力が無いのは致命的なんだ
がな。

「まあそつちもだが、連れの方はどうなった。」

また、それが。

俺は小さく舌打ちをして言う。

「あいつが自分で望んで消えたんだ。俺が引きとめる理由もないだ
ろう。」

「まあそつだが。今まであれだけ楽しんで突然消えるのも妙だと思
うぞ?」

考えられるとしたらあの不審者騎士だがそしたらあいつは魔王の関
係者か何かということになる。

「・・・何にしてもあいつの場所が分からねえんだから仕方ねえ
だろ。」

まあ、嘘は言つてねえ。実際あいつが今何処にいるのかは分からね
えんだから。

「お前がそついうなら俺は何も言わないがな。」

「そうかよ。じゃあな俺はもう行くぞ。」

俺は席を立つとガルラに背を向けて歩き出す。
まさかあいつにまで言われるとは……。

通りに出た俺は今宿へと向かっている。宿に戻ってもロシエルが煩
いがあそこしか帰る場所が無いのだからしょうがない。……
俺が家無き子のように思えてくるから不思議だ。
いや、でもあいつしつこいだろっからな……。

「……………どうすっかな。」

……………金は問題ない。だが宿に帰ればロシエルからマオのことに
ついて聞かれる。まじでどうするか……。

「……………あ？」

俺はふと後ろを振り向く。

……………なるほど。

「前世はストーカーかなんかなのかね。」

俺は思わずそう呟いて前を向く。

ああ、丁度いいところに獲物が来やがった。

俺は思わず嗤いそうになるのを抑える。お客様には丁重な御持て成
しをしなくては……。

「ああ、なら——。」

最上級の御持て成しをしようか。
俺は宿へ向けていた足を街の門へ向けた。

街の外に出た俺は今街道を逸れ森の中を歩いている。

「・・・・・・・・。」

街からは大分離れたか……。俺はそこで足を止め後ろを振り返る。

「よう、ストーカー騎士。追い掛けるなら女の尻にでもしとけよ。」

俺は木の後ろに隠れているであろう男に話しかける。男もバレているという事には気付いていたのだろう少しの間をおき出してくる。

「・・・・・・・・。」

無言で俺を睨み付け男は腰に下げてある剣を抜く。

「・・・随分嫌われたもんだ。」

俺は騎士の様子を見て肩を竦める。まったく、人の話を聞かない奴らが多すぎる。

「——死ね。」

男の姿がぶれ一瞬で俺の目の前に現れる。

速い！？

俺はスキルである魔神の観察眼を発動させその攻撃を躲していく。
鬼神の武勇伝と魔神の観察眼は魔力が無くとも発動できる。恐らく
これは俺の元々の特技と能力だからだろう。

「デメエが死ね。」

俺は手に持ったナイフを騎士の眉間へと投げる。

「——ッ」

その攻撃を騎士は仰向きに倒れ込むようにして躲す。その隙に俺は
騎士の首目掛けてナイフを投げる。そのナイフはあと僅かというところ
で見えない壁のような物に弾かれた。

「なら——」

俺は懷からデザートイーグルを取り出し銃口を向ける。弾も残り少ない
がケチ臭いことは言ってられねえ。

「こいつでどうだ！！」

俺は騎士に向けその引金を引く放たれた銃弾を追うように発砲音が
鳴る。だが続く断末魔は聞こえず血飛沫も上がらない。

「……終わりだ。」

俺の背後で剣を振り下ろそうとしている騎士。その頬には浅く傷がつ
っていた。

「っ！？くそ！！」

俺は咄嗟にナイフで剣を防ごうとするがナイフは一瞬で両断され――俺の身体は真つ二つに切り裂かれた。血飛沫を上げながら倒れる俺が見たのは此方に手を向け魔力をためている騎士の姿だった。

「消えろ。」

「……形無き略奪者」
ジェロシニア

魔力が無いことも忘れ思わず俺は魔剣の名を呼んだ。その瞬間光が俺を飲み込んだ。

私は丁度、喫茶店の中にいた。周りからは相変わらずの羨望や嫉妬が入り混じった視線。

「……はあ。」

思わず溜息を吐く。ヴァルキュリア戦乙女と呼ばれていようと私だって一応人間なのだ疲れだっ感じる。

「……マオちゃん大丈夫かな。」

私はあの日のことを思い出す。もしあそこで私やハクちゃんと一緒に着いていけば……。そんなありえないifの物語を考えてしまう。私は自分に叱咤する。今更そんなことを考えてもしょうがないのだ。

「・・・・・・・・・・」

よく考えれば三人は私を普通の視線で見ている。世に名が広まれば皆私のことを普通の人としては見てくれなくなる。覚悟していたけれどやはり少し寂しい。ガルラや他のクラウン達の有名人は私と対等に接してくれるけど正直他の一般の人は私のことを対等な目で見てはくれなかった。

「そう考えると友達なんてあの子達だけかも・・・・。」

・・・約一名捻くれているけれど。そんなことを考えて思わずクスリと笑う。

「よし、マオちゃんを探さないで。」

私が席を立とうとすると丁度通りに見覚えのある白髪の青年――
響夜君がいる。

噂をすればなんとやら・・・。

私は青年から話を聞こうと会計を済まし店を出た。

「とはいえ・・・・どこにいったのかな。」

青年を追い掛けたは良いけど見失ってしまった。門を出て行ったのは見えたけど・・・・。

「魔物に会ったら大変なのに・・・。」

響夜君——本人は君を付けるなと言うけど——はマオちゃんから魔力を供給してもらっていると言っていた。今は魔力の供給がないと聞いていたのに厄介な魔物に出会ったらどうするつもりなのか。．．．これはマオちゃんが帰ってきたらハクちゃんも入れてお説教しなくては。

「．．．でも本当に何処だろう?」

引き返そうにもやはり心配だし．．．でも何処にいるか分からないし．．．。

「．．．．．どうしよう。」

私は頭を悩ませる。．．．本当にどうしよう。そんなことを考える
と森の中から突然巨大な
魔力の反応を感じ取った。そして続くもう一つの巨大な魔力。

「．．．響夜君!？」

思わず私は叫んでいた。彼は魔力が無いと言っていたのに．．．。
私はその魔力の感じた場所へと向かった。

「．．．．．くつ。」

早く．．．早く．．．。

私は歯噛みする。コンマ一秒でも遅く感じてしまう。そんな感情を抱きながらも私は全力で駆けて行った。

俺は目の前に広がっていた光景に茫然とした。

「……………どういうことだ。」

俺に放たれた光は目の前に広がっている円状の盾にそれ以上の侵攻を阻まれていた。

何よりもその盾は……………

「……………形無き略奪者^{ジェロジャー}」

咄嗟に名前を呼んだとはいえ魔力のない俺が出現させられる訳がない。なら何故……………。

「……………!?」

驚愕から落ち着いてきていた俺に襲いかかる激痛。くそ、そういや切り裂かれたんだっとな。

「……………切り裂かれた?」

おかしい。どうして傷が塞がらない? 悪魔^{グリモア・ハート}の心臓は俺への魔力供給が無くとも勝手に動いていた。魔剣が出てきたのと関係してるのか? ……まさか。

「……………っ。」

俺がある結論を出そうとしていると激痛と共に視界がぼやける。……………くそ、思考が回らねえ。
俺が意識を失いかけているからか、形無き略奪者^{ジェロジャー}の形も朧気になっ
ていく。

「――」

まずい。そう思いながらも体はその意思に反し俺はうつ伏せに倒れる。徐々に地面には赤い血溜りができていく。

「響夜君!!」

・・・俺は地面に倒れ薄れゆく意識のなかそんな声を聞いた気がした。

・・・目が覚めた俺の目に映る身に覚えのある天井。どうやら自室にいるようだ。俺は周囲に視線を移す。

「・・・・・・・・。」

目が覚めたら知り合いが斧を振りかぶってるってどう思います？

「死ねええええええええええい!!!!!!」

「ふざけんなあああああああああああ!!!!!!」

俺は起き上るとすぐさまベッドから抜け出す。そして振り落とされた斧。見事ベッドは破壊されそこにはベッドと呼べるような物は無くなっていた。

「・・・・・・・・それだけ元気なら問題あるまい。」

「デメエに問題がありまくりだボケエ!!!!!!」

やりきったような顔で頷くガルラを俺は蹴り飛ばす。普通病人に斧を振り下ろす奴がいるか！

「どうしたの（んですか）！？」

その音を聞きつけハクとエルザがドアを開けて入って来る。ハクがここまで心配していることに少し驚いた。

俺は無言で立ち上がっているガルラを指差す。二人はそれを見ると笑顔で魔法を放つ。顔は笑っているのに目が笑ってねえ。てか此処室内なんだが……。

「……おい、落ち着けお前ら。」

俺はガルラを蹴っている二人に若干気圧されながらも言う。二人はまだ多少の不満はあるのか渋々といった様子で離れる。

「……怪我、大丈夫？」

ハクに言われ俺は自分の体に目を向ける。傷はもう完治している。どうやら悪魔の心臓が今度は機能しているようだ。

「ああ、大丈夫だ。……誰が俺を助けたんだ？」

俺はその人物について聞く。もし他人だったら色々と面倒臭いことになる。

「それは私です。貴方と別の魔力を感じたので……。」

「そこにもう一人騎士っぽい奴はいなかったか？」

その言葉にエルザは少しの間をおいて答える。

「・・・いしましたが、逃げられました。幸いあの人物の魔力は覚え
ましたのである程度の追跡は可能です。」

魔力の追跡とか・・・。俺達三人は驚愕に満ち溢れた目でエルザを
見る。

「・・・私一応クラウンの一人なんですけど。」

部屋の隅でエルザは体育座りをし「の」の字を書き出す。俺達はそ
んなエルザを視界に入れないよう体をずらして話しあう。

「その騎士・・・どうしたの？」

「あの似非騎士。もしかしたらマオの関係者かもな。」

最初はガルラやエルザの可能性もあったがエルザはそんなことをす
る奴ではない。ガルラも考えていたが決闘が終わった後に戦いを挑
むのもおかしい。殺したら決着もつかない。

「ホント!？」

珍しくハクが声を大にして言う。

「ああ。と言っても多分だが・・・。」

「で、お前は行くのか？」

ガルラはニヤニヤしながら俺に聞く。うぜえ。

「……行くわけねえだろ。」

俺は二人に背を向けドアに手をかける。

「……ほう。」

「……勝てないから逃げるのか（んですね）。」「

背後の二人の声に俺は後ろを向く。

「ああ？」

そこにいるのは何時の間に復歸したのかエルザとガルラ。

「勝ち逃げされてもしょうがないですよね？」

「魔力が無いと何も出来ないからな？」

分かりやすい程の挑発。

「勝手に言ってる。」

俺はそう言っただアノブを回し下へと降りて行く。

「響夜さん！怪我は大丈夫なんですか？」

また面倒臭いのが。俺は心配してくるロシエルに適当に返事をし席へと向かう。

「何でここにいんだ爺？」

のんびりと飯を食っている爺ギルドマスターに話しかける。此奴はこんな所には来ねえ筈だが。

「主に用がの。」

そう言つて渡されるのは一枚の依頼書。俺は爺の顔を一度見ると依頼書に目を通す。

「……………」

「これは立派な依頼。それに主当ての依頼だから何も心配することなどない。好きなだけやつてくるといい。」

その言葉に俺が爺を見ると爺は不敵な笑みを浮かべる。

「…………主も男なら勝ち逃げなど許せんじゃろ？」

「どうなつても知らねえぞ？」

「クソ餓鬼の世話位どうということはないわ。」

爺は豪快に笑う。見ればロシエルもその小悪魔っぽい笑みを浮かべている。

「…………きよーや。」

俺達が笑っているとハクが降りて来た。その姿からは沈んだ様子が感じられる。

「丁度いいところに来たな。」

俺はそう言っただけで先程渡された依頼書を見せる。

「案内はエルザにでもさせる。準備しとけ。」

その依頼の内容を見たハクは先程から一転その顔を輝かせる。

「・・・うん！」

急いで準備をしに行くハクを見ながらも一度爺を見る。

「悪かったな。あんたに責任押しつけちゃって。」

「構わんよ。俺とガルラ達の権限を使えば問題ない。どうせ主もそこを気にしていると思ってたしの。」

「まさか、俺はこのまま放つところだと思ってたしな。」

「そういうことにしておくかのう。」

俺の言葉に爺は愉快そうに笑う。そんなことをしていると既にハクが降りてきていた。早いなあ。どうやらエルザも連れて来たらしく早く早くと催促している。

「んじゃ行ってくるわ。」

俺は隣に座っている爺にそう言っただけでハク達の下へと歩く。

そんじゃ、ちつとばかり賤をしに行きますかね。

依頼書

依頼先 キョウヤ・ナルカミ

・マオ・オメテオトル・ヘーラーとの再会
・報酬金 ———

依頼主 ロシエル・ブレンダー

殺人鬼は勝ち逃げなど許さない（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

ようやくてすが終わりの四日五日ぶりの投稿です。もうすぐ一部・一章？ももうすぐ終わりますので頑張りたいと思います。クリスマスまでには・・・なんとか。

殺人鬼達の殴りこみ（前書き）

「想像・・・形成・・・」

b y 響夜

殺人鬼達の殴りこみ

「・・・やってられねえ」

俺はそう愚痴る。だがそれも仕方ないだろう。

「少ししつこくありませんか」

街を出てから馬車で移動しているのだが――

「・・・あの野盗殺して良い？」

そう先程からずっと馬車の近くで野盗が何か叫んでいるのだ。よくこの馬車襲おうと思ったな。俺なら絶対襲いたくねえよ。

「・・・あゝ、何匹か残しておけよ？」

少し実験したいしな。丁度いいといえば丁度いいか。

「・・・ん」

ハクは一度こくりと頷くと馬車の外に出る。

「そっぴや戦う時どうすんだ？」

俺はふと疑問に思っていたことを声に出す。いや、気にならないか？見た目獣人だがあいつは白銀狼だぞ？

俺は疑問を解消する為に馬車の外を見る。

「……こんな美術館は嫌だな」

外を見た俺は苦笑する。野盗も可哀そうに。そこには何人もの男の水像があつた。脚が砕け散つた物、逃げ出そうとしている物と様々だ。俺的にはもう少し赤の染料と生々しさが欲しいな……。

俺はそれを確認すると馬車から降りる。ハクは人間の姿をしたままだ。

「……きよーや」

「気分の方はどうだ？」

「少しだけ……満足」

ハクはそう言うとき残りの奴らを見る。全員脚を凍らされ動くことが出来ないようだ。俺達のことを化け物でも見るかのような目で見ている。失礼な奴らだなおい。

「あれ、どうするの？」

「ん？……まあ実験だな」

グリモア・ハート

悪魔の心臓のこともあるしな。俺はハクにそう言つとまだ生きている残りの男達に近寄る。

「ひっ！く、来るんじゃない！ええ！！」

「酷くないか？俺だつて傷付くんだぞ？」

まあ、別に実験動物に何言われても大体のことは平気だけだよ。

「逃がしてやつてもいいぞ?」

俺の言葉に男達は顔を上げる。どんな奴だつて死にたいとは思わないだろう。そう思う奴は自分じゃ何も出来ない屑だ。

「俺が今からお前らにあることをする。それでもお前達が一人でも正気を保てたら全員の傷を治して逃がしてやるよ」

男達は若干怯えながらも頷く。よし此奴らは承諾した……。

「……それじゃ始めようか」

自分でも嗤うのを抑えることが出来ない。此奴らは自分達が何をしたのか分かっていない。ああ、そこまで酷いことじゃない。ただ――

「……壊してやるだけだからよ」

「おいおいおい、逃げんなよ」

俺は走って逃げている男の頭を掴み地面に叩きつける。何か呻くがそんなもんは関係ない。

「手間掛けさせるんじゃないか」

俺は手に持ったナイフを男に突き付ける。

「そんじゃ・・・派手にぶちまけろや」

瞬間、男の体が膨れ上がり爆発した。

「・・・微妙」

俺は降り注ぐ血の雨と臓器、肉塊を見ながら呟く。門を開ける時に少しはしゃぎ過ぎたかこの程度では満足出来ない。

「そついや今のが最後か」

俺は来た道を振り返る。そこには頭が、腕が、脚が、臓器が、血痕があつた。それらの男達の死体が来た道を教える道標の様になっていた。

「・・・今度どこかで暴れるか」

俺はそう考えると血まみれになつた服と体を拭きながら二人の下へ戻る。少し遊びすぎたな。

「少し時間をかけ過ぎですよ」

馬車に戻つた俺への一言は予想通りのものだった。ハクも何も言わないがその目がエルザと同じことを伝えてきている。

「悪かつた」

俺は一言言つと馬車に乗る。なんというか・・・

「意外だな」

「何がですか？」

「お前みたいな真面目な奴はてつきり何か言つと思つたんだが」

俺がそう言つとエルザはきょとし、苦笑した。

「クラウンにもそういう特殊な人はいますからね。むしろそういう人の集りのような物ですから」

「そうかよ」

とんでもないことを聞いた気がするが気のせいだろう。

「・・・マオの臭い」

俺達がそんなことを言っているとハクがぼつりと呟く。

「・・・そうか」

俺達はその言葉を聞くと同時に馬車から降りる。

「でも、すぐそこで消えてる」

「あの時の騎士の魔力もここで消えてますね。・・・いえ、これは別の空間に入って行きましたかね」

ハクの言葉にエルザも同意する。

「・・・星の墓場ねえ」

俺達がいた街からは飛ばして三日程かかる距離。まあ今回は急ぎだから馬にも無理させまくったが。
俺達の目の前には雪原と幾つもの巨大な結晶が広がっている。

「・・・・・・・・どうするの？」

「エルザ、お前何とか出来ねえの？」

俺の言葉にエルザは思案する。

「一応出来るには出来ますが・・・・。強引に決じ開けるので危険ですよ？」

「構わねえ」

俺の言葉に同意するようにハクも頷く。それを見たエルザは腰に帯剣している騎士剣を抜く。

「雷鳴轟かす勝利の咆哮」
フリスト・ヒルド

その言葉と同時に響く雷鳴。エルザは蒼い雷を纏い剣を構えた。その姿からは今迄にない程の魔力を感じる。

「――」

神速。視認することの出来ない程の速度でエルザは剣を振る。その

一撃は周囲にあつた結晶を粉碎し辺り一帯を陥没させた。

「——っ」

その衝撃に俺は目を瞑る。どれだけの破壊力だったのかは想像に難くない。俺は改めてエルザがどれほどの手加減をしているのかを悟った。戦えば恐らく俺はエルザに一太刀浴びせる前に斬り伏せられるだろう。

「・・・・・・・・・・。」

俺達が目を開けるとそこには変わり果てた大地と罅割れ裂けた黒い空間。

「何、やったの？」

ハクも疑問に思ったのだろうエルザに問い掛ける。

「いえ、少しばかり空間を切り裂いただけです」

「・・・・・・・・・・。」

簡単に言うがそれってありえないだろ。それともクラウンは皆そんなことが出来るのか？俺達はその言葉があまりにも現実離れしている目の前の現象を信じる事が出来ず茫然としていた。

「さ、行きましょう」

俺達はエルザの言葉に躊躇いながらも頷くとその後を追って黒い空間の中へと入って行く。

「……すごい」

空間の中は外とはまるで違う世界だった。夜空が広がり星が輝いている。地面はまるで水の上に立っているようで空から星が落ちてくる度に水面が揺れる様に波紋が広がる。

「……ここは何処なんだ？」

俺は前にいるエルザに問い掛ける。

「空の魔法と似ていますが恐らく此処は一種の別世界ですね。魔法と違い自然現象で此処は生まれたんだと思いますよ」

世界つてのはとんでもない存在らしい。この世界ともいえる規模の空間を創るとは……。

「それで？行くんでしょう」

俺達の先、そこには城があった。最も巨大であるために城壁だけでとんでもなくでかいんだがな。

「ああ、どれだけ問題を起こそうがお前らの責任になるだけだからな」

「……お手柔らかにお願いします」

俺の言葉にエルザが苦笑する。

「どうやって入るの？」

「決まってる」

下手な小細工は必要ないただ

「障害は破壊するだけだ」

俺の言葉に二人が苦笑する。だが二人とも悪い気はしないらしく笑顔だ。

「・・・任せて」

ハクは聳え立つ城壁に手を向ける。

「凍てつく氷河よ その牙をもって獲物を蹂躪せよ」

荒ぶる魔力の奔流はやがて巨大な氷柱へと変わる。

「穿て」

放たれる氷柱。その数は実に三十を超え城壁を破壊せんとその牙を？く。

——ドガアアアン！！！！

その氷柱は城壁を易く破壊し城へと攻め込んだ。

「やるねえ」

破壊された城壁を見て俺は口笛を吹く。

「そんじゃ、行きますか」

俺達はそう言っていると騒がしくなってきた城へと歩いて行った。

「ハハハこりゃあ良いなおい!!」

闇に染まった城の廊下。今そこは戦場と化していた。

「おらあ、次はどうだア!?!」

その戦場の中を響夜は走っていた。

「賊があ!」

近付いてくる魔族の一人。響夜はその魔族に手を向ける。

「断頭台^{ギロチン}」

次の瞬間現れた断頭台は魔族の首を刎ね飛ばす。だがその光景は異常だろう。何故なら魔法、響夜は魔法を使ったのだ。本来ならマオからの魔力供給がない響夜が魔法を使うことなど出来はしない。だが響夜は魔法を使ったのだ。

「――」

響夜の脇腹を槍が掠める。その一突きは響夜の脇腹を貫いた。流れ出す血を無視して響夜は背後の敵を燃やす。再び響夜は戦場の中

を走るがその傷は治らない。そう治らないのだ。

グリモア・ハート

これが響夜が導き出した結論。悪魔の心臓、たとえ魔力供給が無くとも動き続けていた神器はある構造をしていた。無限再生能力、それは永久的に魔力を生み出す魔力機関でもあった。常時膨大な魔力を生み出しそれによって半不死的な再生能力とも思わせる回復行い不老であるために老化を止める。想像形成によって響夜はその回路にその為のスイッチを創ったのだ。再生を止める代わりに生み出される魔力を自身のものとして扱う。故に傷が癒えない代わりに無限の魔力を得る。

「我が軍勢よ」
レギオン

響夜は自身の軍勢の牙を呼び出し魔族たちへ向ける。

「殺れ」

瞬間、その場が火薬が弾ける音と硝煙で染められる。だが響夜の顔はどこか不満げだった。

「・・・感謝しろよ？半殺し程度で済ましてやったんだからよ」

見れば魔族たちは何とか生きていた。ただその体も無事で無く死に体だ。

元々魔族たちは魔力だけでなく身体能力も上位の種族である。この状態でも気力さえあれば何とか回復できるだろう。

「あゝ・・・やってらんねえ」

ここにマオがいる。つまり此奴らはマオの配下なのだろう。ならば殺すのはなるべく控えなくてはいいけない。響夜は面倒臭そうに倒れ

ている魔族たちの中を歩いて行く。

「・・・中庭か」

廊下の先には中庭があつた。地面には草花が月明かりに照らされながら生えている。

「・・・侵入者が」

声が出た方を見ればそこにはあの時の騎士。その姿を視認した響夜の口が弧を描く。

「よう、こんにちは。いやあ、ようやく出て来てくれたかあ。ったくよオ、手間掛せんじゃねえよ」

「やはり殺しておくべきだったか」

既に響夜の傷は全て癒えている。その魔力の流れを響夜は自身へと変えた。突然の魔力の反応に騎士の顔に僅かな驚愕が見える。

「馬鹿な、貴様の魔力はマオ様から供給されていた筈・・・」

「おいクソ騎士」

響夜の空間が歪んでいく。そこから見える無数の銃口と鎖の群れ。

「見せてやるよ！人間の力って奴をよお！！！」

放たれた銃弾と共に二人の戦いが始まった。

殺人鬼達の殴りこみ（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

初めて感想が来ました！！思わずテンションが上がリ少々うざくなった作者です。感想ありがとうございました！皆さんも誤字の指摘、普通の感想などどんどん送ってきてください！主に作者のやる気がみなぎってきます。批判？どんと来い！！・・・やっぱあんまり責めないで下さい。

成長と再開と二人の少女（前書き）

「・・・頑張った甲斐はあったか」

b y 響夜

成長と再開と二人の少女

「ラァ——！！」

「シ——」

互いの得物をぶつけあう。既に百合、いや二百合は打ち合っただろうか。地面には何百もの砕けた武器が落ちている。

「形無き略奪者——！」
シェロジャー

その言葉に応じる様に響夜の胸から何百という槍が飛び出す。それは目の前にいる騎士へと迫るが突如騎士の影がの伸び槍を絡め取る。

「そんなもんで止められるかよお——！」

形無き略奪者^{シェロジャー}はその姿を霧へと変え影の拘束から脱出する。霧は周囲を覆い二人の姿を隠した。

「我が軍勢よ」
レギオン

手加減などしない。例えマオの配下であろうとも此奴は完全に屈服させる。

「目の前にある障害を汝等の手によって灰塵へ変えよ」

響夜はその牙を獲物へ向け引金を引いた。

「暴風に潜みし獅子の牙」
シュトゥルムヴァイント・シュトースツアーン

放たれる無数の呪いの弾丸。それは霧で姿の見えない騎士を蹂躪していく。

「お得意の無効化も効かねえぜ」

騎士の魔法属性。それは無の属性。聞くだけであれば属性が無いようにも思えるがこれは魔法、魔力無効化の力を持つ。極めればあらゆるものを無へと帰すことも可能とする魔法属性。だが恐らくこの騎士はそこまでの力量には達していないのだろう。そう結論付け響夜はこの技を使った。元が魔力であつても想像形成は物質を創り出す。それは無の属性で消せる物ではない。

だが――

「――」

銃弾の嵐の中を掻い潜り漆黒の影が迫っていた。それを確認した響夜はデザートイーグルとグロックの二丁を取り出し狙いを定める。

「爆ぜろ！」

放たれた弾丸は超高密度の炎の塊となつてぶつかり大地を揺るがせた。その炎は影の群れを消し去り霧の中を照らす。

「しぶてえなあおい」

そこには鎧を破壊されながらも勝利を確信している騎士の姿。

ああ、むかつくな。その面あ今すぐ

「見れねえもんにしてやるよ」

瞬間響夜は脚に魔力を集中させ加速する。既に形無き略奪者^{ジェロジニア}はその姿を一本のナイフへと変えていた。

「この程度で俺が倒れるものか!!」

心眼で振り下ろされる騎士の剣を響夜は手に持ったナイフで防ぐ。だが騎士の力が僅かに衰えていることに響夜は気付いた。

「あ?しつかり食らってるじゃねえかよ」

恐らくこれは響夜の技による呪いによるものだろう。

「そんなもんじゃ俺の剣は防げねえよ!」

突如響夜の持つナイフは三又の矛へと変わる。

「ぐ——!?!」

その突然の変化に反応できず傷を負いながらも騎士は後ろに下がろうとする。

「神殺しの鎖^{グレイブニル}」

だが下がろうとする騎士の腕に鎖が絡みつく。

「逃がすと思ってるのか?」

見れば鎖は響夜の腕にも絡みついている。両者の距離は2mもない。当然武器を振るえる距離ではない。

「高貴な騎士様には辛いかなあ！」

響夜は全身を魔力で強化すると騎士に殴りかかる。その行動に騎士は呆気にとられ殴り飛ばされる。だが鎖は逃げることなど許さず響夜は騎士を引き寄せるとその胸に一撃を叩きこむ。

「がッ——」

騎士がよろめき追撃するように響夜は拳を振り下ろす。だが――

「・・・舐めるなよ。侵入者あー!!」

その拳を騎士は受け止め蹴りを放つ。

「っだあ!?!つてえな!!」

蹴りを食らい僅かによろめくが響夜は直ぐに体制を整え頭突きする。だが騎士もそれを同じく頭突きで返し鈍い音が響く。

「ざっけんじゃねえぞクソが！」

「ぶざけているのは貴様の方だ!!」

騎士は叫ぶと同時に響夜の顔を殴る。

「あの方がどれ程の方かも知らずに連れ回す!!」

騎士は響夜に馬乗りになると何度も殴り続ける。自分の感情を吐き出すかのように何度も何度も。

「あの方は常に命を狙われているのだぞ！傲慢な人間達によって！」

既に響夜は碌な抵抗もしていない。だがそれでも騎士は殴り続ける。

「あの方は何もしていないのに！！何故あの方がこんな目に会わなくてはいけないのだ！！」

「・・・知らねえよ」

不意に響夜はポツリと呟き騎士の拳を受け止める。

「んなもん俺が知る訳ねえだろうが！！！！」

響夜は騎士を殴りつけ立ち上がる。

「生き物つてのはなあ。皆そうなんだよ！！全員が自分の欲の為に生きる」

響夜は騎士の胸倉を掴むと叫ぶ。

「あいつが苦しんでる！？だからどうした！あいつは俺達という時、心の底から笑ってたんだよ！苦しめたくない！？だったらダメエらが支えてやれば良いだろうが！！」

響夜は自身の魔力を全て解放つ。

「口でどうこう言ってるじゃねえよ！テメェらが単に臆病なだけだろっが！！」

「ただ閉じ込めることしか出来ねえ奴が一丁前にほざくんじゃねえ！！」

「燃やしつくす業火の世界 それは常世全てを焼き尽くし 貴方が愛する全てを燃やす」

「ああ燃やせその総てを ああ焦がせこの我が身を ただその想いのままに荒れ狂え狂気の焰」

空に巨大な方陣が展開され現れるのは圧倒的な魔力と紅蓮に染まる刀身。

「焼き尽くす劫火の剣」
レーヴァテイン

現れた炎の剣は神器に匹敵する程の魔力を持っていた。騎士はその姿に驚愕を露わにする。

「神器だと！？馬鹿なお前の神器は——」

「無いなら創れたクソ野郎」

響夜の言葉と同時にその剣は真下にいる二人と振り下ろされた。

月明かりに照らされた一室。そこにマ才はいた。

「……なんじゃろうな」

城の中が何時もより騒々しいことにマ才は微かに疑問を覚えたが、どうでもいいかと窓に目をやる。

「此処は相変わらずつまらないの」

「響夜たちという時は楽しかったのう」

マ才は皆で過ごした時間を思い出し微笑する。

「……皆どうしてるかのう」

ハクやエルザ、ロシエル達は心配しているだろう。響夜は……
どうだろう。

マ才は白髪を思い出し苦笑する。怒ってる……訳はないか。
ふと扉の前が騒がしくなっていることに気付く。それと同時に部屋の窓が砕け散り誰かが入って来た。

「……お久しぶりだ、魔王様」

「くくく、っははははは」

やべえ、もう上手く笑うことも出来ねえ。俺は炎に包まれた中一人立っていた。

レイヴァテイン
焼き尽くす劫火の剣。それは形無き略奪者の一部を混ぜ創り出した

神器。本物でないから魔力は相当持つていかれるが悪魔の心臓グリモア・ハートを所有している俺には関係ない。

その効果は所有者以外の全てを燃やす。神話通り世界を焼き尽くすというものに沿った力だ。ただこれに欠陥があるとすれば

「激痛が襲うつてこと位か」

この神器は燃やした物の分だけ所有者に激痛を与える。俺は動かない体に鞭打ち気力だけで立ち上がる。

「殺さなかった分だけ良いと思えよクソ騎士」

俺の目の前に倒れているのは焼き尽くす劫火の剣を食らった騎士。レーヴァテイン
恐らく無の魔法で多少の軽減をしたのだろうがそんなものじゃ俺の神器は止められない。

『……響夜君？聞こえますか？』

俺が辺りを見回しているとエルザからの念話が届く。

「何だ？あと君付けすんな」

『マオちゃんの場所が分かりました』

「……何処だ？」

『貴方の場所から近いですね。そこから少し先にある城の最上階です』

「了解。分かった」

それに答えると俺は念話をきる。

「……………」

俺は騎士を一瞥すると走る。あゝ全身が痛い。明日大丈夫かこれ？俺はそんな呑気なことを考えながらも走って行く。すると中庭を超えやがて見えてくるのは巨大な城の外壁。

「今の状態をいうなら盗賊か？」

俺は苦笑する。うん、意外にピッタリかもしれない。俺は神殺しのグレイニル鎖を外壁に突き刺すと一気に外壁を昇って行く。急な加速で全身が悲鳴を上げるが無視。そのまま昇って行くと見えてくる一つの窓。

「……あれか」

俺はその窓ぶち破り中に転がり込む。俺は気配を感じそちらを向く。

「……………」

そこには何か信じられないものを見るかのような目をしたマオ。俺は出来る限り微笑む。つっても王子様みてえのは無理だけだよ。

「…………お久しぶりだ、魔王様」

「…………あ」

マオは此方に近寄る。それと同時に勢いよく部屋の扉が開く。

「マオ！」

「マオちゃん」

そこにいるのはハクとエルザ。二人とも急いだのだろう息を切らし
ている。

「・・・マオ!!」

マオの姿を確認したハクは笑顔を浮かべるとマオに飛びつく。マオ
も驚いた表情を浮かべるが涙を流しなら微笑むとハクのことを包み
込むように抱きしめる。

「・・・」

俺とエルザは顔を見合わせると思わず苦笑。

『・・・良かったじゃありませんか』

エルザから念話が届き俺は泣いている二人を見る。

『・・・かもな』

・・・二人を見て知らず俺はそう呟いていた。

その日、夜の世界に二人の少女の鳴き声が響いた。

成長と再開と二人の少女（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

はい、マオとの再会です。一章？は次の話辺りで終わりです。あとこれからはもしかしたら不定期更新になるかもしれません。・・・と言っても週に最低二つは上げようと思います。

閑話

薄暗い部屋。中央にある円卓とそれを囲む十三の席のみがある部屋に今十三の人影があつた。

「（・・・・・・気まずい）」

静寂に包まれた部屋の中エルザは内心で溜息を吐く。だがこの沈黙の理由は彼女自身痛いほど分かつていた。

本来いない筈の席。そこに座る人物に皆恐怖しているのだ。髪は黒くその眼はまるで溝川のように濁り奈落のように深い。全身を黒いローブのような物で包み端正な顔立ちであるが常にその顔には微笑が張り付いておりそれが一層その男の姿を不気味な物にしている。まるで影法師のような姿。

「ふむ、今宵はどうしたのだ？ 卿がここに現れるなど珍しい」

口を開いたのは一位の席に座る金髪の男。髪は長くまるで黄金の輝きを放ち、その顔は生物としてこれでもかと言つほどの美しさをもっている。今その顔にはまるで面白い物を見るかのような微笑が浮かべられていた。彼こそがクラウン序列一位、最強にして最凶の男。そして目の前の影法師の男と共にクラウンを創立した人物。

「いえ、何。少々皆に伝えることが」

影法師の男が口を開くそこから流れ出る言葉はまるで人の神経を逆撫でにするもので、同時に底無しの沼に脚を絡め取られたかのような感覚だった。

エルザは無意識に体を震わす。黄金の輝きを放つ男とその黄金さえも呑み込むかのような黒い男。まるで正反対の二人。その二人から発せられる言葉だけでエルザは気圧されたのだ。いや、エルザだけでない。他のクラウンの者達も皆二人の言葉に気圧されている。まるで強者に蹂躪される弱者の様に。

「――私の代行を見つけてまして」

その言葉に黄金はほう、と呟き。他のクラウン達に動揺が走る。

「それで？その者はどうした」

黄金は影法師に問い掛ける。僅かだが期待の色がこもる声色であった。だがその言葉に影法師は首を横に振る。

「いえ、まだ勧誘はしておりません。いずれ行おうかと」

二人の男の会話。エルザは僅かだが思い当たる節があった。

「す、すみません」

エルザは影法師へとその疑問をぶつける。まるでそれを恐れるかのように。

「そ、それは私の視察と関係が？」

そもそもあの街にエルザを視察に行かせたのはこの男。それが関係ない筈がない。だがエルザは頭でそう予想していても心はそのことを認めようとしなかった。だが、それも影法師の言葉で崩れ去る。

「無論。然りだ、戦乙女^{ヴァルキユリア}。君は既に黄昏の破壊者^{ロキ}と出会っている筈。無論彼の成長も促したのでは？」

まるでそうなると決まっているかの様な口ぶりで影法師は言う。その言葉にエルザはかつてない程の恐怖を覚える。

「で、では彼が代行だと！？本気で言っているのですか！！」

思わずエルザは身を乗り出す。だが影法師は動じずその奈落の目でエルザを見る。

「無論。些か未熟ではあるが、彼は私の代行に相応しい」

それは決して覆らない。影法師の目からは確かにそう感じた。エルザはその顔を歪ませながら席に座る。

「ならば卿の好きにするがいい。だが――」

「ええ、誓いは、守る。貴方を退屈にはさせませんよ」

その言葉を残し影法師は消える。それと共に笑いながら黄金もまた消えていく。二つの力が消えたことによりクラウン達は解放され一言二言話すと各々消えていく。エルザもまた俯き拳を握りながら消えて行った。

後に残った誰もいない円卓と十三の席だけだった。

閑話（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

活動報告でも書きますがこれから偉人や、伝説上の人物の名前について募集したいと思います。作者である私は少し知識が偏る変人です。是非ともご協力ください。できればその人物の逸話等もあると嬉しいです。

因みに今考えてあるもの

・ゲッツ。フォン・ベルリヒンゲン 「隻腕の騎士」

・ジークフリート（シグルズ） 「竜殺しの英雄」

などです。特にどの地方のもので拘るといふのはありませんのでもしありましたらお願いします。

ああ、はいはい。テンプレですか。勘弁して下さい……！（前書き）

「今は出来ることをやるっ」

byコウタ

ああ、はいはい。テンプレですか。勘弁して下さい！！

俺こと柚木浩太は特にこれといった特別な奴ではなかった。身体能力と成績は平凡。友達付き合いも良好。顔は普通より少しだけ良いというだけ。

特に家族構成に何かある訳もなく今まで友人と普通に過ごしてきた。

「なのにさあ・・・」

異世界召喚ってどういうこと？

俺の現状を説明するには少し時を遡らなくてはいけない。

その日、俺は学校の帰り道を歩いていた。明日友人から借りるゲームに想いを馳せつつ足早に家を目指していた。

「持つべき者は友だな」

そんなことを言いながら歩いていると突然俺の足元が輝き出したんだ。その突然のことに俺は上手く頭が働かなかった。そして気が付いたら

「異世界の者よ。どうか我らに力を貸して下さい」

目の前には白い髪的美少女とたくさんの人がいた。・・・え？なにこれ。もしかしてテンプレってやつですか？

「え、あ、あの俺、どうしてこんな所に？」

自分でも思った以上に混乱していたらしい。自分でも何から聞いてどう理解すればいいか全然分からない。俺が混乱していると少女の後ろにいた人達の中から恰幅の良い男性が歩み寄って来る。

「此度は済まぬことをした異界の者よ。今は状況を理解するために
も部屋でゆっくりと休んでくれ」

男性は済まなそうな顔をし俺に言う。だが今はこの人のいうことは有難い。正直今の状況を俺は呑み込めていない。
俺は力なく頷くと騎士たちに案内されて宛がわれた部屋に入って行った。

正直に言って泣きなくなった。改めて翌日広間でこの国の王——俺が召喚された時に歩み寄って来た男性だった——と謁見した時俺の心には絶望感が広がっていた。向こうでの友人や家族のことを考えると申し訳ないという思いで一杯だった。

それからの二週間は只管に剣と魔法の練習をした。手がボロボロになっても早く元の世界に帰りたいという思いでがむしゃらに鍛錬していた。他の皆も俺の鬼気迫る様子に気圧されながらも心配して何度も休むよう言ってきたが俺はそれを断って剣を振った。

そんな中だった彼女に会ったのは。俺が王立図書館で魔法の練習をしている時一人の少女が声をかけて来た。

「だ、大丈夫ですか？」

見ればそこにいたのは気弱そうな少女。俺を心配そうに見ているそ

の少女に俺は見覚えがあった。

「・・・アリシア王女」

アリシア第二王女。この国の王、聖王の娘だ。長女であるアリア第一王女は男装の麗人という言葉がぴったりな少し堅い人だが第二王女は争いを好まない本当に優しい人だ。

「そ、そのもう夜遅いですしそろそろ休んだ方が・・・」

この人は本当に気弱な人だ。軟弱者、弱虫など言うかもしれないがこの人なりにこの国のことは考えている。

俺は王女 of 言葉に壁に窓を見る。どうやら熱が入りすぎたようだ。外は既に暗く満月が空高く輝いていた。もう真夜中だということが分かれると眠気が襲ってくる。もう少し此処に居たいが王女を送り届けるべきだろう。王城の中とはいえっても夜では何があるか分からない。

「そうですね。部屋まで送りますよ」

俺は王女にそう言うとペンや本を片付ける。待たせるわけにもいかないから迅速に片付けると王女に向き直る。

「あ、す、すみません・・・。」

少女は顔を赤くさせながらも申し訳なさそうに言う。

「いえ、俺が好きでやっているのでお気になさらずに」

俺は王女にそう言うと王女を送って行く。部屋に着くまで俺達は終

始無言だったが決して気まずい雰囲気ではなかった。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

律義にも王女は俺に頭を下げる。その行動に苦笑しつつもそう言う
と自分の部屋へと足を向ける。

「あ、あの！」

俺が帰ろうとすると背後から王女が声をかける。どうしたのだろうか
かと振り向くと王女は少し照れたように俯き何かを決心すると俺を
見る。

「こ、今度一緒にお茶会をしませんか？」

その言葉に俺は少驚く。まさか王女様が俺にこんなことを言うとは思
わなかったからだ。王女の善意——何か本人が勇気を出してい
たようだし——を無碍にするわけにもいかないだろうと俺は微笑
んで頷く。すると王女は満開の花の様に顔を輝かせる。不覚にもそ
の姿に俺は少しだけ見惚れてしまった。

その後王女とお茶会をしたりしていく内に只剣を振るっていただけ
の時期が嘘のように俺は笑うようになった。他の兵士やメイドの方
ともよく話すようになり俺の荒んでいた心は次第に元に戻って行っ
た。勿論、元の世界に帰るという目的を忘れたわけではないが・・・。

他にも様々なことがあった近隣諸国にも俺と同じ勇者という人物は
いるようだ。ただ異世界から来ていたのは俺だけの様だが。それな
りに友好的ではあったが中には受け入れられない者もいた。力が全

てという者達等だ。人々に安寧を与えるから勇者なのではないかと思っている俺はどうしてもそいつらを受け入れられなかった。

「・・・魔王」

俺は誰もいない部屋の中ぼつりと呟く。俺達勇者が戦う相手。万の軍勢を蹴散らす力を持つ化け物。見たことはないがこの国や近隣諸国は魔王と魔族は敵だと言っていた。当然他の国の中には魔族を受け入れていたりなどもあるようだがこればかりは仕方が無いのだろう。人種が、信じる者が違えば人々は争い、異物を嫌う。それは古今東西歴史が証明している。そのことを俺は悲しくも思ったが割り切った。今まで魔物や山賊との戦いで俺は割り切ることも覚えたのだ。一人で世界が救えるわけではない。俺はそう考え戦争に向けより鍛錬に熱を入れた。

・・・最近知った。聖女様は毒舌だ。

あの日俺を召喚した際に目の前にいた人は聖女様と言われていた。何度か目にもすることもあったが巡礼や祈りであまり会うこともなく会っても喋ることは殆どなかった。

つい前日俺は聖女様と話す機会があったが、・・・うん。なんかこう、凄かった。第一声が

「・・・ああ、召喚されて頭の混乱したアレな勇者ですか」

というものだ。いや、認識的には確かに混乱もしたしその所為でアレな言動——テンプレ等々言っていたこと——があったけど流石にそれは酷いのではないだろうか。

だが国民——特に子供——にはとても優しくよく笑っているのを見かける。商店街の皆に聞いてみるがどうやら彼女の毒舌には慣れるしかないらしい。お陰で毎日心に傷を負っている。

「・・・・・・ハア」

ここ最近のことを思い出し俺は嘆息する。疲れた。一日が三日と思える程の濃密な生活をこっちでは過ごしている。

「・・・・・・」

魔王を倒せば果たして元の世界に帰れるのだろうか。だが今はそれしか道はなく。何よりも問題なのが

「俺はその時この世界をどう思ってるんだろう」

ふと声に出して言う。この生活を満更でもないと思い始めている自分。けれど元の生活には帰りたいと思っている自分もいる。まるで子供の様だ。どちらも欲しいから得ようとする。やはり人間は欲深い生き物だということが良く分る。

「あ、コウタさん！」

その声が出た方向に顔を向けるとそこには笑顔で走って来るアリシア王女の姿。

俺はその姿を見ると座っていたベンチから立ち上がり王女に歩み寄る。またお茶会だろうか・・・・。

「あの、お茶会しませんか？」

予想どおりらしい。俺は微笑むと彼女に返事をする。
とりあえず、今はこの瞬間、瞬間を楽しもう。俺はそう思い王女から差し出された手を握った。

「・・・」

マオの下へ殴り込みに行つてから既に二週間近く経つた。既に季節は夏——こちらではどういふんだっけか・・・風の期だっけか——になっている。マオは最近はある城にいる。なにやら重要な要件があるらしく連れ出そうとしたら魔族——あの騎士除く——が総出で土下座するもんだから流石に連れ出すのをやめた。というかあれは無理だ。全員がガチ泣きしながら土下座してきやがる。騎士は最後まで俺を睨んでいたが擦れ違う時俺にしか聞こえない程度の声量で、済まなかった。とか言いやがった。お陰で耳が腐るし鳥肌が立つわで堪ったもんじゃない。

マオの配下は皆マオのことを大切に思っているらしい。だがどうしても緊張してしまい中々本人と話すことが出来ないと言っていた。何だかんだで愛されているようだ。そしてそれはマオの友人である俺達にも適用されまるで何もなかったかのように俺達に対して友好的に接していた。

その後三日程してエルザはクラウンの呼び出しで帰った。ガルラも元々視察来た為か帰って行った。ハクは俺とマオと行き来してる。それで俺は

「想像・・・形成・・・」

スキルを見極めている。スキルと言うのは本人が成長することに同じく成長していくらしい。何がどう成長していくことでスキルも

成長するのか、というのはまだ分かっていないらしい。最もだ、成長なんて個人で違う。身体なのか精神的なのか技術面なのかそれは数え切れないほどにある。

そして俺は成長したらしくその証拠がああ騎士相手に使った神器だ。俺の想像形成は神器を創ることが出来るようになった。尤も戦闘中に創れるわけもなく、時間も掛るし魔力も食われる。そして俺の場合は呪の魔法を取り入れることが多いからハイリスクハイリターンの神器になることがある。と言っても創ったのは焼き尽くす劫火の^{レヴァテイン}剣を含めて三つだが。創るのに約六日。それも魔導具や神器を組み込んで創るから多重能力になりバランスが崩れないよう神経を使う。

そして今は新しい魔法を創っている途中だ。創れば戦闘の規模次第じゃ相当なものになる。

「やってられねえ」

俺は回路を組み上げるとそれを紙に書き写し倉庫に仕舞う。正直これは辛い、どこをどう創ればいいのか頭を使いながら創っていく。マオからの知識が無かったら創るなんて無理だ。最も、複雑な物を創っている俺が悪いのだが。

因みにここは宿の裏庭だ。ロシエルの依頼報酬は此处を貸し出すと言ったものだったから有難く借りた。本人的にはまた会えるのならば成功らしい。俺は汗でびしょ濡れになったシャツを近くの水道——魔石とかいう物から発生しているらしい——で洗い宿の中に入る。

ギルドの方も爺達が大分苦しんでたが受け持つと言った奴が悪い。精々苦しめ。

「.....」

暑さにやられながら俺は向こうの世界のことを考えていた。こつちに来てから既に一ヶ月以上経っている。元の世界がどうなっているのかというのはどうでもいい。ただ向こうに置いて来た奴が心配だ。

「発狂してないかなあ。自殺してねえといいんだが・・・」

死ぬ時は俺に言えと言っていたがやはり心配だ。

「仕方ないか」

向こうに戻る手段もないのに向こうのことを心配しても仕方が無い。というか向こうに戻る気はない。連れてきたい奴はいるが・・・。そんなことを考えていると念話が入る。恐らくマオだろう。

『響夜、済まぬが戻ってきてもらえないじやろうか？少し頼みたいことがあるんじゃ』

『あいよ』

俺はそう返事をする。と倉庫から指輪を取り出す。転移用の魔導具だ。それなりに値段が張るが一ヶ所だけ登録した場所に転移することが出来る。俺は路地裏に入るとマオの下へと転移した。

「・・・来たか」

帰ろう。もう一つ指輪を取り出そうとした俺の手を騎士は掴む。

「何だ？俺は男に触られて喜ぶ奴じゃないぞ？」

「私だってそうだ。魔王様からの頼みを聞く前に帰すわけが無かる

う」

その言葉に俺はうんざりしつつ騎士の手を振り解く。何でこんな奴と顔を会わせなくちゃいけねんだよ気持ち悪い。俺は騎士から離れる様に足早にマオのいる部屋へと向かう。

「何で追いついてきやがる」

「貴様より遅れるなど恥だからだ」

俺と騎士はその場で立ち止まり睨みあう。

「あ？何こつち見てやがる。目が腐るだろクソ騎士」

「野蛮な言葉しか貴様の口からは出ないようだな。そんなに罵りたのならゴブリンと会話でもしているカス」

「「あ？」」

「何をやっておるのじゃ」

俺達が何時でも目の前の敵を殺せるよう構えていると良く知っている声が聞こえる。

「何だマオ。邪魔するなち羽虫がうるせえから殺したいんだ」

「邪魔をしないでください魔王様。薄汚いコソ泥が入り込んでいるので少し痛い目にあわせたいのです」

再び睨み合う俺達にマオは溜息を吐く。

「重要な用件なのじゃ。喧嘩しないで早く来い」

顔は笑っているが目は全く笑っていない。その迫力に俺達は黙って頷き後を着いて行く。

「で？用件って何だ？」

「うむ、勇者たちの件じゃ」

その言葉に俺は納得する。

「済まぬが奴らの場所に潜って作戦の方をの」

「ああ、はいはい。成程ね」

俺は呪の魔法を使えるからその気になれば自分ごと相手を呪って逃げることも出来るし、呪は希少だからそこまで対策を取っている奴も少ないだろう。俺はその言葉に頷く。

「んじゃ、ちよっくら行って来る」

俺がそう言って城を出ようとするとマオが抱き着いてくる。

「あ？」

俺がどうしたのかと目をやるとマオはその顔を赤く染めている。クソ騎士も何時の間にか消えてやがる。野郎、無駄なことだけ空気を読みやがる。

「き、気をつけてね」

そう言つて俺の頬にキスをするとマオは離れる。その顔は茹でダコのように真っ赤になっている。恥ずかしいならやらなければいいものを……。

俺は嘆息すると取り敢えずマオの頭を撫でその場を去っていく。

「勇者たちねえ」

真面目腐った奴らなんかなあ。俺はそんな想像をしながら歩いて行く。

「いやあ戦争は素晴らしいね。どんなに人を殺しても許される」

マオ達が聞いたら少し怒りそうだがこれは俺の本音だ。勇者とやらの首を？ぎり取ってやりたい。俺は唇を弧の形に歪めながら廊下を歩く。

「また楽しくなりそうだ」

戦争のことを考えながら俺は歩いて行く。目指すのは聖王率いる勇者の国。その名をエクレール。

ああ、はいはい。テンプレですか。勘弁して下さい！！（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

はい、勇者です。テンプレです。後悔はありません。
もう少しでクリスマス。・・・砕け散ればいいのに。

弱い奴ほど何かを持つらしい。今まで生き延びてきたからなのかねえ（前書き）

「これを創るのには苦労した。いろんな意味で・・・」

b y 響夜

弱い奴ほど何かを持つらしい。今まで生き延びてきたからなのかねえ

「・・・・・・・・」

あゝ・・・苛々する。俺は乗っていたバイク——既に見た目も中身も化け物になっちまったが元は隼と言う物だ。俺が創った神器でも一番凶暴な物だろう。——を止めると懷から煙草を取る。想像形成で創った害の無い物だ。こうして使うとこのスキルの異常性も良く分る。

「・・・・・・・・あゝ」

取り敢えずイラつきは治まったがどうせ直ぐに再発するのだろう。俺はそれに辟易しつつも半ば諦めた様に煙草を吸う。

元々俺のイラつきは煙草で治まる物じゃないし、殺しても治まることはない。一応治まる手段は一つだけあるがここでは特に関係するものでもない。

「ようやく半分か」

半分、實際星の墓場を経由すると一カ月はかかるから近い場所から出たがそれでも二週間は掛かる。その距離をたった二日で半分も進む。・・・異常だな。まあ今回は魔力もすべて速度出すのに回してたから当たり前なのかもしれないが。・・・一応神器だし。

「少し歩くか・・・」

俺は乗ってきたバイクを倉庫にしまうと森の中を歩いて行く。今は

夜だから魔物も多くいるだろう。腹減った。

森の中を歩いていると少し奥から明かりが見えた。

「……人か？」

見つからないよう木の影隠れながら様子を窺う。見たところ五人組のパーティーらしい。女が二人に男が三人だ。どうすっかなあ……。襲って全員殺すか？女はゴブリン共に渡して孕まされるのでも眺めてるか？いや、身包み剥いで素手で魔物共と戦わせるのも良いな……。どっちにしろ女は男より利用価値は高いし大した抵抗もされないから一通り試してみるか？

まあ、どっちにしろ見張りをどうにかしないと駄目なんだが……。

「……保留だな」

俺はそう考えるとその場を立ち去る。取り敢えずこの辺りの魔物みとかねえとな。

そんなことを考えながら歩いていると茂みが揺れる。念の為何時でも殺せるようナイフを構えておく。

「みゅ」

「……」

だがそこから出て来たのはとても危険には見えない白い毛並のウサギ。目は赤い。

「お前俺と被り過ぎだろ」

白と赤なんて俺と同じじゃねえか。仲間か？

ウサギは言葉が分からないのか首を傾げる。

「まあ、良いか」

美味そうではあるが此奴は食わないでおくか。
そんなことを思いながら俺はウサギを撫でる。ウサギも悪い気はしないのかされるがまだ。

「よし、他の魔物探すぞ」

「みゅ！」

恐らく此奴は群れから逸れた奴だろう。なら他にも此奴の仲間がいる筈だ。俺はそう考えるとウサギを連れて歩き出す。

正直に言おう。ウサギが怖い。最初は可愛げのある只のウサギ。俺の印象はそれだった。だがいざ他の魔物を見つけた時奴はとんでもねえ生物だと言うことが分かった。

それは俺が此奴を囚にして獲物を仕留め様とした時だった。ウサギが獲物を誘き出す役目として魔物の前を通り掛かる時――
振れた魔物が黒こげになった。

は？と思うだろう。実際俺はマジでそんな声を出した。黒こげだぞ黒こげ。こんな人畜無害に思えるウサギが魔物を黒こげだぞ？俺が触った時にこんなことにならなくて良かったと心底安心した。

どうやらこのウサギ外敵が触れると高圧電流が何かを流すらしい。
とんでもねえウサギだ。

「……もう腹はいいか」

諦めよう。ウサギに任せるのは駄目だったんだ。俺はそう思って先程の五人組がいた場所に戻った。

「破壊音が五月蠅いな」

先程五人組がいた場所からは戦闘を知らせる破壊音が聞こえてくる。近くへ行ってみると素晴らしい状況だ。魔物VS山賊VS五人組。何だこの素晴らしい状況。俺手え出さなくて良かったな。

そのままこの状況を静観しているがどうやらどれか山賊か五人組が逃げようとしても残りの二グループがそれをさせないようにしているようだ。魔物たちはトロールを中心としたオークで構成された奴らだ。うん、捕まったら最低でも女は子を産まされるな。山賊どもは戦いのなかを上手く立ち回り漁夫の利を得ようとしている。五人組は丁度二グループの間にいるため両方からの攻撃で劣勢だ。

「――」

そんなことを考えているうちにローブを着たおかつぱの女の肩に矢が刺さる。それによって五人組は火力不足になり五人組は敗北の色が濃くなる。

「少し調整するか」

俺はウサギに指示すると山賊達の後方に回り油断している一人を黒こげにする。その叫び声に山賊達にも動揺が走る。

「はいアウト」

俺は奴らの上空に剣群を創り出すと山賊に落とす。その突然の事態

に山賊どもは対応できず次々に串刺しにされていく。いやあ、愉快愉快。久しぶりに殺したが中々の叫び声だ。

どうやら五人組や魔物共も茫然としている。ち、折角調整したのにここで終わるのは避けたい。俺は剣群を消すと一体のオークの眉間を打ち抜く。その音で五人組も魔物共も今の状況を思い出したのか対峙する。だが今のが何なのか分からない以上互いに周囲を警戒しているようだ。

俺は帰って来たウサギを撫でながらその様子を眺める。

「あ、男が死んだ」

注意が散漫になっていたところを一体のオークが切り裂いたようだ。一人が死ねばそこからは総崩れ数の暴力に五人組……いた四人組は押されていく。

「……」

どうするか。助ける気は端から無い。助けても俺に特ないし。最後に残った奴は俺が殺すか。そんなことを考えていると何時の間にか残り二人の男も斬り伏せられ残っているのは弓使いのエルフとおかつぱの女。……そういえばエルフって排他的種族じゃなかったか？

女どもの抵抗むなしく二人は捕らえられる。

「想像形成」

俺は女がオーク共に侵されていくのを眺めながらスキルを発動させ一本の槍と長剣を創る。トロールは死体を貪っている。どうやら今のところ女よりも食らしい。取り敢えず

「それは飯を食っていない俺への当てつけか？」

俺はトロールへ強襲しその首を刎ね落とす。その突然の出来ごとに動くことの出来ないオーク共を斬り伏せる。断末魔も醜いな。

グレイブニル
「神殺しの鎖」

俺は神殺しの鎖グレイブニルを使うとその場にいたオークを一気に殲滅する。

「あっさりしすぎたな」

その光景を見て俺は溜息を吐くと二人を見る。そこにはオーク共の精液で薄汚くなった女の姿があった。その目は既に焦点が定まっていなく虚ろな眼をしている。

「どうするかなあ」

取り敢えず俺は女に歩み寄る。

「おい。聞こえてるかー、聞こえてないならこのまま殺しちゃうぞー」

おかっぱは完全に精神が崩壊してるっぽい。何か笑って欲しがってる。何をとは言わないが正直気持ち悪い。エルフの方はどうやら多少の理性は戻ったらしく泣きながら俺を見ている。
こっちの方が面白いか・・・。

「ご機嫌麗しゅう。高潔なるエルフの娘よ」

俺は一礼するとエルフに歩み寄る。

「他の者はどうやら間に合わなかったようだが貴方だけでも助けられて良かった」

俺はまるで偶然通りかかった様に言う。オーク達のお陰で思考も纏まっていなかったろうし多少の役には立ったか・・・。

俺はエルフの頬を撫でると顔を近付ける。

「あ・・・」

「少しお聞きしたいことがあるのです。よろしいでしょうか？」

オーク達はこういったことをする際に相手を発情させるフェロモンのようなものを放つ。当然このエルフはそれを十分過ぎるほどに嗅いだのだ。発情していないわけがない。そしてそれは時間が経つ毎に増していく。

「エクレールのことについてなのです。お話していただければ貴方の望むものを・・・」

「あ、・・・お願い。私を・・・」

ちよろいなあ。いや、オーク共のフェロモンの所為だと分かっている。でも見るの初めてだから何とも言えん。これ拷問か何かで使えんじやね？

そんな考えはおくびにも出さず俺はエルフの唇に人差し指を当てる。

「ええ、承りました。ではエクレールについても・・・」

「は、はい」

ほんつと・・・ちよろいなあ。

朝方、俺は肩に昇っているウサギを撫でながら森を出ていた。あのエルフからは思った以上の情報が得られた。どうしたかつて？当然消したけど？顔見られてるし生かす価値ないし・・・。本人も満足出来てたから良いんじゃないの？オークの子供を産むよりましだろ。エクレール、魔族を忌み嫌う国の中で最も戦力を持ち近隣諸国を統括している国らしい。それぞれの国の勇者も一人一人が一騎当千の実力を持つ猛者共。何より聖女とやらの聖魔法、そして神聖術はとんでもないらしい。神聖術ってのは神の使徒を一時的にこの世界に顕現させる物らしいぶつちやけ天使？を召喚する物らしい。最後にその国の王である聖王と天竜アカーシャってのが国で最も強く最強と言われている程であるらしい。その輝きは決して曇らず、放たれる一撃は山を砕き天を裂くとか・・・。

「いや、ねーよ」

天竜はともかく聖王はクラウンでもないのにそこまでの力はねえだろ。少なくともマオよりは劣っているというのが俺の予想だ。

そして何よりこの情報はでかかった。何千という月日を生きた者はその身に神の力を宿すらしい。つまりは身体・・・そいつ自身が神器のようになるらしい。マオが眉間撃たれても死ななかったのはそういうことか・・・。

俺は倉庫から再びバイクを取り出すと吹っ飛ばされないようウサギに補助用の魔法をかける。目的のエクレールまであと少しだ。

「いっちょ派手に行きますか」

「みゆ！」

俺はウサギを撫でるとバイクを走らせた。あとには静寂が立ち込める森だけがあった。

弱い奴ほど何かを持つらしい。今まで生き延びてきたからなのかねえ（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

クリスマス・・・消し飛ばばいいのに。

というわけでh i m a m eです。今回トロールやオークはルビを振るかどうか迷いました。最初それぞれ考えてはいたのですがトロールは他の魔物とかぶりそうだしオークにルビはなあ。というわけでゴブリンは横文字だし此奴らもいいかと考え横文字にしました。

お気に入り登録が1件ずつですが増えてきて嬉しいです！！これからも少しずつ増えるよう頑張りたいと思います！！あと出来れば評価などもしてくれるとありがたいです。今後の文章の書き方を考えたりするのに役に立ちます！

というわけで後書きが長くなってしまいました但しこれからもこの作品をお願いします。

危険と出会いと死刑宣告（前書き）

「……俺の半月板」

b y 響夜

「……為になりました」

b y アリア

今回、最後主人公が崩壊気味です。あと凄いい長いです。

危険と出会いと死刑宣告

バイクを走らせ三日。ようやくエクレーが見えてきた。エクレーは周囲を城壁で囲まれている。これで農作業もやっているのだから堪ったものではない。食料や水に困ることもなく城壁に囲まれた難攻不落の城、それがエクレーだ。

俺はバイクを止めるとそこからは歩き出す。流石にあんなもので入国とか目立ち過ぎてしまう。取り敢えず倉庫にバイクをしまいウサギは使い魔ということにするとエクレーへと入国する。

「はい、ではごゆっくりしてってください」

「ああ」

正直に言えば入国は人間だった為か比較的簡単だった。容姿が珍しいから多少の注目を受けてしまうのは仕方がないと割り切りエクレーの中を歩いて行く。

「王城。ふむ、どう行くか」

呪の魔法を使えば行けないこともないが正直あまり使いたくない。

隠密も完璧というわけではなく周囲で聖の魔法を使われたら呪の効果が薄まってしまうからだ。

だが一番確実なのは呪の魔法を使うこと……。

「仕方が無いか」

俺は一度路地裏に入ると着替える。今まで着ていたシャツやズボン

から貴族が着るような少し立派な服装——まあ中世の頃の紳士服だ……どうしてもこの貴族の服は好きになれん。——に着替え帽子を少し深めに被ると人通りを避けて王城へ向かう。前にこれで歩いたら通行人の視線が集まるし女が寄ってきたりしてうざかった。ウサ公は俺の肩に乗っている。髪や瞳が同じだからよく馴染む。まあこれでとりあえず見た目は完璧な貴族だ。口調もこの時は紳士的にしている。

そして後は呪の魔法を使う。美しい女が魔女の呪いで誰からも見えなくなったという架空の物語を想像したもので効果は誰からも認識されないというものだ。使い勝手が悪かったりもするが便利と言えば便利だ。ウサ公と俺は互いの姿が見えるぞ。

俺は番兵の横を通り過ぎる。今の俺達はだれからも認識されないから番兵も侵入者が通り過ぎたことに気付かない。

「先ずはこの構造を把握しましょうか」

取り敢えず近くにいた兵を部屋の中に連れ込む。突然体が動き出し部屋の中に入ったのだ混乱しないわけがないだろう。認識できないから俺がやったとも分らないしな。俺達は魔法を解くと男の首にナイフを突き付ける。

「少しお聞きしたいのですがよろしいでしょうか？」

「な、何だお前は!？」

「聞かれたことだけ答えてください。でないと手元が狂ってしまいかもしれません」

その言葉に兵士は口を嚙む。俺はそれに満足気に頷くと質問を始める。

「私道に迷ってしまいました。ここの地図をお借りしたいのです」

「ま、迷っただと！ふざけ——ッ!？」

「おや、すみません。どうやら力加減を間違えてしまったようです」

俺は兵士の鎧の隙間にナイフを突き立てる。声も出ないよう既に猿轡を噛ませている。叫び声なんて出されたら困るからな。俺は猿轡を外す前にもう一度言う。

「私の質問に答えるだけでよろしいのです」

その言葉に兵士は黙って頷く。最初から大人しくすればいいものを・。

「それでこの城の構造を教えてくださいませんか」

「あ、ああ」

俺は男が説明する言葉に頷いていく。まあ魔法で此奴の考えを読んでいるから嘘をついたら即殺せる。

「ふむ、ありがとうございます」

俺はそう言うのとナイフをしまい背を向ける。兵士はそれを隙有りと思ったのか剣を抜こうとする。無駄な努力お疲れさん。既に男の首は切り落とされ全身は火達磨にされているのにな・・・。

俺はそのまま部屋を出ると城の中を歩いて行く。一応魔法を使って

認識されないようにしている。

「さて、次は作戦の内容ですか・・・」

どうするか。これは参謀やらが知ってるのだから殺したら作戦は変更されるかもしれん。はて、どうしようか。

「小型の盗聴器でもしかけるか？」

だがどうやって？そもそも服に仕掛けても今日作戦を言ってくれ
るか分からないのだ。ならば誰か籠絡するか？

「どうしようか・・・」

心を盗み見るか？だが記憶を消せるようなものは呪の魔法には無い
し、魔導具でも流石に記憶は創るのは難しい。

「みゆ」

「ん？」

ウサ公の鳴き声を聞きそちらを振り向くと何やらお偉いさんですと
自己主張している奴らがいた。

「良くやりましたねウサ公」

俺がウサ公の頭を撫でるとウサ公は気持ち良さそうに目を瞑る。随
分役に立つな此奴。取り敢えず一般兵よりも良い鎧を着ている大男
が一人になるところを狙って近くの空き部屋に連れ込む。

「動かないでください。質問に答えていただければ何もいたしません」

既に男が何をしようとも遅い。何かしようとした瞬間この男には死の呪いが掛けられる。

「俺に何の用だ」

「いえ、魔王軍との戦争があるそうではないですか。是非ともその際の作戦を教えてください」

生物つてのは声を掛けられた時相手が話したことについてどうしても考えてしまう。後は考えを読んでしまえば問題ない。

「・・・・・・・・」

どうやらこの男はある程度の作戦について聞かされていたようだが全てではない・・・と。

「俺がそれを言うんでも？」

「いえ、もう用はすみません。」

「な「御休みなさい」——かつ」

俺は男に手刀をいれ眠らす。起きた時にはこの会話は覚えていないだろう。

「魔法に頼るからこれが思い付かなかったのかもな」

この魔法に頼るのは治さないとな……。俺はそんなことを考えながらおっさんを寝かせ部屋を出る。

今のおっさんは中々上の役職だったようだし他も似たようなものだろうか。参謀は聞こうにも誰か分からんし、出来るだけ兵士は殺したくない。下手をしたらばれる。

「……流石にこれ以上は止めるか」

俺は城の中庭に出ると近くのベンチに座る。ウサ公も随分とはしゃいでいるようでそこら中を駆け回っている。そんな様子を見ていると不意にウサ公の周囲が暗くなった。俺はそれが気になり上を見上げる。

「――」

思わず息を呑んだ。そこにいたのは藍色の髪を首辺りで結っている男装の少女。このままだとウサ公を踏みつぶす。今俺達は誰にも認識されていながら少女はそこには何もないと思っている。

「くそ――！」

俺は悪態をつき疾走する。魔法は既に解かれている。少女も突然ウサ公が下に現れたことに驚いている。

俺は少女が踏みつぶすギリギリでウサ公を救出することに成功した。

「あ……。ぶなかった」

俺は木に勢いよく頭をぶつけながらも腕の中にいるウサ公を見て安堵の息を漏らす。どうやらそれは落ちてきた少女も同じらしくへたりこみながらも俺達が無事なのを見てほっと胸を撫で下ろしていた。

俺は立ち上がると少女へと歩み寄る。

「お怪我はありませんか、レディ？」

少女に歩み寄り微笑む。

「は、はい。すみません」

少女は立ち上がろうと脚に力を入れる。・・・が立てない。

俺は少女が頑張っている様子に爆笑しそうになるのを抑え何とかすすくと笑う程度にする。

その様子を見て少女はますます顔を赤くし拗ねたようにそっぽを向く。ふむ、からかうのもここら辺にするか。

「どうぞレディ」

俺は少女に手を貸すとおずおずといった様子で少女は俺の手を取った。未だに先程のことが恥ずかしいらしくその顔は赤い。

「活発なのですね。アリア王女は」

うん、見たことあるぞ此奴。城に入る前に何やら男を取り押さえたのを見たぞ。

俺の言葉にアリア王女はさらに顔を赤くする。

「幾ら男装とはいえ女性なのですからあまり無茶をしてはいけませんよ？」

俺はアリア王女に優しく注意を促す。うわ、自分で言ってる気持ち悪くなってきた。

「す、すみません。え〜と・・・」

「ああ、ナルカミ。と申します」

「ご迷惑をおかけしましたナルカミ様」

少女はそう言って頭を下げる。すげえぴったり45度のお辞儀だ。此奴お辞儀マスターか何か・・・。

「いえ、非は此方にありましたので。私こそすみません。使い魔が迷惑を・・・」

俺の言葉にアリア王女は腕の中にいるウサ公を見る。気のせいか王女はそわそわしているような・・・。

「抱いてみますか」

俺が王女に聞いてみると王女はその目を輝かせた。やはりまだまだ女の子なのだろう。

「い、いいのですか？」

「ええ、構いませんよ」

俺がそう言ってウサ公を王女に渡すと王女は目を輝かせながらウサ公を撫でる。ウサ公もその瞳を細める。俺的には電流流さなくて心底安心したぞ。ウサ公、良く分っているじゃないか。

「・・・かわいい」

王女はそう呟いた後はつとしたように俺を見る。・・・今のが聞かれたから恥ずかしいのだろうか。

「そ、その・・・」

「ええ、今は秘密にしておきますよ」

俺の言葉にほっとすると王女は再びウサ公を撫でる。

「普段はどのように振舞っておられるのですか？」

「騎士のこともあるので普段はなるべく厳しくしてます。だからこ
ういう風に動物を可愛がることなど無くて・・・」

「ああ、分かります。私も普段は大変ですよ」

主に街で殺したりするのを我慢したり面倒臭い奴らが何か問題起
さないか不安に駆られたりで・・・。

「ナルカミ様ですか」

「ええ、大変ですよ。普段から休まる暇もなくて・・・」

俺は深い溜息を吐く・・・。あいつら本当に色々起こしたよな。いや、
俺の運が無いのか？

「私も勇者の訓練や友人の毒舌で・・・」

王女も深い溜息を吐く。どうやら俺と同じらしい。何だろうか、妙

な仲間意識を感じる。

「ナルカミ様はどのような用事でいらしたのですか？」

「いえ、友人に会いに少し・・・後は観光などもありますね」

「そうですか。どうですかこの国は」

「と、いいますと？」

「この国は魔族を忌み嫌っています。その昔からの考えは民衆にも浸透し変えるのは難しいでしょう。他の国を統括しているということもそれに一役買っています」

「・・・」

「魔族達を受け入れている国では皆どの様な顔をしていますか？」

「・・・この王女さんって魔族を嫌わないのかねえ。王女は真摯な目で俺を見つめる。」

「ここに住む方々と同じですよ。皆家族がいて恋人がいて、いい笑顔をしていますよ」

「・・・そうですか」

王女はそついうとウサ公を放す。

「ナルカミ様、今宵はとても為になりました。ありがとうございました。」

「いえ、王女様の為になったのでありましたら私も光栄です」

「アリアと、私のことはアリアとお呼びください」

少女は微笑む。

「ではアリア様と」

少女は様づけに少し不満なのか唇を尖らせるが直ぐに笑顔になる。

「では失礼します。本当にありがとうございました」

「いえ、此方こそ」

「貴方もね」

「みゅ！」

俺とウサ公に別れの言葉を言ってアリアは戻って行く。王女様も色々と考えているらしい。ま、敵だから戦う時は容赦しないけど・・・
・たぶん。

俺はアリアが去ると魔法で城を出て宿へと向かう。ギリギリだが部屋は空いていて取ることが出来た。貴族の格好をしているから少しだけ宿の人は緊張していたが話している内に普通に接してくれた。まあ明日にはこの国を出るから多少の注目は問題ないだろう。

俺はウサ公の毛繕いなどをすると布団にもぐった。久しぶりの布団は今迄にない程快適に感じた。

正直昨日の件は失敗したのかもしれない。

「おはようございます」

「・・・ええ、おはようございます」

何故宿の前にアリアがいるんだろうか。おい、クイックセーブ何処だ。巻き戻せ。もしくは時間を吹っ飛ばせ。取り敢えずあいさつはしておく。・・・場所変えようか。

「アリア。少し此方へ」

「え？ああ、はい」

首を傾げるアリアの手を掴むと場所を変える。王女の割に何故こういう時だけ視線を気にしないのか・・・。
なるべく人目が無い場所に連れてくると用件を聞く。

「どうしたんですかこんな朝早くに・・・」

「いえ、観光と言っていたので案内をしようかと・・・」

といっても特に何かあるわけではないんですけどね。とアリアは苦笑する。

ミスった。まさかこう来るとは・・・。神はそんなに俺に不幸というものを与えたいのか？Sか？Sなのか？

「で、ですが騎士の方や仕事があるのでは・・・」

「問題ありません。緊急の物は昨日全て片付けたので」

何てこつたい。優秀なものも困りものだぞこれは……。

『マオ、聞こえてるか』

『むゝ……何なのじゃあ？帰って来るのか？』

『いや、逆だ。帰るのに時間掛かる。以上』

それだけ言うとマオの返答も聞かずに念話をきる。あまり怪しまれたくはないんだよ。

「……では案内、よろしく願いします」

俺が一礼するとアリアもその顔を輝かせ笑う。

「はい、お任せ下さい！」

……どうしてこうなったのだろうか。俺は天を仰ぐが当然答えてくれる者はいなくなただ太陽が俺を馬鹿にするように輝いているだけだった。

アリアの案内は的確で非常に分かりやすかった。まあ王女がいるのだから周囲の視線は凄いいことになっているのだが……。どうやらアリアが異性相手に無邪気に笑っているのは珍しく皆驚いていた。というかアリアがない時におばさんが教えてくれた。男相手に気を張ってるのは何時何があるか分からないからねえ。

「……だとしたらアリアは俺の何処を見てこんなに無邪気に笑ってるんだ？こんなウソを塗りたくった奴の何処を……」

俺はウサ公を撫でながらふとそんなことを考えた。ヒトの気持ちと
いうのは良く分らないな。

俺がウサ公を撫でているとアリアが俺を見ているのに気が付いた。

「……？どうかしましたか？」

「い、いえ。何でもありません！！」

そう言つてアリアは掌を胸の前でわたわたと振る。

考えに没頭して話を聞いてなかったな。まあ重要なことじゃないの
だろう……たぶん。

「そうですか。では行きましょうか……」

「あ、はい」

俺の隣を歩くアリア。そのまま歩いているとふいにアリアが話しか
けて来た。

「あ、あの。少しお聞きしたいことがあるんですが……」

聞きたいことねえ。多分ばれては無いと思うから問題ないと思うが・
・・。

「何でしょう？」

「ご迷惑でなければ、その外のことをお聞きしたいのです」

もじもじといった音が聞こえそうなほどアリアは照れ臭そうに言う。何だかんだ言っても近隣諸国以外は行ったことはないのだろう。俺はそれを承諾すると適当な店に入り外の話をしていた。

「……平和だ。敵陣だと言うのに平和すぎる。味方陣営より敵陣営にいる方が平和ってどういうことだ？」

「おい兄ちゃん。お話し中済まねえな」

前言撤回。何処に行こうと俺に平穩は無いらしい。

「……ノーレン」

どうやらアリアの知り合いらしい。というか此奴がノーレンか。ノーレン・ウィ・ヴィスカヴァル。この国から一番近い国であるヴァローナ王国の勇者。元は傭兵だかだったらしいがヴァローナ王国に忠誠を誓い勇者になったらしい。

「これはヴィスカヴァル卿。私共にどのようなご用件でしょうか？」

俺の言葉にヴァスカヴィルが此方を見る。

「あ？お前会ったことあるっけ？」

「いえ、貴方は有名ですから」

特に風評などは気にしない人物らしい。てか血の臭いがすげえな。

「何処かで戦闘でも？」

その一言にヴィスカヴァルは訝しるように俺を見る。

「何でんなこと言うんだ？」

「いえ、私少々鼻がいいもので貴方から血の臭いがしたものですから」

その言葉にアリアは少し驚きヴィスカヴァルは、ほうつと俺を品定めするように見る。

「デメエ武の者が……。いや」

ヴィスカヴァルは自分の言葉を否定するように一度言葉を区切る。

「デメエ何人殺した？」

その眼は猛禽類そのものとも言えた。絶好の得物を見つけたかのような眼。

刹那、銀の軌跡が見えた。

「……………何をするのでしょうか」

俺は放たれた短剣をナイフで弾く。

「いや、……………何でもねえ」

ヴィスカヴァルは益々笑みを深めて言う。・・・おもしれえ、殺すぞクソが。

「の、ノーレン！！貴方は突然何をするんだ！！」

今の状況を理解するとアリアは怒った様子で席を勢いよく立ちヴィスカヴァルに詰め寄る。

「あ、貴方は敵でも無い者に剣を向けたのだぞ！その意味が分かっているのか！！」

「めんどくせえ王女様だな。あいつが防げたんだから問題ねえだろうが」

その剣幕にヴィスカヴァルは面倒臭そうに答える。

「そういう問題では「いえ、いいですよアリア様。私は気にしませんので」——で、ですが此奴はそれ以前に——」

「あいつも良いつつてんだからいいだろ？」

「お前が言っな！」

俺は席を立つと二人に一礼をする。

「申し訳ありません。そろそろ出国しなくてはいいけませんので・・・」

俺がそう言つとアリアは気を悪くしたと思ったのか慌て、肩を落とした。

「そんな肩を落とさず、気を悪くした訳ではないので。只予定が詰まっています。そろそろ出国しなくてはいけないのです。本当に申し訳ありません」

俺がそう言つとアリアは先程とは違うことになつくりしたのかシヨボンとした様子で肩を落とす。

「そうですか。・・・ではまた今度、もう一度会えることを楽しみにしております」

アリアはそう言つと笑つ。次に会うのは戦場か屍かもしれんがな。

「次会つたら殺す」

「・・・殺せるものならば」

隣を通る時際にヴィスカヴァルが言つた言葉に俺は笑つて返す。アリアには聞こえない程度の声量だった為聞かれたということはないだろう。

アリアはヴィスカヴァルから何か言われたのだろう。俺は二人とそこで別れ宿にある荷物を取ると門へと向かう。服装は既に黒のシャツズボン、それにコートを着た状態になっている。流石にあの服装で通るのは拙いだろ。

「あゝ・・・敬語は疲れた」

精神的に何かこう・・・分かるかねえ。まあ、あれだ。あれなんだよ、うん。

落ち着こうとウサ公を撫でると俺は倉庫からバイクを取り出す。門

から大分離れてるしばれることはないだろう。俺はバイクに乗ると走らせる。

「……随分楽しめそうな輩がいるじゃねえか」

出来るならヴィスカヴァルと戦いたいが……。

俺はそんなことを考えながらウサ公と共にバイクを走らせた。

あの森にも寄ったがウサ公の仲間に出会うことはなかった。山賊や魔物、五人組の死体は俺が回収しといたので問題ない。肉の方は獣共が食ったのだろう骨だけだった。

「しかし此処は人気なのか？」

俺は茂みに隠れながら目の前の状況を見る。そこにはトロールの群れと戦っている冒険者のパーティーがいた。

「……ほう」

その様子を見ながら俺は眼を瞬かせる。中々いいチームのようだ。後衛は少なく前衛が少し多いが常時二人は後衛を護るように立ち回っている。それぞれが安心して戦っている。

「……七人か」

俺が今迄見た冒険者の中では最も多い人数だ。というのも人数が多い程報酬や素材の分割が減るし面倒臭いしで色々大変だからだ。

「ここら辺はトロールが多いのかね」

それとも群れがここらにあるのか。まあどちらにしろ関係ない。

「みゆ!!」

「どうしたウサ公。・・・あ？」

俺がウサ公が示している方向を見るとそこには此方に向かって来ているトロールがいた。

「・・・面倒臭いな」

正直今は殺すのが面倒臭い。それにここで暴れたら向こうの冒険者にばれるかもしれない。

かといって此处で逃げようにもウサ公もいるし木が多くて全力疾走は出来ない。てかトロールがでかいのが問題なんだよな。

俺は先ずその場から離れようとトロールの注意を引き付けながら走って行く。ウサ公は既に定位置と化している俺の肩に乗っている。

着かず離れずその距離を保ちながら十分に離れると俺は奴を見る。

俺が止まったことによりトロールはそのままの勢いで離れていた距離を埋める。

「形無き略奪者」
シエロシニア

久しぶりの魔剣。魔剣は散弾の様に飛び出し迫っていたトロールの体を蜂の巣にする。でかい鳴き声を出される前に殺すことが出来たのでお仲間は呼ばれることなく殺すことが出来た。

先程の場所に戻ると冒険者の姿はなく。そこには体の一部を剥ぎ取られたトロールの死体とそこに群がる獣の姿だけがあった。

取り敢えず獣とトロールの死体を回収した俺はもう用は無いと森を出てバイクを取り出した。

「よし、これからお前は俺の家族だからな」

「みゆう」

俺はウサ公の頭を撫でながらそう言っているとバイクを発進させる。中々面白い旅だったな。これから起こることを考え俺は高揚感に包まれながらウサ公と共にその場を走り去って行った。

「まあ、じゃろうな」

マオの下に着き成果を報告した俺にマオはそんなことを言う。

「……それより、変な状況にはならなかったじゃろうな」

俺を疑うようにジト目で見てくるマオ。

「いや、特にはしていない……」

変な状況というかそうしてからぶっ壊しまくったし……。

「……あ」

俺の絶叫に流石にマオも驚いたようだ。少し眼を見開いている。だがその目も次第に細められ面白いものを発見したような目になっていく。

「きょーやー」

猫の様に俺に抱き着き甘い声で俺を呼ぶマオ。ハッキリ言おう。俺今死にかけてる。此奴こんな天使のような笑顔のくせして再生してた俺の半月板に衝撃加えやがった。再生のお陰とさっきので感覚が麻痺してるお陰で痛みは無い。

「何だ悪魔」

「悪魔じゃなくて魔王だよ」

笑顔で即死級の一撃を放とうとするマオ。ごめんなさい止めてください。流石にそれは拙い。

「で？何があつたの」

腕を振りかぶった状態で俺を問い質すマオ。これは拷問か尋問だと俺は思う。学が無いからどっちか明確な違いは分かんが。

「・・・あれだ王女にウサ公潰され掛かったり王女と街歩いたり、勇者に短剣投げられたり——」

俺が言っているとマオがその拳を俺の腹に振り下ろす。いや、上半身と下半身千切れたんだけど……。まあ千切れても再生するし汚れもマオが浄化するから問題ないんだけどな……。

「女……じゃなくて、王女と街を出歩いているとは何事よ!!」

そこか？普通勇者に攻撃されたツツコムんじゃねえの？仲間が攻撃されたんだぞ？

「どういうこと！何で偵察に行ったのに何で女と街を歩くのよ!? 吐け、吐けー!!」

マオが色々と凄い。何かこう何かが音を立てて崩れていく音がする。この状況をどうにかしたいので俺は取り敢えずそうなった経緯を話す。他に何かあるわけでもないから問題はないだろう。

「……何故？」

「キョーヤ、酷い。浮気、許さない」

「この場で首を刎ねてやるのじゃ!」

俺の首に添えられる氷の剣とそれと正反対に突き刺さる怒りに燃えた二人からの視線。いや、俺悪くなくね？何も問題起こしてなくね？

「あれだ、これは冤罪だ。至急弁護士を呼べ。俺は無実だ」

「弁護士が何かは知らぬが絶対に主は無実ではない!!」

マオの言葉に賛同するようにハクも首を縦に振る。いや、絶対俺無

実だから。悪くないから。

「キョーヤ、言い訳は見苦しい」

「これは正当な発言だろ。おかしい、絶対にお前らがおかしい」

「此处では乙女が法律じゃ!」

・・・乙女。

「お前ら乙女つてと——がふっ!!?」

発言しようとした俺を二人が殴る。くそ、しまった。まさか歳のことを口に出すとは・・・。

「勘弁してくれ。後で言うこと聞いてやるから」

首を落とすとか勘弁してくれ。痛い、此奴らは絶対にただ刎ねるだけじゃ済まさないだろ。てかハクの剣ってこれ切断したら俺の首凍らねえ?

「では判決、無罪」

「うん」

「早っ!」

自分で言うておいて何だが早いだろ!?あまりの早さについ口に出しちゃった。取り敢えず拘束を解かれたので俺は手首を摩りながら二人を見る。

「では我らの言つ事を聞くのじゃぞ？」

「聞いてね？」

先程の怒りが嘘に思えるほどの笑顔。やばい俺女性不信に陥りそう。怖すぎる。

「はいよ、分かったから。で、何すりゃいいんだ？」

荷物持ち位で処刑を免れるんだ安いもんだろ。そんなことを考えていた俺はどうやら甘かったらしい。いや、此奴らのことだからと高を括っていた。

「この前出来なかった夜「そっぴや俺やることあったわ」——逃げでないぞ響夜」

帰ろうとする俺の首を掴み180度回すマオとハク。今首が死んだぞ？

「・・・キョーヤ、約束は約束」

「いや、したが期限なんて付けなかっただろ？」

「では二回目があるということじゃ」「いやあ、そう言えば期限あったな」——・・・流石にそれは傷付くんじゃぞ？」

「じゃあ私は何回d」「ごめんなさい。勘弁して下さい」——・・・」

全力で謝る俺。アリアの礼を見て良かった。今の俺の礼は完璧なものだっただろう。そう自負できるほど綺麗な一礼だった。

「何でもいうことを聞くんて言つてウサ公！外へ散歩に行くぞ！！」「みゆ！」――・・・」

俺は二人が動き出す前にウサ公と共に港街へと転移する。ヘタレ？何とでも言え。断ると言ったら断る。俺は何が何でも逃げ切つてみせる。

街の中を走り出した俺達の背後から二人の声が聞こえた気がした気のせいだろう。・・・うん、気のせいだ。

久しぶり（？）の街は今迄にない程スリルがあつた。

当然逃げ切れるわけもなく翌日取り押さえられたけどな・・・。

危険と出会いと死刑宣告（後書き）

感想、批判、意見、評価などがありましたらお願いします。

はい、h i m a m eです。今回、響夜が最後の方頭のねじが抜けかけてます。まあ彼なりに色々と考えている為全力で拒否ということです。後、いじるためにも・・・。

今回、書いている時ふいに見たら10000字を超えとかいいうことが起きました。最初は6000位でやめようと思っていたのですが何時の間にやら・・・。

分けようかとも思いましたがこのまま投稿しました。所々おかしいところがあればそれは書きなおした時の影響などなので大目に見てください。

開幕する前の舞台の裏方。戦争はそう簡単なものじゃないよね（前書き）

「おいおいおい！神様も粹な計らいすんじゃねえのオ！？」

b y 響夜

「・・・ああ、何だか良いことがありそうな予感がすんなあ」

b y ノ

ーレン

開幕する前の舞台の裏方。戦争はそう簡単なものじゃないよね

「ほれ次じゃぞ！」

「氷獄」

「火葬祭！」

マオから放たれた無数の土槍を俺とハクは迎撃する。お互いの魔法の属性が反対だから結構魔力を調節させるのが難しい。

次々に迫りくる土槍を俺達はぶつかると瞬間だけ魔力を爆発させて破壊する。俺の場合はハクと違い炎を爆発させないと破壊できないから威力の調節が難しい。

「ではこれじゃ」

そう言つてマオが創るのはゴーレム。全身が土で出来たものだ。

「・・・・・・・・」

ハクは氷槍を出現させゴーレムを貫くがゴーレムの体は周囲の土で体を再生させる。

「ぶっ壊れる！」

俺はゴーレムを殴りつけると同時に炎を爆発させる。それによつてゴーレムの上半身と下半身が吹き飛ぶがまるで何事もなかったかのよう再生する。

「おいおい」

これ神器か魔剣使わねえと俺倒せなくね？俺はハクとアイコンタクトをとるともう一度炎を爆発させゴーレムを吹き飛ばす。

「凍てつけ」

再生しようとするゴーレムにハクが氷槍を放ちその全身を凍らせる。これでもうこのゴーレムは再起不能。流石にもう再生はしないだろう。

「で？次は何だ？」

俺が座っているマオに問い掛けるとマオは腕を組んで悩む。

「ここまで早く倒すとは思っていなかったからのう。・・・あ」

マオは何か閃いたのか俺達を見る。その目は俺の半月板を破壊した時の目と同じだ。つまり

「・・・碌なことにならねえだろ」

「・・・うん」

俺の言葉に賛同するようにハクも首を縦に振る。そんなことを言っているマオの魔力が膨れ上がる気配がする。

「——」

「汝、理を外れし異なる者よ　その魂は海より深く　その身体は空より広く」

マオの詠唱が進むにつれ俺達の周囲の景色が歪む。ただ何となくだ
がこの感覚は倉庫を使う時と似ている。だが何よりも感じるのは――

「その力は破壊　総てを壊す原初の魂　さあ迷える子羊よ今この瞬間
我は解き放たれる」

これはマズイ！！

走り出す俺。だがマオの詠唱は既に終わり周囲も変貌していた。

「この場なら我が暴れても問題ない」

笑顔で言うマオ。無邪気な笑顔だがこれは最早生物の出来ることではない。周囲は荒れ果てた荒野になり草も木も、そもそも生命という物の気配を感じない。

「空の魔法。その終極と言っても良い術じゃ。これを使えるのは世界で十人もいないじやろう」

俺が空の魔法を使えるからだろうか。感じ取れる。これの危険度が、これに辿り着くまでにどれ程年月が費やされるのかも。

俺の隣にいるハクもまたこの魔力を感じ取って一言も話すことが出来ない。それほどにこれは完成された魔法。せかい

「では行くぞ」

俺達に放たれる言葉。

「——は？」

次の瞬間には俺は宙を舞っていた。今の状況も分からないし何をされたかも分からない。ただ俺は重力に引かれ地面に落ちた。

「——かッ！？」

受け身も取っていなかった俺は突然の衝撃に息を詰まらせた。だがその衝撃は俺を目の前の現実に取り戻した。

「・・・・・・・・！！」

追撃が来る前に立ち上がった俺が見たのは俺と同じく吹き飛ばされていたハクに凸ピンをしているマオの姿。

冗談じゃねえ。凸ピンで人を飛ばす？洒落にならねえぞ。おい。

俺はマオのことを完全に見誤っていた。死ぬ気で挑めば傷位は負わせられると思っていた。甘い、甘過ぎる！これが魔王、これがあいつの力。俺は気合を入れる。マオは俺達を殺すことなど羽虫を払うほどに簡単なことで羽虫が束になろうとも傷などつけられる訳が無い。

「神殺しの鎖！！」
グレイブニル

「我が軍勢よ！」
レギオン

「汝等の力その牙をもって目の前の障害を食い千切れ！暴風に潜みし獅子の牙！！！！」
シュトゥルムヴァイント・シュトースターン

マオに向かう無数の鎖と呪われた無数の弾丸。その鎖は獲物を追いかみ獅子の牙は獲物の喉元に噛み付く。放たれた弾丸はマオに触れ

止まった。

「な——！？」

止まったのだ。確実に当たったであろう物が全て。マオに触れた瞬間にまるで時が止まったかのように。・・・時？

「！——くそ——！」

全身に魔力を張り巡らし離れようとした瞬間目の前にマオが現れる。

「時、か」

「正解じゃ。尤もクラウンの様な者には油断してなければ聞かないだろうがの」

マオが俺を捉えてから既に何秒と経っている。だが唯一ハクの動きが遅く見えるということは・・・。

「体感時間」

「正解。ではご褒美じゃ」

それと共に放たれるか細い腕。だがそれはどんな生物よりも危険な一撃。

「——ぐっ、が・・・」

生き物が出せるとは思えない声。俺はその一撃で四肢が爆散し吹き飛ばされる。悪魔の心臓が（グリモア・ハート）が痛みが来る前に治してくれるのが幸いだ。もしそうじゃなかったら死んでいた。

「氷獄！！」

その声が響くとともにマオの足が凍らされ身動きが取れなくなる。こんなもので止まることはないだろう。だがほんの一瞬とまればそれで十分。マオは迫りくる氷槍に襲われた。こんなものではあいつは止まらないだろう

「燃やしつくす業火の世界 それは常世全てを焼き尽くし 貴方が愛する全てを燃やす」

「ああ燃やせその総てを ああ焦がせこの我が身を ただその想いのままに荒れ狂え狂気の焰」

「焼き尽くす劫火の剣」
レーヴァテイン

降り注ぐ劫火と赤く輝く剣。それは真下にいる獲物^{マオ}へと落ちていく。瞬間鳴り響く轟音と襲いかかる熱風。ハクは射程範囲内から逃れているから問題ない。あとはマオだが・・・。

「・・・だよな」

そこから起きたことは予想出来ていても認めたくないこと。凍ったのだ。総てを燃やす炎が。爆心地を中心として。

「勝てる気がしねえ」

俺は剣を創り出す。

「うむ、今のは良かったのう」

まるで何事もなかったかのように出てくるマオ。人の心をナチュラルに折ってきやがる。ハクの方も足止めと氷槍にそうとう魔力を込めたのだらう。既に立つこともままならないようだ。

「ハクもそろそろ限界のようだし終わりにするかの」

その言葉が聞こえ俺の意識は暗転した。

「・・・・・・・・・・」

寝起き、最悪。体中が痛い。なにやらされた？全身がボロボロになる程の攻撃を受けたのか？どうやら特に問題なく宿に戻って来たらしい。

「っ・・・・・・・・てえなあ。」

俺は起き上ると身体を確かめる。取り敢えず特に問題はない。それを確認すると部屋の扉を開ける。廊下はひんやりとし外の暑さを感じない。俺は一回に降りると誰かいらない確認する。

「あ、起きましたか」

「ようロシエル。久しぶり・・・か？」

どうやらロシエルしかないらしく。あいつらは何処かに行ったようだ。畜生、冷たい奴等め。今の時間を聞き飯を食うと俺は宿を出た。街の中は何時もより人が少なく聞いてみるとどうやら魔王と聖王の戦争で人通りが少ないようだ。まあ、誰だって巻き込まれたくはないだろうからな。教えてくれたおばちゃんにれ礼を言って俺は城へ転移する。

「・・・相変わらずだな」

城の中は魔族の奴が多い。多いというのはマオの城には魔族以外にも一応いるからだ。構成としては基本的に長寿の奴らばかりだがな。今は戦争もあるからか全員訓練や警備に精を出している。俺はその様子を横眼で見ながらマオの部屋へと向かう。街にもいなかったから多分ここにいるのだろう。

「マオ、開けるぞ」

「響夜か。入ってよいぞ」

その返事を聞いて俺が扉を開けるとそこにはハクの他にクソ騎士や部隊長の姿がある。

「全員ここにいたのか」

「うむ、先程聖王が軍を動かすと情報が来ての」

成程。通りで全員集合とかありえねえことが起きてんのか。扉を閉めながら俺もハクの隣に立つ。

「それで、どうだったのです」

マオの前一番右端にいる部隊長のガルドスが聞く。容姿はスキンヘッドのおっさんだ。隊長の中じゃ二番目に年取ってる奴だ。その分戦というのを長く経験し中々の腕前だ。

「今、ヴァローナのこの勇者が先発隊として出発したそうじゃ」

「……あいつか。」

「で？そのまま進める訳じゃねえだろ？」

「無論迎え撃つ。今回はその為にお前達を呼んだのじゃ」

あいつが来るのか。……おもしれえじゃねえか。

「……俺が行く」

その言葉に周りの奴らが俺を見る。マオも俺に厳しい視線を送る。

「響夜、今回は遊びではないのじゃぞ？勝算があつてのこと発言か？」

「ああ。あいつに勝ってやるよ。任せとけって」

というか他の奴らにあいつを取られたくねえ。折角あいつが俺を殺すとか言ってくれたんだ。俺も殺しに行くべきだろ。

「……良いじゃろう。じゃが恐らくこのまま戦うことはないじやろつな。あ奴らも真っ向から戦って勝ち目があるとは思っていないじゃろつ」

だろうな。数はほぼ同じ。だが兵一人一人の實力は向こうより此方が高い。尤も勇者や聖女つつう化け物もいるんだが……。

「……戦力はほぼ互角ってか？」

「いや、此方の方が上じゃろうな。……主が札を総て使えばじやが」

何で知ってやがる此奴。くそ、妙に勝ち誇った顔すんじゃない。いらっとするんだよ。

「キョウヤ、お前まだ何か持ってるのか？」

ガルドスが少し驚いたように俺を見る。

「生憎、俺はお前ら見てえに才能も實力もねえんだよ」

非力で経験も浅い。そんな状態で勇者と戦ったら殺されるわ。俺は自殺志願者じゃねえんだよ。何時の間にか自殺行為をしていることはあるが……。

「使う代わりに配置、俺がやっていいか？俺の持つてる札は味方ごと巻き込む奴なんだよ」

流石にそれは許容出来ないのかマオは少し渋った顔をする。だが実際問題味方がいたら俺は札を使うことが出来ない。むしろ近くにいるのは邪魔になるだけだ。

「いいんじゃないか魔王様。此奴が札を使えばある程度の戦力は埋

められるんだろ？」

「無論。決めるのは我々もその配置を見てからですが……」

思わぬ助け舟。ガルドスとクソ騎士が俺の意見に賛同してきやがった。ただしクソ騎士。テメエの賛同とか鳥肌超えて蕁麻疹ものだから止める。ありがたいが止める。

二人からの推薦にマオは他の奴らを見るが特に反対もないのか反論する奴はいない。信頼されてんのか配置を見てからでもいいかと思つてんのか。生憎、頭ぶつとんだ様な配置にしかしねえけどよ。

「……分かった。その配置を見てから考えよう」

第一段階はクリア。俺は思わず顔をニヤつかせた。

「――」

一閃、ただそれだけで私の前で構えていた兵士が倒れる。私はその様子を見て一息吐く。

ぱちぱちぱち

私が剣を納めると拍手をしながら近付いてくる影。私はその人物を見た。

「いやあ、やるねえアリア王女様。ここまで戦いが得意な王女つてのは中々いないぜ？」

ノーレン・ヴィ・ヴィスカヴァル。そういえば此奴は先発隊に選ばれていた筈。

「そんな怖い顔すんなよ。美人が台無しだぜ？」

肩を竦めてやれやれといったように言うノーレン。どうやら無意識に彼のことを睨んでいたらしい。尤も悪いとは思わないが。

「まだあの男に剣を向けたの根に持ってるのか？」

これだから女は……。と呟くノーレンに思わず私は語気を強める。

「貴方は自分がしたことに責任を持ちなさい！彼は貴方に危害など加えていないでしょう！」

「あゝはいはい。それは耳にタコが出来るほど聞いたよ。そんなにあいつに惚れてんのかい」

「ほ！？私は貴方があのようなことをしたからこう言っているのです！勝手な解釈をしないでください！！」

「分かった分かった。お前は別に惚れてない。良く分ったから少し落ち着け」

まだいいことはあったけれどもここでは辺りにいる兵士にも迷惑だろう。そう考えた私はそれ以上彼に何か言うのをやめる。

そう、この男は彼、ナルカミ様に危害を加えようとした。それも面白いという理由で。勇者としても人としても決して許されるものでもないだろう。

「で？結局あいつがどこの奴か分かったのか？」

そう、彼の容姿は目立つしウサギという特徴的な使い魔も連れていたから検問で何か知らないか聞いてみたが兵士たちも見たものの何処の者かは分からないと言っていた。従者も連れていなかったようだし・・・。

「ま、いいや。今回の戦争。中々楽しめそうだぜ？」

私が悩んでいるとそれを遮るようにノーレンが言う。その言葉の意味が分からず私は首を傾げた。

「魔王と戦えるかもしれないからですか？」

「いやあ、それも楽しみっちゃ楽しみだが・・・」

彼はそこで言葉を区切ると猛禽類の様な目を細め不敵な笑みを浮かべる。

「それ以上に楽しめることがありそうなんだよ」

ま、あくまで勘だが。そう言うとな彼は去っていく。結局彼が私に何を伝えたかったのかは分からない。

「私も気を引き締めなくては・・・」

先発隊が出たら私の部隊も出発しなくてはいけない。父上は心配していたがやらなくては・・・。

「出来るなら・・・」

どうか人間と魔族が手を取り合えますように……。無駄だと分か
っていても私はそんなことを願ってしまった。

夜が明けノーレン率いる先発隊は出発した。

開幕する前の舞台の裏方。戦争はそう簡単なものじゃないよね（後書き）

感想、批判、意見、評価など良かったらお願いします。

評価ありがとうございます。見てみたら10ポイントも増えて驚きました。

お気に入りにしてくれた方もありがとうございます！やはり増えるのを見るとつい喜んで舞い上がってしまいます！

お気に入りがだいたい話数・1か2なので「・・・何か法則でもあるのだろうか？」などと液晶を見てつい呟いてしまいました。・

・恥ずかしい。

お気に入りが話数を抜けるよう頑張りたいのでこれからもこの作品をお願いします！

戦争開始。・・・気に入らねえなデメエ（前書き）

「・・・・・・・・」

b y 響夜

「・・・降伏してください」

b y アリア

眠いです。長いです。何時もより拙いです。（――）o

戦争開始・・・気に入らねえなデメエ

「・・・・・・・・来たか」

俺は魔力で強化した視界に映った影を見て呟く。

周囲に味方の影は無い。最も近い部隊でも此処から10kmは離れた場所に展開されている。ここに来るにしても急いで一時間はかかるだろう。敵の襲撃や罠を警戒しながらを考えると二時間、悪くて四時間程だろう。

つまりこの10kmは俺が全て守らなくてはいけない。まあ当然それなりの準備もしているから問題ないだろう。

ヴィスカヴァル率いる先発隊が俺達の軍と衝突してから18時間が経過した。この陣形を採用する代わりに俺は先発隊と戦うことは許されなくなった。最初此方は勇者という化け物によって苦戦を強いられていたが数の力で何とか痛み分け両軍共に撤退した。そして両国の丁度中心に当たる場所で再び激突しようとしている。あちらさんは増援が来たらしく合流。此処の守りは俺一人、故に罠だと分かっている。いようと物量の差で敵は此処を突破するしかない。他の所なんて指揮最高潮戦力も相当なものになっていくからな。考えてみる暑苦しいおっさんたちが鬼の形相で迎え撃って来るんだぞ？俺なら見た瞬間に回れ右して逃げ出すぞ。それに長引かせたらマオが来るかもしれないからな。

「それは俺も同じなんだが・・・」

周辺の部隊ももうすぐ交戦するだろう。救援はなし。これで第二段階はクリア。

「さあ、存分にやり合っじゃねえか」

俺は迫りくる軍勢を前に笑った。

「！ヴィスカヴァル卿！！」

「あ？どうしたよ？」

ノーレンは前を走る部下の声を聞き馬を止める。魔王軍はどういうことか此処だけを開けて軍を展開させていた。自分達を包囲して袋叩きにするつもりなのか……。罾があるかもしれないと思っていたがその様子もなく包囲する前に抜けられてしまったらう。

そのことを奇妙に思いながらもノーレンは前方を見る。だがそこには何もない。

「・・・・いや」

いる。一つだけぼつんと影が見える。そしてその姿を見てノーレンは笑った。

「成程。テメエはそつちか・・・」

何時か殺してやると言ったがこつも早く殺せるとは思っていなかった。ノーレンは薄く笑い全軍に指示を出す。

「野郎ども！！あちらさんはお一人で俺達を止めるつもりらしいぜ！！！！？」

その言葉に兵士たちは目をむきその姿を見るや否や笑いが広がっていく。

「（どうやって止めるつもりだあ？）」

この場所を一人で任されると言うことは相当なものなのだろう。ノーレンはそう考えながらも隣にいる人物を見る。

「良かったなあ？お早い再会だぜ？」

隣にいる騎士の少女。アリアはその唇を震わせている。顔も死人のように青い。

「ま、どうでもいいけどよ。戦争にそんな顔してる奴は殺して下さいつつつてる様なもんだぜ？」

少女からの反応は無い。ノーレンは肩を竦めると全軍を見回す。

「野郎ども！！行くぞ！着いて来やがれ！！！」

その言葉と共に駆けだす。続くように総勢五千を誇る兵士達が駆けだした。

兵士達が消えた大地にアリアはその従者である女性と共に立ち尽くしていた。

「……来たなおい」

じゃあおもてなしだ。

兵士達が向かってくる瞬間響夜を中心に地面が発光する。それは上からでないと分かりづらいが文様を描き魔方陣となる。そして発光が治まり異変が起きた。異常なまでに周囲の魔力濃度が上がっている。響夜は周囲にあるマナを全て魔力にし吸収しているのだ。

「おいおい、何だこりゃ」

その現象にノーレンはその笑みを深くする。

「（おもしれえ。俺達を本気で止める気が・・・）」

ノーレンは腰に下げてある剣を抜き迫る。

「ああ、どうかこの想いを消してくれ 私は貴方を愛してしまった 私は貴方に恋焦がれてしまった」

「この罪を、この卑しさを どうかこの身諸共食潰して欲しい ああ、貴方は誰よりも気高い孤高なる者」

「どうか、どうかこの鎖おもてを引き千切って」

「疾走する魔狼フェンリル！！」

「神器か！？」

その瞬間響夜を護るようにして炎が包む。そして現れるのは一台のバイク。だがその車体からは炎が溢れだし、まるで獣のような唸り声を上げている。響夜がアクセルを踏むとともに悲劇は起こる。

「噛み殺せえ！！」

速い！馬が遙かに遅く感じる程の速さ。ノーレンは本能で馬から飛び降りる。瞬間ノーレンの乗っていた馬と共に続いていた兵士が劫火に包まれた。

「散るがいい弱者よ。今ここにお前達が信ずる者はいない」

聞こえてくる声。ノーレンは上空を見上げた。そこにいるのは踏み殺さんと迫り来ている響夜の姿。そして疾走する魔狼フェンリルが地面に触れた瞬間、辺りは衝撃と共に火柱が立つ。

戦闘が始まって数分。それだけで300を超える者が死んだ。ノーレンはその劫火の中に立つ響夜を見る。

「よう、随分すげえの持ってんじゃねえか」

まるで友人にでも話しかけるかのような気軽さ。その声に響夜もまた笑って答える。

「だろ？」

その瞬間ノーレンは響夜の目の前にいた。

「死んじまえよ」

だがその攻撃を響夜は疾走する魔狼フェンリルを走らせ逃れる。

「ひやははは！！いくぜクソ共！これが戦争だあ！！！」

「ああ、愛しい貴方 私は貴方の全てが欲しい その声もその瞳もその魂も」

「どうかその身を私に委ねて 共に生きよう」

「枯れ落ちる荊の少女」
マイネ・リーベ

その言葉と共に無数の巨大な荊が地面を食い破り出現する。

流石と言ったべきなのだろうかその突然の襲撃に兵士たちは慌てながらも槍で突き剣を振る。だがそれはこの荊には愚策と言うほかないだろう。

「ひーぎゃあああああ・・・あ・・・あ」

枯れ落ちて行くのだ。まるで咲き誇った花たちの末路のように触れたものは枯渴する。肉も臓器も血液さえも奪い取り後に残るのは物言わない骸骨。その光景に響夜は目を輝かせる。

「く、ははは。こりゃあこええな。残り三千・・・六百つてところか？」

響夜は疾走する魔狼を走らせながらも次の詠唱へ入る。最初の一撃も枯れ落ちる荊の少女も全てはこの魔法の為の準備。
マイネ・リーベ

「愛しき者よどうかその目を開けてくれ 愛した貴方どうかこの手を取って この世界を君の愛で埋め尽くそう だからお願い目を開けて」

「例え骸であろうとも君の全てを私は愛そう ああ、踊ろうこの舞台で 皆で祝おうこの瞬間を！」

「死の舞踏！！」

周囲一帯を覆っていた魔力が骸となった死体へ吹き込まれていく。

「……とんでもねえことするな」

その状況を見たノーレンはそう呟くと身近にあった骸を消し飛ばす。この判断は正しかったと言えるだろう。

「死の舞踏」、終末観を表現する芸術的なモチーフの一つである。「死」を擬人化し死者と聖者が手を取り合って踊る様子を描いたものだ。そしてこの魔法もそれを再現したもの。呪の魔法により怨念を骸へ込め動かす簡易的なスケルトンと呼べるものだ。その力は術者の込めた魔力の分だけ上がっていく。

「足りねえ分は敵から持ってくる。こっちからしたら堪ったもんじやねえよ」

おまけに死ねば響夜の手駒となって動き出す。だが当然この魔法にも弱点はある。

「（保つのに魔力を供給し続けないといけないんだよな……）」

これだけの数を操るのだ。当然魔力も相当な量がもってかれる。その為のこの魔方阵でもあるのだが……。

「来いよ。殺してくれるんだろ？」

挑発、疾走する魔狼をしまい響夜はノーレンを見る。その手には想像形成で創られた二つのナイフが。
フェンリル

「ああ、今ぶち殺してやるからよお……!!」

激突する二人。だが真つ向から戦えば響夜が不利になるのは明白。よって響夜はその攻撃を躲しつつ隙を見つけ攻撃していく。だがその攻撃もノーレンに届く前に弾かれる。

「オラァ！どうしたどうした！！？こんなもんなのかよテメエの実力はよお！！！」

「んなわけあるかぁ！！！」

繰り出される風の刃を響夜は間に盾を創り出し防ぐ。結果は相殺互いの技がぶつかり合い消える。

本来なら形無き略奪者や他の神器を使えば互角以上の勝負が出来る。だがここでそれらを使うという事は自分の手の内を晒すと言う事。不利な状況で自らの手の内を晒せばそこにあるのは死という現実だけ。故にここで使うことは出来ない。

「――」

壊れたナイフを捨て新たに一つの剣を創り出す。

「ぽんぽんぽん。テメエは手品師か何か？」

「そんなところだよ！！」

ぶつかり合う剣と剣。二人は互いの剣を弾きながら距離を取り油断なく剣を構える。

「まったく、お前のお陰で内の姫さんが戦えなくなっちまっただろうが……」

「おや、それは大変ですね。まあ、戦う相手が一人減ったので此方としてはありがたいのですが・・・」

「その喋り方止める気持ちわりい。・・・で？テメエがここを一人で任せられるつつうことはだ」

ノーレンは剣の切っ先を響夜に向ける。

「テメエ魔王の側近か何かか？じゃねえとこんな場所は任せられねえだろ」

「・・・さあ、んなこと答えるとも思ってたのか？」

「全然」

瞬間、背後から迫るナイフを響夜は弾き落とす。

「何だよおい。復活してんじゃねえか」

「ホントだな」

響夜はノーレンを睨むがノーレンはただ肩を竦めて笑う。

「ま、これで三対一。正直サシの勝負がしたかったが・・・運が無かったか」

「・・・畜生」
ファック

響夜はそう吐き捨てると背後を見る。そこには第一王女であるアリ

アと紫の髪を三つ編みにした・・・

「・・・メイド？」

響夜はその姿を見て此処が戦場であることを疑う。戦場にメイド。全くの正反対に位置するような人物が目の前にいるのだとても信じられるものでないだろう。

「――」

ふと隣に立つアリアを一瞥すると彼女は持ち直したようだがまだ目の前のことが理解出来ていないらしい。いや、したくないと言った方が正しいのだろうか。

「（油断してんなら・・・！）」

響夜は手に持っていた剣をアリアへと投げる。その行動にアリアは慌てながらも対処するが響夜はその隙に駆けだしていた。

「させません」

その凜とした声とともに背後から放たれたナイフ。

「（速い！）」

その攻撃を躲し響夜はその場を離れる。だがメイドの女性は逃がしてくれないらしく降り注ぐナイフの雨を時に盾を創り時に銃を使い躲していく。

「つぶねえだろうが！！」

響夜は炎の蛇をメイドへと放ち、迫って来るノーレンを右手に持った剣で迎え撃つ。

「——ッ！」

ノーレンの一撃を防いでいると横から斬りかかって来たアリアを響夜は軍勢の^{レギオン}の一部を呼んで迎え撃つ。

「くっ！」

「ラァ！」

響夜はノーレンを弾き飛ばすと三人を一行にするように立ち回る。どうやら周りの死体と兵士達の戦いも膠着状態にはいったことから互角の勝負が出来ているのを見ると三人から距離を取るよう疾走する魔狼^{フェンリル}を呼び出す。

「ぶっ殺してやるよお！！！」

響夜はアクセルを踏むと加速する。

「おもしれえことすんじゃねえか！！！」

だがノーレンも風で自身の速度を上げ追い付けないまでも食い下がる。疾走する魔狼^{フェンリル}の速度は音速をも超えるだけの速度を持っている。その速度に食い下がるだけでも十分だろう。現に響夜も着いて来れていることに驚きを隠せないでいる。

「おいおい、お前ホントに人間か？」

右手で強化したデザートイーグルの引金を引く。だがその攻撃もノーレンへと当たる前にメイドのナイフで弾かれていく。

「訂正、化け物だお前ら」

響夜はその狙いをアリアへと変える。響夜は銃口をアリアへと向け

「——ふ！！」

「ハア！」

放たれた銃弾をアリアは右手に持った剣で横に一閃する。銃弾と剣がぶつかる鈍い音がし互いの影が交差する。

「・・・やるな」

とてもではないが先程まで茫然としていたとは思えない程の反応だ。響夜はその技量に舌を巻きながらも狙いはアリアから変えない。

「——」

再びの強襲。だが今度は右手の銃をしまい大剣を創ると疾走する魔狼フェンリルの加速を利用し飛び掛かった。

「派手に逝きな」

「貴方がですよ」

だがその間に割り込むようにしてメイドが現れる。響夜は剣の狙

いをメイドへと変えるとその手に持った大剣を振り下ろした。

「ハアアアアアア！！！！」

「くっ……——ッ！！！」

音速での加速と重力、そして大剣自身の重量と響夜の怪力を垂直で受け止めたのだ。何とか逸らしたが両手が痺れ暫くは碌に動かせないだろう。響夜は大剣を地面に削りながら切り上げる。

「吹き飛ばえ！」

「なあにテメエらで楽しんでんだあ！！！」

その大剣をノーレンが横から弾くと二人は距離を取る。

「くっそ！邪魔ばっかだなおい！！！」

響夜は左手にもう一本大剣を創り出す。今度は右と違った岩を削って造られたかのような巨大な物だ。

「……時か」

響夜はメイドを見ながら言う。時の魔法。どうやら時を止めたまま敵に直接攻撃することは出来ないようだがそれでも十分脅威だろう。

「何でこう厄介な奴らが纏まるかなあ」

技量は三人とも相当なもの。メイドは時、ノーレンは風、アリア

は分からないからこそ下手に攻める訳にもいかない。だが幸いなことに時の魔法は空の魔法と互いに相性が悪い。先手を取れば対応することは容易だろう。

「（メイドは空で応戦するとして、勇者は銃火器で一気に行くか・・。アリアは下手なことをされる前に潰す！！）」

これ以上やつても無駄に時間が浪費されるだけ。なら・・

「テンポ上げんぞお！！神殺しの鎖！！」
グレイブニル

響夜は神殺しの鎖グレイブニルを出現させると攻めに転じる。

「我が軍勢よ！！」
レギオン

更に後方からの呪いが掛かった銃火器による支援。響夜は魔神の観察眼を常時発動させる。

「——ち！何だこりゃあ！？」

ノーレンは神殺しの鎖グレイブニルを躲していくが後方からの一斉射撃に響夜へ攻め込むことが出来ない。メイドも時の魔法を使おうとするが周囲の空間を歪ませることで効果を半減させる。響夜は後方からの射撃がまるで見えているかのように躲しアリアへ近づく。いや、これは本当に視えているのだ。自らの銃火器がある場所を予測しそこから空の魔法で周囲の空間の状況を理解する。魔神の観察眼が無ければ響夜自身とうに死んでいただろう。

「ぶっ壊れちまいなあ！！」

響夜は左手に持つ巨大な石剣をアリアへと振り下ろす。

「そんなもの！」

アリアは剣を迫りくる石剣へ向けるとまるで受け止めるかのように構える。

「笑止！んなもんで、受けれるもんなら受けてみるお！！！」

振り下ろした石剣。誰もが無謀だと思える行為。だがアリアの魔力が急激に活性化するとともに

——ズガガガガガガガガアアン！！！！！！

まるで鉋石にドリルで穴を開けるかのような音。だが目の前で起きていることはまさにそれだ。水はどれほど堅い岩でも削って見せる。アリアは刃の部分に水の刃を創りそれを高速で動かすことで石剣を削り切ったのだ。

「（水か・・・畜生。相性最悪じゃねえか）」

炎は水によってかき消される。魔法の技量も自分より向こうの方が上。響夜はそこまで考えると石剣を捨て右手の大剣を一閃する。だがそれもアリアの持つ剣によって一刀両断。

「舐めんなあ！」

響夜は大剣をアリアへ投げ捨てると自らの相棒の名を呼ぶ。

「形無き略奪者——！」
ジェロシーア

響夜は現れた魔剣を握るとアリアへ振り落とす。彼女もそれを剣で受け止めるがその顔からは驚愕が見受けられる。響夜の持つ魔剣ジェロシア形無き略奪者には形が無い。故に切ろうと思っても剣は逆にその刃を呑みこむようにして水の動きを阻害する。

「何故！貴方は人を殺してそんな顔が出来るんですか！！？」

「……………」

「貴方のあの時の笑顔は嘘だったかのか！！」

「……戦争なんて殺して喜ぶようなもんだろ。敵は殺す。それで勝者は笑う。あんたが俺にどんなことを思ってたのかわかんねえ！！けどよお！」

「俺にも譲れねえもんがあんだよお！！」

「――」

響夜はアリアを吹き飛ばすと炎の蛇を創り出す。

「…………貴方のやっている行為は死んだ者達への侮辱だ！！」

「じゃあ何だ！死んだ奴を棺桶に入れて土に埋めるってのは優しさかア！？んなもんはテメエらが自分を傷付けたくねえだけの慰めだろうが！！」

「死んだ奴はもうそこにはいない。あんのは物言わねえ骨だろうが！んなもんはそこの石ころと変わんねえんだよ！！」

「——だとしても！」

「お嬢様！！」

響夜はその場から飛び退く。すると先程までいた場所に無数のナイフが突き刺さった。

「お嬢様。あの者の言葉を聞いてはなりません！」

そのメイドの制止も聞かずアリアは響夜に問い掛ける。

「——貴方に愛は！無いんですか！！」

「………ほざいたな小娘」

その言葉を聞いた瞬間。響夜から感じられる空気が変わった。先程までの人を馬鹿にしたようなものではない。それは間違いなく憤怒の感情。

「愛？貴様俺に愛が無いと言ったな・・・？」

「——」

放たれる膨大なさつき。今そこに立っているのは鳴神響夜の本心なのだろう。だからこそ恐怖した。まるで先程までの彼が嘘のように思える程の激情を見せているのだから。

「ああ、その言葉、後悔させてやる」

響夜の前にアリアを護るようにしてノーレンとメイドが立ち塞がる。響夜は日本刀を創り出すと駆けだした。

「ハア！」

「・・・・・・・・」

無言。だがその目は確かに憤怒の色が見える。響夜はノーレンが振り下ろした剣を受け流すと背後へ回る。だがその背後を護るようにしてナイフで切り付けようとするメイド。

「・・・・・・・・」

「「「な——！？」「」」

だが響夜はまるで防御を取ろうとせず逆に進む。結果、ナイフは響夜の右目に吸い込まれ刺さった。その光景に三人の動きが一瞬だが止まる。

「死ね」

その隙を逃さずに響夜は刀を振るう。メイドはギリギリで時の魔法を使ったが完全に躲ことは出来ず右足を負傷した。

「喰い殺せえ！」

響夜がアリアの眼前に迫ると同時にその言葉に今迄黙っていた魔剣が唸りを上げる。

「——！？」

死んだ。思わずアリアは目を閉じるが一向に痛みが来ない。アリアは恐る恐る目を開けるとそこには人ほどの大きさの光り輝く天使の姿がいた。

「・・・神聖・・・魔術」

アリアはその言葉を呟くと同時に理解する。これが誰のものなのかを・・・。

『皆さんそこから離れてください!』

焦った声が念話に乗って聞こえる。アリア達はその声を聞くと同時にその場を飛び退いた。

瞬間鳴り響く轟音みれば先程まで響夜が立っていた場所は光の柱に飲み込まれていた。

『大丈夫ですか』

その声の人物が丘の上に立っていた。白髪 of 髪と金色の瞳。あれは

「ミーナ済みません」

アリアはその人物が立っている場所まで後退すると礼を述べる。

「いえ、それよりも間に合って良かったです。今教会でも300人の信徒達が祈りと魔力を捧げることで全員の回復、及び強化を行使しています。魔王軍ともこれで互角に戦えるでしょう」

それより、と彼女は先程光が落ちた場所を見る。

「認めたくありませんがまだ死んでいないようです」

その言葉にアリアもまたその場所を見る。

「邪魔してくんじゃねえよ」

そこから現れたのは白髪紅眼の青年と同じく白い毛並と赤い瞳のウサギ。

「……………」

その姿を見てアリアは愕然とする。刺された場所も既に回復しており何よりあの一撃を防いだことが彼女に大きな波紋を寄せていた。

「アリア、此処からはノーレンとコウタが前衛の主として。貴方達は彼らのサポートをしてください」

その言葉に下を見ればそこには茶髪の青年の姿。

「分かりました」

アリアはそう言うと飛び降り響夜を包囲するように立つ。既に周囲の兵たちも満身創痍だったが援軍のお陰で何とか保ていた。

「……………」

響夜は神殺しの鎖を全員へと向け軍勢を再び呼び出し応戦する。
グレイブニル
レギオン

「ハア！」

浩太が響夜へ斬りかかろうとするさせまいと鎖が目の前伸びその一撃を防ぐ。響夜はその鎖を踏み台のようにして跳び包囲網から逃れる。

テンベスト
「災厄！！」

ノーレンはその手に持つ剣に魔力を込めると暴風を放つ。それは軍勢を崩壊させ神殺しの鎖の動きを鈍くする。

その隙に響夜へ肉薄し剣を振るうが響夜はそれを魔剣で受け止め弾くと同時に炎でノーレンを追撃する。それを振り切るとノーレンは風の鎌を響夜へ放つ。

フエンリル
「疾走する魔狼！」

その攻撃を呼び出したバイクで正面から碎き響夜はノーレンへ高速で迫る。

「させません！」

だがそれを封じる様にメイドは時を遅らせナイフを放つ。響夜はその攻撃を空間を隔離することで躲しそれ以上の接近を断念した。

「ハア！」

その響夜を追撃するように横からのアリアの一撃。響夜はその攻撃にギリギリ反応するがその瞬間を狙って聖女、ミーナからの一撃がくる。

「（・・・くそが！）」

響夜はその猛攻を防ぎながらも考える。どうやってこの状況を逆転するかを……。此方の攻撃も向こうの攻撃もそれぞれ直ぐに再生する。だが響夜は一瞬とはいえ魔力を消して再生に回さなくてはいけない。その分数の差も相まって追い込まれる。

右からの攻撃を受け流し真上から降り注ぐ光を神器で躲す。反撃の一撃をしようにもそれぞれが隙を埋める様に動き攻撃を封じる。

「ラア！」

「コウタ！」

アリアの言葉を聞いて響夜は思案顔をしやがて思い出したのか目を細めた。

「成程、テメエが向こうから召喚された奴か。日本人で助かったぜ。分かりやすい」

その言葉に浩太は目を見開く。

「な！？貴方は向こうのことを知っているんですか！」

「ああ、良く知ってるよ。俺も向こう出身だからな」

その言葉は浩太に更なる衝撃を与える。

「じゃ、じゃあ貴方もこっちに召喚「ちげえよ。俺は自分でこっち来たんだ」——な！？」

その動揺した隙を逃さず響夜は浩太を蹴り飛ばした。

「っ！」

響夜は背後からの攻撃を感じ取るとその場から飛び退く。

「降伏してください。今なら間に合います」

確かにこの状況は最早負けが決まったと言っても良いだろう。この状況を覆すなど奇跡でも起きない限りはあり得ない。そう誰もが思っていた。

「（氣に入らねえな・・・）」

自分達が上にいるかのような台詞。まるで既に勝ちが決まっているというかのような態度。何より・・・

「そのくそ甘い考え方が氣に入らねえ」

響夜は全員から距離を取ると魔力を集中させた。

「見せてやるよ成れの果てって奴を・・・」

「ああ、私は彼女を愛そう どれほど光から遠ざかろうともこの身は彼女の為に 例え忌み嫌われようとも 私は貴方の救いになろう」

「皆が私を忘れようとも どれ程薄汚くなろうとも 私は貴方の味方であろう 最強の剣無敵の盾となろう」

言葉が紡がれていく中誰も動かない。いや動くことが出来ない。

やがて響夜の身体を黒い霧が覆い隠す。

「幻想交響曲」
げんそうじょうきょく

そこには黒いフルプレートに身を包み闇に包まれた中、その瞳を赤く輝かせる一人の男がいた。

戦争開始・・・気に入らねえなデメエ（後書き）

感想、批判、意見、評価等がありましたらお願いします。

何と話数にお気に入りの数が並びました。何か壁を一枚突破した感じがします。

作中では基本的に響夜の上位魔法や創った神器などは愛の言葉などが入っています。

例えば、焼き尽くす業火の剣は身を焦がすほどの愛を感じたい。枯れ落ちる荊の少女は重すぎた愛の結果。疾走する魔狼は愛してしまった自分への罪深さなどです。幻想交響曲は前に出た者を更に神器へと昇華させた物。恐らくこれが響夜の本心を表しているかなあと 생각합니다。姿は某聖杯の戦いで第四次狂戦士さんを想像すると分かりやすいです。

そうそう、クラウンでの名前でのロキというのはグレイプニル、フエンリルと考えて「あれ？じゃあ此奴ロキになるんじゃない？」と思います。だからロキっていうのは設定としては最後あたりなんですよね。

もしかしたら設定資料集なんてのも書くかもしれません。その時はお知らせしたいと思います。

長かったですがこのからもこの作品をお願いします。（＾・＾）

（・・・）（――）

誰だって憧れの一つや二つはあるもんだろ？（前書き）

「悪いな」

「うっん、私は■■といられるだけでいいよ」

雪が降る中■■は無垢な笑顔を浮かべる。

「ありがとよ。こんな情けねえ奴を慕ってくれて・・・」

不器用ながらも隣を歩く少女の頭を優しく撫でる。だが少女は何処か起こった様に見た。

「情けなくなんて無いよ！ ■■はカッコいいよ！！ ■■は私のヒーローだもん！！」

その言葉に驚きつつも俺は苦笑する。

「・・・そうだな。頑張ってカッコいいヒーローになるよ」

カッコいいヒーロー。まだ子供だった俺は最初はそうなろうと本気で目指していた。だが裏で生きて行けば分かる。そんなものはなくただ殺して薄汚れて汚水を啜って生きて行く。そんな生活しか自分には出来ない。ただ目の前にいる少女が笑ってられるように穢れ続けた。いつしかカッコいいヒーローは曇り、そこには仮面を付けたハリボテのヒーローの姿だけがあった。

俺はヒーローにはなれない。なら汚れながらも彼女の味方であり続けよう。そう決めた筈だった。

・ ・ ・ ・ ・ けど心のどこかで俺は大切な人を助けられるそんな姿に憧れていた。

誰だって憧れの二つや二つはあるもんだろ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フルプレート黒い甲冑に身を包んだ響夜は周囲を見渡す。やがて響夜は丘の上に立つ聖女を見ると右手にフランベルジュを創り疾走した。

「！させるかあ！！」

最も近い距離にいた浩太が斬りかかるが響夜はその攻撃の上に跳躍し躲すと右手のフランベルジュを叩きつける様にして振り下ろす。

「ぐっ！」

その一撃を浩太は剣の腹で受け止めるがその重さに腕が悲鳴を上げる。響夜は空の魔法で空間を固定しそこを足場にすると浩太を吹き飛ばす。響夜はそのまま追撃をするが間を割り込んできたノーレンにそれ以上の追撃を防がれる。

「何だそりゃあ？騎士道でも語るのかア？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

響夜はノーレンの言葉にその手に持つ剣で答える。

「—————！？」

正しく神速。例え勇者であつても捉えられない速度での一撃が繰

ミーナが言うとともに二人の間に落雷が落ちる。響夜は飛び退くとともに右手に持っていたフランベルジュを聖女へ投げつけるが煙の中にいる何かに弾かれる。響夜は両手に形無き略奪者^{ジェロシニア}を呼びだすと左手に槍を創る。

やがて煙が晴れそこにいたのは十体の使徒。その姿は様々で鰐や鳥、獅子を擬人化した者や女神の姿をした者までいる。だが彼らは皆共通して目の前にいる黒き騎士への殺意を宿していた。響夜はそれを迎え撃つように両手に持った槍を構える。

先に動いたのは使徒たちだった彼らは響夜へ肉薄すると各々の武器を振る。ある者は矢を番え、あるものは剣を振り下ろし、あるものはメイスを構える。

「」

だがその攻撃を響夜は両手に持つ槍で捌いていく。その動きは一国の騎士団長を遥かに超えた技量であり見るものを魅了するような華々しさと獣のような荒々しさを持ち合わせたものだった。このようなことは響夜には決して出来るもので無い。元来響夜には武の才も智の才も持ち合わせてなどいない。よくて凡人より少し出来ると言っただけだ。達人の領域などに入る技量はない。

ならば彼が五人を相手にして戦っていたのは何故か。それはひとえに彼の生への執着だ。生きるために時に汚水を啜り、時に溝鼠の様に這い蹲って生きて来た彼は誰よりも死の回避に特化していた。それが最も現れているのが彼の観察眼と本能。逃げる為に全てを観察し続け次の行動を予測する。決して見破れない罠を第六感とも言えるもので回避する。だからこそ彼は五人を相手にして生き延びれた。

もしそれが達人をも凌駕する技量を持ち合わせたら？その答えは正しく今の現状だろう。カッコいいヒーローになりたい。薄汚れた彼が心の片隅に持っていたもの。自分では為れないからこそ、その

願いはより大きなものとなっていた。それがこの神器だ。大切なものを護れる者。^{ヒーロー}それは強くあれる者であった。この神器の能力。^{ちから}それは全ての能力を上昇し、あらゆる技術を瞬時に習得する。大切なものを護るという殺人鬼の小さな願いの為に生み出された力だ。故に、この騎士は敗れてはいけない。^{ヒーロー}それは大切なものを護れなかったということだから。

「かあ s w で f r g t h y ! ! ! ! !」

槍に貫かれた天使が奇妙な叫び声を上げ死んだ。形無き略奪者^{ジェロジニア}は殺す程にその力を上昇させる。天使という神の使徒を殺したのだ。当然その力は別格といっても良いものだろう。残る天使は九体。ノーレンやメイド達も神殿にいる信徒の祈りからその傷を回復させてきている。だがやはりこれだけの戦場全体を範囲にするのも限界があるのだろう。回復速度が遅くなっている。

「オラア！さっきのお返しだあ！！」

復活したノーレンがカマイタチを飛ばしながら肉薄する。響夜はその総てを叩き落とすと壊れかけている槍に炎を纏わせると投擲し爆発させる。ノーレンはその爆風の中を抜けると飛び掛かる。

「ハア！」

その攻撃を新たに創り出した大剣で受け止めようとするがメイドのナイフが背後から襲う。だがその攻撃を響夜は炎の熱ナイフを炭化させることで砕く。響夜はその場から飛び退くという先程まで立っていた場所に剣を構えていた浩太が降りてくる。

「水千花！」

二人の後方から無数の水の弾丸が響夜を襲ってくるが響夜は近付いていた天使の頭を掴むとその盾にし天使の頭を握りつぶした。その光景に天使達の動きが僅かに乱れたのを察知すると響夜は再び神器を呼び出す。

「神殺しの鎖」
グレイブニル

鎖達は先頭にいた天使三体の身体を貫きながら後方に続いていた天使全てを拘束する。

響夜は右腕を振りかぶり圧縮していた魔力を解き放つ。

「疾走する魔狼の牙」
フェンリス・ヴォルフ

そこから放たれたのは極大まで圧縮された魔力の塊。それは劫火の炎を纏い絡め取られていた天使達を呑みこんだ。これもまた響夜が持つ神器、疾走する魔狼^{フェンリル}の能力。多重能力であるフェンリル^{フェンリル}はあ
る意味所有者の肉体の一部と言える物でもあった。疾走する魔狼^{フェンリル}の
心臓とも言えるエンジンを使用し込めた魔力の力を増大させ放つ。
それによって込められた魔力は一撃必殺とも言える破壊力を誇る。
響夜は天使達を完全に消すため上空に無数の断頭台の刃を創り出す
と無慈悲にもその全てを振り下ろした。

「・・・何だこの神器のオンパレードはよお。幻つてのが嘘に感じ
るぜ」

ノーレンの言葉も最もだろう。世界中を探そうともこれ程の神器
を所有している者などいないだろう。響夜の神器は贗作とはいえそ
の力は本物に迫り、物によってはへたな神器を超えるだけの力を持
っている。

「・・・・・・・・」

響夜はその赤い瞳を四人へ向ける。聖女の天使を始末した以上。

聖女の魔力と精神力は大幅な減少を見せているだろう。ならば危険視するのは残りの四人。響夜は剣を構えると浩太へと加速する。その速度は魔力で強化こそされているが音速に迫るだけのものだ。浩太は自身が持つ神器である聖剣を構えながらその動きを見極めようとする。心眼、特殊^{レア}ではあるもののその力は戦場で極められたものであり、それをさらに極めたものは最早予知の如き力を得る。だが響夜もまた観察眼という眼がある。浩太が防ごうとする動きに合わせてそれ隙を突こうとするが脇腹を掠りながらも回避される。

メイドが浩太を援護する為に近距離でのナイフによる斬撃を繰り出す。響夜はまるで鎧を着けていないかのような俊敏な動きで躲す。アリアと浩太の挟撃を両手の大剣を巧みに時にその姿を変えながら響夜は応戦する。二人が離れた瞬間、メイドとノーレンが攻めに入り押さえつける。そして聖女が再び光の柱を落とし響夜はその攻撃を再び神器を発動させることで相殺する。その隙を突いたノーレンの一撃。だがそれは響夜の影から出て来たウサギの障壁に阻まれた。生存競争の底辺であるウサギは逃げる為にいつしか結界を持つようになった。だがそれでも勇者の一撃を防げるとわけがない。そこでそれを覆るのが響夜の想像形成である。増大機能^{ブースト}が付与された魔導具を装備させることでインターバルが必要とはいえ勇者の一撃を防ぐだけの強度の結界を創り出す。

ノーレンは舌打ちをすると響夜の反撃が来る前にそのばから飛び退く。そして再びアリアが水の弾丸を放ち牽制しつつ三人が肉薄する。

次々に来る連撃を躲しながら響夜はその両手に持つ大剣とで攻勢に出る。ノーレンが振り下ろした剣を左手に持つ大剣を軽々と振りノーレン諸共吹き飛ばす。近付いてこようとする者を響夜は軍勢全^{レギオン}

てを使って迎撃する。徐々に疲れが出て来たのか五人は躲し切れずに負傷するが信徒達が五人に祈りを集中させたのか持ち直す。それを見ながら響夜は決着をつけようかとその魔力を集中させた時、それは来た。

a a a a a a a a a a a a !		G a a a a a L U a a a a a a a a a a a
---	--	---

轟く叫び。それはまるで雷鳴の様に響き渡り、それは姿を現した。全身を白い鱗で覆われその背には四枚の純白の翼を生やし、口には鋭利な牙が生え揃っていた。その姿は正しく天を守護する者だった。天竜アカーシャ、そしてその背に立っているのは

「.....王」

兵士の一人が呟くと同時に飛び降りる偉丈夫。その者こそ聖王アルク・ジ・クラテール。ここに今連合軍主力七名が揃った。

響夜 総軍3500名VS 聖王 総軍5380名

今戦争は終結に向かい出した。

誰だって憧れの一つや二つはあるもんだろ？（後書き）

感想、批判、意見、評価がありましたらお願いします。

今回、は前回より短いです。少しお聞きしたいのですが二日三日開けて約一万字程の文章量で投稿するか3000〜5000程でなるべく毎日投稿を目指すか。皆さんのにはどちらの方が良いのでしょうか？

良ければご意見ください。

死と幻想と怒り（前書き）

「俺の憧れはデメエじゃ消せねえ！」

b y 響夜

「この儂の手で散らせてやろう！！」

b y 聖王

死と幻想と怒り

「ガルドス！」

「ゼクスか！」

ガルドスが目の前にいた兵士たちを薙ぎ払うと背後から騎士——
響夜曰くクソ騎士——が駆けよって来た。

「どうした！？」

ガルドスは次から次へと襲ってくる兵士を薙ぎ払いながらゼクスに問い掛ける。

「増援だ！予定通り奴らを包囲するぞ——！」

今連合軍総戦力が集結したのを確認するとゼクス達は徐々に連合軍を包囲していくために移動していく。

「魔導兵器も全て起動させる——！」

魔導兵器。本来創るためにはドワーフ達と魔族かエルフ達の協力が必要である。魔王軍にはドワーフエルフがいるとはいえその数は少ない当然創る時間や人手も無かった。

「キョウヤの力は便利だな——！」

想像形成。それによってドワーフと共に設計をし材料を創りだす。後はそれを組み立て構造を覚えたら再び想像形成を使い量産する。

「むん！」

——ガキイイイン！！！！

聖王の一振り。響夜はその一撃を両手に持つ大剣で防ぐ。だが

——ピシッ！

魔剣は耐えたものの何の力も付与されていない大剣は根元から折れる。響夜はすぐさまその大剣を捨て爆発させると爆風で後方へ吹き飛ばされ聖王の剣から逃れる。今のところ被害が大きいからだろうかアカーシャが手を出してくる様子はない。響夜は目の前にいる聖王に最も注意を払いながら残りの五人を見る。天使を呼び出したことにより聖女は最早戦力外。戦力は減った様に見えるが聖王という存在があることにより兵士たちの士気は高まり本人は響夜を圧倒する力を持っている。

響夜は神殺しの鎖を周囲に展開し、ノーレン達を軍勢で牽制しつつ浩太へ駆けだす。浩太は聖剣を構えると魔力を後方へ放出し加速する。

「ハアアアアア！！！！」

浩太が振り下ろす剣を響夜は寸前で一步下がることで躲す。とても人間に出来る芸当ではない。浩太は勢いのまま剣を振り下ろしてしまい隙が出来る。今から剣を構えなおすには遅すぎる。響夜は魔剣を上段から振り下ろした。

「——が、ア、ア、ア、！！！！？」

降り注ぐ血飛沫の中響夜はその手に持つ魔剣を振り上げ止めを刺

そうとする。

「!!!?」

それは最早本能。響夜は勢いよく頭を下げる。次の瞬間そこには一本の長剣が横切った。響夜は背後を向き魔剣を構える。次の瞬間衝撃と共に響夜は吹き飛ばされる。空中で体制を立て直しながら響夜はその正体を見る。そこには憤怒の色を瞳に宿す聖王の姿。

「・・・ここで散るがいい」

聖王はその手に持つ剣を構える。響夜が動こうとした時、目の前には剣を振り下ろそうとしている聖王がいた。

「!?!」

響夜は咄嗟に魔剣を構えそれを防ぐ。だが体制を崩していた為か響夜はそれを防ぎきれずに右肩を切り裂かれる。鎧のおかげか幸い傷は浅いが完全に力負けしていることが露呈してしまった。

響夜は魔力を脚に集中させ脚力を強化する。脚力が強化されたことによって響夜は加速すると後方へ飛び退いていく。その先にいるのは兵士たちの姿。聖王は加速すると響夜を追いかける。前へ加速する聖王と後方へ飛び退いていく響夜。当然それは前へ進む聖王の方が速い。

「燃やしつくす業火の世界 それは常世全てを焼き尽くし 貴方が愛する全てを燃やす」

「ああ燃やせその総てを ああ焦がせこの我が身を ただその想いのままに荒れ狂え狂気の焰」

その剣が届く、その時響夜の詠唱も終わっていた。

「焼き尽くす劫火の剣」
レーヴァテイン

天に展開される巨大な方陣。そこからは感じられる巨大な魔力と莫大な熱量を放つ神の武器。その姿に思わず聖王が響夜への注意を離れた瞬間、それは獲物を喰らう為放たれた。

!!

爆音と閃光に塗りつぶされる視界。鼓膜が破けたのでは思える程の静けさは次の瞬間業火の燃え盛る音によって破られた。

そこには火の海しかなかった。焼き尽くされ赤く染まる大地。敵も味方も共に焼かれていく。その炎に包まれながら響夜はその剣を掴み取る。恐らくあまりの激痛に麻痺したのだろう。襲ってくる激痛は何時の間にか感じられなく響夜は躊躇い無くその剣を引き抜き構える。燃え盛る災厄の剣と生き血を啜る魔剣。響夜はその二つを両手に持ち聖王を睨む。その赤い瞳は炎に照らされ血の様に赤く輝いていた。

「貴様！」

聖王は怒りでその顔を染め。自身の持つ剣の名を呼ぶ。

エクレール
「神罰！！」

その名が呼ばれた瞬間聖王の持つ剣から魔力が吹き荒れた。その剣こそがエクレールの名の由来となる聖王の持つ剣。数々の戦場で

打ち立てた武勇と人々の信仰から神器に匹敵する程の力を持った剣である。

聖王のその姿に兵士達は後退する。巻き込まれたら自分達等一瞬で塵へと変わることを知っているからだろ。その姿を見た響夜は引くどころか一步前へ出る。互いに緊迫した空気が流れる。動いたのは響夜だった。魔力を腕と脚に集中させると聖王に軍勢の狙い^{レキオン}を定め放つ。それに続く様に神殺しの鎖を（グレイプニル）を放つと響夜自身も疾走する。聖王はその手に持つ剣で迫りくる弾丸を弾き、躲していく。だがその全てを躲すことは出来ず身体を弾丸が掠っていく。響夜は神殺しの鎖で牽制しながら接近すると焼き尽くす劫火^{グレイプニル}の剣で突き刺す。聖王はそれを身を捻りながら回避すると背後から斬り付けようとする。だが響夜は周囲に展開していた神殺しの鎖^{グレイプニル}の上に飛び乗り回避すると魔剣を無数の枝分かれた槍にし攻撃する。流石にこれは防げないと判断したのか聖王はそれらを捌きながらもバックステップで回避逃れると響夜の懷に一瞬で潜り込む。

「――！！」

声にならない叫び。響夜は脇腹を貫かれる。だが

「ぬっ！」

聖王は剣を抜こうとするが剣はびくともしない。響夜は自身の傷を利用して悪魔の心臓^{グリモア・ハート}で再生することで剣を抑え込んだのだ。聖王に生まれたその一瞬の隙を逃さず響夜は魔剣で聖王を斬りつける。

「ぐう！！？」

聖王は痛みで顔を歪ませながらも剣を勢いよく引き抜き飛び退く。響夜は鎖の上を飛び移りながら聖王を上から強襲する。傷の痛みに

耐えながらも聖王は焼き尽くす劫火の剣を捌くが響夜はそれによる隙を魔剣で袈裟切りする。だがその攻撃を聖王は恐るべき反応速度で弾いた。

それによつて響夜に致命的な隙が生まれた。聖王はその隙を逃さず

「オオオオオオオオ！！！！！！」

上段から振り下ろした剣で切り裂いた。飛び散る鮮血。兜と鎧が半壊しながらも響夜は悪魔の心臓で再生し立ち上がる。

「・・・・ハア・・・・ハア・・・・」

その額に大量の汗をかきながら響夜は聖王を睨み付ける。半壊したことにより響夜の幻想交響曲はその能力を半減し、先程までの能力は引き出せない。だがそれでも響夜はその顔に不敵な笑みを浮かべた。

「・・・・くそが。舐めんなよ」

響夜は魔力を高める。聖王は接近しようとするがそれ残った骸骨の兵士達を組み合わせた壁と神殺しの鎖グレイブで防ぐ。敗れる訳にはいかない。この神器を使い敗れると言うことは自分の憧れが碎かれることと同じだから。響夜は目を瞑ると魔力を集中させ詠唱する。

「終末の日 あらゆる者はその身を裂かれ この世全てが終わりを迎える」

「死者が踊り 幻想は現へと変わり 森羅万象その全てが等しく崩れ落ちるだろう」

「この黄昏の中で滅びるがいい!!」

「怒りの日!」
ディエス・イレ

その言葉と共に戦場を蔓延っていた骸の兵士は崩れ落ちその身を包んでいた鎧もまた音を立てて地面へ落ちる。

「目に物見せてやるよ。聖王さまよお!!!」

死の舞踏、幻想交響曲この二つを発動することによって怒りの日はその力を発動する。死を擬人化させた存在と幻想の存在を昇華させた魔法。その属性は破壊。神器と対抗しその存在を破壊する為に創りだした魔法。

——ピキ、ピキピキ

響夜の手にあった焼き尽くす劫火の剣は壊れ魔剣はその身へ納まる。
レーヴァテイン
そしてその両手が紅蓮に輝く。

神殺しの鎖が消えるとともに響夜は疾走する。その突然の行動に聖王は僅かに動きを止めるがそれは一瞬、次の瞬間には剣が振り下ろされていた。

「んなもんで殺せると思うなア!!!」

その一撃を響夜は紅蓮の光を右手から剣の様に伸ばし跳ね返す。両者の間に火花が眩しく散る。聖王は僅かな驚きを含みながらも憚然とした面持で先程よりも速く次々に攻撃を繰り返す。それに応え

その姿に聖王が叫ぶ。その言葉にマオは答えず左手を向ける。

「消えるがいい!!」

マオが叫んだ瞬間その手から放たれた光が聖王を飲み込んだ。

死と幻想と怒り（後書き）

感想、批判、意見、評価がありましたらどうかお願いします。

お気に入り三十件突破、ユニーク数3000突破！ということでした三十話です。

活動報告でも書きましたがもしかしたら何時投稿化の予告をするかもしれません（多分難しいと思いますけど）↑おい！

短編も時間があつたら少しずつ書いていこうと思います。ネタは少しは浮かんでいるので。

今年は恐らくあと一回投稿して終わりだと思います。皆さん良い年越しを！！

追記：最後のところを書き直しました。

それぞれの戦い（前書き）

「腰が痛いもう」

b y 翁

「死んどけクソ爺！！」

b y 響夜&ハク&ゼクス

それぞれの戦い

突然の魔王の出現と聖王が吹き飛ばされたという事態に戦場に一瞬の静寂が訪れる。

「響夜！」

「はいよ！」

そんな中マオの言葉に響夜は返事をする周囲にいた兵士達の下へ向かう。

「疾走する魔狼^{フエンリル}！！」

響夜は疾走する魔狼^{フエンリル}を呼び出すと飛び乗る。

「クソ騎士！ハク！！」

響夜は走り出すと戦っている二人に呼び掛ける。

「うん！！」

「貴様に言われなくとも！」

二人は返事をする兵士達を薙ぎ払いながら響夜の後に続く。前面にいる兵士達は疾走する魔狼^{フエンリル}で蹴散らしながら勇者達へ向かう。

「ガルドスはどうした！？」

その姿が見えないことが気になった響夜は後ろを走る二人に聞く。

「あいつは既に他の勇者と戦っている！！」

「マジか——うお！？」

そんなことを言っていると轟音と衝撃が三人を襲った。三人はその衝撃が襲った場所を見る。そこには大破した多数の魔導兵器とクレーターが出来ていた。

「ちい、天竜か！！」

空で響夜達を見降ろし吠えるアカーシヤを見て響夜は舌打ちをする。アカーシヤは周囲にあった魔導兵器を次々に破壊すると響夜たちを見る。

「掴まれお前ら！！」

二人が掴まると同時に響夜は速度を上げる。次の瞬間先程までの場所に閃光がぶつかり衝撃と大穴を穿った。その光景に三人は冷や汗が流れる。

「おい！どうすんだあれ！！あんなものに勝てるかあ！！」

そう叫ぶ響夜にハクも賛同するように高速で首を縦に振る。

「いや、手筈通りなら天竜の相手は翁がする筈だ！」

ゼクスは言うが本人も不安と焦りでその顔を歪ませている。

翁、その名の通りマオ程では無いものの数千年もの時を生きてきた魔王軍の図書館とも呼ばれる男である。その力はマオにも匹敵する程の者だ。

「おい！あの爺さんホントにやってくれんのかよ！？」

「・・・全然臭いもしない」

二人の言葉にゼクスはうつ、と呻く。

「ええい！お前の神器でどうにかならないのか！！」

ゼクスも諦めたのか響夜に叫ぶ。

「無理言つな！怒りの日と疾走する魔狼^{ディエス・イレ}だけで魔力量ギリギリなんだよー！」^{フェンリル}

「くそ！こんな時だけ使えない奴め！！」

「デメエ振り落とすぞ！！？」

三人が騒いでいる間にもアカーシヤはその口を開け三人を狙っていた。響夜はさらに加速するがその射線上から逃れることをアカーシヤは許さない。

「ハク！何かねえか！？」

「・・・」

無言で首を横に振るハクを見て顔を青くする。そしてその後ろに

見えるアカーシャ。

「くっそ！迎え撃つぞー！！」

響夜は方向転換しようとし、止めた。

「そう慌てるな若いの」

すぐそばで聞こえる少年の声。次の瞬間アカーシャの前に何重と障壁が張られる。アカーシャの攻撃は障壁に阻まれそれ以上の侵入を許されない。そして対峙しているのは十五歳程の黒髪の一人の少年。

「翁！」

その姿を見たゼクスが名前を呼ぶ。翁と呼ばれた少年はニヤリと笑うと響夜たちを見る。目が見えないのか、その目は瞑っており開く様子が無い。

「中々スリルがあつたじゃろう？感想はどうじゃ？」

そう言つて笑う翁。だがアカーシャの攻撃を防ぎながらもこれほど余裕があるのは相当な実力者なのだろう。

三人は何か言おうとするがそれはアカーシャの咆哮で掻き消される。止められたことが彼（？）のプライドを刺激したのかその姿はまるで怒り狂ったようだった。それを見た翁は面倒臭そうにそれを見ると手で先に行くよう三人を促す。三人も自分達が邪魔になることを分かっているのか先へと進んでいく。

「全く、折角の若いのと時間を邪魔するでないわ」

翁はそう言うが返ってくるのは唸り声だけ。それを聞いた翁はやれやれ、といった様に肩を竦める。

「下等種族と話す気はないか……。まあよい」

翁が溜息を吐く。だが次の瞬間無数の方陣がアカーシャを取り囲む。

「ならば貴様が見下す存在に殺されるがいい!」

G a a a a a a a a a ! ! ! !

方陣から放たれた閃光と爆音が天竜に襲いかかった。

「ハク！」

天竜の相手を翁に任せた俺達は勇者達を強襲した。幸いこの戦場の
中でまだ俺達に気が付いていなかったようのでハクの放った氷柱は奴
らを分断した。

「くそ！あいつらか！！」

奴らが俺達に気付くが遅い。俺達は既に奴らに攻撃を開始していた。

「お前が異界から召喚された勇者か」

クソ騎士馬はあの茶髪の浩太とかいう餓鬼に。

「こんな小娘で俺の相手が出来んのかア!？」

「貴方程度、直ぐに殺せる」

ヴィスカヴァルにはハクが。

「ってことで俺の相手はあんたらか」

俺は目の前にいるアリアとメイドをみる。どうしてこう俺の相手は面倒臭い奴らなのか・・・。

そんなことを考えながらも俺は疾走する魔狼フェンリルを消す。正直怒りの日ディエス・イレの維持だけで相当な魔力を持ってかれてんだ。

「あれだけの傷を負いながら何故立てるのが不思議ですね」

此方を睨みながらもメイドは喋る。

「まあな、俺元人間、現化け物だから」

俺は自嘲気味に笑う。二人は何か言いたそうな顔をしているが生憎構ってられる時間は無い。

「悪いが。ここで死んでもらう」

俺は紅蓮の光を纏い疾走する。二人はその光に警戒してか遠距離での攻撃をしてくる。

「それは悪手だな」

俺はその攻撃を前面に紅蓮の光を障壁の様に展開し防いでいく。この光を突破したかったら相当上位の魔法を使わないと無理だろう。二人も無駄だと分かり武器を構える。メイドも厄介だがアリアの剣も厄介なんだよな。あれチェーンソーみてえな物だろ？絶対いてえだろ……。

俺は光を剣の様にして振りかぶる。その攻撃をメイドが僅かに時を遅らせることで回避しアリアがその隙を狙い胴へと剣を突き刺す。

「あめえんだよ!!」

俺は光を即座に鎧のように胴の部分に纏わせることで防ぐ。剣はその光に触れ嫌な音を立てながら壊れた。予想外だったのだろうその現象にアリアは注意が逸れる。当然それを見逃す程俺は甘くない。

「ぶっ壊れるオ!!」

「ぐ——!?!」

俺は茫然としていたアリアの腹を蹴り飛ばす。アリアは苦悶の表情を浮かべながら俺を見る。俺が追撃を仕掛けようとした瞬間

——「ごろん

「あ?」

俺の視界が反転する。また転ばされたか? いや

「酷いことするねえ。首を切り落とすなんて」

俺は嗤いながらメイドを見る。二人とも流石にこれで俺が生きてい

るとは思わなかったのだろう。目を見開いている。いいねえその顔。何か得した気分だ。実際俺の方が損してるけど……。あ、血が俺の目に入った。

暗転。

「あらよつと」

首が切り落とされたことなんて無かったからどうなるか分からなかったが何時の間にか視界が元に戻っていた。見れば俺の頭は背後に転がっている。うむ、不思議だ。どうやって首が生えてきた？さっきまでの俺は？

「ま、いいか」

考えても分からないもんを分かってうなんてする必要はない。実際に起こった。この事実だけが重要だからな。俺は光を散弾の様に飛ばし二人を攻撃する。その攻撃をアリアがレーザーの様に水を飛ばしけん制していく。どうやら最初よりも相当威力が高いらしく光の弾はその勢いを衰えていくそしてその隙を縫うようにメイドは俺へと直進する。

その攻撃を回避しようにも体が動かず、いや、動いているが遅い。時の魔法か！

「貴方の回復能力がどれ程分かりませんが」

メイドは何処からともなく大量のナイフを取り出し次々に俺を切り裂いていく。だが痛みは一向に俺を襲うことが無い。

「不死とはいえ貴方の精神もが不死ではない筈。意識を保っていら

れない程の激痛に貴方は耐えられますか？」

メイドの言葉。それと同時に今迄の痛みが俺に牙を剥く。

「——っづア！？が・・っアゝアゝアゝ！！？」

激痛が俺を襲い、全身を焼かれた様に体が熱い。目眩がして視界がぼやける。

「・・・ぐ・・・っそ」

俺はその痛みに膝を着いた。

「小娘が相手かよ」

目の前にいる男——確かノーレンって言ったっけ？——は溜息を吐く。正直私もこんな変な男を相手にしたくない。何というか付き合ってられない。

「氷獄」

私はノーレンが油断しているうちに氷で閉じ込める。この程度で死ぬなんてことは無いだろうから氷柱を創り出す。

「おいおい、いきなりそれは無いんじゃないの？」

氷を内側から破壊してノーレンが現れる。その瞬間私は創った氷柱を全てノーレンへ放つ。

「刈り取れえ！！」

その氷柱はノーレンが腕を振ると同時に輪切りにされる。確か響夜の話だとノーレンは風の魔法が主体だとか・・・。

「凍てつけ」

私は地面を凍らせノーレンの動きを封じようとする。ノーレンはそれを跳ぶことで回避する。けどそれは予想済み。私は凍った地面から氷槍を飛ばし追撃する。その攻撃をノーレンは空を自由自在に飛ぶことで躲し風の刃で破壊していく。恐らく空を飛んでいるのは風の魔法によるものだろう。

「あの餓鬼には勿体ぶってやられちゃったからな」

瞬間、ノーレンの体が膨れ上がる。着ていた鎧は弾け飛び背からは白い翼が生え腕は猛禽類の鋭い爪に変わる。全身には獣の様に毛が生え、その顔は鷲の顔、そして下半身は獅子の姿。それは正しく

グリフォン
「鷲獅子」

この世界でも上位の魔物。勇敢な騎士の相棒になるとは聞いたことがあるけど人間になれるなんて・・・。

「オラア！いくぞ小娘エ！！！！」

ノーレンは咆哮と共に全身に風を纏い迫る。その攻撃を氷で受け流しながら回避した。ノーレンは旋回すると口から風のプレス攻撃をしてくる。防御しているもののその勢いに私の足が地面から離れた。

「テンペスト
災厄!!!」

「
<
—
!
?」

そして放たれた暴風の塊。それは宙にいた動けない私へ迫り

——ドゴオオオオオン！！

直撃した。

「……こんなもんかヨ。つまんねえなおイ」

ノーレンはそう吐き捨てる。移動しようとする。だが

「G a a a a a a a a a ! ! ! ! !」

その咆哮が聞こえると共にノーレンを無数の氷槍が襲った。

「――！・・ハッ、おもしれエ！！」

ノーレンはその全てを撃ち落とす。その顔には笑みが浮かんでいた。

「何だ、
テメエも俺と同じだったのかヨ」

そこにいるのは白銀の毛並の巨大な狼。元の姿へと戻ったハクだつた。その毛並は霞むことなく輝き周囲の大地は凍てついている。

「いいいいいい、なあおい！！殺りあおうぜエ！！！」

「G a a a a a a a a a a ! ! ! ! !」

放たれる暴風と氷弾その二つはぶつかりあい周囲を巻き込み爆発した。

「ハア！」

「甘い!!」

ハク達から離れた戦場。そこで浩太とゼクスは戦っていた。

「影踏み」

ゼクスが浩太の左腕の影を踏む。すると浩太の左腕が突然動かなくなった。その突然の事態に困惑する浩太をゼクスは影の槍を放つ。浩太は困惑しつつも右手に持つ聖剣で影を両断しながら距離を取った。

「く! 光よ!!」

浩太は指先から無数の光の弾を放つ。しかしそれはゼクスの無の魔法の前に霧散する。それを見た浩太の顔が歪む。ゼクスは影の槍を放ちながら自身も浩太へと駆ける。

「フツ——!!」

影の槍を聖剣で断ち切り横薙ぎに振るわれる剣を逸らしながら浩太

は反撃のチャンスを探う。ゼクスが剣を振り下ろした瞬間

「ハアアアア！！！」

浩太は剣を握る手に力を込め振り下ろされた剣を弾き飛ばした。その予想外の一撃にゼクスは剣を逸らされ大きな隙が出来る。浩太はゼクスに体当たりし体制を崩す。

「ぐ！」

地面に倒れたゼクスが立ち上がろうとすると浩太が馬乗りになり首に剣を当てる。

「俺の勝ちだ！大人しく投降しろ！！」

「・・・・・・・・」

剣を突き付けられながらもゼクスは臆することなく浩太を睨み付ける。無言のと睨みつけるゼクスを見て説得は無理だと悟った浩太が止めを刺そうとした瞬間

「死ね」

ゼクスの影が動いた。その動きに気付いた浩太が止めを刺そう剣を振る速度と影が動く速度はほぼ同じ。そして影と剣が交わり――

――ドス

血が二人を赤く染めた。

それぞれの戦い（後書き）

感想、批判、意見、評価などお願いします。

新年明けましておめでとうございます。

新年明けての初投稿です。少し短かったですがご勘弁。正直長いなあ進展しないなあと自分でも思いますが仕方がないんです。決して飽きた訳ではないんです。マジで。

設定や短編の方もちまちまと書いています。三章に行くまでまだ掛りますけどね。

あ、あと投稿予告ですが今の状態を考えると少し難しいので殆ど書くことはないかも……。誠に申し訳ない。

ではまた次回。

戦争終結。戦争終わった直後でよくこんな空気になれるなおい

「破軍追走！」

その言葉と共にマオの指先から黒い閃光と共に破壊の渦が放たれる。

「又ウー！！！」

だがその一撃を聖王は臆することなく対峙する。自らの魔力を限界まで神罰^{エクセル}に供給し真つ向から迎え撃つ。マオの攻撃を線だとするならば聖王の攻撃は点だろう。少ない魔力を効率よく最大に発揮する為の一点突破。その結果マオの破壊の渦は聖王の剣に斬り伏せられた。

「齢百にも満たない小僧がよくやるのう」

マオはその姿を見てその顔を愉悅に染める。聖王が全力に対しマオは未だ余裕綽々。これが年の功によるものなのか種族の違いによる壁なのかは分からないがその差は明らかだった。あと十年早くこれだけの技量を身につけておけば・・・

「（いや、もしもの話など考えるべきではないだろう）」

聖王はその考えを否定する。聖王の唯一の誤算とも言えるべきはあの五人を相手にあれほど粘った響夜の存在だろう。マオや翁という規格外もいるがここまで追い込まれはしなかっただろう。

「（だが一国の王が倒れる訳にはいかないだろう!!）」

聖王は国にいる民のことを考え自身を鼓舞する。ここで負けると言うことは自身の理想はそこまでになつてしまふ。王が倒れると言うことは民の、共に闘つた戦友の期待を裏切ると言う事それだけであつてはならない。

聖王は自身の残つた魔力を全て自身と戦い続けた相棒に供給する。

「いくぞ戦友よ。我らの絆を奴に見せてやろうぞ!!」

大気を振るわせるほどの魔力が聖王から溢れ出る。その魔力にマオは感嘆の息を漏らす。

「素晴らしいな聖王よ。まさかそれ程の力を持っているとは・・・」

「戯け。貴様と比べれば天と地ほどの差だろう」

聖王は剣を構える。対するマオも無数の方陣を展開し聖王を迎え撃つ。

「いくぞ!!」

「くるがいい!!」

魔力を脚へと送り聖王は加速する。それは音速をも超えた速度。しかしマオはその速度の聖王を捉え全ての方陣から閃光が迸る。その光の奔流のなかを聖王は止まることなく疾走していく。全身から血が流れ出しぶちぶちと何かが千切れる音がする。激痛が、衝撃が聖王を襲いかかる。だが聖王は止まらない。折れそうになる心を叱咤し走り続ける。全ては民と戦場で共に戦つた仲間の為。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

あらん限りの声を上げ聖王は光を切り裂き疾走し続ける。

「（あと、あと一步！！）」

聖王はその最後の一步を踏み出し、光の奔流を超えた。

「喰らええええええええええ！！！！！！」

放たれるのは全身全霊を込めた一撃。聖王は振り上げた剣を振り下ろす。

「――」

自身の全てを賭けた一撃。もう痛みで視界もぼやける。果たして自分は勝てたのか。聖王はついに限界を迎え倒れた。最後に見えたのは此方を見ている一つの影だけ。果たしてそれが誰だったのか・・。聖王は考えることが出来なかった。

「・・・見事」

倒れ伏した聖王を見てマオは惜しみなない賞賛をする。かつてこれを喰らって尚自分にその剣を届かせる者などいなかった。マオは自身の右腕を見る。そこには剣で斬られた傷跡。聖王の一撃はその命を取るに至らなかったがその剣は確かに届いていた。

•
•
•
•
•
•
•

マオは戦い続ける周囲を見渡す。これでこの戦争も終結だろう。

マオはその手を上げ勝利を宣言した。

[illegible]

全身を襲う痛みを無視し響夜は懷からグロツクを抜き引金を引いた。その突然の行動にメイドは反応することが出来なく放たれた弾丸は右肩を貫いた。

「**＜！＞**」

苦悶の表情を浮かべるメイドに荒い息を吐きながらも響夜はグロツクの銃口を向ける。

「やってくれんじゃねえか……。お陰で三途の川見えたぞ」

響夜はメイドの足に銃弾を撃ち込む。メイドが再び苦悶の声を上げる。最初の再生能力はもう見る影もない。おそらく限界がきているのだろう。それを確認すると響夜はその頭に銃口を向けようとし

「あ？」

その手を切断された。それを認識すると同時に響夜はその場を飛び退く。するとそこを青の軌跡が横切る。アリアだ。恐らく水を操り剣の様にしたのだらう。形が無い以上それは生き物の様に動いている。

「随分なことしてくれんじゃねえの」

そう軽口をたたきながらも響夜の腕はすぐ様再生しもとの状態に戻る。だが内心では響夜は焦っていた。

「（どうする。怒りの日はあの痛みで消えちまった。形無き略奪者ジェロジニアをディエス・イレ使おうにも間に合うかどうか・・・）」

幸いなのはメイドをほぼ無効化したことだろう。響夜がそう考えていると光が周囲を覆う。

「？」

その光に首を傾げ周囲を見渡すと同時に響夜の目が見開かれる。

「聖女！？」

そこにいるのは白髪の少女。既に魔力切れを起こしたと思っていたがどうやらまだ温存していたらしい。それと同時にこの光も何なのかを理解した。

「させるかよ！」

すぐさまデザートイーグルを向けるが射線上にアリアが入り邪魔をする。そうしている間にもメイドの傷は徐々に回復し塞がった。

「くそ！」

響夜は舌打ちをしながら神殺しの鎖グレイブニルを発動する。三対一のこの構

図では今の自分では勝ち目は低い。ならば最も優先することは後方支援を妨害すること。

「逝っちまいなあ！！」

響夜は神殺しの鎖の矛先を聖女へと向ける。例え傷を負わせられなくとも視界を奪い邪魔をすることは出来る。響夜はそれと同時に二人へ駆けだす。その手には先程切り落とされた腕が掴んでいたグロックとデザートイーグル。響夜はその二つを持ち二人に弾丸を放つていく。通常の弾ではなくあらゆる呪いをかけた弾だ掠めただけでも危険だろう。その弾丸をアリアは水の剣で弾きメイドは時を操ることで停滞させる。だが二人もまたそちらに集中しなくてはいけなく攻撃することが出来ない。まさに千日手。だがそれも何時までも続くものではない。機械では無い以上いずれ体力、集中力ともに限界を迎えるだろう。

先に動いたのは響夜だった。仲間という存在が今この場にいない以上圧倒的に不利の響夜は先に相手の体力を削りきることを考えた。自らの怪我は悪魔の心臓で全て再生する為強引な戦闘でも有利に戦うことが出来る。響夜は両手に持つ二丁の銃で牽制をしながらアリアへ近づく。メイドの攻撃はナイフによる斬撃の為まだいいが聖女とアリアの攻撃は下手をすれば再生不可能な状態になるかもしれないからだ。響夜は近距離戦に持ち込むと両手の銃を巧みに扱い、アリアを追い込む。水の剣を盾にすれば地面を狙い足場を崩す。攻撃に出れば隙をつくか自らの体を囷にして強引に攻めいる。当然痛みも襲うがそんなものに慣れてしまった響夜には毛ほども効果は無い。メイドの斬撃を躲し神殺しの鎖を足場にしながら響夜は二次元的戦闘にスタイルを変える。その突然の行動と縦横無尽の動きにアリアとメイドは反応しきれない。響夜はアリアが剣を振るった瞬間脚に魔力を集中させ加速。左腕を抉られるが響夜はアリアの額に銃口を押しつけた。

「チェックメイトだ」

だがその事態にアリアは慌てた様子ではなく笑みを浮かべている。

「貴方がですよ」

背後から聞こえる言葉。僅かに首を後ろに向けるとそこにはナイフを突き付けるメイドの姿。そして更に左側には聖女の姿が。もしここで発砲でもしたら聖女とメイドによる攻撃で自身も死ぬだろう。何よりメイドの魔法で弾丸の動きを遅くさせられたら堪ったもので無い。故に撃つことが出来ない。だがそれは聖女たちと同じ。アリアが人質に取られている以上下手な動きは出来なく、弾丸を止められるかどうかも賭けの様なものだ。そのまま何時間も経ったかに見える状況の中四人の耳には何かの咆哮が聞こえる。それは勝利の歓声。・・・つまり

「どうやら決着がついたようだな」

「・・・ええ」

どちらが勝ったかは分からない。だがこれ以上の戦闘は無駄と言えるものだ。此処でどちらが勝とうとも王が負けていれば国は滅びどちらにせよ殺される。

「けどよ・・・」

響夜を囲む三人の周囲が歪む。それに応じる様に三人も魔力を高める。

「このまま終わりつつてのは納得いかねえよな!!」

現れる無数の機関銃。それは銃身も弾丸も赤黒く染まり呪いの効果を受けている。三人も自身の全魔力を込めた一撃を放とうとする。

「暴風に潜みし獅子の牙!!」
シュトゥルムサイント・シュトースツァーン

「百鬼蛟斬!!」

「刹那の栄華!!」

「神罰・偽!!」
エクレール

響夜の全魔力を注ぎ込んだ銃弾の嵐。それをメイドが時を止めることで抑えアリアの水の蛇と聖女の光の柱が響夜へと迫りくる。

「ウサ公!!」

その言葉と共に響夜の影が揺れウサギが現れる。そしてその能力は結界の構築。それにより二人の攻撃は僅かに止まり響夜はその隙に包囲された状態から抜け出し一斉射撃する。

時を止めると言ってもこれだけの数を全て止めることは出来ないのだろつ。

「無駄です!!」

閃光。銃弾の嵐の中心から突然光が襲いかかる。その一撃をウサ公が結界で止めようとするが光は止まることなく結界を破壊した。

「ぐ!がッアッ!!」

閃光は響夜の左半身を呑みこむ。その僅かな時間の間に見えたのは一本の剣。それは光と共に消えると聖女の前に現れる。

「・・・聖王の剣か」

片膝をつきながら響夜はその剣を睨み呟く。そこから感じ取れるのは確かに聖王の剣から感じた力。

「ええ、偽物ですが・・・」

銃弾の嵐は既に消えそこには傷だらけになりながらも立つ三人の姿。

「（・・・やってくれんじゃねえか）」

三人は片膝を着く響夜を見る。

「・・・だから」

「？」

響夜の呟きに三人は首を傾げる。

「あめえんだよあ！！」

立ち上がる響夜の右腕に感じる魔力。それは先程の戦いで感じた神器と同じもの。三人は気付くがもう遅い。既に響夜の準備は整っていた。

その一撃はノーレンの翼を貫き地に落とす。ハクはノーレンに飛びつき食い千切ろうとするがノーレンは前足の爪で反撃し距離を取る。ハクが再び飛び掛かろうとするがノーレンがカマイタチで牽制しそれをさせない。だが翼をやられたことによりカマイタチは本来の威力を発揮できず痛みと流血により体力も削られていく。カマイタチのひとつがハクの脇腹を切り裂く。その痛みでハクの動きが鈍りすかさずノーレンは次々にカマイタチをハクへと放った。

ハクは強引にカマイタチの嵐の中を突き進んでいく。カマイタチが次々に身体を引き裂いていくがハクは決して止まることなく進んでいく。次第にハクの全身から冷気が発せられる。

冷氣によつて傷口から流れ出ていた血が凍りつく。その氷は広がっていきやがて全身を覆う様に氷の鎧がハクを包み込んだ。

ノーレンは大きく息を吸い込むと全力での暴風を放つ。その一撃は今彼が出せる全力の攻撃。その攻撃を前にしてもハクは止まることなく進む。氷の鎧が衝撃に耐えきれず砕け散っていく。一つまた一つと罅割れ砕けていく氷を後目にハクはより一層速く駆け抜けていく。

雨が無い様に終わりの無いモノなどこの世にはない。ハクは全身を覆っていた氷と残り僅かな魔力を犠牲にしてその暴風を抜けた。だがそこには来るのが分かっていたかのようにノーレンが爪を振り下

ろしていた。

だがそれはハクも覚悟していたこと。ハクは人化をするとその爪を潜り抜けノーレンの目の前に出る。

「・・・っあゝアゝあ！！！」

文字通り決死の一撃。その手に創られた氷の剣を一閃。攻撃によって隙が出来ていたノーレンはその一撃を防ぐことが出来ず切り裂かれる。血飛沫を上げながら倒れるノーレン。その目はまるで信じられない物を見るかの様に見開かれていた。

地面を流れ出る血で赤く染めながら沈むノーレンを見る。ハクも大分力を使っただろう。既にフラフラな体が緊張感が切れたことにより倒れ込む。ハクはぼやける視界の中自分の勝利の余韻に浸りながらその目を瞑った。

「ぐ！？」

果たしてその声はどちらのものだったのか。ゼクスは鎖骨を聖剣によって貫かれ、浩太は脇腹と左腕を影で貫かれていた。だが互いに動きが止まったのは一瞬。次の瞬間にはこの状況から脱出しようと目の前にいる相手を吹き飛ばす。ゼクスは場所が場所だった為かその動きは鈍く明らかに重症だ。対する浩太は動かない左腕はともかく脇腹だった為かゼクスより動くことが出来ている。

「ちい！この程度の傷！！」

ゼクスは魔族としての治癒能力を魔力で高めより早く再生させる。だがそれを見逃す程浩太は甘くない。

「させるかあ!!」

ゼクスとの距離を詰め聖剣を振りかぶる浩太。動きが鈍いゼクスは後手に回ってしまい影による牽制をしながら距離を取るしかなかったてしまう。影による攻撃を聖剣による一太刀の下に斬り伏せながら浩太はゼクスへと肉薄していく。彼我の距離はもう数十?。手を伸ばせば届くのではないかと思える程の距離だ。

「影踏み!」

だがその距離はゼクスの領域。聖剣が届くより早くゼクスは浩太の影を踏み右足を動かなくする。突然右足が動かなくなったという事態により浩太は前のめりに倒れてしまう。そしてそこにあるのは獲物を待ち受ける様にゆらゆらと動くゼクスの影。

「死んで——たまるかあ!!!」

それは咄嗟の一撃。聖剣による一振りは影を切り裂きその奥にいたゼクスに届いた。右腕を盾にすることで致命傷を避けるがそれでもこの状況でこの傷は痛い。痛みに顔を顰めながらもゼクスは影による反撃をする。影は浩太の右腕を貫き地面に縫い付ける。そのまま止めを刺そうと地面に落ちた剣を素早く拾うとゼクスは浩太へ止めを刺そうとする。だがそれを邪魔する様に二人の間を閃光と衝撃が横切る。それは二人を吹き飛ばし甚大なダメージを与えた。

「.....」

二人がその衝撃の通った場所を見ればそこには溶解している地面。そして聞こえてくる咆哮。それは天竜の鳴き声に似ていた。そして

更に聞こえてくる歓声。それは勝利が決したことに他ならない。だがそのようなものは関係ないとばかりに二人は剣を取る。

「・・・最後です。投降してください」

「誰が敗軍に投降するか」

二人とも自らの王が負けたなど思っていない。だからこそ自分が負けてはいけなさと剣を取る。その王に続き歩く為に。二人は無言のまま剣を構え、駆けた。

「」

静寂。まるで自分と目の前にいる相手以外無いかのような無音の静寂。

——びき、びし・・・びしびし・・・

それを破る様に罅割れ砕け散ったゼクスの剣。だがそれと同時に浩太の体が揺れ、地に伏した。

「・・・」

・自身の剣を一瞥するとゼクスは浩太を見る。

「騎士の剣が碎けるなど負けたと同じ・・・」

ゼクスはそうぽつりと呟くと剣を鞘に納め浩太へ歩み寄る。

「ここで貴様を殺したら私が恥を搔く」

そう言いながらゼクスは浩太の肩を掴み引き摺っていく。目指すのは自分達の信じた王のいる下。果たしてそこにいるのはどちらか。ゼクスは自らの王の勝利を信じ歩いて行った。

「連合軍に告ぐ！！貴様らが王である聖王は我の前に敗れ去った！大人しく投降するがいい！抵抗する者には容赦しない！！」

自身が信じる王が敗れたという事実連合の兵士達の間には動揺が広がっていった。信じたくないが目の前に魔王がいると言うことはそれが事実であるということに他ならない。兵士達は抵抗を試みようとしたが魔王軍に包囲され次第に大人しくなっていた。

「よう。お疲れさん」

そんなマオに近づく人影。その声でその人物が響夜であると分かるとマオは笑みを浮かべて振り向き、固まった。

「あ？どうした魔王さんよ。俺の顔に何か付いてるか？」

その表情に響夜は意味が分からず首を傾げる。俯くマオに声をかけようとした瞬間マオが勢いよく顔を上げた。

「ハクはともかく何で敵の女など連れてくる！！」

「・・・・・・は？」

その言葉に響夜は意味が分からず首を傾げる。確かに背にはハク

を乗せ神殺しの鎖でアリアやメイド、聖女を連れて来ているがノーレンも連れて来ている。そもそもどっちが勝ったかは分からないが為に人質も考え響夜は四人を連れて来たのだ。そこに邪な感情など無く使えるか使えないかの判断で連れて来たため響夜はマオが何を言っているのかが分からなかった。

だがそんなことなどお構いなしにマオは響夜に詰め寄る。

「そんなにその者達が良いのか！我のことなど放っておいて！！だいたい・・・」

「おい、落ち着け」

これ以上ヒートアップして面倒臭いことになる前に響夜はマオを止めに掛かる。ハクも一応手当はしたがそれはその場凌ぎでのもの響夜はまだ何か言おうとするマオの額にチョップをしハクを見せる。

「此奴、治してやれ」

そう言つてマオにハクを渡し治療を頼むと響夜はどこからか煙草を取り出し一服する。

「大変だったな・・・」

主に精神面が・・・。そんなことを考えながら響夜は辺りを見回す。もはや見る影もない程に荒れ果て地形が変化している大地はこの戦争がどれ程のもだったのかを暗示しているだろう。そんなことを考えながらハクを治療しているマオの方を見ると何やら響夜を見て頬を赤くしていた。

「何だ？」

それが気になった響夜がマオに問い掛けるがマオは目を逸らしてぼそぼそと何かを呟く。

「……聞こえねえよ。もっとでけえ声で喋れ」

響夜がそう言つとマオが目を逸らしながらも聞こえる程度の声で話す。

「……ふ、服を着てくれ」

その言葉に響夜は自分を見る。三人の攻撃のお陰で響夜の服は既にボロボロになり上半身は裸。下半身も膝から下は消えてしまっている。その姿を見ながら響夜は呆れたように肩を落とす。

「お前つてホントに分かんねえ」

そう言いながらもこれ以上面倒臭いことになるのは好ましくない為響夜は服を作るとそれを着る。流石に此処でズボン脱ぐ訳にもいかない為下半身は我慢するしかないだろう。そんなことをしていると遠くから竜の咆哮と共に翁が現れる。

「どうやら終わった様じゃな」

「うむ、それにしても随分とはしゃいだようじゃな……」

マオはそういいながら翁を見る。所々服が破け髪から焦げ臭いにおいを放っている。アカーシャも全身がボロボロだがまだやる気なのか低く唸っている。だが自らの国の王が敗れたことは分かっているのだろう。無暗に暴れることはなく睨みつけたまま静かにしてい

る。

「で？これからどうすんだ？」

何やら生き生きした表情の翁に引きながらも響夜はこれからの連合軍の処遇を聞く。するとマオは暫く思案すると言った。

「そうじゃの、和睦でもしようかのう・・・」

その言葉に再び時間が止まったかのように静寂が広がった。

戦争終結。戦争終わった直後でよくこんな空気になれるなおい（後書き）

感想、批判、意見、評価などあつたらお願いします。

今回前書きに台詞入れてませんが思いつかなかったのではなく今回は書かない方が良いかと思ったからです。・・・何故いまさら思つたし自分。

戦争終結。かといってこの章がもうすぐ終わりなわけではありません。
ん。まだ続きますとも・・・まだ化物が出てきてませんから。・・・
ふふふ（ぴきーん）

イタイ コワイ アリエナイ

魔王上の一室。そこから僅かに声が漏れていた。

「・・・っ！」

「ほれ、ここか響夜？」

「もう少し手加減しろ爺」

「くくく、それは出来んのう」

そしてその扉の前。中にいる響夜と翁の言葉に耳を扉に近付けながらマオとハクは息を呑んでいた。

「~~~~っ！・・・くっそ、ふざけんな爺」

「だがこれが一番いいんじゃないよ。・・・っと」

部屋の中の会話が途切れると突然扉が開かれた。二人は声に集中し過ぎそれに気付くことが出来ず尻持ちを着く。扉を見ればそこにいるのは何やら不思議そうな顔から一転、顔をニヤニヤとさせる翁の姿。その奥に見えるのは背中^{もくさ}に艾を据え点灸をしている響夜。その姿に二人は想像していたことからの羞恥心で顔を赤くし目を背ける。

「どうした二人とも。入るといい」

そう言つて促す翁に従い二人は部屋に入る。よく見れば中には身体に包帯を巻いたゼクスもいた。

「二人とも身体は大丈夫か？」

マオは二人にそう言つと。揃つて彼らは渋い顔をして言つた。

「「翁のお陰で余計な傷を負つた（いました）」」

その言葉に二人は苦笑すると空いている椅子に座る。

「で？もう問題無く動けるのか？」

「ゼクスは恐らく大丈夫じゃのう。ただ響夜の方は暫く動くのは無理じゃ。筋肉繊維はもう治っているが不完全な術式での反動で全身筋肉痛。おまけに暫く魔力が乱れて魔法の行使も想像形成も使えないの」

それは、つまり今の響夜の戦闘能力はほぼ零に等しいという事。
響夜が創り出した魔法「怒りの日」ディエス・イレは未だ不完全。そもそも神器と上級魔法を溶け合わせるのだ経験の浅い、いや、例え翁やマオであってもそれは難しいだろう。その代償がこれで済んだというだけでも奇跡だろう。

「……ったくよお。やってらんねえわ」

煙草を吸いながら響夜は目を染める。だが煙を嫌つたのかウサ公がそれを没収してしまった。その様子を全員が呆れながら見る。本人はそんなことなど考えていないらしい。

「・・・それで。向こうとの和睦と仰っていましたが？」

ゼクスの問いに響夜と翁を除く全員が真剣な表情になる。マオは頷くとその結果を言う。

「取り敢えず今のところ問題は無い」

本来なら敗戦国になる連合は搾取されても文句は言えないのだ。それを不快とは言え和睦を申し込まれたのだ。断ることは無いだろう。

「ただ問題は国民達が納得するか・・・」

今迄続いてきた人族至上主義が崩れるのだ。魔族が敵としか教え込まれていない国民達が受け入れるのは難しいだろう。

「そこら辺はアリアが何とかすんだろ」

溜息をつく三人に響夜は興味なさそうに言う。ハクとマオは響夜の口からアリアという名前が出たことに反応した。

「誰じゃそれは？女か？女の名前か？」

「・・・素直に言うべき」

にじり寄る二人に響夜は呆れたように言う。

「前に言わなかったか？エクレールの第一王女の名前だよ。あいつ人族至上主義をどうにかしようと考えてたからな・・・」

もう一本煙草を出そうとし響夜は再びそれをウサ公に弾かれる。

「……言われた様な言われてない様な」

恐らく戦争のことで忘れてしまったのかもしれない二人はそう考え追求をやめる。

「……で？どうすんのよ？」

「そうじゃのう。……先ずは我らと向こうが和睦をしたという事を向こうの国民に目の前で見せなくてはいけないだろう。後は聖王たちと積極的に食事会やら何やらをして魔族達が敵でないと少しずつ分からせる必要があるのう」

要するに地道に進んで行かなくてはいけないということだろう。そのことに全員が溜息を吐く。

「まあ我らは戻る。二人とも無理するでないぞ。特に響夜は抜け出すでないぞ」

マオは響夜に釘を刺すと部屋を出ていく。

「……それでは私も。世話になりました翁」

ゼクスは響夜を一瞥すらすることなくそう告げると部屋を出ていく。

「うおおい！！元気が若僧！！」

ゼクスが出ていく扉が勢いよく開かれガルドスが入って来る。そ

の姿を見ると二人はまた溜息を吐く。・・・五月蠅いのが来たと。

「ん？ガルドス、お前左腕どうした？」

響夜が疑問に思っ言う。見ればガルドスの左腕は肩から先が無くなり包帯が巻かれている。ガルドスは自分の左腕を見ると豪快に笑う。

「なあに！勇者とかいう猛者と出会ったのう！！左腕が切り落とされてしまった！！」

そう豪快に笑うガルドスに二人は最早何も言うまいと諦める。そのまま暫く部屋の中はガルドスの笑い声が響いていた。

「・・・つと。いつてえな畜生」

誰もいなくなった部屋の中。響夜はベッドから立ち上がる。動くたびに全身に痛みが走るがそれは仕方がないと割り切ってどうにか歩く。

「少し寒いな・・・」

部屋から窓の外を見た響夜は扉を開き廊下に出る。ウサ公は既に眠ってしまい一人の状態だ。

「・・・・・・・・」

響夜は何となく中庭へと歩いていく。思えばこの世界には太陽と

いうものが無いのだろうか……。そんなことを考えながら響夜は空に輝いている星星と青白く輝く満月を見る。

「……お宅は何のご用でしょうか」

城の上に昇り煙草を取り出しながら響夜は何もない空間に問い掛ける。

「いやはや、魔法も使えない状態で私の存在を感じ取るとは……」

まるで人の神経を逆撫でするかのような声。そう言つて空間から現れるのは黒いボロボロのローブをまとつた男。その男はまるで溝川のように濁り奈落の様な眼をしていた。髪もまた目と同じく漆黒で塗りつぶされている。その顔には微笑を浮かべているがそこから感じ取れるのは不気味な雰囲気だけ。

「……何となく……勘、だ」

見れば響夜の足は震えておりその顔には大量の汗が浮き出ている。

「（ありえない。．．ありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえない！！！）」

響夜が感じ取っているのは恐怖。それも今迄に感じたことが無い程の……。今直ぐ此処から逃げ出したい。思わずそう考えてしまふ心を叱咤し響夜は目の前にいるモノを見る。

「勘か。中々面白いことを言う黄昏の破壊者よ」
口丰

そう薄ら笑う男に響夜は一層の恐怖を感じる。

「……黄昏の破壊者^{ロキ}？」

男が言う名前に響夜は首を傾げる。

「ああ、そうだとも。クラウン序列第十三位代行者。それが君だ。黄昏の破壊者^{ロキ}」

「……クラウンだと？」

その言葉に響夜は眉を顰める。自分はそれほどの物に入る程の武功など無いし力もない。すると男は頷く。

「然り。ああ、自己紹介がまだだったね。私はクラウン序列第十三位、アレイスター・クロウリー。同胞からはノアと呼ばれているよ」

男、ノアは言った。それと共に響夜は確信する。これは自分が勝てる存在ではないということに。これは人が、いや、生物が戦っているものではない。

「（何だ此奴は……。何故こんなにも人間でいられる。何故人間の形を保っている）」

自然と響夜はノアを視ていた。分からない、ありえない。そんな疑問と恐怖ばかりが渦巻く。

「此度は君を勧誘しに来た。黄昏の破壊者^{ロキ}」

ノアはそう言ったままその濁った眼で響夜を見た。その言葉に響

夜は沈黙する。

「今の君には二つの選択がある。一つは私の誘いに乗りクラウンへと入る。もう一つは私の誘いを蹴ってクラウンへ入るのを断る。・・・当然一つ目は問題を起こそうとも君の身の保証が出来、この世界についても知ることが出来る。何より、今より遥かに強くなれるだろう。二つ目は・・・」

そこでノアは言葉を区切る。そこから感じ取れるのは無言の圧力。

「……（ようはここで死なっただけか。選択じゃなくてそりゃ脅しだよ）」

「さて君はどちらを選ぶ……」

目の前にいるノアは相変わらず薄笑いを浮かべたまま響夜を見る。

「……分かった。入ればいいんだろウクソ野郎が」

響夜はその誘いに乗った。その答えに相変わらずノアは薄笑いを浮かべたまま口を開こうとする。しかしそれを遮るように響夜は口を開いた。

「ただし……何時かテメエを絶対に殺してやるよ」

その言葉にノアは僅かに目を見開かせ嗤った。

[illegible]

相変わらず不快感を思わせる声でノアは嗤う。そのノアを響夜は

睨み付けたまま動かない。いや、動けない。

「ああ、面白い。君が私を殺しに来る日を楽しみにしよう。では、これにて失礼するよ。黄昏の破壊者^{ロキ}」

その言葉と共にノアが消える。次の瞬間、響夜はその場に倒れた。

「……っ！……ハア……化け物が！……くそっ！！」

今迄抑えていた感情が溢れだす。全身から汗が吹き出し今迄動かなかった心臓が突然動き出したように鼓動が速くなるのが感じ取れる。そのまま落ち着くまで仰向けに倒れていると不意に影が動いた。

「……ウサ公か」

その影から出て来た使い魔の姿を見て響夜は呟く。

「みゅう！」

自身の主人の状態が分かっているのかウサ公は響夜に飛び付いたまま動こうとしない。一応自分なりに主人のことを気遣ったことなのか。響夜はそのウサ公を見て苦笑する。

「顔に飛び付くな、暑苦しい」

大分落ち着いたのか響夜はウサ公を退け空に昇る月を見る。その時だけ、月が自分を嗤っている様に響夜は見えた。

イタイ コワイ アリエナイ（後書き）

感想、批判、意見、評価などがありましたらお願いします。

総合評価ついに100突破です！ありがとうございます！

化物登場です。名前に少し悩みましたが・・・。

響夜クラウン入り！チュートリアル終了！ここからがピーー
ソウルだー！！

すいませんウザかったですね・・・。 ; ; ;

こんな作者ですがこれからもお願いします。意見や評価は小説を書くのに意欲、改善などにつながるので暮れると嬉しいです！

彼の世界と影法師の誘惑（前書き）

「頼むから、全部消えちまえよ」

b y 響夜

彼の世界と影法師の誘惑

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうも、鳴神響夜だ。今、俺の前には修羅がいる。それも二人。

「さあ、吐け」

「・・・・吐く」

ノアが俺の下に来て四日が経とうとしている。どうやらあの恐怖は想像以上に俺を追い込んでいたらしい。普段と様子が違う俺に全員が気付くのもすぐだった。

「・・・・・・・・響夜、大人しく素直に吐いた方がいいぞ」

流石に二人の状態は拙いと判断したのか翁が俺に言う。その顔は引き攣っている。正直出来るのなら逃げ出したい。話す前に消されそうだ。

「5・・・・4・・・・」

「3・・・・2・・・・1・・・・」

知らず知らずのうちにカウントダウンをするマオとハク。どうやら俺の人生はここで終了のようだ。

「ちょ！ま、待つのじゃ二人とも！！！！この城が崩れる！！！！」

今にもここを瓦礫の山にしようとする二人を翁が止める。

「・・・ほう、邪魔をするか翁」

「・・・そこをどいて」

「む、無理じゃ。此处を瓦礫の山には出来ん。せ、攻めて外で「無理じゃ、わざわざ逃げるチャンスやるわけなかるう」・・・」

その言葉に俯く翁。やがて何かを決意すると顔を上げた。

「ならば止む無し。少し頭を冷やしてもらうぞ!!」

その言葉と共に俺&翁VSマオ&ハクという決闘が始まった。

荒れ果てた荒野の世界。既に場所はマオによって変わっていた。

「消え失せる!」

「三重固界術式!」

マオが放った一撃を翁が空間を固定させることで防ぐ。最後の一枚。それでようやくマオの一撃は止まった。その瞬間翁の後ろから俺が前へ出て拳を振るう。

「疾走する魔狼の牙!!!!」
フェンリス・ヴォルフ

俺が拳を放た瞬間爆音と共にマオが吹き飛ばされる。だが追撃へと

動こうとした瞬間地面と空から巨大な氷の塊が現れ俺を潰す。

「ちい！ハクかー!!」

俺は氷から脱出しようとするが想像以上の力の前にびくともしない。前を見れば俺へ一撃を放とうとしているハクの姿。

「響夜！」

その声と共に氷に何かがぶつかり砕ける。それによって俺は間一髪抜け出すことが出来ハクの一撃を躲した。

「……………つち」

何やら舌打ちが聞こえたが気のせいだろう。ハクがそんなことをする筈がない。……………ないよな？

「成程、遠距離は空間ごと魔力を爆発させ吹き飛ばすか」

そう言っただけで歩いてくるマオ。その姿には傷など見受けられない。

「だがそれは近距離でこそその真価を発揮するのであるっ？」

「……………マジかよ」

いや、あれで倒れるとは思わなかったけどよ。直撃させたんだぜ？それで無傷ってどういうことだよ。

「……………つ 響夜！後ろへ跳べー!!」

その言葉が聞こえた瞬間俺は空を舞っていた。そして下にいるのは拳を構えるマオ。

「――」

「・・・がつ！ぐつつうだ、がああ！！」

最早竜巻、轟音を伴って放たれた剛腕の一撃は俺の背骨を完全に粉砕し貫いた。

「さ、吐くのじゃ響夜」

笑顔で言うマオ。だが目が笑っていない。完全にきれている。そこから感じ取れるのはあの男に会った時と同じ恐怖。

・・・ふざけるな。ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな

「ふざけんなあ！！！」

それは今まで無い程の心からの怒声。その声に三人の肩がビクリと動く。

「我が軍勢よ！！！！」
レギオン

俺は周囲の空間に軍勢を呼び出す。次の瞬間俺の目の前は閃光で白く塗りつぶされ絶え間なく続く轟音を聞きながら俺は意識を手放し

た。

「・・・・・・・・・・」

目を覚ました俺が最初に見たのは朝も夜かも分からない闇の中に光る月。それが俺にはどうしようもなくおぞましいものに見えた。

「・・・・最悪だ」

俺は悔しさから歯噛みする。屈辱だ。恐怖を感じたことには無い。奴から感じた恐怖で俺が取り乱したことにだ。

「・・・・・・・・？」

俺は身体に何かが圧し掛かっているのを感じ身体を起こす。

「・・・・・・・・ん、・・・・」

「・・・・むう・・」

そこにいるのは戦っていた時の怒りは何処へやらあどけない顔で眠っているマオとハクの二人だった。

「・・・・悪かったな」

俺は二人の頭を撫でる。すると二人は柔らかい笑みを浮かべる。それを見た俺は気持ち良さそうに眠る二人をあとにしてベッドから出る。扉を出て廊下に出るとまる出てくるのが分かっていたかのよ

うに翁がいた。

「もう大丈夫なのか？」

「……まさか」

たぶんまた恐怖を感じたら俺は頭が怒りで染まると思う。てかなる。

「……その原因は？言っておくが黙っているという選択は無いぞ」

「……」

まあ、何時までも黙ってられるものではないか。俺はそう考え取り敢えず廊下から誰もいない部屋へと翁と共に向かう。

「ふむ、ここなら誰もいないじやろっ」

部屋を見渡して翁が言う。ま、誰がいても関係ないんだが……。

「……そうだな」

俺はあいつが言っていたことを話す。クラウンのこと、あいつが俺のことを黄昏の破壊者^{ロキ}と言ったこと。その話を聞いていくうちに翁は今迄に見たことが無いほど真剣になる。

「……ふむ」

全て話した時翁は何かを思案していた。何を考えているか分からない

いが此奴が此処まで真剣になるとは正直予想してなかったから驚いた。

「成る程のう」

やがて翁は俺を見る。

「・・・何故響夜をクラウンに入れたのか。だが響夜。気を抜くなよ。相手が何を考えているか分からないいじょう隙を見せる訳にはいかない。気をつけろ」

「・・・・・・・・ああ」

「では、僕は戻るとするか。お前も早く戻れよ」

そう言つて翁は部屋を出ていこうとするがドアノブに手を掛けたところで振り向き俺を見る。

「そうそう、お前の恐怖は僕ではどうにも出来ん。他を当たるんじやな」

「・・・・・・・・・・」

そう言つて今度こそ翁は部屋を出ていく。俺はそれを見送ると部屋の隅を一瞥し溜息を吐いた。

「お前らもいい加減出て来い。何時までそこにいんだ？」

「・・・・・・・・どうして分かったのじゃ？」

「……………」

そこから現れるのはマオとハクの二人。その質問に俺は再び溜息を
ついて答える。

「……………なんとなく、だ」

何となくそこにいるのが分かる。理屈ではなくて直感のような説明
のできない第六感の様なもの。あいつに会ってからそう感じだした。

「……………聞いてたろ、今の会話」

俺はそういいながら煙草を取り出す。

「そう言う訳だ。俺はクラウンに入る」

「……………」

「……………どうした？」

俺は黙っている二人に首を傾げる。

「……………響夜、本当は行きたくない。って思ってる」

「は？」

「手が、震えておるぞ？」

俺に近付き手を握るマオとハク。

「響夜、ずっとおかしかった」

俺の目を見るハク。どうしてもそれを見れなくて俺は目を背ける。すると俺の腹部に衝撃が襲い思わず俺はバランスを崩して尻もちを着く。

「……ってえ」

俺は体を起こそうとするがそこには俺を見るマオとハクの顔。二人が圧し掛かっているから俺は身動きを取れなくなる。

「……響夜、目を逸らさないで」

「響夜、もし苦しかったり悲しいことがあったら私達を頼ってくれ」

『ああ、彼女らはそうして嘘を吐く。いや、生物というものは総じて嘘を吐くものだ。黄昏の破壊者^{ロキ}』

俺の頭に入るな。それ以上口を開くな。俺を汚すな。俺を染めるな。

「私達は響夜のこと心配、なの。無理しないで……」

『本当にそう思つかね？もし、彼女らが君を利用しようとしていたら？いや、そもそもこれ自体が君を手に入れる為のものだったら？果たして彼女らは君に何を望んでいる？』

ヤメ口俺を心配するな。ヤメ口、俺は■ ■以外は頼らない。

「……お願い、一人で苦しまないで」

『君は今迄の心には何があつた？果たして君はこれを望んでいたかね？』

「……か」

「そうだ、全て解き放て。君にこれは必要か？君には彼女達がいるだけで良かった筈だ。奪われないようにする為にはどうしたらいい？」

ヤメロヤメロヤメロヤメロそれじゃあの人みたいなことを言うな。
あいつと同じことを言うな。 ■ ■ 以外が言わないでくれ。 お願いだから、お願いだから・・・

「家族以外が、俺を心配するなあ……!!!!」

「ああ、その通り。簡単なことだ。破壊すればいい。何も残さず、骸の山で甘美に酔いしれるといい。ただ只管に無垢なままに、君は骸の山を登り高みへ行けばいい。そうであつてこそ、黄昏の破壊者だ」

[illegible]

炸裂する殺氣とまるで狂ったように叫ぶ響夜。そして感じられる魔力は以前の比ではない。

彼の世界と影法師の誘惑（後書き）

感想、批判、意見、評価がありましたらお願いします。

・・・もう少し上手く表現できないものか。自分の文才の無さが悔やまれます。

あとクラウンの方々は基本偉人の名前で構成されてます。（エルザは除く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170y/>

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

2012年1月9日01時53分発行